

結西谷Ⅳ遺跡・結本谷古墳群

出雲斐川インター企業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和7年(2025)3月

出雲市教育委員会

結西谷Ⅳ遺跡・結本谷古墳群

出雲斐川インター企業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和7年(2025)3月

出雲市教育委員会

序

結西谷Ⅳ遺跡・結本谷古墳群は、出雲市斐川町直江に所在し、仏経山北麓の丘陵上に位置しています。当地は奈良時代の出雲郡にあたり、本遺跡の近くでは出雲郡家も置かれていたと推定されています。本遺跡では、出雲斐川インター企業団地の開発に伴う事前の埋蔵文化財調査として令和2年(2020)に分布調査と試掘調査、令和3年(2021)から令和5年(2023)まで発掘調査を実施しました。

発掘調査では、結西谷Ⅳ遺跡で奈良時代頃の掘立柱建物跡や加工段を確認したほか、勾玉、鉄製紡錘車などの遺物が出土しました。また、結本谷古墳群では2基の方墳を調査し、それぞれの埋葬施設を確認しました。

本書では、結西谷Ⅳ遺跡・結本谷古墳群の発掘調査成果を報告しているほか、旧斐川町によって過去に調査された結古墳群・結遺跡と三斗蒔古墳群も併せて収録しています。本書にまとめた成果が出雲市の埋蔵文化財に対する理解と関心を高め、また歴史学習の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および本書の作成にあたり多大なるご理解とご協力を賜りました地元住民の皆様、ご指導とご助言を頂いた各専門家の皆様をはじめ、各方面の方々に対し心からお礼申しあげます。

令和7年(2025)3月

出雲市教育委員会
教育長 杉谷 学

例 言

1. 本書は、出雲斐川インター企業団地の造成工事に伴い、出雲市が令和2年度から令和6年度に実施した結西谷IV遺跡・結本谷古墳群の試掘調査および発掘調査の報告書である。

2. 出雲斐川インター企業団地の名称は令和6年1月に正式決定した。決定前の名称は以下のとおりである。本書では、基本的に正式決定後の名称を用いる。

令和2年度～令和5年度……(仮称)新工業団地(斐川)

3. 分布調査・試掘調査・発掘調査は、下記の期間において実施した。

分布調査 令和2年(2020)4月3日～28日(5日間)

試掘調査 令和2年(2020)9月23日～令和3年(2021)1月14日

発掘調査 令和3年(2021)11月8日～令和5年(2023)8月31日

4. 発掘調査を実施した地番は、次の通りである。

島根県出雲市斐川町直江3801番外

5. 調査は下記の体制で実施した。

＜令和2年度(2020)＞ 分布調査、試掘調査

事務局 片寄友子(出雲市市民文化部次長兼文化財課長) 大槻智徳(出雲市市民文化部文化財課主査)

景山真二(同課長補佐兼埋蔵文化財1係長) 原俊二(同課長補佐兼埋蔵文化財2係長)

調査員 江角健(文化財課主任) 景山このみ(同主事) 黒田祐介(同主事) 下江裕貴(同主事)

調査補助員 飯塚明花 宇畑豪志 横手眞紀子

整理作業員 荒木恵理子 石原和子 妹尾順子 吹野初子 中島和恵 前島浩子

調査指導 池淵俊一(島根県教育庁文化財課調整監)

＜令和3年度(2021)＞ 発掘調査

事務局 片寄友子(出雲市市民文化部次長兼文化財課長) 大槻智徳(出雲市市民文化部文化財課主査)

原俊二(同課長補佐兼埋蔵文化財2係長)

調査員 石原聡(文化財課主任) 景山このみ(同副主任) 下江裕貴(同主事)

調査補助員 加藤章三 玉木達也 和田守祥吾

整理作業員 妹尾順子 中島和恵 前島浩子

調査指導 池淵俊一(島根県教育庁文化財課調整監)

<令和4年度(2022)> 発掘調査

事務局 片寄友子(出雲市市民文化部次長兼文化財課長) 吾郷尚志(文化財課課長補佐)
調査員 石原聡(文化財課埋蔵文化財2係長) 景山このみ(同副主任) 下江裕貴(同主事)
原俊二(行政専門員)
調査補助員 加藤章三 高橋智沙都 長岡伸幸
整理作業員 妹尾順子 中島和恵 前島浩子
調査指導 今福拓哉(鳥根県教育庁文化財課管理指導スタッフ)

<令和5年度(2023)> 発掘調査・整理作業

事務局 森山賢次(出雲市市民文化部次長兼文化財課長) 三原一将(文化財課主査)
吾郷尚志(同課長補佐)
調査員 石原聡(文化財課埋蔵文化財2係長) 下江裕貴(同主事) 原俊二(同行政専門員)
調査補助員 高橋智沙都 馬庭範成 多々納達也
整理作業員 鶴口令子 中島和恵 前島浩子
調査指導 是田敦(鳥根県教育庁文化財課課長補佐)

<令和6年度(2024)> 整理作業・発掘調査報告書作成

事務局 山崎久美子(文化財課長) 三原一将(文化財課主査) 吾郷尚志(同課長補佐)
調査員 石原聡(文化財課埋蔵文化財2係長) 下江裕貴(同主事) 原俊二(同行政専門員)
調査補助員 高橋智沙都 馬庭範成 多々納達也
整理作業員 鶴口令子 中島和恵 前島浩子

6. 報告書作成にあたって、下記の方々から玉稿を賜った(敬称略、順不同)。

渡邊 正巳 (文化財調査コンサルタント株式会社代表取締役)
瀬戸 浩二 (鳥根大学エスチュアリー研究センター准教授)
奥中 亮太 (文化財調査コンサルタント株式会社)
平石 充 (鳥根県古代文化センター主席研究員)
米田 克彦 (岡山県立古代吉備文化財センター総括参事)

7. 調査、整理作業にあたっては、下記の方々及び機関からご指導・ご協力をいただいた(敬称略、順不同)。

中村唯史(鳥根県立三瓶自然館サヒメル学芸員) 澤田正明(鳥根県立古代出雲歴史博物館専門研究員)
内田律雄(海洋考古学会代表) 穴道年弘(荒神谷博物館企画監) 柏谷美加(荒神谷博物館主任学芸員)
川上昭一(松江市埋蔵文化財調査課長) 松尾澄美(松江市文化財課歴史史料調査員)
鳥根県教育庁文化財課

8. 発掘作業（安全管理、発掘作業員の雇用、機材等の借上）については、令和2年度から5年度にかけて、株式会社トーワエンジニアリングに委託した。
9. 発掘調査の記録は、遺構の平面図作成や遺物の取上げ等には、株式会社CUBICの遺構調査システム「遺構くん」を用いた。
10. 自然科学分析および保存処理については、下記の通り外部委託により実施した。
AMS年代測定・樹種鑑定……………文化財調査コンサルタント株式会社
鉄製品の保存処理……………フジテクノ株式会社
11. 本書で用いた測地系は世界測地系第Ⅲ系であり、方位は座標北を示す。レベル高は海拔高を示す。
12. 本書掲載の遺物実測図については、調査員および調査補助員が作成した。なお、附編1・附編2で使用した遺構図及び一部の遺物実測図については、旧斐川町で作成されたものを使用した。
13. 遺構・遺物の写真撮影は、石原聡、下江裕貴が行った。
14. 結西谷Ⅳ遺跡・結本谷古墳群の出土遺物及び実測図、写真は出雲市文化財課で保管している。
15. 本書の作成は、花谷浩（出雲弥生の森博物館館長）指導のもと、文化財課職員の協力を得て下江裕貴、石原聡、原俊二、幡中光輔（出雲市文化財課主任）が行い、全体の編集は下江が行った。それぞれの執筆範囲は文末に記載している。

凡 例

1. 遺構略号は下記のとおり使用した。

SB：掘立柱建物 SD：溝 SP：柱穴 SK：土坑 SL：灰跡 SX：その他

2. 本書を作成するにあたり、編年および過去の調査について下記の参考文献を利用した。本文引用時には、略称(カッコ内が略称)を用いた。編年間の対応については下表のとおりである。

須恵器(大谷編年)

大谷寛二 1994『出雲地域の須恵器の編年と地域色』『島根考古学会誌』第11号 島根考古学会

大谷寛二 2001『上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室』『上石堂平古墳群』平田市埋蔵文化財調査報告第8集 平田市教育委員会

大谷寛二 2003『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター

須恵器・土師器(国府編年)

島根県教育委員会編 2013『史跡出雲国府跡-9 総括編-』風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書22

須恵器(古代セン編年)

岡田裕之・土器検討グループ 2010『出雲地域における古代須恵器の編年』『出雲国の形成と国府成立の研究-古代出雲地域の土器様相と領域性-』島根県古代文化センター

川原和人 2010『出雲地方における律令時代の須恵器の特色とその背景』『出雲国の形成と国府成立の研究-古代出雲地域の土器様相と領域性-』島根県古代文化センター

3. 出雲国風土記の釈文については、下記の参考文献を利用した。

島根県古代文化センター編 2022『出雲国風土記』-地図・写本編- 八木書店

島根県古代文化センター編 2023『出雲国風土記』-校訂・注釈編- 八木書店

実年代		大谷編年		古代セン編年	国府編年	南邑編年	都城編年			
5C	中葉	出雲1期	古段階			TK208				
	後葉		中段階			TK23				
			新段階			TK47				
6C	前葉	出雲2期	A			MT15				
	中葉		B			TK10				
			C			TK43				
	後葉	出雲3期	TK209							
		出雲4期	TK217			飛鳥Ⅰ				
前葉	出雲5期	飛鳥Ⅱ								
7C	中葉						出雲6期	出雲Ⅰ期	第1型式	
	後葉		a期	出雲Ⅱ期	第2型式					
			b期							出雲Ⅲ期
	c期		出雲ⅣA期			第4型式				
	d期	出雲ⅣC期					第5型式			
8C	第1四半期								出雲ⅤA期	
	第2四半期			出雲ⅤB期						
	第3四半期									
	第4四半期									
9C	前葉						平城Ⅵ・平安Ⅰ中～新			
	中葉							平安Ⅱ古		
	後葉						平安Ⅱ中			

目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 文化財保護法の手続き	1
第3節 調査の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 遺跡の地理的環境	5
第2節 遺跡の歴史的環境	6
第3章 試掘調査	11
第1節 地区割とトレンチ設定	11
第2節 丘陵部の調査	12
第3節 耕作地の調査	22
第4節 試掘調査の成果	25
第4章 結西谷IV遺跡の調査	27
第1節 調査区の選定	27
第2節 1区の調査	29
第3節 2区の調査	37
第4節 3区の調査	52
第5章 結本谷古墳群の調査	81
第1節 古墳の分布状況と調査区の設定	81
第2節 1号墳の調査	82
第3節 2号墳の調査	90
第4節 結本谷古墳群の調査成果	94
第6章 自然科学分析	97
第1節 結西谷IV遺跡発掘調査に係るAMS年代測定	97
第2節 結西谷IV遺跡検出炭素出土炭化材の樹種	106
第3節 結本谷古墳群 結本谷1号墳 第1、第2主体部埋土のPCN分析	112
第7章 総括	125
第1節 文字資料からみた出雲国出雲郡健部郷について	125
第2節 結西谷IV遺跡出土のヒスイ製勾玉について	133

第3節 結西谷Ⅳ遺跡について.....	138
第4節 結本谷古墳群について.....	144
第8章 結語.....	153
附編1 結古墳群・結遺跡の調査.....	155
附編2 三斗蒔古墳群の調査.....	187
遺物観察表.....	193
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

【第1章 調査に至る経緯と経過】

第1図 本調査 地区割	1
第2図 調査・見学会・展示・講演会の様子	4

【第2章 遺跡の位置と環境】

第3図 位置図	5
第4図 周辺の遺跡（西）	8
第5図 周辺の遺跡（東）	9

【第3章 試掘調査】

第6図 試掘調査対象範囲・地区割	11
第7図 試掘調査A区 トレンチ配置図	12
第8図 試掘調査A区 出土遺物	13
第9図 試掘調査B区 トレンチ配置図	14
第10図 B区15トレンチ 北壁土層図	14
第11図 B区16トレンチ・18トレンチ 北壁土層図	15
第12図 B区143トレンチ 北壁土層図	15
第13図 試掘調査B区 出土遺物	15
第14図 B区6トレンチ平面図・東壁土層図・12トレンチ東壁土層図	16
第15図 試掘調査C区 トレンチ配置図	16
第16図 C区41トレンチ・42トレンチ 北壁土層図	17
第17図 C区132トレンチ 北壁土層図	17
第18図 C区133トレンチ・135トレンチ・136トレンチ 北壁土層図	18
第19図 C区137トレンチ・43トレンチ 北壁土層図	19
第20図 試掘調査C区 出土遺物	19
第21図 C区84トレンチ 北壁土層図	20
第22図 試掘調査D区 トレンチ配置図	20
第23図 D区64トレンチ・89トレンチ 南壁土層図	21

第24図 試掘調査E区 トレンチ配置図	22
第25図 試掘調査E区 出土遺物	22
第26図 試掘調査F区 トレンチ配置図・トレンチ柱状図	23
第27図 試掘調査G区 トレンチ配置図	24
第28図 試掘調査G区 トレンチ柱状図	25

【第4章 結西谷IV遺跡の調査】

第29図 本調査 地区割	27
第30図 1区 平面図1	29
第31図 1区 平面図2	30
第32図 1区炭窯SK001 平面図 東西・南北セクション土層図	31
第33図 1区炭窯SK002 作業順序	32
第34図 1区炭窯SK002 東西・南北セクション土層図1	33
第35図 1区炭窯SK002 東西・南北セクション土層図2	34
第36図 1区 出土遺物	35
第37図 伏焼き窯の構造と作業工程	35
第38図 2区 平面図（第2面）	38
第39図 2区 東西セクション・南東壁セクション土層図	39
第40図 2区 掘立柱建物跡SB201・202 平面・エレベーション図・土層図	40
第41図 2区 掘立柱建物跡SB203 平面・エレベーション図・土層図	41
第42図 2区 掘立柱建物跡SB204・205 平面・エレベーション図・土層図	42
第43図 2区 掘立柱建物跡SB206 平面・エレベーション図・土層図	44
第44図 2区平坦面 遺構平面・土層図	45
第45図 2区 遺構にともなう出土遺物	45

第46図	2区 遺物包含層出土遺物(大谷4期～ 国府4型式).....	47
第47図	2区 遺物包含層出土遺物(その他須恵 器・土師器).....	48
第48図	2区 遺物包含層出土遺物(土製支脚・ 金属製品・石製品).....	49
第49図	2区出土土器の型式別グラフ.....	50
第50図	2区と東側地域.....	50
第51図	3区 平面図.....	53
第52図	3区 東西セクション土層図.....	54
第53図	3区 加工段SX301 平面・土層・エレ ベーション図.....	55
第54図	3区 加工段SX302 平面・土層・エレ ベーション図.....	56
第55図	3区 加工段SX303 平面・土層・エレ ベーション図.....	57
第56図	3区 加工段SX303内土坑・炉跡 平 面・土層・見通し図.....	58
第57図	3区 加工段SX304 平面・土層・エレ ベーション図.....	59
第58図	3区 加工段SX305 平面・エレベ ーション図・土層図.....	60
第59図	3区 加工段SX302出土遺物.....	61
第60図	3区 加工段SX303・304出土遺物.....	62
第61図	3区 加工段SX305出土遺物 その1	63
第62図	3区 加工段SX305出土遺物 その2	64
第63図	3区 遺物包含層出土遺物(大谷4期・ 国府1・2型式).....	65
第64図	3区 遺物包含層出土遺物(国府3・4 型式).....	66
第65図	3区 遺物包含層出土遺物(国府5・6 型式、須恵器甕).....	67

第66図	3区 遺物包含層出土遺物(土師器甕)	68
第67図	3区 遺物包含層出土遺物(土製支脚・ 甕).....	69
第68図	3区 遺物包含層出土遺物(石製品).....	70
第69図	3区 遺物包含層出土遺物(鉄製品・特 殊土器・弥生土器).....	71
第70図	隧道水路SX306(全体) 平面図.....	73
第71図	隧道水路SX306 東側流出口 平面・断 面図.....	75
第72図	隧道水路SX306 西側流入口 平面・断 面図.....	76
第73図	隧道水路SX306 出土遺物.....	77
第74図	3区出土土器の型式別グラフ.....	78
第75図	隧道水路SX306 水源地から3区までの 水路推定図.....	79

【第5章 結本谷古墳群の調査】

第76図	結本谷古墳群 全体図.....	82
第77図	1号墳 調査前測量図.....	83
第78図	1号墳 平面図.....	84
第79図	1号墳 東西・南北セクション土層図	85
第80図	1号墳第1・2主体 平面図・土層図	86
第81図	1号墳 出土遺物.....	87
第82図	1号墳 墳丘復元図.....	88
第83図	2号墳 調査前測量図.....	89
第84図	2号墳 平面図.....	90
第85図	2号墳 南北・東西セクション土層図	91
第86図	2号墳第1・2主体 平面図・土層図	92
第87図	SD3062・SP3063 平面図・土層図.....	92
第88図	2号墳 出土遺物.....	93
第89図	2号墳 墳丘復元図.....	93

第90図	3号墳トレンチ(試掘6トレンチ)周辺測量図・東壁土層図……………	95	第119図	1号墳各地点でのP.C./N.C./Nの分布……………	116
【第6章 自然科学分析】					
第91図	1区 平面図……………	97	第120図	粒度分析(50%粒径分布)結果……………	118
第92図	結本谷1号墳 平面図……………	97	第121図	粒度分布特性……………	118
第93図	2区 平面図(第2面)……………	98	第122図	粒度分析結果(粒度累積曲線1)……………	120
第94図	3区 平面図……………	98	第123図	粒度分析結果(粒度累積曲線2)……………	121
第95図	1区炭窯SK001 東西セクション土層図……………	98	第124図	粒度分析結果(粒度累積曲線3)……………	122
第96図	1区炭窯SK002-1 土層図……………	98	第125図	粒度分析結果(粒度累積曲線4)……………	123
第97図	1区炭窯SK002-7 土層図……………	99	【第7章 総括】		
第98図	1号墳 南北セクション土層図……………	99	第126図	島根県内のヒスイ製勾玉……………	135
第99図	2区 東西セクション土層図……………	99	第127図	斐川周辺の主な奈良時代の遺跡……………	139
第100図	2区SK2064 土層図……………	99	第128図	出雲郡家指定地(後谷・稲城・小野遺跡)……………	139
第101図	3区13トレンチ 北壁土層図……………	99	第129図	国史跡出雲国山陰道跡(杉沢遺跡2013調査区)……………	140
第102図	3区SP3003・SL3004土層図……………	100	第130図	三井Ⅱ遺跡00-1区 平面図……………	140
第103図	3区加工段SX305 土層図……………	100	第131図	堀切Ⅰ遺跡00-1区 平面図……………	141
第104図	暦年較正結果(1/2)……………	101	第132図	堀切Ⅰ遺跡00-2区 平面図……………	141
第105図	暦年較正結果(2/2)……………	102	第133図	杉沢Ⅲ遺跡2区-Ⅰ調査区 平面図……………	142
第106図	暦年較正結果一覧(1区)……………	103	第134図	杉沢横穴墓群 全体図……………	143
第107図	暦年較正結果一覧(2区1号墳)……………	103	第135図	結本谷古墳群 全体図……………	144
第108図	暦年較正結果一覧(2区)……………	103	第136図	結本谷1号墳・2号墳 墳丘復元図……………	144
第109図	暦年較正結果一覧(3区)……………	104	第137図	斐川周辺の主な古墳……………	145
第110図	1区 平面図……………	106	第138図	結11号墳 礎礎・蛇行剣……………	147
第111図	1区炭窯SK002 操業順序……………	106	第139図	斐川の首長墳一覧表、小丸子山古墳墳丘測量図、神庭岩船山古墳 石棺実測図・墳丘測量図……………	148
第112図	1区炭窯SK002 南北セクション土層図……………	107	第140図	結古墳群・神庭岩船山古墳 円筒埴輪実測図……………	149
第113図	樹種同定図版(1)……………	109	第141図	三斗蔀6号墳・軍原古墳 家形石棺 比較表……………	150
第114図	樹種同定図版(2)……………	110			
第115図	調査区配置図(試料採取地点)……………	113			
第116図	試料採取位置……………	113			
第117図	1号墳第1主体部のP.C./N.C./Nの分布……………	114			
第118図	1号墳第2主体部のP.C./N.C./Nの分布……………	115			

【附編1 結古墳群・結遺跡の調査】

第142図	周辺の主要な遺跡……………	155
第143図	結遺跡・結古墳群 全体図……………	157
第144図	結古墳群A地区10号墳 地形測量図……………	158
第145図	結古墳群A地区10号墳 出土遺物……………	158
第146図	結古墳群B地区 地形測量図……………	159
第147図	結古墳群B地区11号墳磔櫓 平面図・見通し図……………	160
第148図	結古墳群B地区 出土遺物……………	161
第149図	結古墳群C地区 地形測量図……………	162
第150図	結古墳群C地区 出土遺物1……………	163
第151図	結古墳群C地区 出土遺物2……………	164
第152図	結古墳群D地区17・18号墳、19・39・43・47号墳 40・46号墳 地形測量図……………	165
第153図	結古墳群D地区 出土遺物……………	166
第154図	結古墳群E地区28号墳 26・44・45号墳 地形測量図……………	167
第155図	結古墳群E地区28号墳 出土遺物……………	168
第156図	結遺跡F地区 全体図……………	169
第157図	結遺跡F地区加工段 出土遺物……………	170
第158図	結遺跡F地区SD08 出土遺物……………	172
第159図	結遺跡F地区遺構外 出土遺物……………	173

第160図	結遺跡G地区 全体図……………	174
第161図	結遺跡G地区Ⅰ区 遺構配置図……………	175
第162図	結遺跡G地区Ⅱ区 遺構配置図……………	176
第163図	結遺跡G地区Ⅲ区 遺構配置図……………	177
第164図	結遺跡G地区 出土遺物……………	179
第165図	結遺跡H地区 全体図……………	180
第166図	結遺跡H地区Ⅰ区 遺構配置図……………	181
第167図	結遺跡H地区Ⅰ区 出土遺物……………	181
第168図	結遺跡H地区Ⅱ区 遺構配置図……………	181
第169図	結遺跡H地区Ⅲ区西側 遺構配置図……………	182
第170図	結遺跡H地区Ⅲ区東側 遺構配置図……………	183
第171図	結遺跡H地区Ⅳ区 遺構配置図……………	183
第172図	古墳時代中期～後期の鳥根県における磔櫓をもつ古墳一覧……………	185

【附編2 三斗蒔古墳群の調査】

第173図	周辺の主要な遺跡……………	187
第174図	三斗蒔古墳群 全体図……………	187
第175図	三斗蒔古墳群 地形測量図……………	188
第176図	三斗蒔1号墳 磔床……………	189
第177図	三斗蒔古墳群 出土遺物……………	190
第178図	三斗蒔6号墳 家形石椁……………	191

挿 表 目 次

【第1章 調査に至る経緯と経過】

第1表 調査の経過	3
-----------	---

【第6章 自然科学分析】

第2表 試料一覧表(年代測定結果)	100
-------------------	-----

第3表 3区各遺構と加工段との関係	104
-------------------	-----

第4表 樹種同定試料一覧(同定結果)	107
--------------------	-----

第5表 動物(人間)、植物、土壌中の元素の割合	112
-------------------------	-----

第6表 PCN 測定結果	117
--------------	-----

第7表 粒度分析結果	119
------------	-----

【第7章 総括】

第8表 健部郷の氏族構成・出雲神戸の氏族構成	128
------------------------	-----

第9表 島根県内出土のヒスイ製勾玉一覧	134
---------------------	-----

第10表 斐川の群集墳一覧(調査された古墳のみ)	146
--------------------------	-----

【附編1 結古墳群・結遺跡の調査】

第11表 結古墳群(A～E地区) 一覧表	156
----------------------	-----

【附編2 三斗蒔古墳群の調査】

第12表 三斗蒔古墳群 一覧表	189
-----------------	-----

図 版 目 次

図版 1	調査地全景①	図版 26	結古墳群③
図版 2	調査地全景②・結西谷IV遺跡 1 区全景	図版 27	結古墳群④
図版 3	結西谷IV遺跡 1 区の遺構①	図版 28	結古墳群⑤
図版 4	結西谷IV遺跡 2 区の遺構①	図版 29	結遺跡 F 地区①
図版 5	結西谷IV遺跡 2 区の遺構②	図版 30	結遺跡 F 地区②
図版 6	結西谷IV遺跡 2 区の遺構③	図版 31	結遺跡 G 地区①
図版 7	結西谷IV遺跡 2 区の遺構④・出土遺物①	図版 32	結遺跡 G 地区②
図版 8	結西谷IV遺跡 3 区の遺構①	図版 33	結遺跡 H 地区
図版 9	結西谷IV遺跡 3 区の遺構②	図版 34	三斗蒔古墳群③
図版 10	結西谷IV遺跡 3 区出土遺物①	図版 35	結西谷IV遺跡 2 区出土遺物②
図版 11	結本谷 1 号墳の遺構	図版 36	結西谷IV遺跡 2 区出土遺物③
図版 12	結本谷 2 号墳の遺構	図版 37	結西谷IV遺跡 3 区出土遺物②
図版 13	結古墳群①	図版 38	結西谷IV遺跡 3 区出土遺物③
図版 14	結古墳群②・三斗蒔古墳群①	図版 39	結西谷IV遺跡 3 区出土遺物④
図版 15	三斗蒔古墳群②	図版 40	結西谷IV遺跡 3 区出土遺物⑤
図版 16	結遺跡 F 地区 出土遺物	図版 41	結西谷IV遺跡 3 区出土遺物⑥
図版 17	結西谷IV遺跡 1 区の遺構②	図版 42	結西谷IV遺跡 3 区出土遺物⑦
図版 18	結西谷IV遺跡 1 区の遺構③	図版 43	結古墳群出土遺物①
図版 19	結西谷IV遺跡 2 区の遺構⑤	図版 44	結古墳群出土遺物② (X線写真)
図版 20	結西谷IV遺跡 2 区の遺構⑥	図版 45	結古墳群出土遺物③
図版 21	結西谷IV遺跡 3 区の遺構③	図版 46	結古墳群出土遺物④・結遺跡出土遺物①
図版 22	結西谷IV遺跡 3 区の遺構④	図版 47	結遺跡出土遺物②
図版 23	結西谷IV遺跡 3 区の遺構⑤	図版 48	結遺跡出土遺物③
図版 24	結本谷古墳群の遺構①	図版 49	三斗蒔古墳群出土遺物
図版 25	結本谷古墳群の遺構②		

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

出雲市の総合計画である『出雲市総合振興計画出雲神話2030』では、出雲市の基本施策のひとつ「ともに創る」に多種多様な企業立地を掲げている。計画には「魅力度No1の企業立地環境を、製造業を中心とした新たな企業用地として、斐川地域での新工業団地整備を進める」とあり、斐川地域における企業進出に備え、新たな工業団地整備を進めるとしている。

そうした計画のなか、出雲市斐川町に新たな工業団地を整備することとなったのは、令和元年(2019)10月のことである。(株)出雲村田製作所による新工場建設中の出雲斐川中央工業団地をはじめ、市内の既存工業団地は分譲率が高まっていた。これを受け、県外からの企業誘致や地元企業の事業拡張用地を確保するため、出雲市産業政策課は平成29年度から新工業団地の適地調査に着手し、新工業団地を整備する場所として「斐川町直江の斐川インターチェンジ付近」を選定した。これにより、産業政策課から依頼を受け、選定された地区に遺跡が存在するかどうか、令和2年度に分布調査、試掘調査を実施した。

分布調査の結果を基に、令和2年度に実施した試掘調査は、開発予定地の約10haを対象に148か所のトレンチ(試掘溝)を設けて調査を実施した。調査の結果、須恵器や土師器などの土器類や、平坦面、焼土面、古墳などの遺構が確認できたことから、事業予定地内にこれまで知られていなかった遺跡があることが判明した。

発見された遺跡のうち、急斜面や平坦面の遺跡を「結西谷IV遺跡」(1～3区)と命名した(第1図)。1区は事業予定地の北西丘陵の一部約250㎡、2区は事業予定地の中央丘陵東側の斜面と平坦面約1,000㎡、3区は同じく事業予定地の北側丘陵尾根の東側斜面約3,600㎡である。丘陵尾根に所在する古墳については、北東側の尾根上にある周知の古墳群「結本谷古墳群」の一部とすることにした(1・2号墳)。試掘調査の結果をもとに計画地10haのうち計約4,850㎡を遺跡発掘調査範囲として絞ることとした。なお、令和2年度の試掘調査は、国庫補助金を得て行った(事業費36,724千円 補助対象額25,494千円 国庫補助金12,747千円)。



第1図 本調査 地区割 (1:5,000)

第2節 文化財保護法の手続き

令和2年度

令和3年(2021)2月16日 出雲市教育委員会教育長より出雲警察署長に遺失物法第13条にお

ける遺物発見届提出。

令和3年(2021)2月16日 出雲市教育委員会教育長より島根県教育委員会教育長へ埋蔵物保管証の提出。

令和3年(2021)3月3日 島根県教育委員会教育長から出雲市教育委員会教育長へ埋蔵物の文化財認定及び帰属について通知。

令和3年(2021)3月16日 出雲市教育委員会教育長より島根県教育委員会教育長へ文化財保護法第97条第1項の遺跡発見の通知。

令和3年(2021)3月31日 島根県教育委員会教育長より出雲市教育委員会教育長へ遺跡の発見について通知(遺跡名:結西谷IV遺跡)。

令和3年度

令和3年(2021)7月27日 出雲市長(産業政策課)より島根県教育委員会教育長へ文化財保護法第94条第1項の埋蔵文化財発掘の通知。

令和3年(2021)8月10日 島根県教育委員会教育長より出雲市長に周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について勧告。勧告事項:工事箇所については、発掘調査を行うこと。

令和3年(2021)9月30日 出雲市教育委員会教育長より島根県教育委員会教育長へ文化財保護法第99条第1項の埋蔵文化財発掘調査の通知(結西谷IV遺跡1・2区、結本谷1号墳)。

令和4年度

令和4年(2022)9月12日 出雲市教育委員会教育長より島根県教育委員会教育長へ文化財保護法第99条第1項の埋蔵文化財発掘調査の通知(結西谷IV遺跡3区、結本谷2号墳)。

令和5年度

令和5年(2023)9月1日 出雲市教育委員会教育長より出雲警察署長に遺失物法第13条における遺物発見届提出。

令和5年(2023)9月1日 出雲市教育委員会教育長より島根県教育委員会教育長へ埋蔵物保管証の提出。

令和5年(2023)9月1日 出雲市教育委員会教育長より島根県教育委員会教育長へ遺跡の取り扱いについて協議(記録保存)。

令和5年(2023)9月5日 島根県教育委員会教育長より出雲市教育委員会教育長へ遺跡の取り扱いについて回答(記録保存)。

令和5年(2023)9月12日 島根県教育委員会教育長から出雲市教育委員会教育長へ埋蔵物の文化財認定及び帰属について通知。

第3節 調査の経過

本調査は、令和3年11月から1区、令和4年1月から2区の調査を開始した。1区では10世紀を中心とする炭窯9基を確認した。2区では、平坦面で須恵器や鍛冶関連遺物(羽口・鉄滓)など奈良時代を中心に遺物が出土した。複数の柱穴も確認しており掘立柱建物があった可能性を考えた。

第1表 調査の経過

年	西暦	月	日	内容
令和2	2020	4	1	埋蔵文化財事前調査依頼
		9	23	試掘調査 調査開始 (R3.1.14まで)
		11	27	池淵俊一 (県文化財課) 調査指導
令和3	2021	2	16	出雲警察署長へ埋蔵物発見届提出。島根県教育委員会教育長へ埋蔵文化財保管証を提出
		3	3	島根県教育委員会教育長から文化財の認定及び帰属について通知
			16	島根県教育委員会教育長へ文化財保護法第97条第1項により遺跡の発見の通知
		31		島根県教育委員会教育長から遺跡の発見について通知 (結西谷IV遺跡)
		7	27	島根県教育委員会教育長へ文化財保護法第94条第1項の埋蔵文化財発掘の通知
		8	10	島根県教育委員会教育長から発掘調査の勧告
		9	30	島根県教育委員会教育長へ文化財保護法第99条第1項の埋蔵文化財発掘調査の通知 (結西谷IV遺跡1・2区、結本谷1号墳)
		11	26	結西谷IV遺跡1区 調査開始 (R4.5.27まで)
令和4	2022	1	24	結西谷IV遺跡2区 調査開始 (R4.11.9まで)
		3	22	池淵俊一 (県文化財課) 調査指導
		5	20	結本谷1号墳 調査開始 (R4.12.6まで)
		9	12	島根県教育委員会教育長へ文化財保護法第99条第1項の埋蔵文化財発掘調査の通知 (結西谷IV遺跡3区・結本谷2号墳)
		10	4	第1回 課内検討会
		12	12	結西谷IV遺跡3区 調査開始 (R5.7.28まで)
令和5	2023	2	3	今福拓哉 (県文化財課) 調査指導
		3	11	現地説明会 (地元住民対象)
		4	17	結本谷2号墳 調査開始 (R5.7.24まで)
		5	15	結西谷IV遺跡3区でヒスイの勾玉出土
		6	19	第2回 課内検討会 写真①
		7	24	是田敦 (県文化財課) 調査指導
		8	5	現地説明会 (一般対象) 写真②
		17		JR出雲市駅アトネスいずみ新工業団地 (斐川) 発掘調査関連パネル展示 (R6.3.23まで)
		30		文化財保護法第99条第1項の埋蔵文化財発掘調査の通知
		9	1	出雲警察署長に遺失物法第13条における遺物発見届提出。島根県教育委員会教育長へ埋蔵物保管証の提出および遺跡の取り扱いについて協議
		5		島根県教育委員会教育長より遺跡の取り扱いについて回答 (記録保存)
		12		埋蔵物の文化財認定及び帰属について通知
令和6	2024	27		出雲弥生の森博物館速報展 (第1回) 「発見! 奈良時代のニュータウン〜結西谷IV遺跡の発掘調査速報その①〜」 (R6.1.29まで) 写真③
		10	2	イオンモール出雲での展示 出雲弥生の森博物館速報展「新工業団地発掘調査の成果」 (R5.12.3まで)
		1	31	出雲弥生の森博物館速報展 (第2回) 「発見! 斐川の群集墳〜結本谷古墳群の発掘調査速報」 (R6.5.27まで)
		6	15	出雲弥生の森博物館速報職員リレー講座「神名火山のふもとにて〜発掘調査でわかった古代の斐川〜」 写真④
		10	26	荒神谷博物館定例講演会「発見された奈良時代のニュータウン〜斐川町結西谷IV遺跡の発掘調査〜」

令和4年度は継続して発掘調査を実施した。2区の調査では、平坦面の掘立柱建物跡や炭窯の遺構調査を継続した。結本谷1号墳では、5月から調査を開始し、約15m×11.5mの方墳で、2基の埋葬施設があることを確認した。3区は、立木伐採終了後、丘陵東側斜面の発掘調査を12月から開始し、2区平坦面と同様に奈良時代を中心とした遺物や人工的な加工段を確認した。遺跡周辺の地元住民を対象とした中間現地説明会を3月11日に実施した。17名が参加した。

令和5年度は現地発掘調査の最終年であり、3区の調査を継続するとともに、4月から結本谷2号墳の調査を実施した。5月15日には、3区加工段SX305からヒスイ製勾玉が出土した。8月5日には一般を対象に現地説明会を実施して調査成果を公表した(写真②)。65名が参加した。

現地調査終了後、令和5年9月にはJR出雲市駅商業施設アトネスにて、パネル速報展示を行った。また、出雲弥生の森博物館にて、同年9月から「発見！奈良時代のニュータウンー結西谷IV遺跡の発掘調査速報その①ー」(写真③)、令和6年1月から「発掘！斐川の群集墳ー結本谷古墳群の発掘調査速報ー」と2回連続して新工業団地関連調査の速報展を開催した。その他、『鳥根考古学会のたより』への寄稿や出雲弥生の森博物館の職員リレー講座(写真④)、荒神谷博物館の講座で発表し、調査成果の周知に努めた。

(石原 聡)



写真① 第2回課内検討会(2号墳)



写真② 現地説明会(2区・西から)



写真③ 速報展(第1回)



写真④ 出雲弥生の森博物館職員リレー講座

第2図 調査・見学会・展示・講演会の様子

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の地理的環境

結西谷Ⅳ遺跡・結本谷古墳群は鳥根県出雲市斐川町直江に所在する（第3図）。遺跡の所在する出雲平野は東側を宍道湖、西側を日本海、南側を中国山地、北側を鳥根半島に囲まれ、宍道湖に流れ込む斐伊川と日本海に流れる神戸川の沖積作用で形成された平野である。調査地は出雲平野の南東にそびえる仏経山（標高366 m）の北麓にのびる丘陵上に位置する。仏経山は『出雲国風土記』（733年）出雲郡条に「神名火山」と記され、古来より信仰の対象である山であった。

現在でこそ出雲平野は東西約20km、南北約5kmに及ぶ広大な平野であるが、約6,000年前の縄文海進時には出雲平野の大部分が入海となっていた。その後、海退が進むとともに、約4,000年前の三瓶山の火山活動による火山噴出物が、神戸川と斐伊川（当時は西流して日本海に流れ込んでいた）によって運ばれ、平野西部では平野形成が進むとともに入海（奈良時代の神門水海）が広がっていた。一方で、平野東部では宍道湖が今より西まで拡大しており、調査地が立地する仏経山北麓の丘陵地帯の近くまで湖が入り込んでいた。結本谷古墳群が築造され、結西谷Ⅳ遺跡で人々が生活した古墳時代から奈良時代にかけても、この景観は大きく変わっていなかっただろう。

近世以降、中国山地で盛んになったたたら製鉄に伴う鉄穴流しによって、さらに多量の土砂が流れ込んで平野を拡大させた。特に、寛永年間（1624～1645）の大洪水をきっかけに、流路を東向きに変えた斐伊川によって土砂が運ばれ、東部の平野はさらに拡大した。



第3図 位置図

第2節 遺跡の歴史的環境

今回の調査では、結西谷Ⅳ遺跡・結本谷古墳群(1)で、古墳時代中期後半～後期前半の古墳群、奈良時代頃の集落跡が確認された。遺跡が立地する斐川町、特に仏経山北麓の丘陵地帯では、縄文時代から連綿と人々の活動の痕跡が確認され、数多くの遺跡が見つまっている地域である。以下に縄文時代から近代にかけての出雲平野東部を中心に主要な遺跡を概観し、結西谷Ⅳ遺跡・結本谷古墳群の通史的な位置づけについて検討する(第4・5図)。

縄文時代 縄文時代の出雲平野は海進によって大部分が海になっており、人々が生活できたのは標高の高い地域に限られる。出雲平野で最も古い縄文時代の遺跡は早期のもので、大社湾に面する上長浜貝塚(56)や、北山山麓に位置する山持遺跡(61)、菱根遺跡(59)などがある。

斐川の丘陵地帯では、前期前葉の土器が出土した結遺跡(15)が最も古い遺跡として知られる。その後も中期の三井Ⅱ遺跡(17)や上ヶ谷遺跡(22)でも土器が出土している。この頃までの遺跡の立地はほぼ丘陵上や谷の最奥地などに限られる。

海退が始まる後期から晩期になると、標高の低い場所でも遺跡が確認されるようになる。矢野遺跡(32)や三田谷Ⅰ遺跡(44)など平野の微高地や丘陵の縁辺地にも遺跡が拡大する。斐川の丘陵地帯でも、武部遺跡(13)や後谷遺跡(26)など谷の入り口付近まで進出することがわかっている。

弥生時代 弥生時代になると、人々はさらに平野部へと活動の場を広げる。前期の遺跡としては、縄文時代から継続する矢野遺跡や山持遺跡、後谷遺跡のほか、新たに古志本郷遺跡(46)や青木遺跡(62)が挙げられる。

中期になると、出雲平野の各所で集落が急速に発達し、拠点集落の遺跡群を形成するようになる。矢野遺跡や小山遺跡(33)を中心とした四路遺跡群、青木遺跡を中心とした美談遺跡群、白枝本郷遺跡(36)を中心とした白枝遺跡群、天神遺跡(37)を中心とした天神遺跡群、古志本郷遺跡や下古志遺跡(47)を中心とした古志遺跡群、中野清水遺跡(29)や中野美保遺跡(30)を中心とした中野遺跡群が知られる。斐川の丘陵地帯にも、杉沢遺跡や杉沢Ⅱ遺跡(19)を中心とした杉沢遺跡群が存在し、人々が活動していたことが判明している。中期末になると、結西谷Ⅳ遺跡から東に約2kmの地点にある荒神谷遺跡(7)で銅剣358本、銅矛16本、銅鐙6個が埋納された。

後期になると、西谷墳墓群(27)で大型の四隅突出型墳墓が築かれるようになる。西谷墳墓群では、特殊器台といった吉備地方の搬入土器、北陸地方の影響を受けた土器、ガラス勾玉・小玉や朱などの舶来品が出土し、他地域と広く交流をもった強大な「出雲王」が出現したことを示す。破鏡やガラス玉といった舶来品が出土した白枝荒神遺跡(35)をはじめ、平野の各遺跡でも西日本の各地域や大陸との交流がうかがえる遺物が出土し、活発な広域交流や出雲平野の勢力拡大がうかがえる。

古墳時代 古墳時代前期になると、平野部の各所で営まれていた大規模集落が急速に衰退する。それに呼応するように、古墳時代初頭には古墳の築造も目立たなくなり、出雲平野で最古の前方後円墳といわれる大寺Ⅰ号墳(63・52m)が、北山山麓に築かれるのは前期後半である。平野南西部の丘陵地帯でも、前期後半から中期前半にかけて、浅柄Ⅱ古墳(51)や山地古墳(55・円・24m)、常楽寺柿

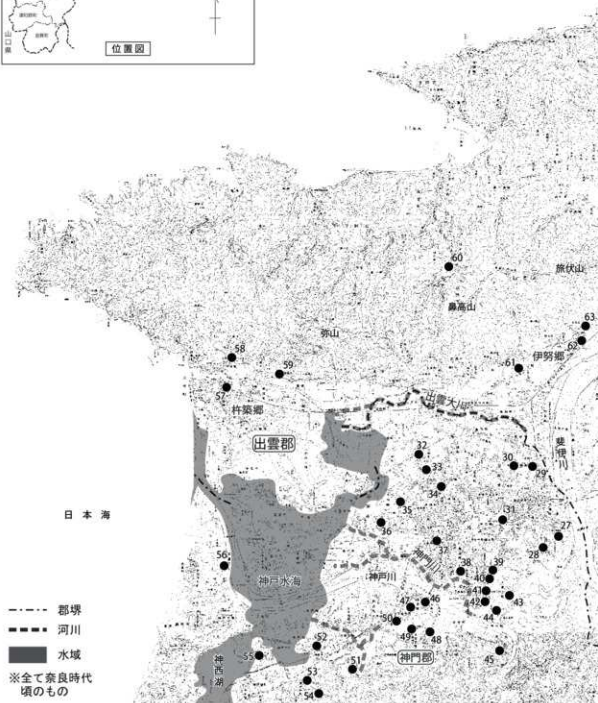
木田1号墳(前方後円・35m)、北光寺古墳(54・前方後円・64m)といった有力な古墳が多く築かれる。

斐川の丘陵地帯では、中期になると小丸子山古墳(5・32m)や軍原古墳(2・29m?)といった中型の円墳が築かれる。中期後半には、当時の出雲で最大級の前方後円墳である神庭岩船山古墳(4・49m)が、穴道湖に面した丘陵先端に築かれる。中期後半から後期前半にかけて、出雲平野では珍しい初期群集墳である結古墳群(15・34基)や三斗蒔古墳群(16・7基)が築造されている。なかでも、結11号墳からは山陰で3本しか出土例のない蛇行剣が出土しており注目される。また、西1号墳(14)から全長108cmの大刀が出土している。

後期になると、平野南部の三田谷I遺跡や九景川遺跡(53)のほか、平野部の各遺跡で再び集落形成が活発化する。それに合わせて後期後半以降、古墳の築造も盛んになる。神戸川東岸では、出雲最大級の前方後円墳である今市大念寺古墳(31・92m)のほか、上塩治築山古墳(40・円・46m)や上塩治地蔵山古墳(41)、半分古墳(42・前方後円・34m以上)といった、大型の横穴式石室をもつ古墳が築造される。これらの古墳は出雲西部の首長層が代々葬られたと考えられる。築山遺跡・築山古墳群(39)では、周溝や石室底部しか残っていないものの、上塩治築山古墳を囲むように古墳群が築造されたことが判明している。首長を支えた有力者の古墳として、神戸川西岸には妙蓮寺山古墳(49・前方後円・49m)や放し山古墳(48・円・13m)、宝塚古墳(50)が、穴道湖北西岸には国富中村古墳(64・円・30m)が築かれている。神戸川西岸の刈山古墳群(45)は、横穴式石室を内部主体に持つ39基の古墳で構成される群集墳である。また、後期後半以降には横穴墓の築造も隆盛し、平野西部では上塩治横穴墓群(43・236基)や神門横穴墓群(52・120基)など、大規模な横穴墓群が築かれた。

平野東部でも後期になると佐利保谷遺跡(6)や尾田瀬II遺跡(9)、西I遺跡(12)などで土器が出土しており、人々の活動が活発化したことを示す。平野西部には及ばないものの、平野横穴墓群(20・19基)や大倉横穴墓群(3・6基)、杉沢横穴墓群(19・15基)など横穴墓も多く築かれている。

奈良・平安時代 奈良時代の様相は『出雲国風土記』からも知ることができる。それによると、現在の出雲平野には4郡(出雲郡、神門郡、橋縫郡、秋鹿郡)がまたがり、斐川の丘陵地帯は出雲郡にあたる。出雲郡には8つの郷が記されており、結西谷IV遺跡は築治郷と健部郷の境あたりに位置する。出雲郡の郡家は出雲郷に置かれたとされ、後谷遺跡で見つかった大量の炭化米を伴う礎石建物跡は郡家の正倉跡と推定されている。付近の小野遺跡(24)や稲城遺跡(25)では、瓦や硯、呪符木簡などが出土し、郡家関連遺跡として注目される。出雲国古代山陰道跡(21)が斐川の丘陵地帯を東西に横断する様子が2kmにわたって確認されており、道度条に記されている「正西道」にあたる古代道と推定されている。杉沢III遺跡(19)では、丘陵上で9本柱の掘立柱建物跡が見つかり、風土記に記された神社との関連性が指摘されている。他にも、結遺跡や三井II遺跡、堀切I遺跡(18)、三メ田遺跡(23)などでは、丘陵上や尾根の斜面で7世紀後半から8世紀代の掘立柱建物跡や加工段が見つまっている。特に三メ田遺跡では、3×3間の重厚なつくりをもつ総柱の掘立柱建物跡が確認され、風土記に記載された築治郷の正倉との関連が推測されている。谷底に立地する尾田瀬II遺跡や西谷遺跡(8)では、当時の水田跡が発見され、西谷遺跡では牛の足跡も確認された。このように斐川の丘陵地帯では、奈良時代頃から様々な性格の遺跡が急増し、開発が加速した様子がうかがえる。



第4図 周辺の遺跡(西)(1:100,000)

平野西部では、神戸川西岸の古志本郷遺跡で多数の大型建物跡が確認され、神門郡家と推定されている。鹿蔵山遺跡（57）や青木遺跡、三田谷1遺跡でも墨書土器や硯、木簡、奈良三彩といった官衙に関連すると考えられる遺物や遺構が確認されている。特に、青木遺跡では神社施設と考えられる9本柱の建物跡や石敷きの井戸跡といった祭祀遺構や、神像や絵馬といった信仰関連の遺物が出土しており注目される。また、天寺平廃寺（11）や長者原廃寺（28）、神門寺境内廃寺（38）では、この時期の瓦や基壇などが確認され、『出雲国風土記』に記された新造院との関連が推察されている。

中世 中世になると出雲大社と鰐淵寺の両社寺が勢力を強めていく。出雲大社は平野東部に北島村や千家村といった所領を成立させている。出雲大社境内遺跡（58）で確認された3本束ねの巨大柱を用いた本殿遺構は、宝治2年（1248）造営のものだと考えられている。鰐淵寺（60）は神仏習合思想を背景に、鎌倉時代から南北朝時代にかけて勢力を強め、多くの僧坊・堂塔が建てられた。最盛期には3,000石もの所領を有し、平野東部でも柴治郷などを所領とした。結西谷IV遺跡が所在する「直江」という地名は永享5年（1433）に柴治郷直江村として初見される。また、堀治氏や朝山氏、古志氏といった在地の有力武士も中世以降に勢力を強め、築山遺跡や蔵小路西遺跡（34）、古志本郷遺跡で居館跡など関連する遺構が確認されている。

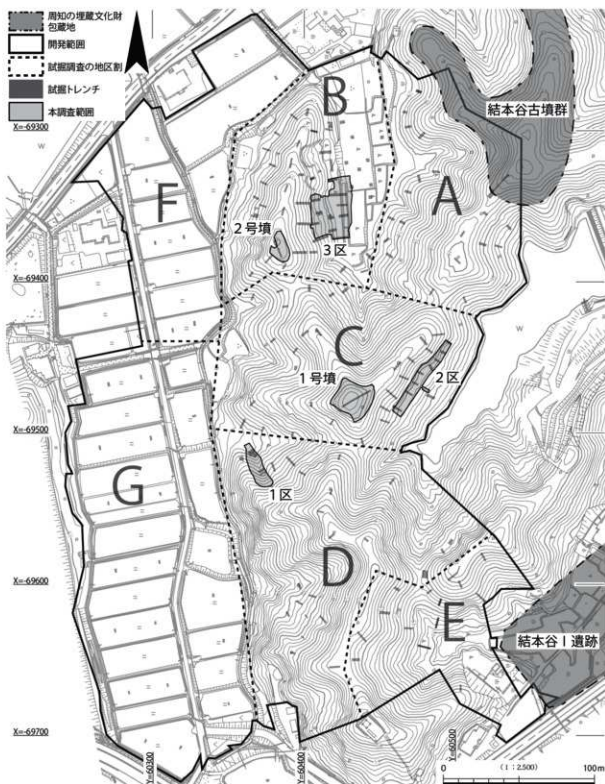
戦国時代になると、守護地の尼子氏が京極氏から守護職を譲り受け、出雲国を掌握する。尼子氏は出雲国内に主要な防衛拠点として「尼子十旗」と呼ばれる城を置いた。そのうちのひとつが斐川町に所在する高瀬城（10）である。尼子氏とそれを破った毛利氏は、出雲大社や鰐淵寺といった寺社や在地の有力武士に対して支配を強め、戦国大名として成長していった。

近世・近代 関ヶ原の戦い（1600年）後に滅封された毛利氏に代わり、堀尾氏や京極氏が入国するも長く続かなかった。寛永15年（1638）に松平直政が出雲国に入国して以降、雲州松平家として幕末まで存続する。寛永年間（1624～1645）の大洪水をきっかけに斐伊川が流路を東向きに変えるなど、当時の出雲平野は河川の氾濫が頻発する湿地帯であった。そこで、出雲平野の治水工事や新田開発が進められ、出雲平野は藩内随一の穀倉地帯に成長した。なかでも、新川は斐伊川から穴道湖南西岸まで、斐川の丘陵裾を10kmも掘削した大事業であった。しかし、斐伊川上流域で盛んであったたたら製鉄などにより、大量の土砂が流れ込んで川を埋め立てたため、洪水の原因となり昭和14年（1939）に新川は廃川となった。その後、新川跡地には太平洋戦争末期に旧海軍大社基地の滑走路が造られた。周囲の丘陵地帯には掩体や爆弾庫、魚雷庫、高射砲陣地など基地の関連施設が多く造られ、杉沢遺跡で確認されたタコ壺群も大社基地に関係するものと考えられる。なお、コンクリート舗装の滑走路跡は近年まで往時の姿を留めていたが、2023年以降に一部を残してそのほとんどが消滅した。

斐川の丘陵地帯を地理的・歴史的に概観すると、丘陵のすぐそばまで水域が広がっていた縄文時代以降、近現代にわたるまで連綿と人々の活動が継続してきた土地である。特に、古墳時代中期以降は多くの古墳や横穴墓群が築かれ、奈良時代には郡家関連施設や古代道が整備されたことにより、さらに開発が進んだと考えられる。結西谷IV遺跡・結本谷古墳群は斐川の丘陵地帯の開発が進んだ時代とちょうど合致し、調査では当時の様子をさらに深く知る資料を得ることが期待された。（下江裕貴）

第3章 試掘調査

第1節 地区割とトレンチ設定



第6図 試掘調査対象範囲・地区割 (1:2,500)

工業団地の造成予定地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地は含まれていなかったが、周辺には、結本谷Ⅰ～Ⅲ遺跡や結西谷Ⅰ～Ⅲ遺跡、結本谷古墳群など多くの遺跡が存在しており、造成予定地内にも未確認の遺跡があることが予見された。そのため、造成予定地全体を対象範囲として、令和2年(2020)9月23日～令和3年(2021)1月14日まで試掘調査を行った。なお、令和3・4年度の本調査前にも、本調査範囲を絞るために追加でトレンチを設定して試掘を行ったが、それらのトレンチ調査も含めて本章で報告する。

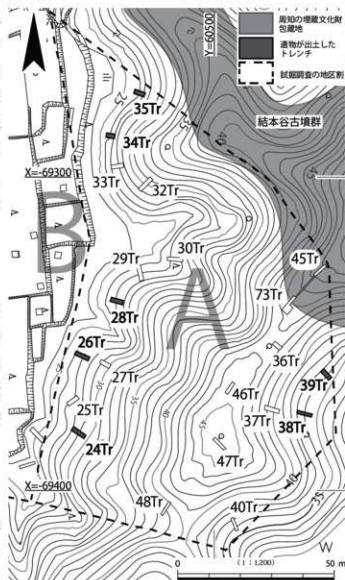
試掘調査では、対象範囲を丘陵部と耕作地にわけて調査を行った(第6図)。そのうち、丘陵部は地形に合わせてA～E区の5地区に分けた。事前踏査時の地形観察によって、遺跡の存在を想定した尾根上や緩斜面、平坦面などにトレンチを設定し、人力掘削による調査を行った。ただし、B区の谷部にある旧耕作地は重機の進入が可能だったため、重機掘削によるトレンチ調査を実施した。耕作地に関しては、F・G区の2地区に分けて、水田1反につき1～2か所ずつ重機掘削によるトレンチ調査を行った。試掘調査で設定したトレンチは丘陵部(A～E区)で152か所、耕作地(F・G区)で27か所の計179か所に及んだが、次節以降では遺構・遺物が確認されたトレンチを中心に試掘調査の成果を詳述していく。なお、確認した遺構については、本調査の報告(第4・5章)で記載する遺構名で表示した。また、本調査範囲(2・3区)にあたるトレンチで出土した遺物については、各調査区の報告(第4章第3・4節)で紹介するため、本章では掲載しない。

第2節 丘陵部の調査

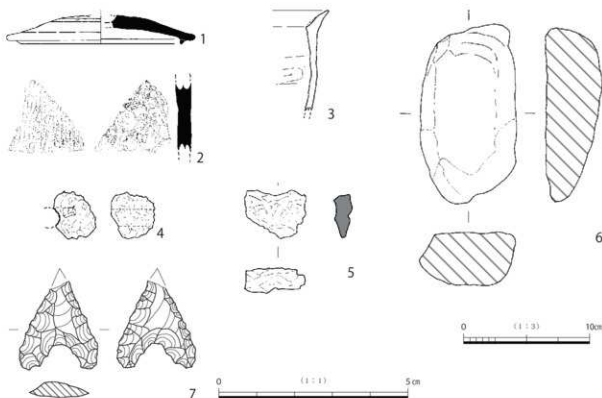
造成予定地の東側は標高約60m、比高差約40mの丘陵となっている。丘陵部の試掘調査は主に人力掘削によるトレンチ調査を実施し、計152か所のトレンチを設定した。以下に各地区ごとの調査成果を詳述する。

第1項 A区(第7・8図)

A区は造成予定地内のうち、北東側の尾根とその斜面を含む地区である(第7図)。A区内では21か所のトレンチを設定したが、遺構は全く確認できなかった。



第7図 試掘調査A区 トレンチ配置図(1:1,200)



第8図 試掘調査A区 出土遺物（1：3、7のみ1：1）

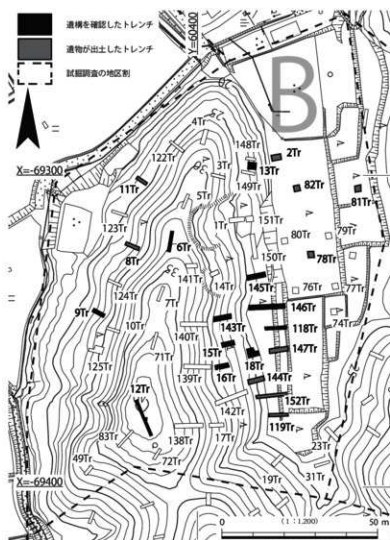
尾根の西斜面裾に設定した24・26・28・34・35トレンチで、土師器や須恵器、砥石、鞆羽口が少量出土した。また、尾根の東斜面に設定した38・39トレンチでは石鏃1点や土師器、鉄滓が出土した。

出土遺物のうち、図化できた7点を第8図に挙げた。1は35トレンチから出土した須恵器の蓋で、国府編年第1型式のものである。2は24トレンチから出土した須恵器の甕の胴部片である。3は35トレンチから出土した土師器の甕で、外面の全面にススが付着している。4は35トレンチから出土した鞆羽口で、送風口の部分が残存している。5は38トレンチから出土した鉄滓である。6は28トレンチから出土した流紋岩製の砥石である。表面中央の砥面は良く研磨されてツルツルとしているが明瞭な擦痕はみられない。7は39トレンチから出土した安山岩製の石鏃で、深い抉りをもつ凹基無茎式である。いずれの遺物も自然堆積層から出土し、小片が多いため、周辺から流入した遺物である可能性が高い。

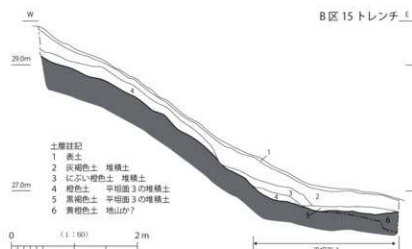
第2項 B区（第9～14図）

B区は造成予定地内のうち、北西側の尾根とその東側の谷にある旧耕作地を含む地区である。B区内では55か所のトレンチを設定した（第9図）。

調査の結果、尾根の東斜面では、加工段と考えられる遺構が複数確認された（15・16・18・118・143・145・146トレンチ）。15トレンチでは標高約26.7mで幅2.2m以上の平坦面を確認した（平坦面3）（第10図）。16トレンチでは標高約28.3mで幅約1.7mの平坦面を確認した（平坦面1）（第11図左）。18トレンチでは標高約24.2mで幅約1.8mの平坦面を確認した（平坦面4）（第11図右）。



第9図 試掘調査B区 トレンチ配置図(1:1,200)



第10図 B区15トレンチ 北壁土層図(1:60)

143トレンチでも標高約27.1mで幅約2.1mの平坦面を確認した(平坦面2)(第12図)。

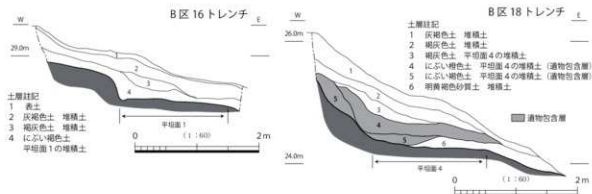
これらのトレンチやその周辺に設定したトレンチ(119・144・147・152トレンチ)から出土した遺物は、7世紀末～8世紀代の須恵器・土師器がほとんどで、加工段と密接に関連すると考えられる。以上の成果から、B地区の東斜面には奈良時代頃の遺跡が存在すると判断し、本調査の対象(3区)とした。なお、これらのトレンチから出土した遺物は第4章第4節で本調査出土の遺物とともに紹介する。

尾根の西斜面では、9トレンチで性格不明の溝状遺構が確認されたほか、8・9・11トレンチで弥生土器や土師器、須恵器が少量出土した。

出土遺物のうち、図化できた3点を第13図に掲げた。1・2は9トレンチから出土した須恵器である。1は輪状つまみをもつ蓋、2は高台付坏で、どちらも国府編年第2型式である。3は11トレンチから出土した土師器の甕もしくは壺である。頸部の破

片で内外面に横ハケが施されている。

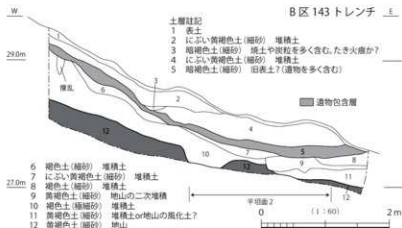
谷の旧耕作地では、2・78・81・82トレンチで土師器や須恵器、陶磁器の細片が少量出土した。



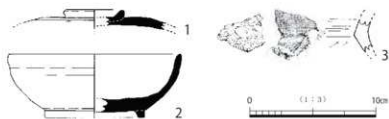
第11図 B区16トレンチ(左)・18トレンチ(右) 北壁土層図(1:60)

いずれの土器片も旧耕作地の造成土内や耕作土内から出土し、細片で摩滅も激しいため、造成や耕作の際に周辺から混ざりこんだ遺物である可能性が高い。

尾根上では、マウンド状の地形にあわせて6か所ほどトレンチを設定したが、そのうち6・12トレンチで古墳に係る遺構を確認した。尾根上の標高34m付近に設けた6トレンチでは、トレンチの北半で古墳の主体部と考えられる長さ2.2m以上の土壌1基が確認された(第14図上)。また、トレンチの南半で東西方向にのびる幅約2.4



第12図 B区143トレンチ 北壁土層図(1:60)

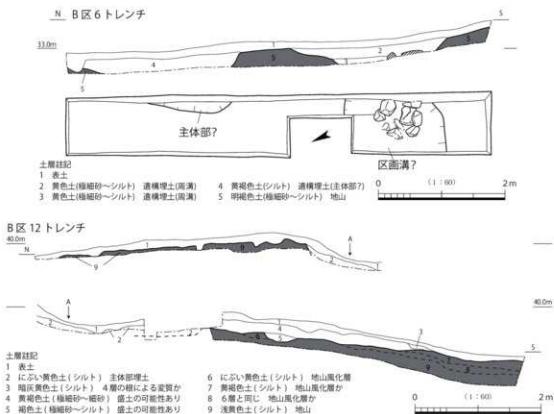


第13図 試掘調査B区 出土遺物(1:3)

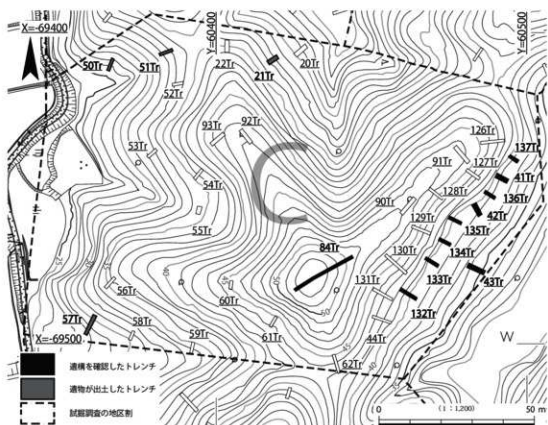
mの溝1条も確認しており、古墳の区画溝の可能性がある。6トレンチから南へ約50mほどいった標高40m付近の尾根上に設けた12トレンチでは、古墳の主体部と考えられる長さ約2.7mの土壌1基を確認した(第14図下)。なお、14図であげた土層図は試掘調査時のものであり、本調査時の土層図とは異なるため注意されたい。以上の成果から、B区の尾根上には古墳2基が存在すると判断し、東隣の尾根上にある既知の古墳群「結本谷古墳群」に含めて(第5章記載のB支群)、南側の12トレンチの古墳を2号墳、北側の6トレンチの古墳を3号墳と呼称した。なお、3号墳は残地森林内に保存されることとなったため、2号墳のみ本調査の対象となった。

第3項 C区(第15～21図)

C区は造成予定地内のうち、A・B地区の南側に位置し、丘陵の最高所から北東・北西・西・南の



第14図 B区6トレンチ平面図・東壁土層図(上)・12トレンチ東壁土層図(下)(1:60)



第15図 試掘調査C区 トレンチ配置図(1:1,200)

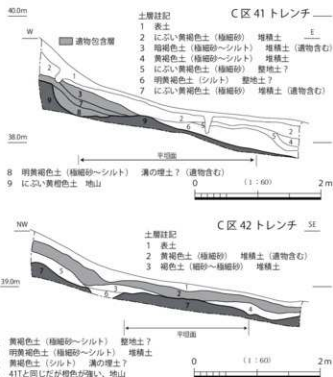
4方向にのびる尾根を含む地区である(第15図)。C区内では37か所のトレンチを設定した。

調査の結果、北東方向にのびる尾根の東斜面では、標高39 m付近と標高35 m付近の上下2段にわたって平坦面が確認された(41～43・132～137トレンチ)。

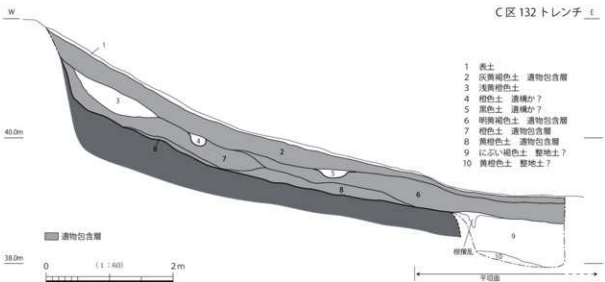
41・42・132～137トレンチでは、それぞれ標高38.5～39 m付近で平坦面が確認された(第16～19図上)。これらのトレンチで確認された平坦面は全て同一のものだと考えられ、長さは北東～南西方向に約60 m、幅は最大で約7.5 mという大規模な平坦面が想定できる。

上段の平坦面の斜面下方に設定した43トレンチでも、標高35 m付近で幅4.8 m以上の平坦面が確認された(第19図下)。後述のとおり、この下段の平坦面は本調査範囲から外れたため正確な規模は不明だが、周辺地形を参考にすれば上段の平坦面と同程度の規模を想定できる。

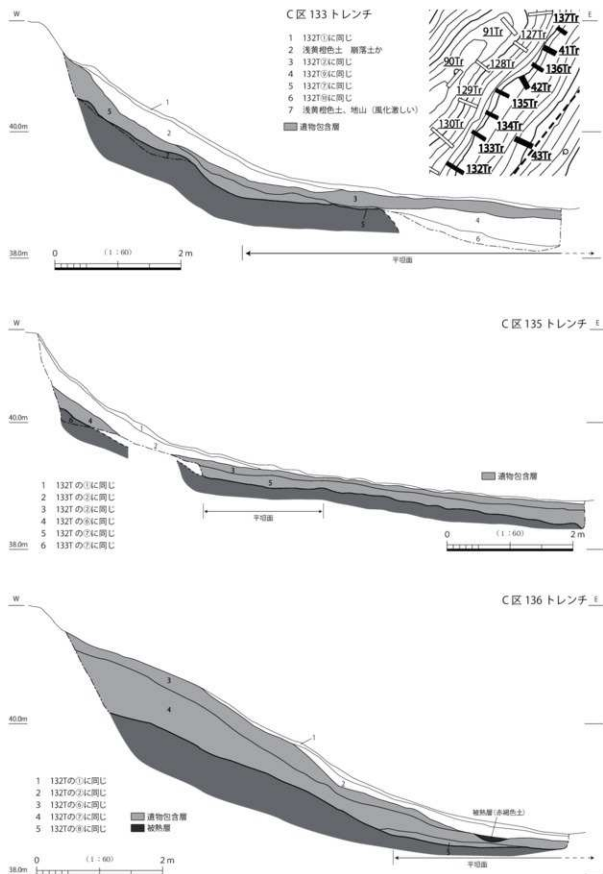
平坦面上では複数の柱穴や土坑が確認されたほか、7世紀後半～8世紀代の須恵器・土師器も多く出土したことから、これらの平坦面は奈良時代頃に人為的に造成・利用されたと考えられる。以上の成果から、C区の北東方向にのびる尾根の東斜面には、奈良時代頃の遺跡が存在すると判断し、本調査の対象(2区)とした。ただし、43トレンチを含む下段の平坦面は残地森林として保存されることとなり、上段の平坦面のみ本調査範囲と



第16図 C区 41トレンチ(上)・42トレンチ(下)
北壁土層図(1:60)



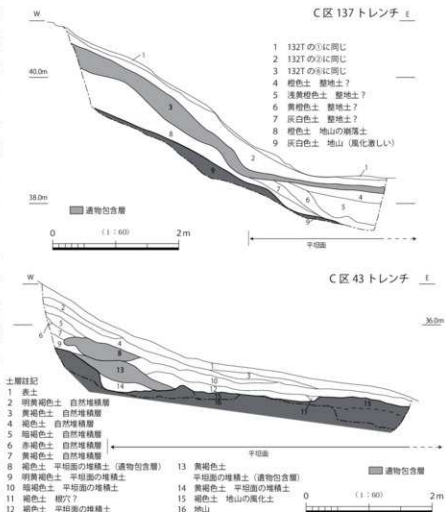
第17図 C区 132トレンチ 北壁土層図(1:60)



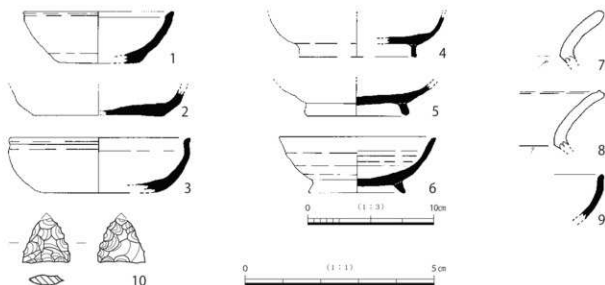
第18図 C区133トレンチ(上)・135トレンチ(中)・136トレンチ(下) 北壁土層図(1:60)

なった。そのため、本調査範囲から外れた43トレンチで出土した須恵器・土師器のうち、遺存状態の良い8点を第20図に挙げた。

1～3は須恵器の無高台坪で、1は国府編年第1型式、2は底部片で国府編年第2～4型式、3は国府編年第2型式のものである。4～6は須恵器の高台付坪で、4・5は底部片で国府編年第2型式、6は国府編年第1型式のものである。7・8は土師器甕の口縁部片である。どちらも単純口縁で口縁部内外面には横ナデを施す。以上のことから、43トレンチを含む下段の平坦面でも7世紀後葉～8世紀代の須恵器が出土しており、本調査の対象となった上段の平坦面と同じ時期に利用されたと考えられる。



第19図 C区137トレンチ(上)・43トレンチ(下) 北壁土層図(1:60)

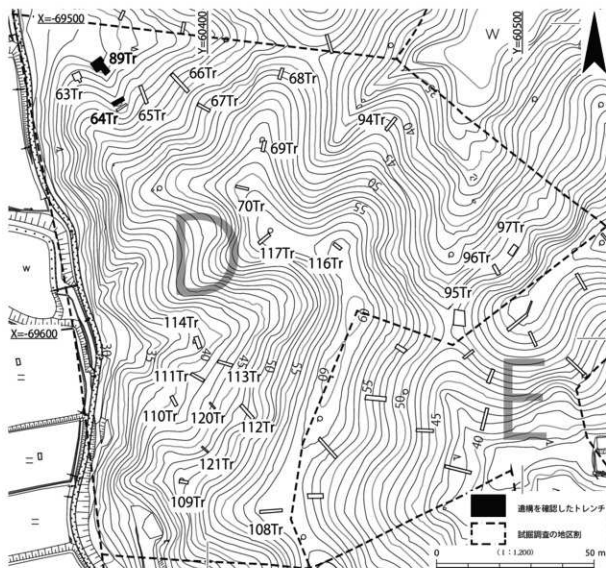


第20図 試掘調査C区 出土遺物(1:3、10のみ1:1)

C区84トレンチ



第21図 C区84トレンチ 北壁土層図(1:80)



第22図 試掘調査D区 トレンチ配置図(1:1,200)

ほかにも、北西方向にのびる尾根の斜面に設定した 21・50・51 トレンチや、西方向にのびる尾根の南斜面に設定した 57 トレンチでは、須恵器や石畿が少量出土した。

出土物のうち、図化できた 2 点を第 20 図に挙げた。9 は 21 トレンチから出土した須恵器の坏の口縁部片で、国府編年第 3～4 型式のものと思われる。10 は 50 トレンチから出土した黒曜石製の石畿で凹基無茎式のものである。いずれの遺物も自然堆積層から出土し、細片で摩擦も激しいため、周辺から流入した遺物である可能性が高い。

丘陵の最高所にあるマウンドに設定した 84 トレンチでは、古墳の主体部と考えられる幅約 1.5 m の土壌 1 基を確認したため、このマウンドは古墳の可能性が高いと判断した(第 21 図)。よって、この古墳も結本谷古墳群の一部(第 5 章記載の A 支群)に含め、1 号墳と呼称して本調査の対象とした。なお、第 21 図であげた土層図は試掘調査時のものであり、本調査時の土層図とは異なるため注意されたい。

第 4 項 D 区(第 22・23 図)

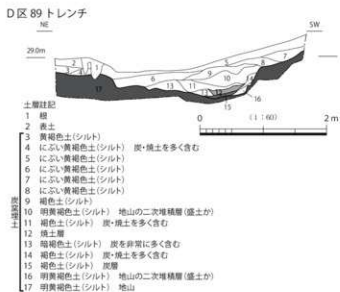
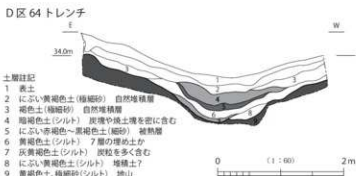
D 区は造成予定地内のうち、C 区の南側に位置し、造成予定地の南端まで南北にのびる尾根とその斜面を含む地区である(第 22 図)。D 区内では 24 か所のトレンチを設定した。

調査の結果、北向きの谷に設定した 64・89 トレンチで、多量の焼土と炭片が堆積する土坑を複数確認した(第 23 図)。これらの土坑は炭窯跡と考えられ、炭窯の操業時期を示すような遺物は出土しなかったが、炭窯内から採取した炭片を試料として AMS 年代測定を行ったところ、10 世紀～11 世紀初めの年代が得られた。以上の成果から、D 区の北向きの谷では平安時代に炭窯が操業されたと判断し、本調査の対象(1 区)とした。

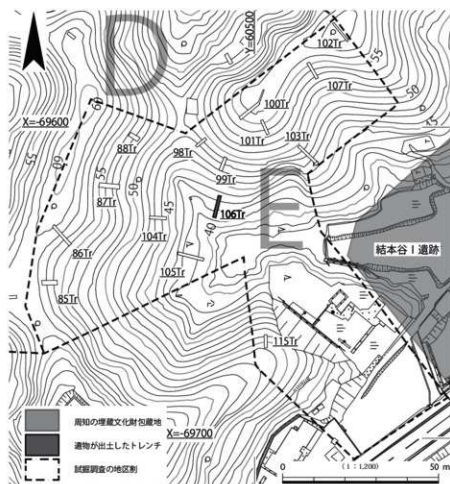
第 5 項 E 区(第 24・25 図)

E 区は造成予定地内のうち、南東側に位置し、東向きに広い谷を含む地区である(第 24 図)。E 区内では 15 か所のトレンチを設定したが、遺構は全く確認できなかった。

谷の北側に設定した 106 トレンチでは土師器や須恵器が少量出土した。出土



第 23 図 D 区 64 トレンチ (上)・89 トレンチ (下)
南壁土層図 (1:60)



第24図 試掘調査E区 トレンチ配置図(1:1,200)

遺物のうち、図化できた1点を第25図に挙げた。1は須恵器の高台付壺の底部片である。自然堆積層から出土し、細片で摩擦も激しいため、周辺から流入した遺物である可能性が高い。

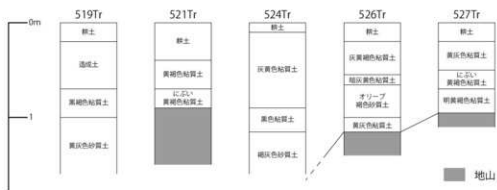
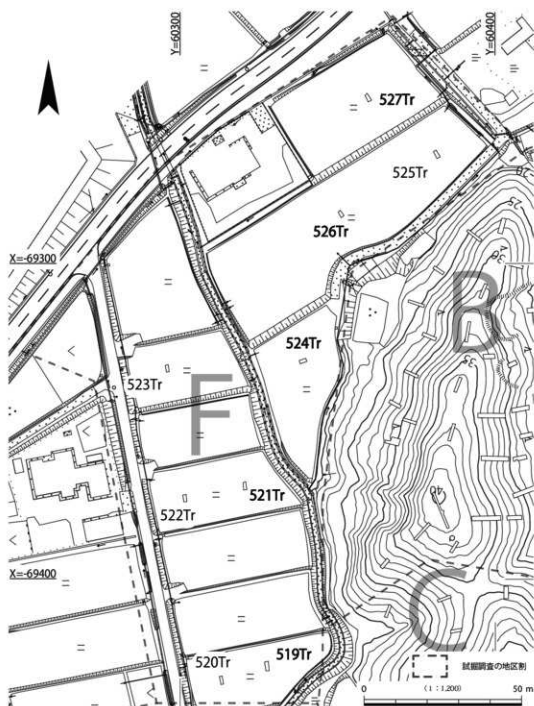
第25図 試掘調査E区
出土遺物(1:3)

第3節 耕作地の調査

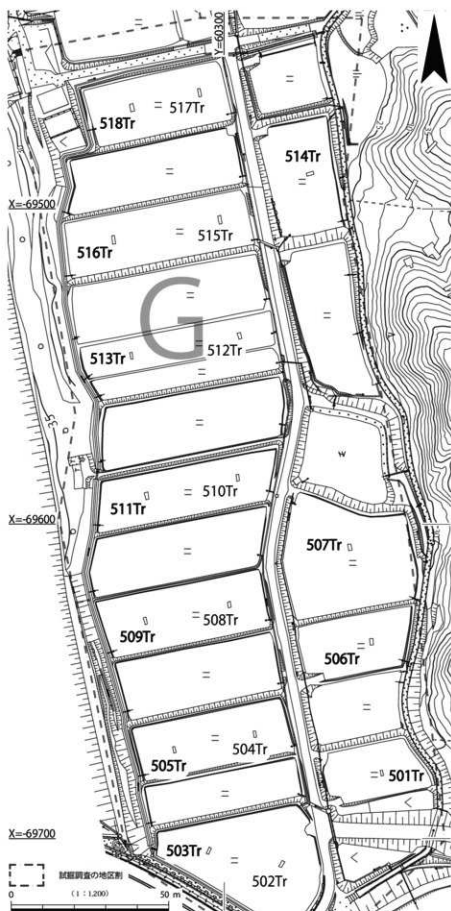
造成予定地の西側には、標高約16～35mの緩やかに北へ向かって低くなる谷が広がっており、水田耕作が行われていた。耕作地の調査は重機掘削によるトレンチ調査を実施し、計27か所のトレンチを設定した。以下に各地区ごとの調査成果を詳述する。

第1項 F区(第26図)

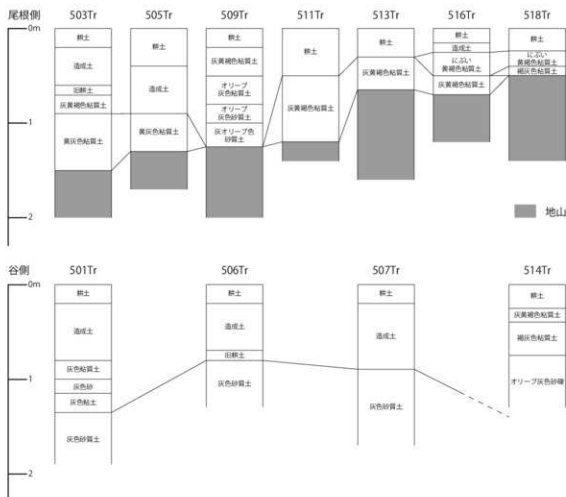
F区は耕作地の北半にあたる地区である(第26図)。9か所のトレンチを設定したが、遺構・遺物は全く確認できなかった。谷の入り口側に近い526・527トレンチ等では、地表から0.9～1.2mほどで地山を確認した。一方で、519・524トレンチなどでは1.5m以上掘削しても地山を確認できず、自然堆積層や圃場整備の際の造成土が厚く堆積していた。



第 26 図 試掘調査 F 区 トレンチ配置図 (1:1,200)・トレンチ柱状図



第27図 試掘調査G区 トレンチ配置図 (1:1,200)



第28図 試掘調査G区 トレンチ柱状図

第2項 G区(第27・28図)

G区は耕作地の南半にあたる地区である(第27図)。18か所のトレンチを設定したが、遺構・遺物は全く確認できなかった。尾根側に近いトレンチ(503・505・509・511・513・516・518)では、地表から0.5～1.5 mほどで地山を確認した。一方で、谷側に近いトレンチ(501・506・507・514)では、2 m近く掘削しても地山を確認できず、自然堆積層や圃場整備の際の造成土が厚く堆積していた(第28図)。

以上のことからF・G区の緩やかな谷には、谷側を中心に大量の土砂が流入しているほか、圃場整備によって大きく地形が改変されており、元来はより深い谷状地形であったと推定される。

第4節 試掘調査の成果

工業団地の造成予定地内には、これまで周知の埋蔵文化財包蔵地は知られていなかったが、計 179 か所のトレンチを設定した試掘調査の結果、B・C 区の尾根の東斜面ではそれぞれ奈良時代頃の遺構・遺物を確認し、D 区の北向きの谷でも平安時代頃の炭灰跡を確認した。

以上の発見により、この3地区を新たな埋蔵文化財包蔵地「結西谷Ⅳ遺跡」として届け出て、本調

査の対象範囲（1・2・3区）とした。

さらに、試掘調査ではB区の尾根上に2基、C区の丘陵の最高所に1基の古墳を新たに発見した。これら3基の古墳は造成予定地北東側の尾根上にある既知の古墳群「結本谷古墳群」に含めることとし（A・B支群）、残地森林内に残る3号墳を除いた1・2号墳を本調査の対象範囲とした。

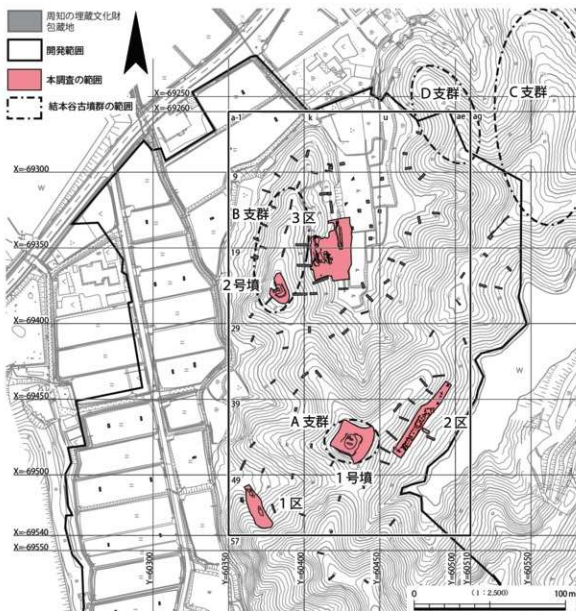
各遺跡の本調査成果については、次章以降で詳述する。（下江裕貴）

第4章 結西谷Ⅳ遺跡の調査

結西谷Ⅳ遺跡は、工業団地造成予定地の西側から北側北半部に位置し、3つの調査区にまたがる遺跡である。調査区は、南に位置する調査区から1区、東に2区そして最も北に位置する3区と呼称し、それぞれの調査区について発掘調査を実施した(第29図)。本章でもその名称に即して調査区ごとに調査成果を述べる。

第1節 調査区の選定

試掘調査の結果、開発範囲すべてで遺構や遺物が確認されることはなく、限定的な範囲に収まることが判明した。また、本調査前にさらなるトレンチ追加調査を実施して、調査対象面積をさらに縮小



第29図 本調査 地区割 (1:2,500)

した。特に2区・3区の急斜面部分は、トレンチ調査の結果から遺構が存在する可能性が低く、本調査対象範囲から外した。

調査区には世界測地系第Ⅲ系座標に基づいて、四方のグリッドを設定した。グリッドはX=-69260、Y=60350の交点を基点として、5m間隔のグリッドを設けた。南に向けてアラビア数字(1、2、3・・・)を、東に向けてアルファベット小文字(a、b、c・・・aa、ab、ac・・・)を付与した。グリッドの名称については、北西隅の交点の番号を基準とした。遺構の位置については、グリッドを基準として記録した。遺物は基本的に遺構ごとに取り上げ、遺構外から出土したものについては、グリッド番号ごとに層位を確認し、取り上げた。

1区調査区

試掘調査D区の64・89トレンチでは、多量の焼土と炭片が堆積する土坑が複数確認された。当初製鉄関連の遺構も想定したが、製鉄関連遺物(鉄滓、鍛造剥片、粒状滓など)は、出土しておらず、廃滓場も確認できなかった。確認した遺構は、伏せ焼の炭窯であり周辺にも同様の遺構が存在する可能性があったため1区として設定し、発掘調査を実施した。

2区調査区

試掘調査C区の41・42・43トレンチでは、北東方向にのびる尾根の東斜面及び平坦面に奈良時代を中心とする遺構、遺物を確認したため2区として設定し、発掘調査を実施した。当初急斜面部分も本調査区に入っていたが、126～131トレンチの6本のトレンチ調査を行い、遺構・遺物がないことを確認し、本調査区から除外した。

3区調査区

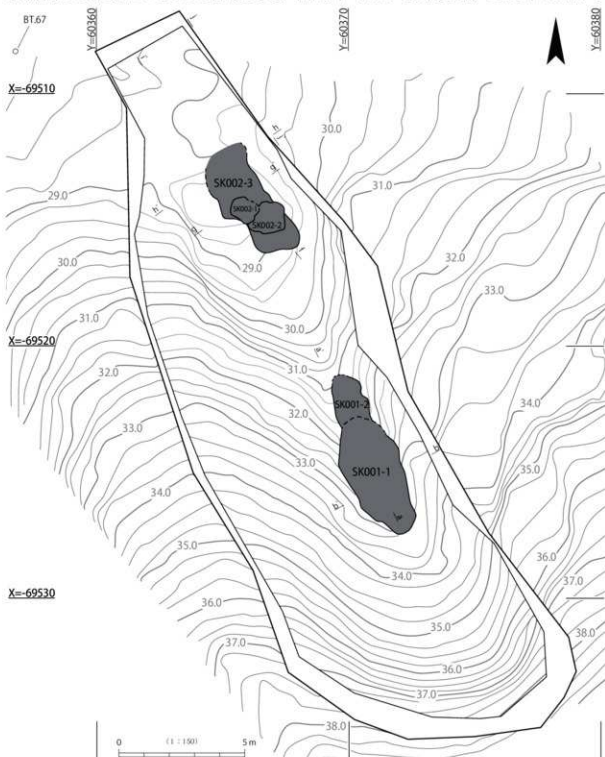
試掘調査B区の15・16・18トレンチでは、加工段や遺物を確認した。B区丘陵東側の斜面に奈良時代を中心とする遺構・遺物を確認したため3区として設定し、調査を実施した。当初急斜面部分も本調査区に入っていたが、138～142トレンチの5本のトレンチ調査を行い、遺構・遺物がないことを確認し、本調査区から除外した。

(石原 聡)

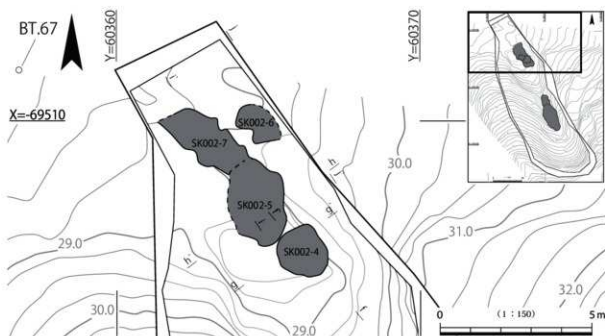
第2節 1区の調査

第1項 調査の目的と方法

試掘調査で平安時代の炭窯が確認された1区の本調査は、炭窯の具体的な構造や数、操業順序、操業時期などを明らかにすることを目的として、令和3年(2021)11月26日から翌4年(2022)5



第30図 1区 平面図1 (SK001・SK002-1~3) (1:150)



第31図 1区 平面図2 (SK002-4~7) (1:150)

月27日まで調査を実施した。

試掘調査では、谷の斜面下方と中腹でそれぞれ炭窯が確認されたため、標高29～38mの谷斜面に約250㎡の調査区を設定した(第30・31図)。表土や自然堆積層を掘削したのち、各炭窯に土層観察用の畦を残しながら、埋土を掘り下げ、平面・土層断面の両方から土坑の構造や数、重複関係を把握するように努めた。また、埋土に含まれる炭片は年代測定用の試料として層別別に採取した。窯底から出土した取り残しの木炭は位置を記録したうえで、樹種鑑定用の試料として取り上げた。

第2項 遺構

(1) 炭窯 (第32～35図)

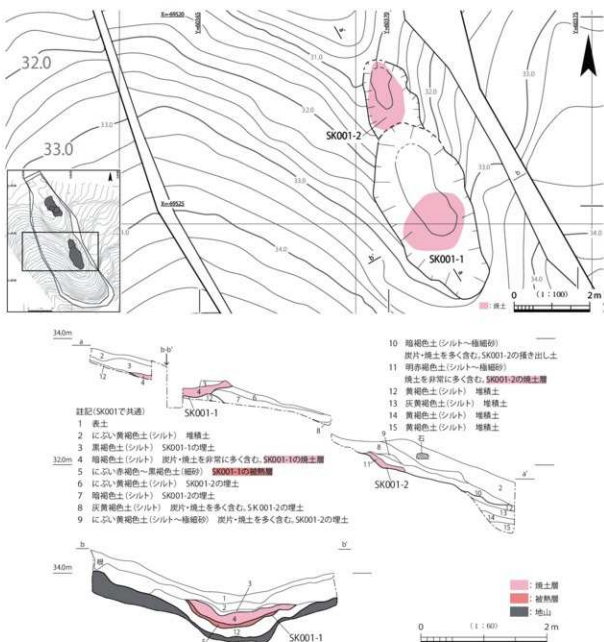
北斜面の谷から計9基の炭窯を確認した。斜面中腹の標高約32～33mで確認された土坑をSK001とし、斜面下方の標高27.5～29.5mで確認された土坑をSK002とした。試掘時にはSK001・SK002がそれぞれ1つの大きな炭窯と思われたが、調査を進めるとSK001で2基、SK002で7基の土坑が複雑に重複していることが判明したため、作業が新しい順にSK001-1～2・SK002-1～7の枝番をふった。

炭窯 SK001-1 (第32図、図版18)

土層観察により、SK001-2の後に作業された炭窯と判明した。標高約33mで確認され、長さ約5.0m、幅約2.0m、深さ約40cmの浅く掘りくぼめた長楕円形の土坑である。土坑の底で火を焚いた際に被熱硬化した層(5層)が確認された。その上面は焼土層(4層)で、焼土のなかに5cm内外の炭片が多く混じっている。作業後、焼土層を覆うように地山の土(3層)で埋め戻している。

炭窯 SK001-2 (第32図)

標高約32mで確認された炭窯で、長さ約3.5m以上、幅約1.5m、深さ約40cmの浅く掘りくぼめ

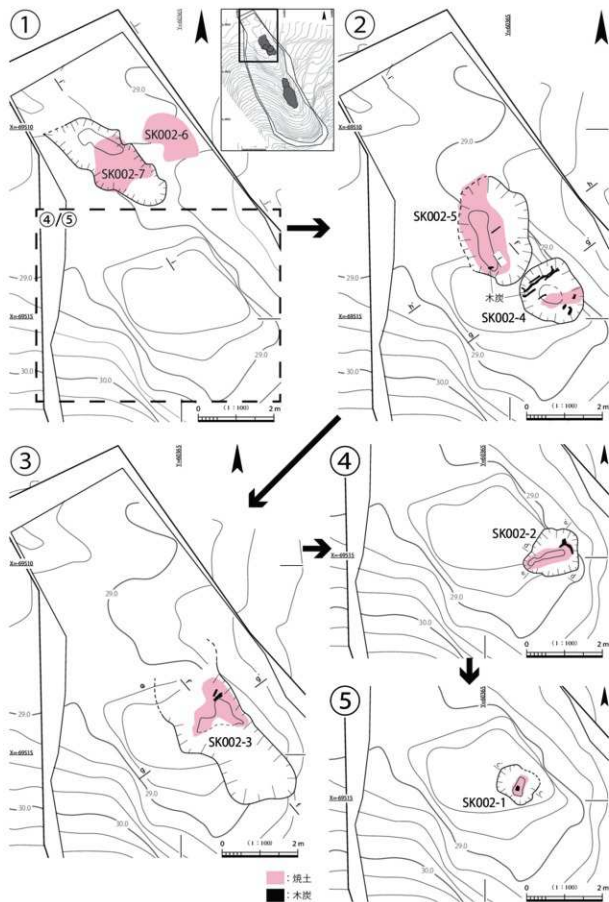


第32図 1区炭窯 SK001 平面図 (1:100) 東西・南北セクション土層図 (1:60)

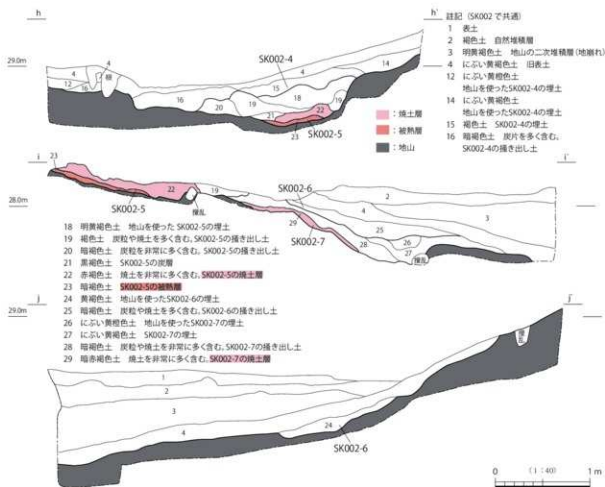
た長楕円形の土坑である。土層観察により SK001-1 より前に操業されたことが判明した。土坑の底には操業時の焼土層 (11 層) が確認され、その上面には掻き出し土 (10 層) が堆積している。操業後に炭窯を埋め戻している (6〜9 層)。

炭窯 SK002-1 (第33・34 図、図版 18)

土層観察により、SK002 のなかで最も新しい炭窯と判明した。標高約 29 m で確認され、長さ約 1.1 m、幅約 90 cm、深さ 20 cm 以上の浅く掘りくぼめた歪な円形の土坑である。土坑の底には操業時の焼土層 (6 層) が堆積しており、取り残しの木炭が 1 点出土した。焼土層の上面には掻き出し土 (5 層) が堆積している。



第33図 1区炭窯SK002 作業順序(1:100)



第35図 1区炭窯SK002 東西・南北セクション土層図2 (1:40)

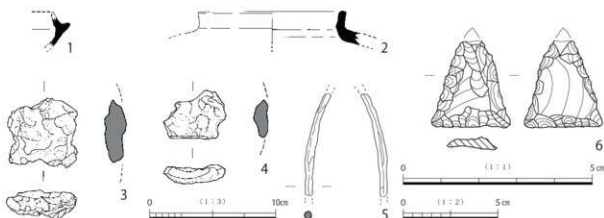
のなかで最も遺存状態の良い土坑であり、土坑の底で被熱硬化した層(23層)が確認され、その上には焼土層(22層)が堆積しており、取り残しの木炭が2点出土した。焼土層の上面には掻き出し土(19・20層)が堆積しているほか、炭片のみ堆積している部分もあった(21層)。操業後は地山の土(18層)で土坑を埋め戻している。

炭窯SK002-6(第33・35図、図版3)

標高約27.5mで確認された炭窯で長さ1.6m以上、幅1.1m以上、深さ20cm以上の浅く掘りくぼめた不整形の土坑である。土層観察によりSK002-7の後に操業されたことが判明した。土坑の底で操業時の焼土層が確認され、その上には掻き出し土(25層)が堆積している。操業後に地山の土(24層)で土坑を埋め戻している。

炭窯SK002-7(第33・35図、図版3)

土層観察により、SK002の中で最も古い炭窯と判明している。標高約27.5mで確認され、長さ1.5m以上、幅1.4m以上、深さ約30cmの浅く掘りくぼめた不整形の土坑である。土坑の底で操業時の焼土層(29層)が確認され、その上には掻き出し土(28層)が堆積している。操業後に地山などの土(26・27層)で土坑を埋め戻している。



第36図 1区 出土遺物 (1・3・5は1:2、6は1:1)

第3項 出土遺物 (第36図)

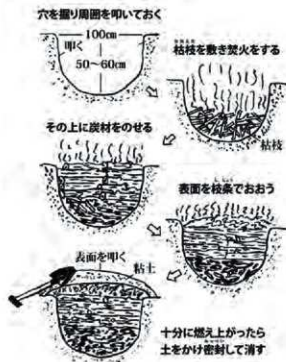
1区の出土遺物は全て自然堆積層や旧表土内を掘削中に出土したものである。出土遺物のうち、図化した6点を第36図に挙げた。1は須恵器の坏身で大谷編年4期頃のものと考えられる。2は須恵器の短頸壺である。3・4は椀形の鉄滓である。5は棒状の鉄製品だが用途は不明である。6は安山岩製の石鏃で、基部の挟りがほとんどない。

出土した須恵器は古墳時代終末期から奈良時代のものである。また、鍛冶関連の遺物である椀形の鉄滓も2点出土したが、1区では炉などの鍛冶関連遺構は確認できなかった。出土層位や後述のAMS年代測定の結果を踏まえると、出土した須恵器や鉄滓は炭窯と直接的な関連はなく、1区の谷に土砂が堆積する際に周辺から自然流入したものだと思われる。

第4項 小結

(1) 炭窯の構造・操業工程

土層観察により、炭窯の構造・操業工程は以下のように復元できる(第37図)。最初に、地面を50cmほど掘りくぼめた土坑をつくる。次に、土坑の底で燃料に火を点け、その上に炭材を置いてから土等を被せて蒸し焼きにする。操業後に土を掻き出して木炭を取り出し、地山の土で窯を埋め戻す。これらの工程を操業ごとに繰り返しており、こうした構造・操業工程の炭窯は「伏焼き窯」と呼ばれる簡易な構造の炭窯である(斎藤1993)。



第37図 伏焼き窯の構造と操業工程 (斎藤1993)

(2) 木炭の原料

確認された炭窯のなかには取り残しの木炭が出土する場合もあった。なかでも、SK002-2・3・4から出土した遺存状態の良い木炭10点を試料として樹種鑑定を行った(第6章第2節)。鑑定の結果、クヌギやツツジ、クマシデ、イイギリが確認され、里山で一般的に生育する広葉樹を原料に使用していたことが判明した。「伏焼き窯」という簡易な構造の炭窯であることも考慮すると、日常生活で消費するための木炭を生産していたと考えられる。

(3) 炭窯の年代と操業順序

1区から出土した遺物は石鐮や古墳時代終末期以降の須恵器など、炭窯の操業とは直接関係のないものであったため、出土遺物から土坑の年代を特定することはできない。一方で、土坑の埋土には多量の炭片が混じっていたため、SK002-1・7、SK001-1で採取した木炭片を試料としてAMS年代測定を行った(第6章第1節)。その結果、SK002-7は8世紀後半から10世紀後半、SK002-1は9世紀末から11世紀前半、SK001-1は11世紀前半から12世紀中頃に操業されたと判明した。この測定結果は土層観察により判明した操業順とも矛盾しない。以上のことから、谷の最下部でSK002-7が最初につくられた後、SK002-6→5→4→3→2→1の順に谷の斜面下方から上方に向けて、少しずつ場所を移動しながら操業したと考えられる(第33図)。その後に斜面中腹へ場所を変え、SK001-2→1の順に操業したと復元できる。

なお、年代測定では8世紀後半から12世紀中頃という幅広い結果が出ているが、土層観察では各炭窯の間に自然堆積層等は挟まらず、土坑同士が直接重複していた。このことから、実際の操業期間は400年弱の長期間にわたるものではなく、ごく短期間に連続して操業されたと思われる。操業年代を厳密に特定することは難しいが、各土坑の年代測定結果が重なっている、10世紀後半から11世紀前半の間に操業された可能性が最も高いのではないだろうか。(下江裕貴)

【参考文献】

斎藤 勝 1993『たかが木炭されど木炭』(1) 北海道立総合研究機構

第3節 2区の調査

第1項 調査の目的と方法

2区は、南西から北東に向けてのびる尾根の南東側斜面に位置し、長さ35m前後の平坦面である。斜面下方には、若宮ため池が所在するが、近世以降のため池である。調査区は、北東側に開けた谷の最奥部にあたる。今回の調査では、約1,350㎡の範囲の調査区を設け、発掘調査を行った。

基本土層としては、表土（遺物包含層）－黄橙色土（斜面崩落土）－第1面－黄褐色土（流土・遺物包含層）－第2面－南東側一部整地土－地山である。本来の第2面にあった遺物は、第1面下層の流土により斜面下方に流出しており、大部分が原位置をとどめていないと思われる（第39図）。

第1面は、表土及び黄橙色土（斜面崩落土）を除去した段階で確認した。炭化物が面的に分布する層の上面である。x-44グリッドでは、木炭の集積箇所を確認した（図版4・5）が、遺構は全く確認できなかった。木炭の試料については、AMS年代測定を実施し、11世紀～12世紀の年代を得ている（第6章第1節）。

さらに、下層の黄褐色土（流土）を除去したところで第2面を確認した。この面で掘立柱建物跡など複数の遺構を確認した（第38図）。

以下、第2面の遺構、遺構出土遺物及び包含層出土遺物の順に詳細を述べる。

第2項 遺構

第2面で建物跡6棟、炭窯1基などを確認した。主な時期は、7世紀の後葉から8世紀代である。平坦面は、丘陵緩斜面上方を断面L字状に削り、斜面下方を一部盛土して長さ35m前後、幅6m前後の平坦面を造成している。標高は、39.0m前後である。

（1）掘立柱建物跡（第40～43図、図版5・6・19・20）

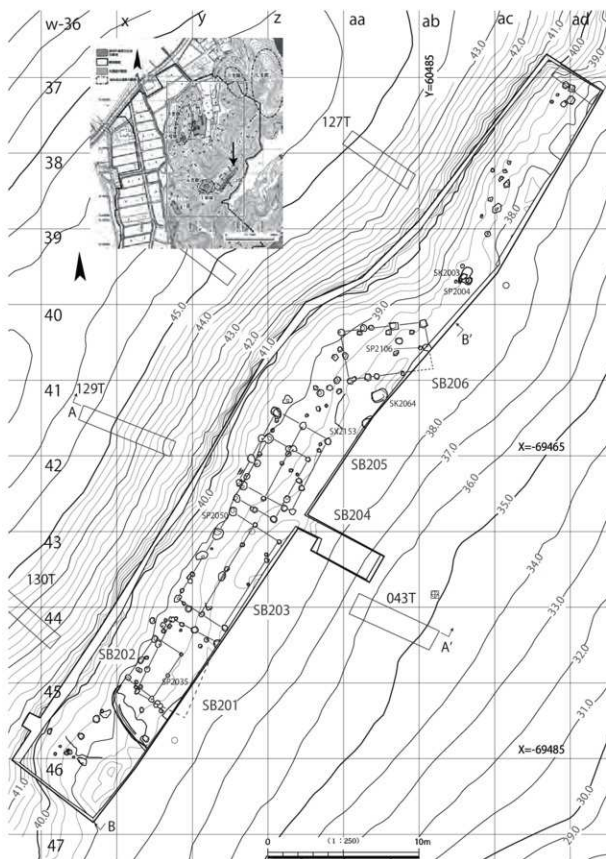
ピットは、162基を確認している。ピットの並びや深さなどから平坦面の南側で掘立柱建物跡6棟を確認した。SB201～205は地形に沿って一直線に並ぶが、SB206は、向きを異にする地形的制約を受けている。

掘立柱建物跡SB201（第40図、図版20）

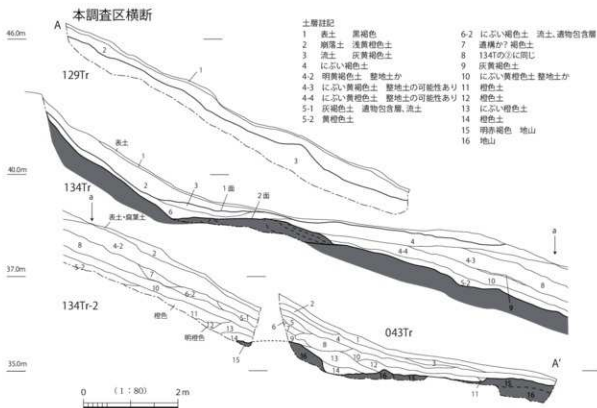
2間×3間（梁間3.8m 12.5尺、桁行5.1m 16.8尺）の掘立柱建物跡である。建物の方位は、N－31°－Eである。南西側一辺は、調査区外であり確認していない。平面形は長方形となり、地形に沿っている。年代は遺物が出土していないことから、不明である。ただし、SB202の柱穴との前後関係からSB201が古く、SB202が新しいことがわかる。SB202が8世紀第2四半期以降である。SB201は、8世紀第2四半期以前に廃絶したと考えられる。

掘立柱建物跡SB202（第40図）

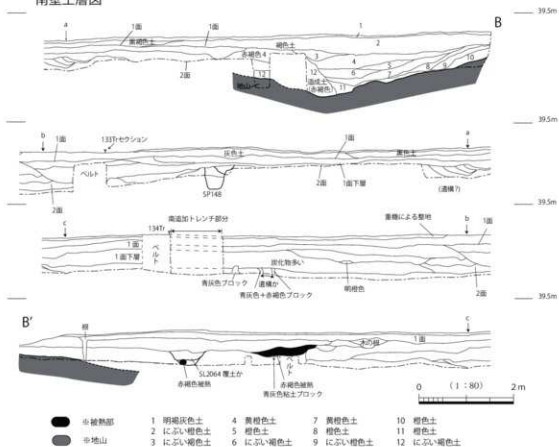
1間×2間（梁間2.0m 6.6尺、桁行3.2m 10.6尺）の掘立柱建物跡である。建物の方位は、N－42°－E、平面形は長方形となる。年代は、SP2035埋土から無高台坏A、出雲国府第3型式（8世紀



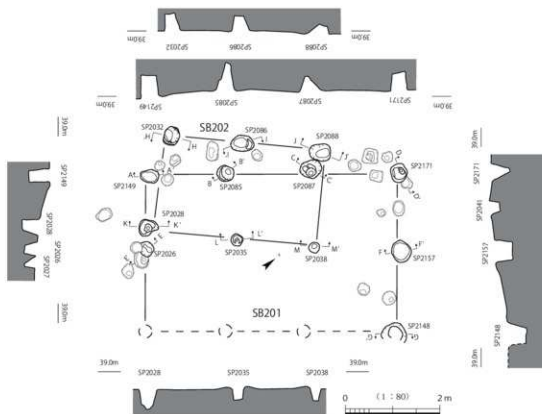
第38図 2区 平面図(第2面) (1:250)



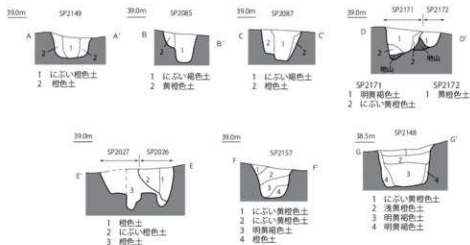
南壁土層図



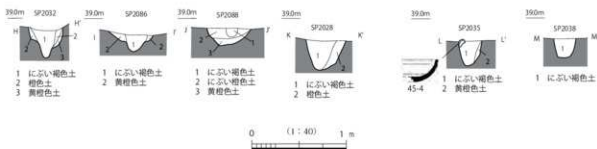
第39図 2区 東西セクション(上)・南東壁セクション(下) 土層図(1:80)



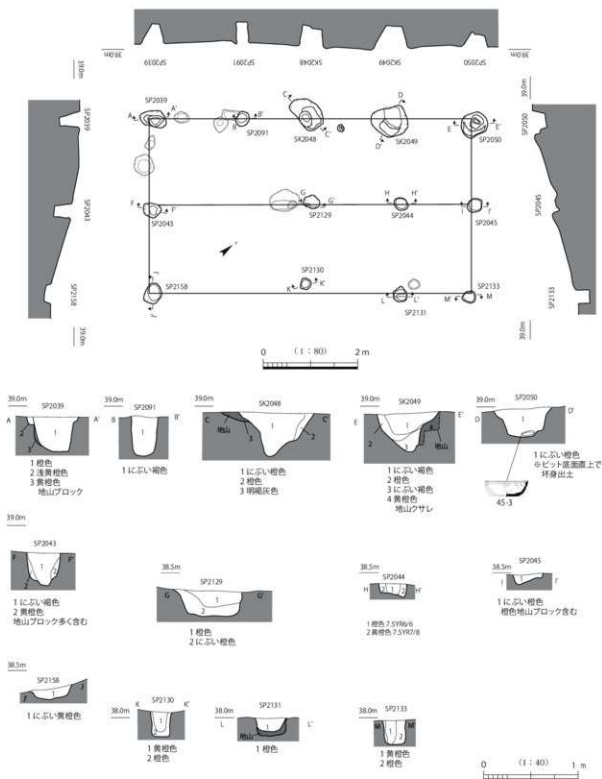
SB201



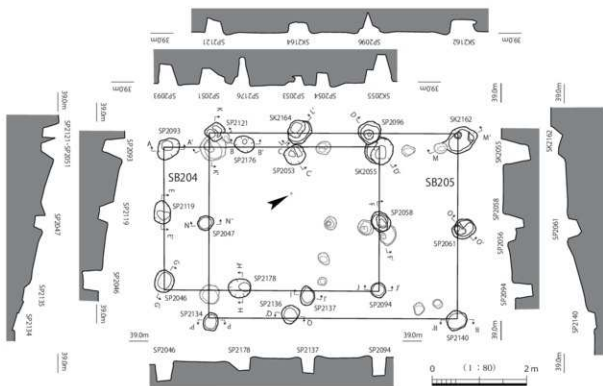
SB202



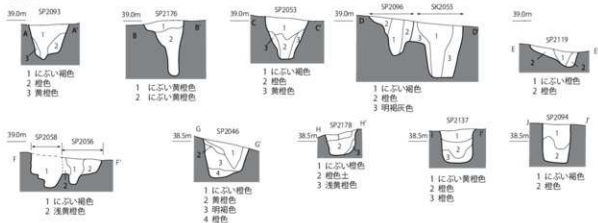
第40図 2区 掘立柱建物跡SB201・202 平面・エレベーション図(1:80) 土層図(1:40)



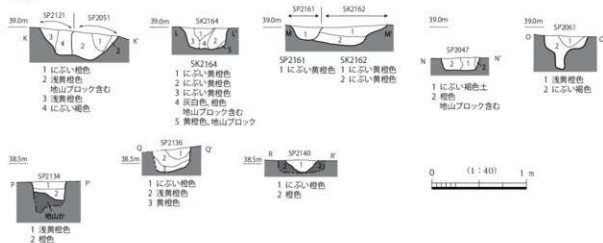
第41図 2区 掘立柱建物跡SB203 平面・エレベーション図(1:80) 土層図(1:40)



SB204



SB205



第42図 2区 掘立柱建物跡SB204・205 平面・エレベーション図(1:80) 土層図(1:40)

第2四半期)が出土していることから、8世紀第2四半期以降に廃絶したと考えられる。SB201とSB202は、重なっており、前後関係がある。SB201の主柱穴であるSP2087とSB202のSP2088では、前後の関係からSP2087をやや切ってSP2088が掘られており、SB201→SB202の順が考えられる。SB201は、掘立柱の住居跡、SB202は、建物規模が小さく、倉庫のような使用が考えられようか。

掘立柱建物跡SB203 (第41図)

2間×4間(梁間3.6m 11.9尺、桁行6.4m 21.1尺)を想定できる掘立柱建物跡である。中間の柱は浅く床を支えた束柱で、床が想定できる。建物の方位は、N-43°-E、平面形は長方形となる。年代は、SP2050埋土から無高台坪A出雲国府第3型式(8世紀第2四半期)が出土していることから、8世紀第2四半期以降に廃絶したと考えられる。床を想定すると倉庫として使用された可能性もある。

掘立柱建物跡SB204 (第42図)

2間×3間(梁間3.0m 9.9尺、桁行4.5m 14.9尺)を想定できる掘立柱建物跡である。建物の方位は、N-35°-E、平面形は長方形となる。SB204はSB205と重なっており、前後関係の検討が必要である。SB204のSK2055とSB205のSP2096では、前後の関係からSK2055を削ってSP2096が掘られており、SB204が古くSB205が新しいことがわかる。

掘立柱建物跡SB205 (第42図)

2間×3間(梁間3.8m 12.5尺、桁行5.1m 16.8尺)を想定できる掘立柱建物跡である。建物の方位は、N-32°-E、平面形は長方形となる。SB204と重なっている。

掘立柱建物跡SB206 (第43図、図版20)

2間×3間(梁間3.0m 9.9尺、桁行5.4m 17.8尺)を想定できる掘立柱建物跡である。建物の方位は、N-78°-E、平面形は長方形となる。他の掘立柱建物跡と比較して軸線の角度が異なる。

(2) その他の遺構 (第44図)

その他の遺構として、土坑やピット、炭窯がある。遺物が出土した遺構及び炭窯について述べる。

土坑SK2003 (第44図)

ab-39グリッドで確認した。長さ100cm、幅60cmの隅丸長方形で、深さ10cm程度の浅い土坑である。埋土から須恵器2点が出土している。いずれも国府第2型式である。

ピットSP2004 (第44図)

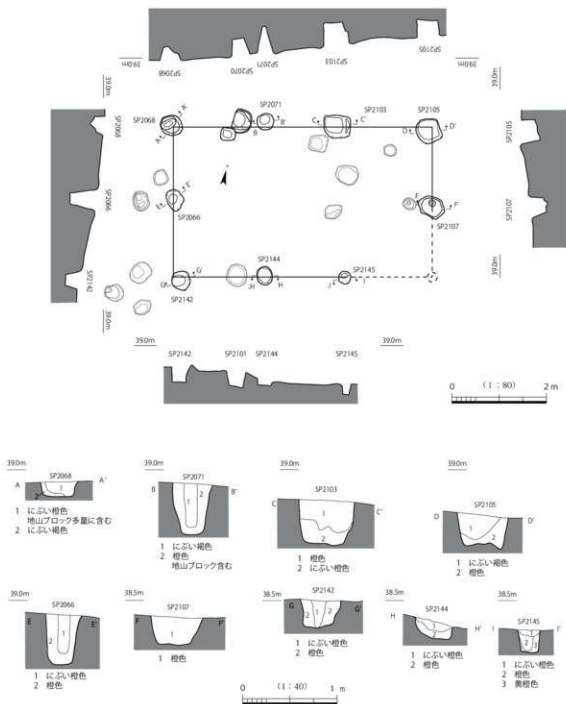
ab-37グリッドで確認した。直径50cm程度、深さ15cm程度の楕円形のピットである。断面観察から判断すると柱穴ではない。土坑SK2003と前後関係があり、SK2003が古く、SP2004が新しい。

ピットSP2106 (第44図)

ab-40グリッドで確認した。直径25cm程度、深さ30cm程度の円形ピットである。掘立柱建物SB206の内側にあるピットである。埋土内から須恵器1点が出土している。国府第1型式である。

炭窯SK2064 (第44図、図版7)

aa-41グリッドで確認した。遺構壁面に赤褐色の被熱が見られる。長軸100cm、短軸70cmの平面形、深さ25cm、長楕円形である。木炭の伏焼き土坑と考えられる。内側は被熱土が多数混じり、木炭を



第43図 2区 掘立柱建物跡SB206 平面・エレベーション図(1:80) 土層図(1:40)

取り出す時に壊したためであろうか、攪乱されている。遺構内の炭化物について AMS 年代測定を行っている。結果、7世紀～8世紀代であり、第2面出土遺物との矛盾はない。

第3項 遺構出土遺物(第45図、図版35)

遺構から出土した遺物は数少ないが、図化できた7点を第45図に掲げた。土坑SK2003の埋土から須恵器2点が出土している。1は、出雲国府分類で蓋環Cに分類される蓋である。完形で輪状つまりがある。国府第2型式である。2は、出雲国府分類で無高台環Aに分類される環である。国府第

第4項 包含層出土遺物(第46～48図、図版35・36)

2面より上層の黄褐色土は、遺物包含層で、その層を中心に遺物が出土している。遺存状態の良い遺物を第46～48図に掲げた。時期の古い遺物から報告する。

第46図1～5は大谷編年の出雲4～6期にあたる須恵器である。1・2は蓋環の環で、1は蓋口径12.3cm程度、2は蓋口径11.7cm程度で、どちらも大谷分類A4～6型に分類できる。出雲4期のものである。3は無蓋高環で、脚部に退化して切れ目となった透かしが入り、大谷分類A6型である。出雲6b～c期であろう。4は無蓋高環で、脚部に2方向の小さな方形透かしが入り、大谷分類A5型である。出雲5～6a期のものであろう。5は、甕の頸部である。出雲5～6期であろうか。

第46図6～8は、国府編年の第1型式にあたる須恵器である。全て蓋環の蓋である。6、7は輪状つまみと口縁部にかえりのつく蓋環Cである。8は、宝珠つまみと口縁部にかえりのつく蓋環B型である。

第46図9～17は、国府編年の第2型式にあたる須恵器である。9～11は、蓋環の蓋でつまみが輪状つまみで口縁端部に強い屈曲をもつ蓋環Cである。12～15は、9～11の蓋と組み合う高台付環で蓋環Cである。16は、短頸壺の口縁部～胴部、17は、直口壺の口縁部分である。

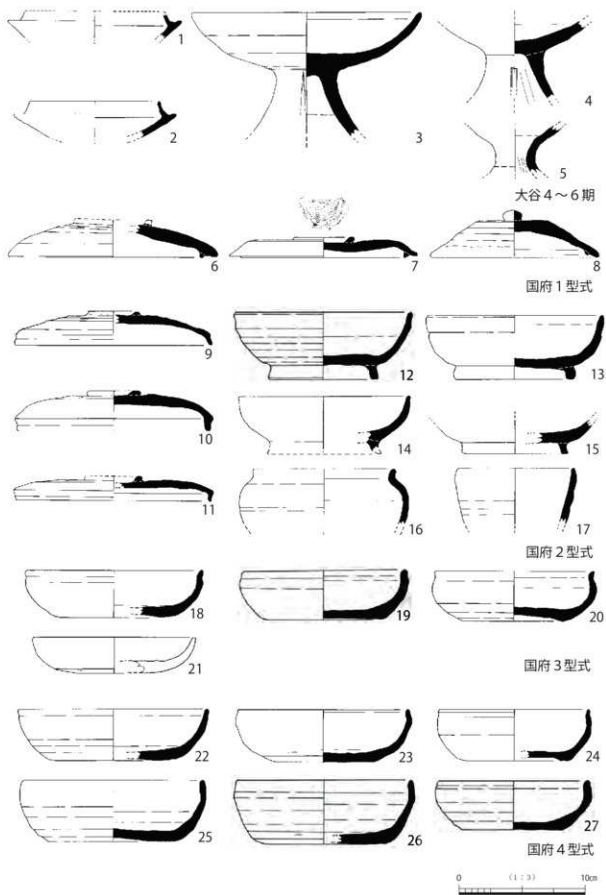
第46図18～21は、国府編年の第3型式にあたる土器である。18～20が須恵器である。無高台環Aに分類され、口縁端部が若干外反する。21は土師器の無高台皿である。

第46図22～27は、国府編年の第4型式にあたる須恵器である。全て無高台環Aで、口縁端部の屈曲が弱くなっている。

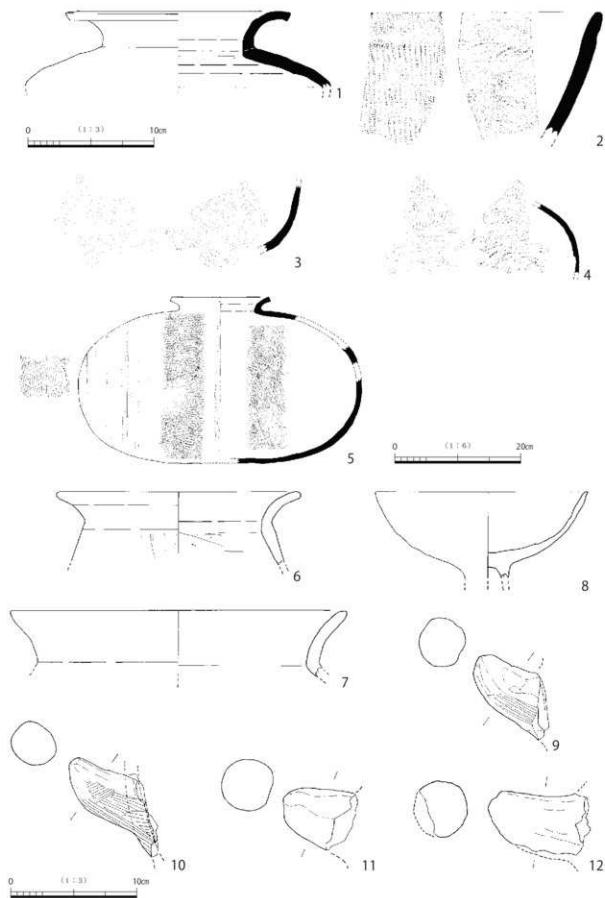
第47図1～5は、須恵器である。1は広口壺の口縁から頸部である。口径は18.0cmである。2は鉢の口縁部である。外面は平行タタキ、内面は同心円文の当具痕が残る。3は甕の底部付近である。4は、横瓶の側面部である。内面に円弧状の接合痕がみられる。5も、横瓶である。ほぼ全形が復元され、口径15.4cm、器高26.7cmで、外面に平行タタキとともにカキメもみられる。内面は、口縁部に回転ナデ、胴部に同心円文の当具痕が残る。側面の頂部には成型時に塞いだ接合痕が明瞭に残る。調査区南西部、w-44、45グリッドに破片が集中して出土している。

第47図6～12は土師器類である。6、7は土師器の甕口縁部である。6は口径19.1cm、頸部径15.2cmである。7は口径26.6cmである。8は高環の環部分である。口径は、16.9cmである。9～12は甕の把手である。9、10は外面持ち手部分にハケメが残る。9、10、11は、w-46グリッドからの出土である。

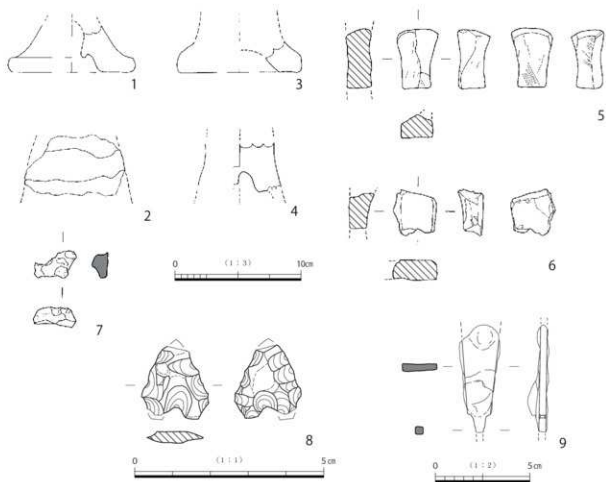
第48図は、土製品、石製品、金属製品である。1～4は土製支脚である。いずれも支脚の底部で、底部内面には棒状工具で突いた成形痕が残る。5、6は砥石である。5は流紋岩、6は花崗岩である。7は鉄滓である。8は、デイスイト製の石鏃で、凹基無茎式である。9は先刃式の鉄鏃だが、刃の形状は不明である。茎間は角間である。



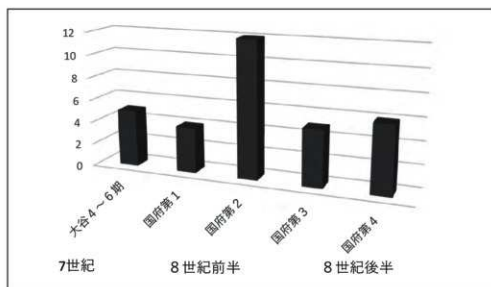
第46図 2区 遺物包含層出土遺物(大谷4期~国府4型式)(1:3)



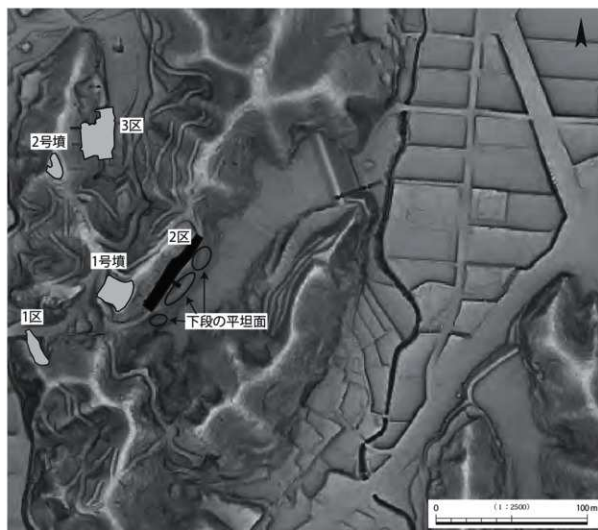
第47図 2区 遺物包含層出土遺物(その他須恵器・土師器)(1:3、3~5は1:6)



第48図 2区 遺物包含層出土遺物（土製支脚・金属製品・石製品）（1：3、8は1：1、9は1：2）



第49図 2区出土土器の型式別グラフ



第50図 2区と東側地域

第5項 小結

(1) 遺構

遺構面は、表土を除去した段階で、木炭の集積1箇所を確認した(第1面)。AMSの年代測定の結果、11～12世紀の年代を得ている。第1面からさらに掘り下げ、地山直上で第2面を確認した。第2面の観察では、丘陵緩斜面上方をL字状にカット、斜面下方を一部盛土して平坦面を造成していることがわかる。平坦面には、178基の柱穴や土坑が確認できる。そのなかで、柱穴の柱痕跡や配置の検討から6棟の掘立柱建物跡を確認した。建物は、1間×2間が1棟、2間×3間が4棟、2間×4間が1棟となっている。柱穴埋土から出土した遺物(須恵器)は、いずれも国府第3型式であり、8世紀第2四半期以降に掘立柱建物は廃絶したと考えられる。また遺構の重複関係からSB201→SB202、SB204→SB205の変遷が考えられるほか、建物規模では、SB201とSB205は2間×3間(梁間3.8m×桁行5.1m)と同様の規模であり、方位もほぼそろえていることを考えるとSB204→SB201・SB205→SB202の変遷が考えられる。

(2) 遺物

第2遺構面上層の遺物包含層から須恵器の蓋環、無高台環、横瓶が確認でき、土師器の甕や甔、土製支脚、石鏃、砥石などが出土した。遺物包含層の年代では、最も古いもので大谷編年の出雲4期の蓋環が出土しており、出雲国府第4型式の無高台環まで継続的に出土している。また、年代を特定した遺物を集計した結果を第49図にあげる。国府第2型式が急増しており、7世紀末葉から8世紀第1四半期ごろに人の活動が活発化しているようである。第2面の活用時期は、8世紀に収まり、一定期間、放置され、その後、第1面の活用となっている可能性がある。

(3) まとめ

出土遺物では、古墳時代後半以降の遺物から確認している。その後、8世紀を中心に掘立柱建物が建て替えられながら活動しており、煮沸具も調査区の南西端のグリッドから集中して出土していることから、一般的な集落と考えられる。また、東柱のある掘立柱建物跡もあるため、倉庫などの建物があったことも想定できる。試掘調査の結果では、調査区のさらに下段からも遺物が出土しており、遺跡の範囲は下方に段状に広がる可能性がある(第50図)。2区の掘立柱建物の建つ第2面は、8世紀代を中心として新たに谷奥に営まれた住居、倉庫などのあった集落の最上段造成地であったのではなかろうか。

(石原 聡)

第4節 3区の調査

第1項 調査の目的と方法

3区は、2区からみて西隣の南北方向にのびる尾根に位置する。調査区は北側に開けた谷の西側斜面にあたる。

今回の調査では、丘陵東斜面の約2,000㎡の範囲に調査区を設け、発掘調査を行った(第51図)。なお、調査区北西方向で円弧滑りを起こしており、土砂崩壊の危険な状態であったので、北西側を一部調査区から除外した。斜面下方は水田に造成しており、改変が激しい。基本層序は、表土→水田造成土(斜面下方)→旧表土(遺物包含層)→遺構面→地山となっている(第52図)。

また、3区の南側に隧道水路SX306がある。この遺構については、第5項にて説明する。

第2項 遺構

(1) 加工段(第53～58図、図版8～10・21～23)

調査区では、加工段を5基確認した。

加工段SX301(第53図、図版21)

調査区の西端にあたり、3区の加工段としては、最高所の28.0～29.0m、ℓ-20、ℓ-21グリッド、16トレンチで確認した遺構である。平面形はいびつな長方形で、南北方向に約4.2m、南北方向に約2.0mを測り、壁体の高さは約40cmである。壁体溝は遺構内側深さ10cm程度の溝が巡る。柱穴などは確認できない。

加工段SX302(第54図、図版21)

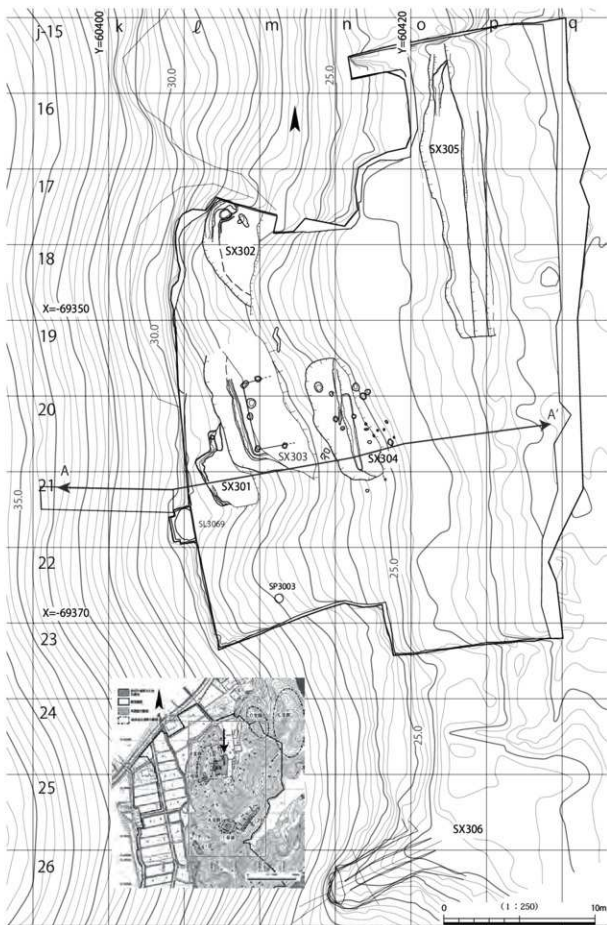
加工段SX302は143トレンチ(ℓ-16、ℓ-17グリッド)で検出した遺構である。標高は27m前後である。平面形は半円形で、南北約6.0m、東西約3.3m、壁体の高さは最大で約40cmを測る。壁体の立ち上がりは急である。壁体溝は他の加工段と違い、壁の一段高いところに造られており、深さ10cm程度の溝が一部巡る。遺構の南側は後世の地滑りによって、消失している。

加工段SX303(第55・56図、図版9・22)

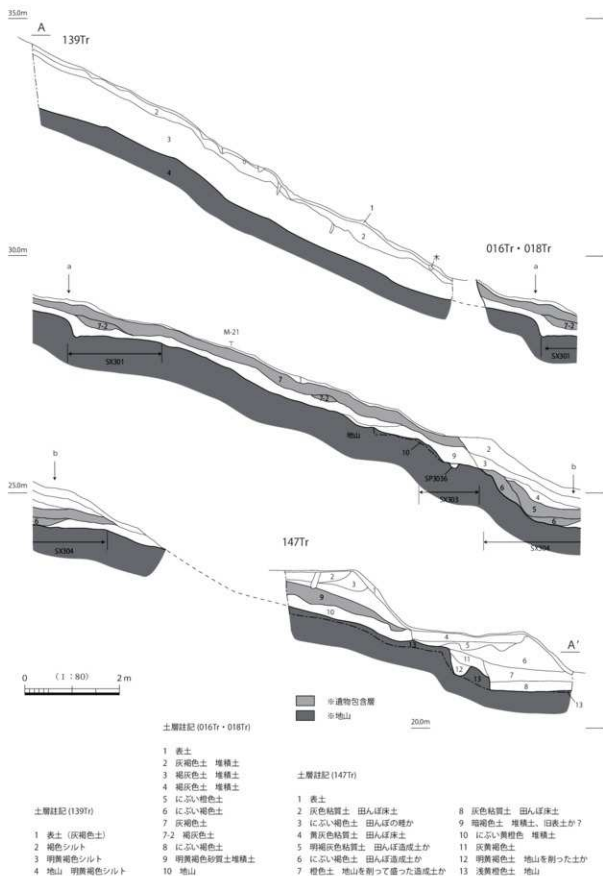
加工段SX303は15トレンチ(ℓ-19、ℓ-20グリッド)で検出した遺構である。標高は26m前後である。平面形は長方形で、南北約7.8m、東西約3.2m、壁体の高さは最大で約100cmを測る。壁体の立ち上がりは急である。壁体溝は遺構内側深さ10cm程度の溝が巡る。平坦面では、5基の柱穴を確認している。2間×1間以上で、1間2.0m間隔の掘立柱建物跡で、軸線は、N-16°-Wである。同一遺構内に炉SL3004が所在する。炉内の炭化物AMS年代測定では、9世紀末～10世紀末の年代結果が示されており、掘立柱建物跡と炉SL3004が同時に使用されたのではなく掘立柱建物跡→炉SL3004と時期差があるかもしれない。

加工段SX304(第57図、図版22)

加工段SX304は18トレンチ(n-19、n-20グリッド)で検出した遺構である。標高は25m前後である。



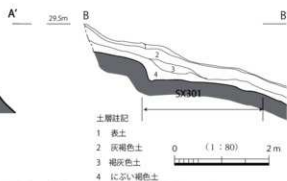
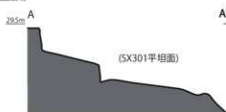
第51図 3区 平面図 (1:250)



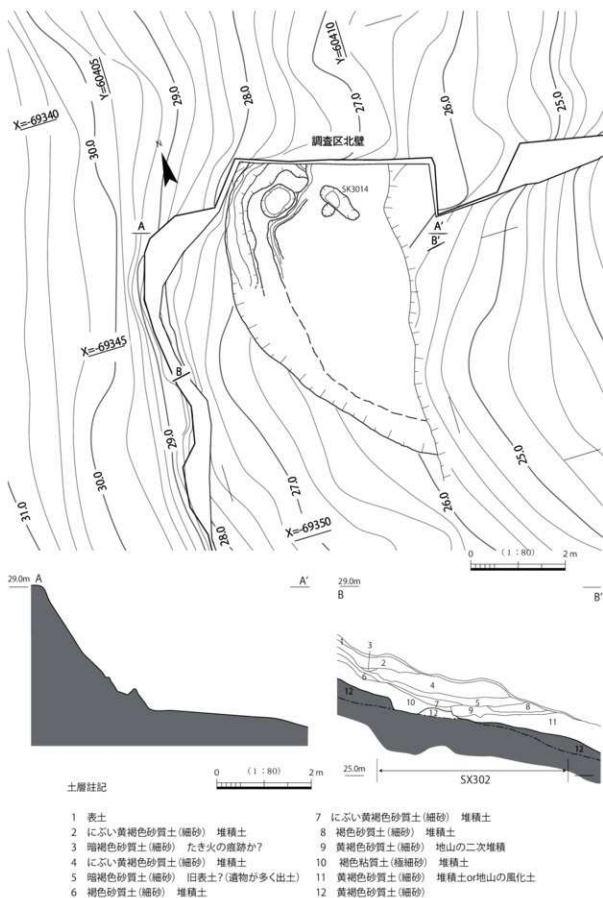
第52図 3区 東西セクション土層図 (1:80)



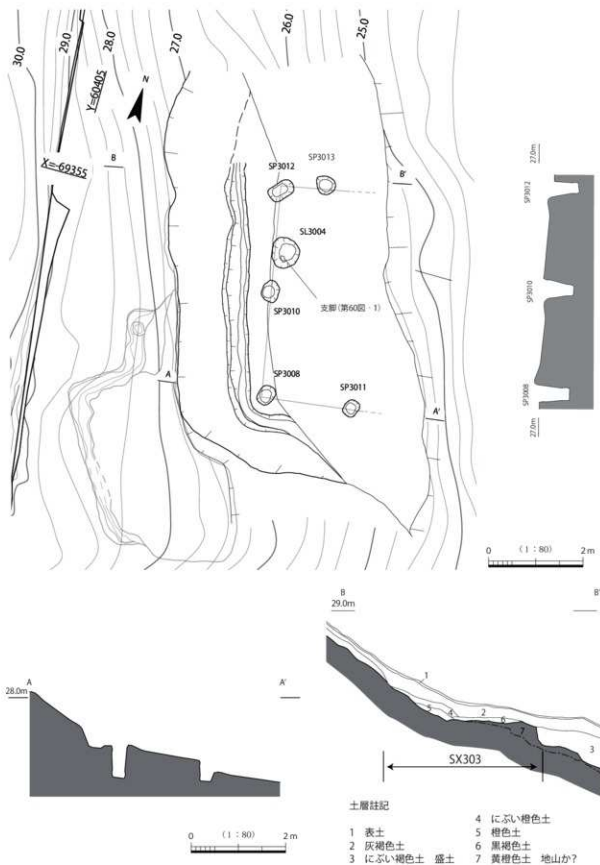
調査区西端



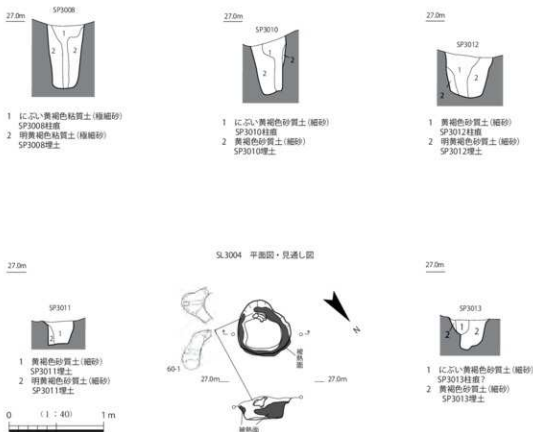
第53図 3区 加工段SX301 平面・土層・エレベーション図(1:80)



第54図 3区 加工段SX302 平面・土層・エレベーション図(1:80)



第55図 3区 加工段SX303 平面・土層・エレベーション図(1:80)



第56図 3区 加工段SX303内土坑・炉跡 平面・土層・見通し図(1:40)

平面形は長楕円形で、南北約6.9m、東西約3.0m、壁体の高さは最大で約140cmを測る。壁体の立ち上がりは急である。壁体溝は遺構内側深さ10cm程度の溝が一部巡る。平坦部は狭く、一段下の後世の水田耕作地造成の際に平坦面の東側が削られた可能性がある。

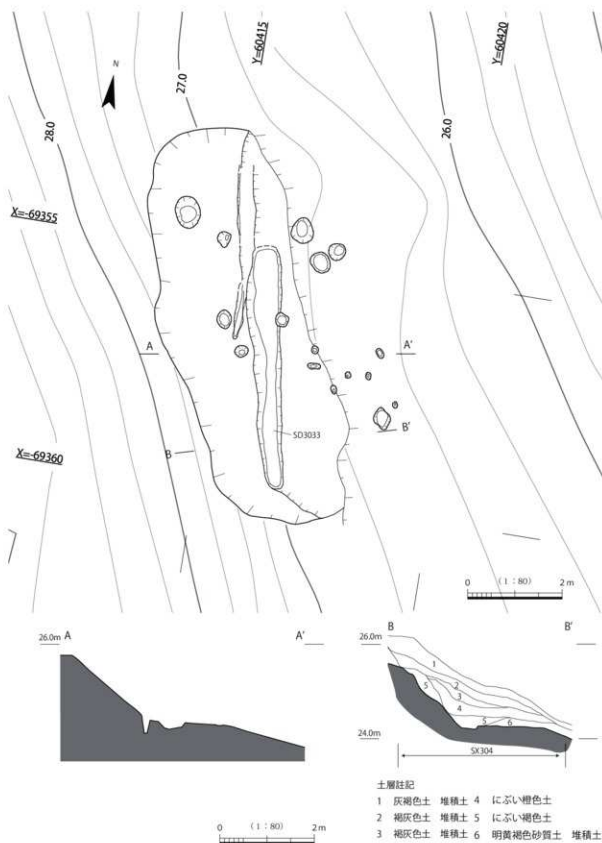
加工段SX305 (第58図、図版10・22・23)

加工段SX305は118、146トレンチ(α-16～18グリッド)で検出した遺構である。標高は22m前後である。平面形は長細い長方形で、南北約18.5m、東西最大約2.0m、壁体の高さは最大で約70cmを測る。壁体の立ち上がりは緩い。壁体溝は遺構内側深さ10cm程度の溝が北側の一部に巡る。柱穴などは確認できない。遺構上面からは、ヒスイ製勾玉、鉄製紡錘車、土器破片集中箇所などが確認できる。

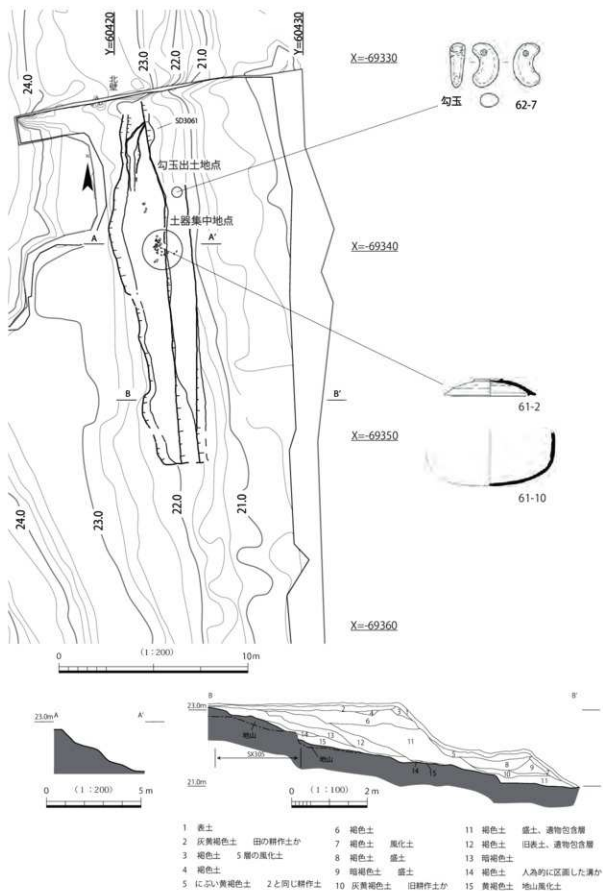
第3項 遺構出土遺物

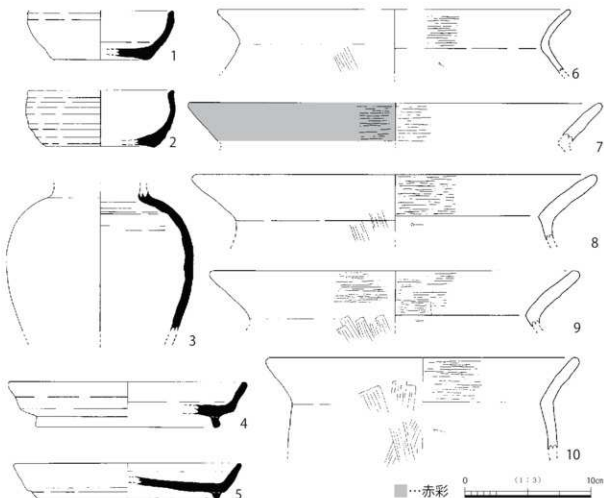
(1) 加工段SX302出土遺物 (第59図、図版37)

第59図はSX302から出土した遺物である。1～4は須恵器で加工段埋土からの出土である。1・2とも無高台杯Aで、国府第3型式である。3は、長頸壺の胴部である。体部が丸みを帯びていることから国府第4型式であろうか。4は、高台付皿Aで国府第5型式である。7～10は、土師器の甕で、加工段埋土から出土した。全て口縁部のみで、7の外面は、赤色塗彩されている。5は須恵器の高台付皿で、国府第4型式である。SX302遺構内のSK3014から出土している。6は土師器甕の口縁部で、



第57図 3区 加工段SX304 平面・土層・エレベーション図 (1:80)





第59図 3区 加工段SX302出土遺物(1:3)

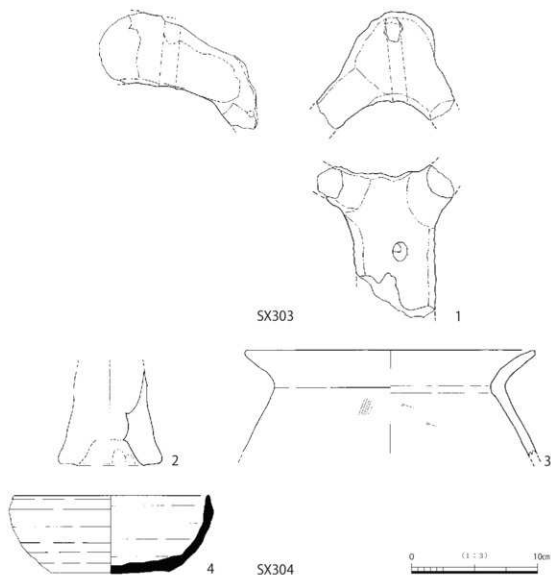
5と同じく遺構内SK3014から出土している。

(2) 加工段SX303・304出土遺物(第60図、図版37)

第60図は加工段SX303・304から出土した遺物である。1は、土製支脚で、SX303遺構内にある炉跡SL3004からの出土であり、土製支脚と炉跡が何らかに関連する可能性がある。突起部は二股に分かれ、体部に孔を開けている。2は土製支脚の底部でSX304遺構内の溝SD3033埋土から出土している。3は土師器甕の口縁部で、SX304遺構内の溝(壁体溝)SD3033の埋土から出土している。4は、須恵器の無高台環Aである。国府第2型式でSX304遺構の地山直上から出土している。

(3) 加工段SX305出土遺物(第61・62図、図版37・38)

第61・62図は、加工段SX305から出土した遺物で、第61図は、須恵器である。1・2は、輪状つまみを持ち、口縁部にかえりがつく蓋環Cの蓋で国府第1型式、2は、遺構中央の遺物集中地点からの出土である。3は、ボタン状つまみをもつ蓋環Cの蓋で、国府第4型式である。4は、口縁端部が強く屈曲する蓋環Cの蓋で、国府第2型式である。5～7は、体部が丸みを帯び、外形する高台がつく蓋環Cの環で、国府第1型式である。6の底部は著しく摩滅しており、転用碗の可能性もある。8、9は無高台環Aであり、国府第2型式である。10は、横瓶の胴部から底部である。遺構中央の遺物集中地点から破片で出土している。

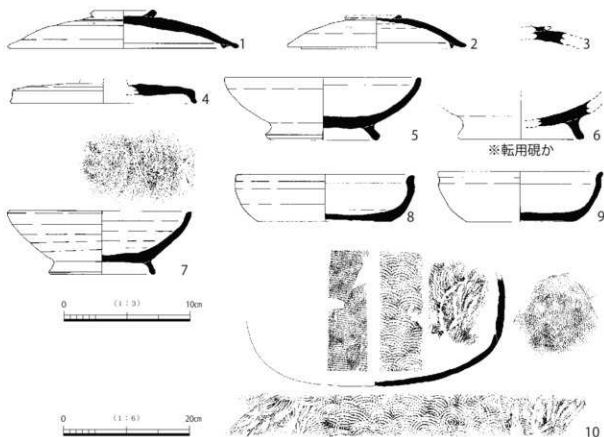


第60図 3区 加工段SX303・304出土遺物(1:3)

第62図は、土師器、土製品、石製品、鉄製品、玉類である。1・2は土師器甕の口縁部である。3は、土製支脚の底部、4は、甕の把手である。5は、メノウの自然石だが、全体に細かな敲打痕が残る。6は、砥石である。両面に擦痕が残り、石材は花崗岩質砂岩である。7は、ヒスイ製の勾玉で、SX305の床面近くから出土した。長さ22.7mm、幅13.3mm、厚さ7.3mm、重さ3.7gで、両面穿孔の小型品である。背面側は部分的に被熱しており、斑状の黒色に変色している。米田氏によれば、古墳時代前期後半頃に製作されたものである(第7章第2節)。8は、鉄製の紡錘車である。鉄製の軸がはめられているが、軸の両端は折れている。軸は断面円形で直径5mm、紡輪は直径52mmの円形で、厚さ5mmである。

第4項 包含層出土遺物(第63～69図、図版39～42)

第63図1～8は、大谷編年の出雲4期及び国府編年の第1型式の須恵器・土師器である。1は、蓋坯の蓋で、大谷分類A6型で、出雲4期である。2～7は国府編年の第1型式にあたる須恵器であ



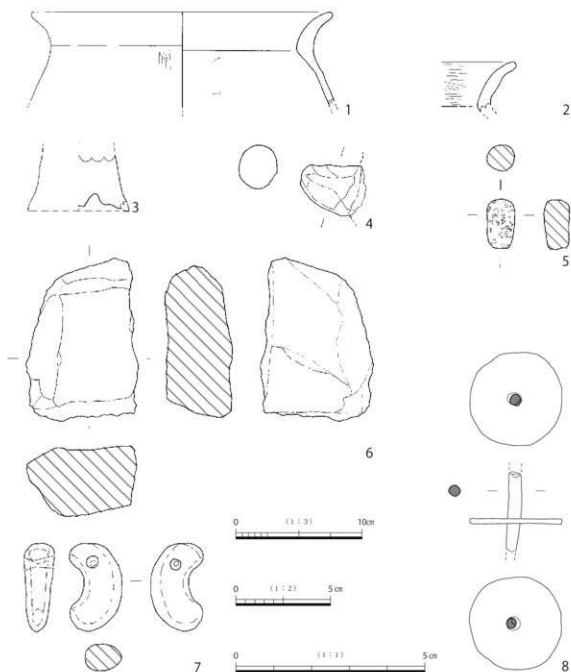
第61図 3区 加工段SX305出土遺物 その1 (1:3, 10は1:6)

る。2と3は、かえりが付き、輪状つまみをもつ蓋環Cの蓋であろうか。4・5は、輪状つまみと口縁部にかえりのつく蓋環Cの蓋である。6も輪状つまみをもつ蓋環Cの蓋である。7は、蓋環Bの環で、外傾した体部と丸みを帯びた底部をもつ。8は、土師器の無高台杯で内面ミガキ、外面ケズリが施されている。国府第1型式であろうか。

第63図9～18は、国府編年の第2型式にあたる須恵器である。9～11は、口縁端部が強く屈曲する無高台杯Aである。12・13は、蓋環Cの杯である。14は、直口壺の口縁部分である。15～18は灯明皿である。15・18は、内面に煤が付着している。いずれも川原分類のI段階Bタイプで、古代セン編年の出雲Ⅲ期と併行し、8世紀前半のものと考えられる。

第64図1～9は、国府編年の第3型式にあたる須恵器である。1～6は、無高台杯Aで、口縁部端部の屈曲が弱くなり、体部立ち上がりの湾曲も緩やかである。7・8は、高台がつき、体部が直線的に立ち上がる蓋環Cの杯である。9は、無高台皿である。内面が平滑であり、硯として使用したものであろうか。

第64図10～24は、国府編年の第4型式にあたる須恵器・土師器である。10～12は、体部が直線的に立ち上がり、第4型式の特徴とされる無高台杯Bである。13～17は、無高台杯Aで湾曲が緩やかである。18は、口径15cm、高さ6.6cmと大型であるが、無高台杯Aに入る。19は、直線的に立ち上がる体部と高台をもち、蓋環Cの杯である。20は、土師器の無高台杯で、内外面を赤彩している。21は、須恵器の無高台皿である。22～24は、高台付皿Aである。22・24は、皿の内面が平滑であり、



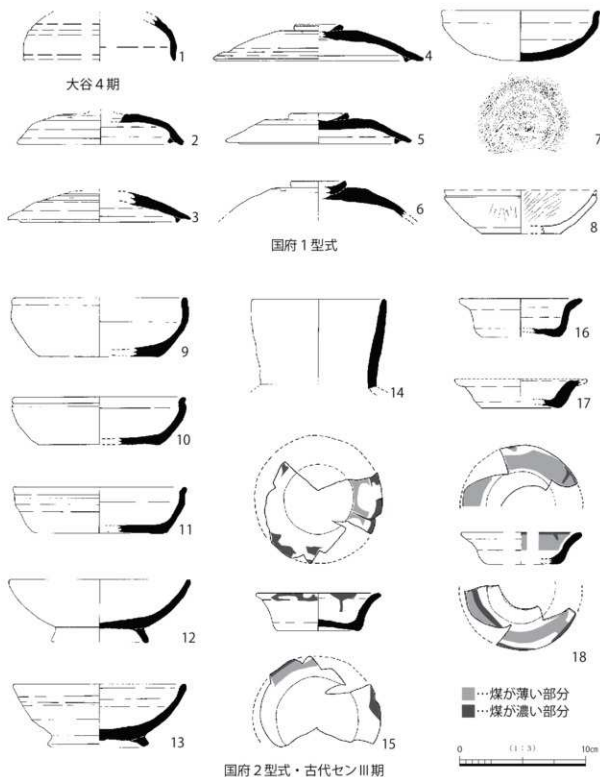
第62図 3区 加工段SX305出土遺物 その2 (1:3、7は1:1、8は1:2)

硯として使用したものであろうか。

第65図1～6は、国府編年の第5型式にあたる須恵器・土師器である。1・2は、無高台杯Bで、体部が直線的に立ち上がり、外傾する。3～5は土師器の無高台皿である。3・4は内外面を赤彩している。6は、土師器の高台付皿である。

第65図7～13は、国府編年の第6型式にあたる須恵器・土師器である。7は、無高台杯Bで、体部の外傾化がすすんでいる。8～13は、土師器の無高台杯である。底面糸切り痕が残り、器厚が薄くなる。8～11は内外面を赤彩している。

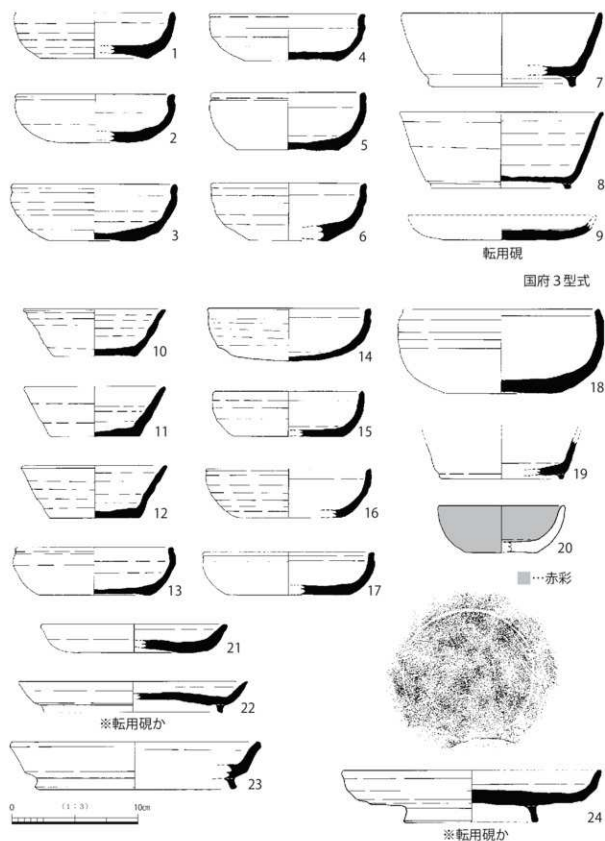
第65図14～16は、須恵器の甕類である。14は頸部で、外面に凹線で区切られた波状文を施文し



第63図 3区 遺物包含層出土遺物(大谷4期・国府1・2型式)(1:3)

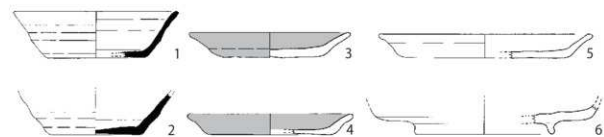
ている。15・16は胴部で、外面は平行タタキ、内面は同心円文の当具痕が残る。15は、内面に段が付くことから横瓶胴部の可能性もある。

第66図は、土師器の甕である。1・2は口縁部、3・4は口縁部から胴部、5・6は底部以外の全形である。口縁部内外面はヨコハケ、胴部外面はタテハケ、胴部内面にケズリがみられる。

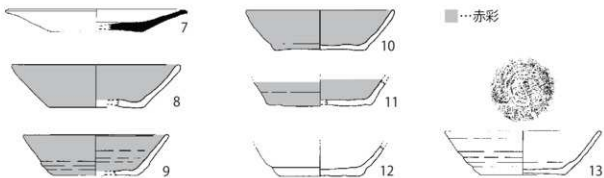


第64図 3区 遺物包含層出土遺物(国府3・4型式)(1:3)

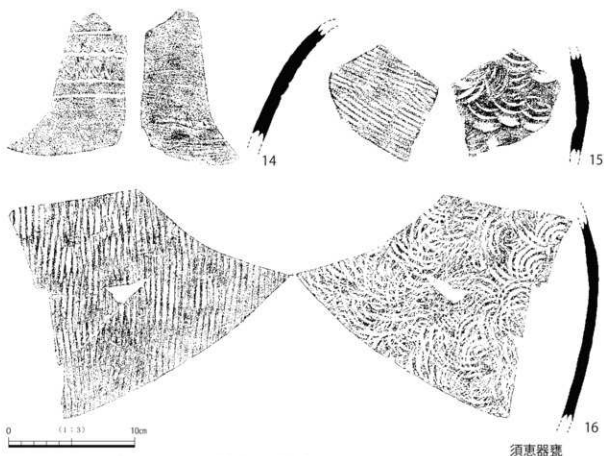
国府4型式



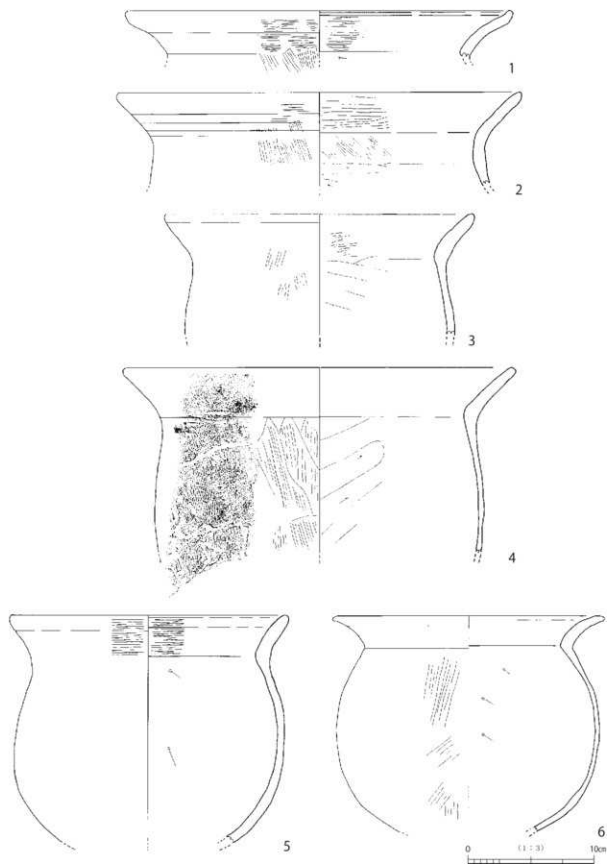
国府5型式



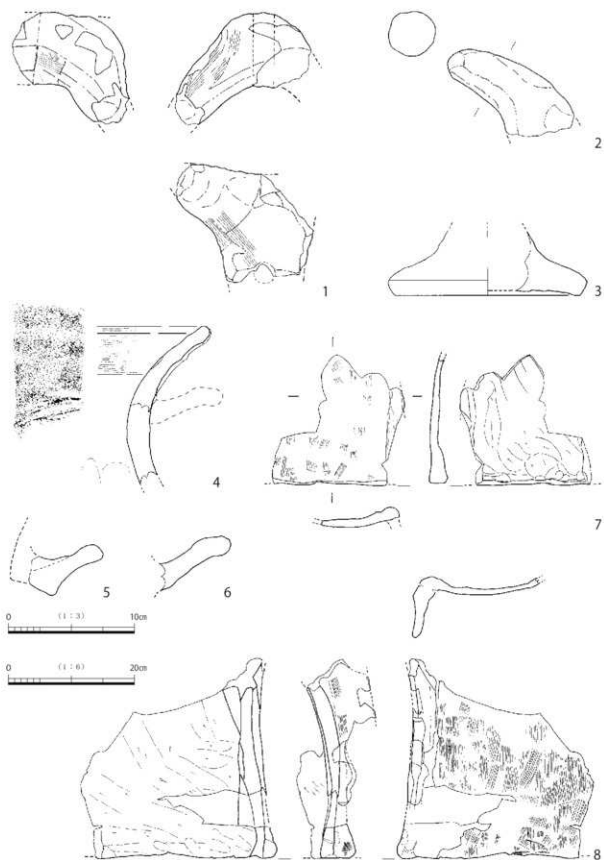
国府6型式



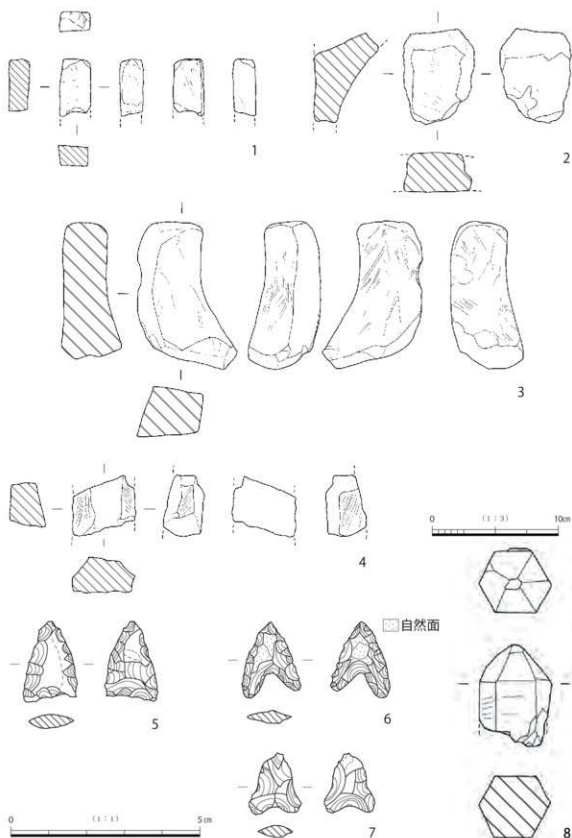
第65図 3区 遺物包含層出土遺物(国府5・6型式、須恵器甕)(1:3)



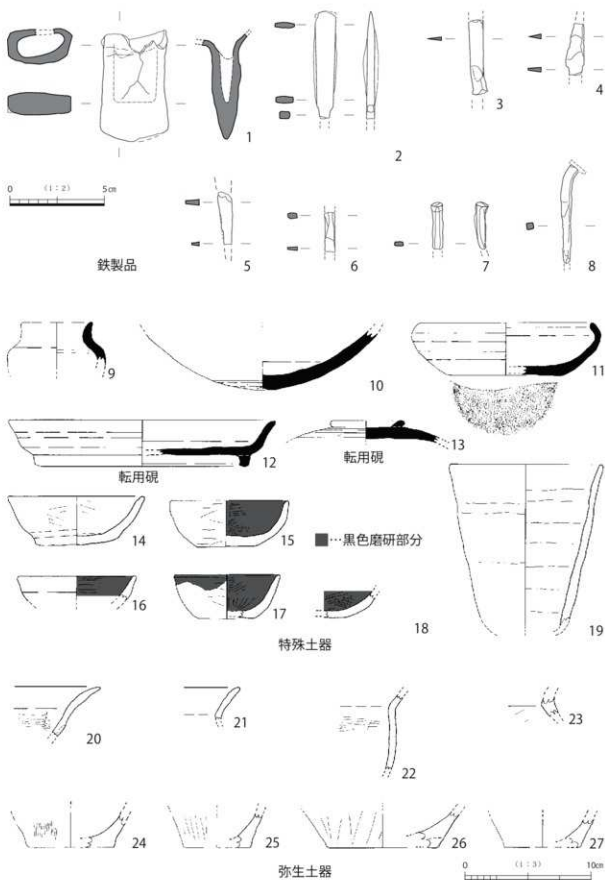
第66図 3区 遺物包含層出土遺物(土師器甕)(1:3)



第67図 3区 遺物包含層出土遺物(土製支脚・甕)(1:3、7・8は1:6)



第68図 3区 遺物包含層出土遺物(石製品) (1~4は1:3、5~8は1:1)



第69図 3区 遺物包含層出土遺物(鉄製品・特殊土器・弥生土器)(1:3、1~8は1:2)

第67図は土製支脚・竈である。1～3は、土製支脚である。1・2は突起部で、1の突起は二股に分かれ、体部に孔を開けている。3は底部である。4～8は、竈である。4は焚口の上で底の剝離痕がこのころ。5・6は焚口底部、7・8は焚口部で外面ハケメ、内面ケズリである。

第68図は石製品である。1～4は、砥石である。砥面数は、1が5面、2が2面、3が4面、4が3面である。石材は、1・2・4が流紋岩、3がシルト岩である。5～7は、石鏃である。5の石材はデイスイトで、基部が平坦な形態の平基形である。6・7の石材は安山岩で、凹基無茎式である。6は、特に基部の挟りが深い。8は、水晶の原石である。

第69図1～8は、鉄製品である。1は、袋状鉄斧で、長さ5.9cm、幅3.6cm、厚さ1.5cmと小型である。2は、鉄鏃である。細長い方頭鏃で、茎関はなで関である。3～6は、刀子である。3は刃部、4は刃部～茎部で、茎関は両関である。5・6は茎部である。7・8は釘である。

第69図9～19は、特殊系の遺物を掲載している。9は須恵器の小壺である。10は、底面丸底であり、鉄鉢形の須恵器であろうか。11も口縁部が大きく内傾しており、鉄鉢を意識した須恵器であろうか。12は国府編年第4型式の高台付皿Aであるが、見込み部が平滑であり、転用碗である。13は国府編年第2型式にあたる蓋坏Cの蓋であるが、内面が平滑であり、蓋坏碗である。14～18は、黒色磨研土器である。内・外面にヘラ磨きがみられる。19は、製塩土器であろうか。輪積成型で手捏ねの土器である。器厚が5mm程度と薄い。

第69図20は弥生土器の高坏で口縁部片である。21～27は、弥生土器の壺甕類である。いずれも中期以降の弥生土器である。21～23は、口縁部、頸部である。24～27は底部である。ℓ-20グリッドを中心に調査区西側の斜面上方から出土している。

(石原 聡)

第5項 隧道水路 (SX306)

(1) 隧道水路の概要 (第70～72図、図版23)

隧道水路遺構の位置は、3区南端から斜面沿いに南へ約20mの地点で、隧道水路SX306の水路流出口を確認した(第51図)。この水路の流入口は、南北の丘陵を東西に貫き西側に開くが、流入口が埋もれているため、窪みとして痕跡をとどめる(第70図)。

調査は、流出口側が造成予定地内の盛土部分にあたり、流入口側は造成予定地外の残地森林として保存される部分であるため、両側とも現状測量のみ実施した。

形態及び規模は、東側の流出口は、丘陵斜面に向かって溝状に掘削された奥部にあり、地山を掘削している(第71図)。溝状の部分は2段掘りで、1段目は幅2.7m、長さ8mで、全体を地表から約0.5～1m掘り下げる。2段目は中心部分を幅1m、深さ1.4m掘り下げ、この部分が水路となる。地山を掘削した流出口の現状は、幅1.4m、高さ0.7mで不定形な楕円形である。隧道内部は、入口から0.7m付近で幅が一端狭まり1mとなり、さらに入ると幅1.4mに広がる。

水路内は、流土が厚く堆積する。堆積土上面の幅は1.4m、現状の高さは0.65mである。天井はドーム形である。

水路の本来の高さを推定すると、流入口手前の水路の分岐点(第72図のC地点)での地表面の標高



第70図 隧道水路SX306 (全体) 平面図 (1:1500)

が23.6 mであることから、床面は、これより低いと考える。流出口から東の水田の標高が、23.40 m以下であることから、床面は、これより高いと考える。このことから、堆積土の厚さは、堆積土表面の標高24.6 mとの差から、1.0 m～1.2 mとなり、隧道内部の本来の高さは1.65～1.85 m程度と推定する。

水路の奥行は、天井部の空間が約10 mまで続くことが目視できたが、それ以上は確認できなかった。この間での天井の落盤は確認できず、保存状態は比較的良好と思われる。

一方、西側の流入口は、完全に埋没しているため規模等は不明である。また、流入口につながる水路も埋没しているが、現状では、分岐点Cからの長さは約9.9 m、幅0.8～2 mである（第72図）。

（註1）

（2）出土遺物（第73図、図版42）

遺物は土管のみで、水路周辺から表採したものである。いずれも破片で、完形品は無く、素焼きの橙色・明赤褐色である。内部には黒色に変色した部分があり、滞留物によるものと考えられる。模式図にあるように、土管は差込口部を持つ円筒部（上側）と受け口部を持つ円筒部（下側）を別々に作り、最後に結合させ1本としたものである。接合部は粘土を厚くし、小口に刻み目を入れ、結合を強固にする。内傾接合である。

円筒部の最大径より、大（17～18 cm）と小（13～15 cm）の2種類に分類した。

2・5・6は、大形品である。5・6は、差込口で、先端が内側に内湾し、直径が円筒部より1.0～2.5 cm狭まる。2は、接合部である。断面が内傾することから、受け口部の円筒とした。

1・3・4は小形品である。4は、差込口で、先端が内側に内傾し、直径より円筒部が0.8 cm狭まる。この、差込口の形態の違いは、大小の違いによるものなのかどうかは資料数が少なく不明である。1は、小形の受け口部円筒である。受け口部が円筒部より直径が1.1 cm広がり、段になる。3は、筒部である。

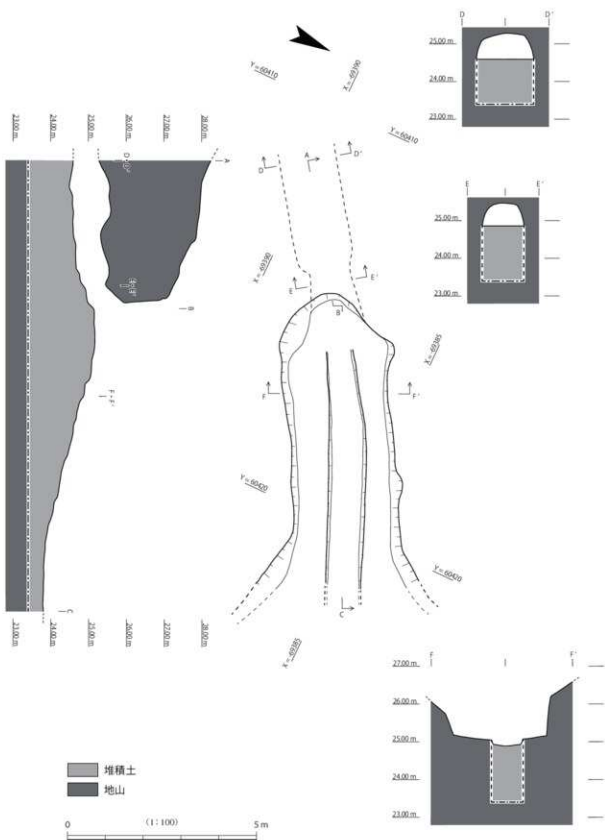
土管は大小に分類できるが、水路流入口、流出口の両側から表採出来ることから、大小区別なく使われていたと考える。また、土管が使われていた場所は、両入口につながる露出した水路の底に設置されていたと考えられ、水路が流土で埋まった場合でも流れを確保する目的があったと考える。

（原 俊二）

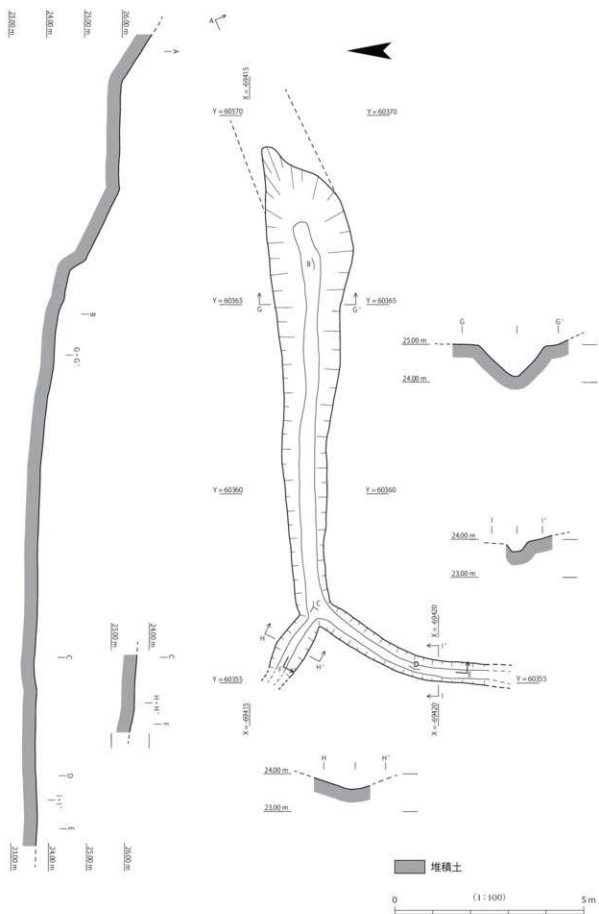
第6項 小結

（1）遺構

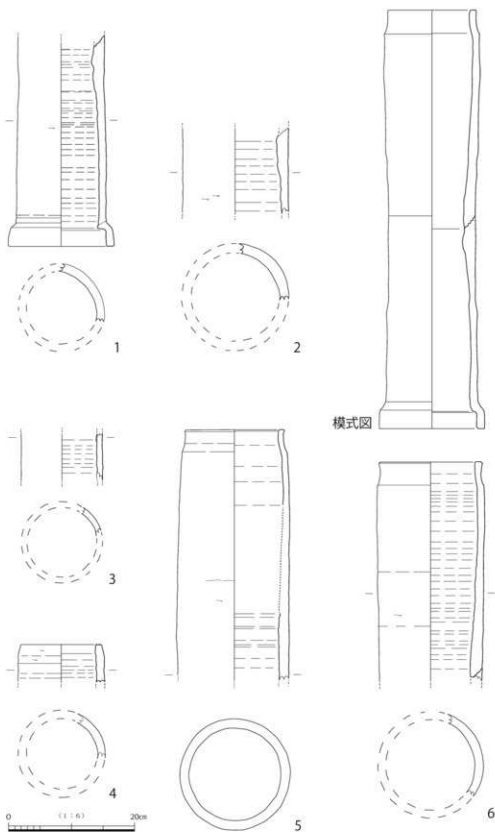
3区の遺構は、加工段5基を確認した。2区のように規模の大きな加工段は造っていない。いずれの加工段にも壁体溝が残る。加工段SX303には、5基の柱穴が残る掘立柱建物があった可能性がある。また、埋土に土製支脚を含む炉SL3004がある。AMS年代測定では、炭化物の年代測定から9世紀末から10世紀末の年代結果が示されており、掘立柱建物としての活用とは別時期であった可能性がある。前後関係では、加工段SX301、SX302、SX303の順に造成された可能性がある。また、加工段SX304は、平坦面がもっと広がった可能性があるが、後世の水田用地造成のために大きく削



第71図 隧道水路SX306 東側流出口 平面・断面図 (1:100)



第72図 隧道水路SX306 西側流入口 平面・断面図 (1:100)



第73図 隧道水路SX306 出土遺物 (1:6)

平されている。加工段SX305についても、水田用地造成のため、削平された部分がある。長さ18.5mと細長い平坦面であり、2区と同じく、幅が広い平坦面が広がっていた可能性があるが、水田が整備されたため、削平を受け不明瞭な点が多い。しかし、遺構面近くからヒスイ製勾玉、鉄製紡錘車、須恵器（蓋坏・横瓶）、土師器の集中出土箇所などがあり、他の加工段SX301、302、303、304とは、性格が異なる可能性が考えられる。

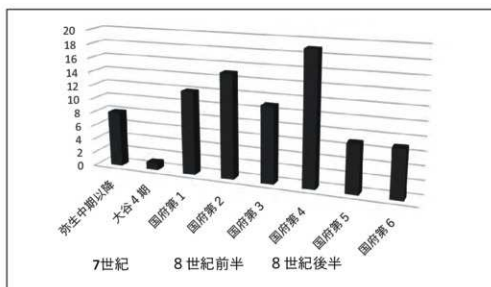
（2）遺物

2区出土遺物との比較をすると、2区では確認できなかった鉄鉢形須恵器や蓋坏碗、灯明皿、黒色磨研土器のほか、加工段SX305ではヒスイ製勾玉や鉄製紡錘車などの遺物が出土しており、2区の遺物とは性格が異なる。特に、ヒスイ製勾玉は古墳時代前期後半頃に製作されたものとみられ、3区が主に利用されていた奈良時代とは400年ほど隔たりがあり、伝世品の可能性もある。

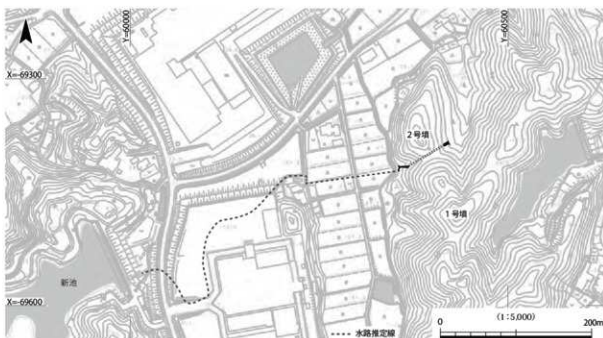
年代を特定した遺物を集計した結果を第74図にあげる。国府第1型式から遺物が増加し、第2型式・第4型式にピークがある。また、中期以降の弥生土器が確認できるほか、国府第5型式・第6型式の須恵器・土師器も確認できる。以上のことから、国府第2型式の遺物が特に多かった2区と比べると、3区は時期幅が広く、7世紀末頃から利用され始め、8世紀代を通じて人々が活発に活動していたと考えられる。そして、その後も9世紀代までは利用されていたとみられる（註2）。

（3）まとめ

3区は、2区出土遺物と同種の須恵器・土師器が出土したほか、仏教的要素のある遺物（鉄鉢形須恵器、灯明皿）や鉄製紡錘車、ヒスイ製勾玉が出土するなど2区出土遺物との差異がある。遺構に関しても、幅が広い大規模な平坦面が造成された2区と比べると、小規模な加工段が段状にひろがり、遺構の性格も異なる。そして、2区と比べると、7世紀末から9世紀代と長きにわたり、利用されていたと考えられる。遺構の性格について第7章第3節にて検討を行いたい。



第74図 3区出土土器の型式別グラフ



第75図 隧道水路SX306 水源地から3区までの水路推定図 (1:5,000)

隧道水路SX306は、工業団地造成予定地の西側にあるため池（新池・旧名称は馬背谷池）を水源とする農業用水路である（註3）。

用水は、ため池から流れ出て、東に向かって山裾を回り水田を横断して隧道水路流入口に至る。この間、直線距離にして約390mである。隧道水路は流入口から東進し、そのまま尾根の鞍部を約50m貫き水路流出口に至り、谷水田に注ぐ（第75図）。

このような大がかりな隧道水路にも関わらず、建設年代や廃棄年代は不明であるが、建設年代を推定する上での参考例として、同じ斐川町地内の平野間樋（註4）や、松江市穴道町の本幡山荘隧道（註5）がある。平野間樋は1893（明治26）年頃に建設された可能性があり、松江市の本幡山荘隧道は1941～1944（昭和16～19）年に建設されている。これらの例から隧道水路SX306の建設年代も、これらの年代に近いものと推定する。

一方、廃棄年代については、1962（昭和37）年と1976（昭和51）年の航空写真を比較すると、谷中央部の南半部（奥側）の水田と東西の棚田状の水田が樹木に覆われており、谷中央部の北半分（入口側）も茶畑等に転用されていることから、この間に土地の利用形態が大きく変化したことがうかがえる。また、水田跡に植林されていた杉や檜などの年輪数が、約55～60本数えられることから、植林の時期が1961～1966（昭和36～41）年頃と推定出来る。このことから、この頃までには水田の耕作は終了していたことになるので、隧道水路の廃棄年代を考えるうえで参考になると思われる（註6）。

これらの隧道水路は、食糧増産のため、用水を確保し水田を拡充していった時代の産物であり、農業土木遺産といえよう。

（石原聡・原俊二）

【註】

- (1) この場所で親世代が水田を耕作されていた80歳の方に話を伺ったところ、「子供の頃、隧道内部の掘除を手伝った際、体をひねって横になって入った」「しゃがんで中に入った」との話であった。具体的にどの場所を指すのかは不明であるが、出入り口付近の狭い部分のことであろうか。
- (2) ただし、全域が調査された3区と異なり、2区は最上段の平坦面しか調査されておらず、斜面下方にも未調査の平坦面があることは注意を要する。
- (3) 現場近隣にお住いの70～90歳代の方、数名に話を伺った。
- (4) 平野間樋は、斐川高瀬川から用水をひくための農業用施設である。

間樋の掘削年代は、1893(明治26)年に渡瀬計画があったという記録が残存するが、実際にこの計画通りに工事がなされたかは不確かである。いずれにしても、斐川高瀬川の開通が1676(延宝5)年であることから、それ以上には年代が遡らないのは確実である。間樋の規模は、隧道部の長さ約60m、西側入口の幅6m、東側出口の幅5mである。間樋は、1983(昭和58)年に工業団地造成事業により消滅し、現在は奥出雲村田製作所(本社工場)となっている。

- (5) 木幡山荘隧道は、山神谷溜池から用水をひくための農業用施設である。

隧道の掘削年代は、1941～1944(昭和16～19)年で、規模は隧道部の長さ約100m、幅約2m、高さ約1.8mである。隧道は、農業用水路として建設されたが、後に木幡山荘の庭園用の導水施設となり現存する。

- (6) この場所で親世代が水田を耕作されていた80歳の方に話を伺ったところ、「隧道内部が崩落したため、復旧はあきらめた」、との話であった。その年代は不明である。

【参考文献】

- 穴道町教育委員会 2003「山神谷溜池―木幡山荘隧道について」『穴道町歴史叢書』8 穴道町教育委員会
- 斐川町教育委員会 1983「Ⅲ 平野遺跡群の概要 3. 平野間樋」『平野遺跡群発掘調査報告書』Ⅰ(斐川町埋蔵文化財調査報告3) 斐川町教育委員会

第5章 結本谷古墳群の調査

第1節 古墳の分布状況と調査区の設定

第1項 古墳の分布状況（第76図）

結本谷古墳群は昭和60年代の踏査によって発見され、既に2基の古墳が確認されていた。その後、斐川インター企業団地の造成が計画されたことにより、令和2年度（2020）に古墳群のある丘陵全体で事前踏査及び試掘調査を行った結果、新たに13基の古墳が発見され、計15基の古墳群となった。

古墳の分布状況によって、古墳群は4つの支群に分けられる。丘陵の最高所（標高約52m）には方墳1基（後述の1号墳）が立地する（A支群）。そして、A支群から北西にのびる尾根上には2基の方墳（後述の2・3号墳）が存在する（B支群）。1・2号墳は約110m、2・3号墳は約60m離れており、A・B支群の3基はそれぞれ単独で築かれている。

A支群から北へ約200mの尾根上には円墳3基、方墳5基の計8基が連なる（C支群）。C支群では、支群内での最高所（標高約49m）に位置する4～6号墳、その30m北側の尾根上に位置する7・8号墳、さらに40m北側の尾根上に位置する9～11号墳と、2～3基ずつの小群に分かれている。

C支群から北西にのびる尾根上には円墳3基、方墳1基の計4基が確認されている（D支群）。D支群は12号墳のみ独立して立地し、13～15号墳は12号墳の25m北側にまとまっている。

墳丘規模に関しては、約15.0×11.5mの方墳である1号墳が古墳群内で最大規模となっており、全ての古墳が10m前後の小規模墳である。ただし、高所に立地する古墳（1・4・5号墳）が比較的大きな規模となっており、結古墳群など付近の群集墳と似た傾向にある。

以上のように、結本谷古墳群では円墳6基・方墳9基の計15基の古墳が確認され、A～Dの4支群に分かれて尾根上に分布している。全ての古墳が墳丘規模10m前後の小規模墳であるが、高所に立地する古墳は比較的大きな規模が大きい傾向にある。そして、立地や墳形、墳丘規模といった点からみると、結本谷古墳群は斐川の丘陵地帯に多く分布する群集墳と類似した特徴を持つといえる。ただし、3～15号墳に関しては、本調査を行っていないため、墳形・墳丘規模は地形観察によって推定している点で注意が必要である。

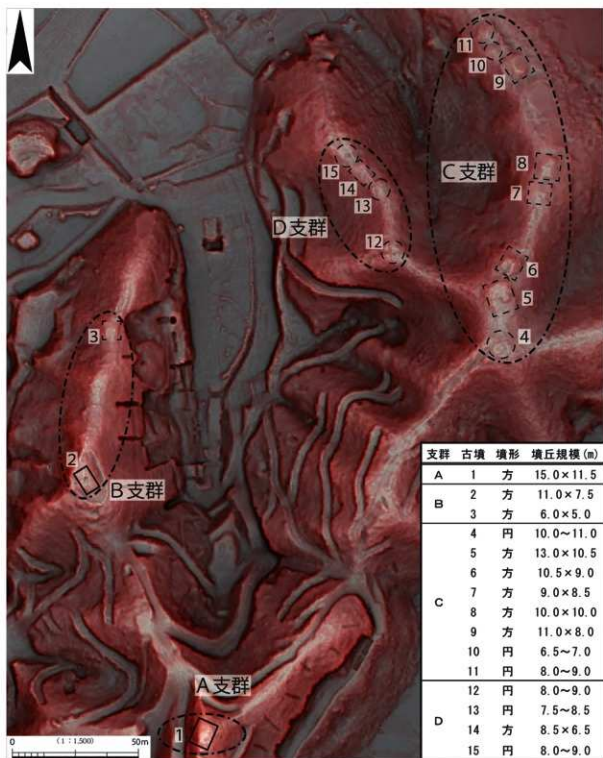
第2項 調査区の設定

工業団地の開発範囲にはA・B支群の計3基の古墳が含まれていた。そのうち、A支群の古墳を1号墳、B支群のうち南側の古墳を2号墳と呼称して、計2基の古墳を本調査の対象とした。なお、B支群のうち北側の3号墳は工業団地の残地森林内で保存されることになったため、本調査は行わなかった。

第2節 1号墳の調査

第1項 調査の目的と方法

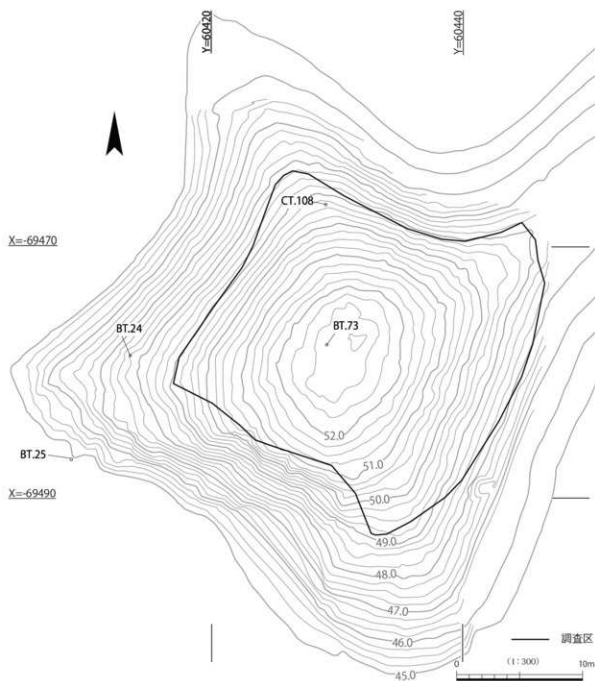
1号墳の本調査は墳形や墳丘規模、主体部の詳細、築造時期などを明らかにすることを目的として、



第76図 結本谷古墳群 全体図 (S=1/1,500)

令和4年（2022）5月20日から同年12月6日まで行った。

試掘トレンチの土層観察や地形観察により、1号墳は最大で20 mを超える規模も想定された。そのため、想定される最大規模の墳丘が含まれる約500m²を調査範囲とした（第77図）。そして、想定される墳丘の中心から試掘トレンチを利用して十字方向の群を残しつつ、墳丘の堆積土を掘削し、墳裾の傾斜変換と主体部の確認に努めた。確認された2基の主体部はそれぞれ主軸に沿って十字の群を残して埋土を掘削し、平面と土層断面の両方から主体部の構造把握に努めた。なお、主体部埋土の掘削中にPCN分析用の試料を採取した（第6章第3節）。



第77図 1号墳 調査前測量図（1：300）

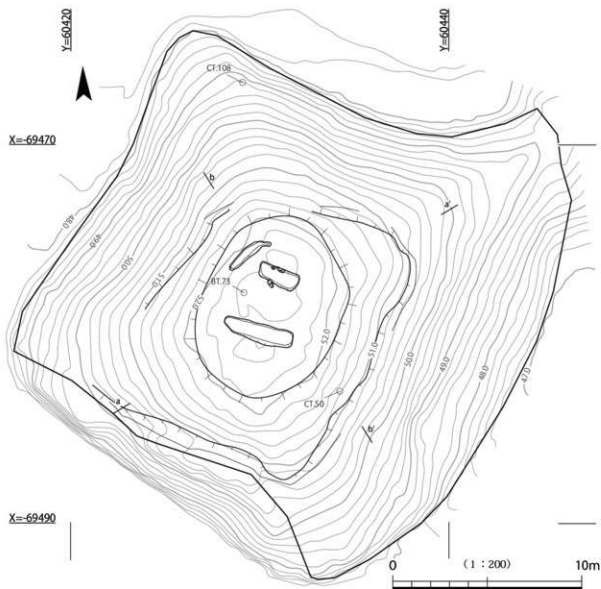
第2項 層序 (第78・79図)

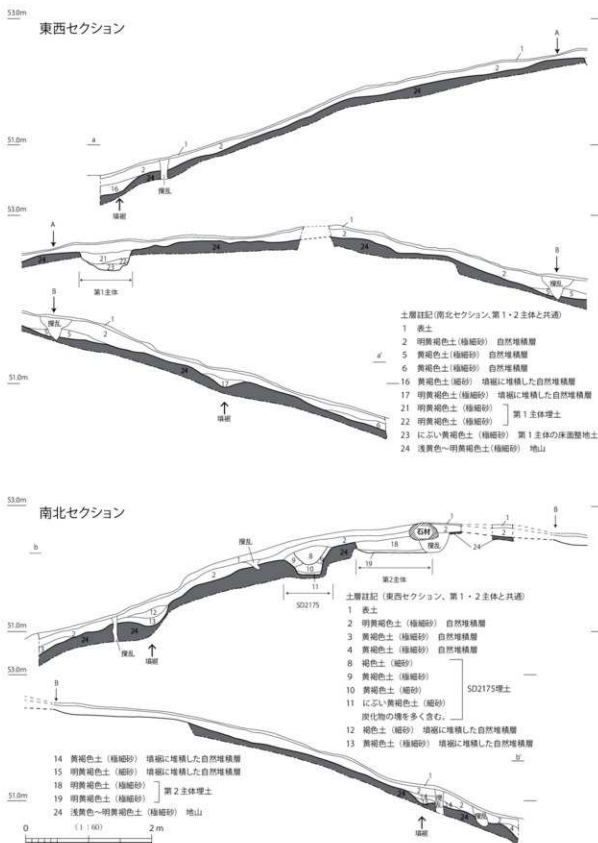
墳丘に残した十字畦の土層断面を検討したところ、墳丘の堆積土のほとんどは自然堆積層であり、人為的な盛土はみられなかった (第78・79図)。また、標高51.0m前後で地山を削りだし、墳裾の傾斜変換をつくりだしていることが確認された。以上のことから、1号墳の築造に際して墳丘の大部分は地山を削って成形している可能性が高く、多少の盛土をしていた場合も既に流出したと考えられる。

第3項 遺構

(1) 埋葬施設 (第78・80図、図版11・24)

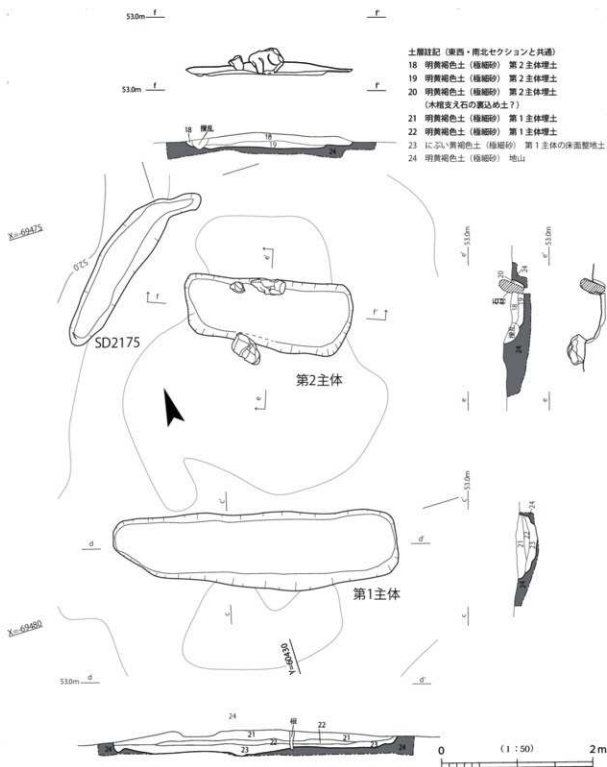
墳頂平坦面で2基の土嚢を確認した。2基とも上面を削平され、棺の痕跡や副葬品も見つからなかつ





第79図 1号墳 東西(上)・南北(下)セクション土層図(1:60)

たが、墳頂平坦面の中央に並行して配置されていることやその規模から、1号墳の埋葬施設だと推測した。埋土のPCN分析を行った結果、両土壌とも遺骸痕跡を示すとされる全リン含有量(P)の水平分布が認められたことも推測を補強する(第6章第3節)。南西側を第1主体、北東側を第2主体と呼称して、以下に各主体部に関して詳述する。



第80図 1号墳第1・2主体 平面図・土層図 (1:50)

第1主体

第1主体は南西側の主体部で、墳丘の中心に位置するため中心主体だと考えられる。主軸は南東―北西方向で、頭位は幅の広い南東側と考えられる。墓壇の寸法・形状は長さ約360cm、幅約100cm、深さ30cm以上の隅丸長方形を呈する。墓壇の底面は歪で高さも不揃いだが、整地土（23層）で床面を水平に整えた可能性がある。主体部の上面は大きく削平されており、木棺等の棺の痕跡は確認できなかった。

第2主体

第2主体は第1主体の北東側約2mのところにある。主軸は南東―北西方向で、頭位は幅の広い南東側と考えられる。墓壇の寸法・形状は長さ約210cm、幅約75cm、深さ20cm以上の隅丸長方形を呈する。墓壇の北側の長側面に2つ、南側の長側面に1つずつ流紋岩の石材が配置されていた。北側の石材のうち、大きい方は長さ約45cm、幅約35cm、厚さ約15cmの板状の石材だが、顕著な加工痕はみられない。小さい方は長さ約20cm、幅約18cm、厚さ約13cmで、拳大の不整形な礫である。北側の石材2つは墓壇の長側面に立てかけるように並んでおり、土層の乱れもなかったため、原位置を保っていると考えられる。南側の石材は長さ約45cm、幅約30cm、厚さ約15cmの板状の石材だが、顕著な加工痕はみられない。現状では根の攪乱を受けて、平らな面を上に向けた横倒しの状態になっているが、本来は北側の石材と同様に、墓壇の長側面に立てかけるように置かれていた可能性が高い。これらの石材は墓壇の両側面で何かを挟み込むように配置されているため、棺の痕跡は見つかっていないものの木棺等の棺を支えるための石材だったと考えられる。

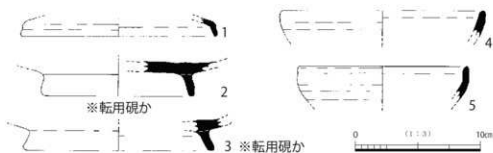
(2) 埋葬施設以外の遺構（第78・79・80図）

溝 SD2175

溝 SD2175 は第2主体の北西側約60cmのところにあり、墳頂平坦面の北西隅で確認された。長さ約2.6m、幅約55cm、深さ35cm以上で、墳頂平坦面の輪郭に沿ってカーブしている。1号墳と直接的な関係のある遺構かわからないが、溝の底面では多量の木炭片が確認された。この木炭片でAMS年代測定を行った結果、5世紀前半～6世紀前半の年代が得られた（第6章第1節）。

第4項 出土遺物（第81図）

1号墳の遺物は全て墳丘の自然堆積層を掘削中に出土した須恵器である。図化できた5点を第81図に掲げた。1は蓋の口縁部で国府編年第2型式のものである。2・3は高台付坏の底部で、蓋と同



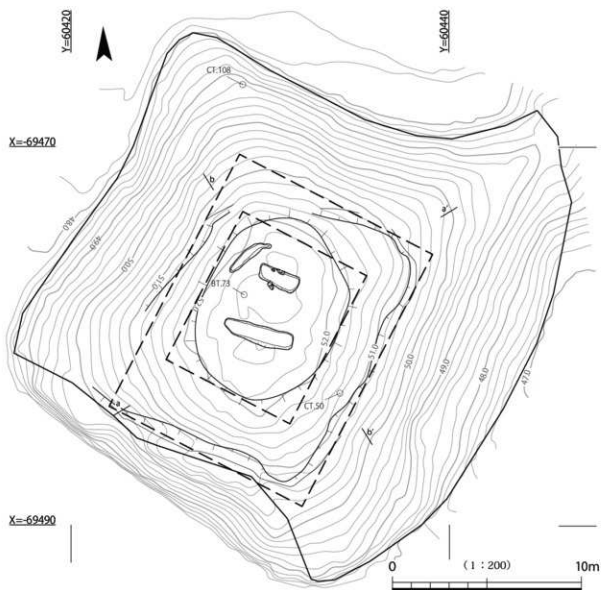
第81図 1号墳 出土遺物（1：3）

じく国府編年第2型式のものである。4・5は環の口縁部である。

これらの須恵器は全て奈良時代頃のものであり、古墳の築造とは直接的な関連はないと考えられる。ただし、1号墳の斜面下方にある結西谷IV遺跡2・3区でも、同じく国府編年第2型式の須恵器が多く出土していることは注目される。1号墳は丘陵の最も高い場所に位置しており、周囲から遺物が流入するような状況ではないため、奈良時代に結西谷IV遺跡2・3区の集落に住む人々が1号墳で何らかの活動を行った可能性はある。

第5項 小結

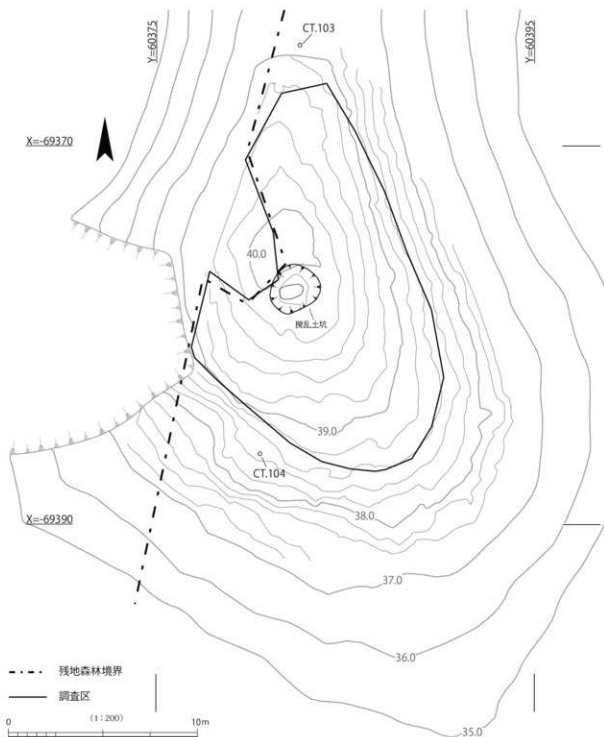
1号墳では、墳丘の東・南・北側において標高51.0 m前後で地山の削り出しによる傾斜変換がみられる。さらに、この傾斜変換は直線的に伸びているうえ、北東側・南東側で直角に近い角度で回り込んでいる。この傾斜変換を墳裾として、墳形・墳丘規模を復元すると、長辺が南西―北東方向に約



第82図 1号墳 墳丘復元図 (1:200)

15 m、短辺が南東－北西方向に約 11.5 m の方墳になる（第 82 図）。また、1 号墳の短辺と主体部の主軸方向がおおむね一致することもこの復元を補強する。

主体部は 2 基確認され、南西側の第 1 主体が 1 号墳の中心に位置しているため、中心主体だと考えられる。両主体とも主軸は南東－北西方向で、頭位は南東側だと考えられるが、上面が削平されており、棺の痕跡や副葬品は確認されなかった。ただし、第 2 主体では、墓壇の長側面に 3 つの石材が配置されており、木棺等の棺を支える石だったと考えられる。



第 83 図 2 号墳 調査前測量図 (1:200)

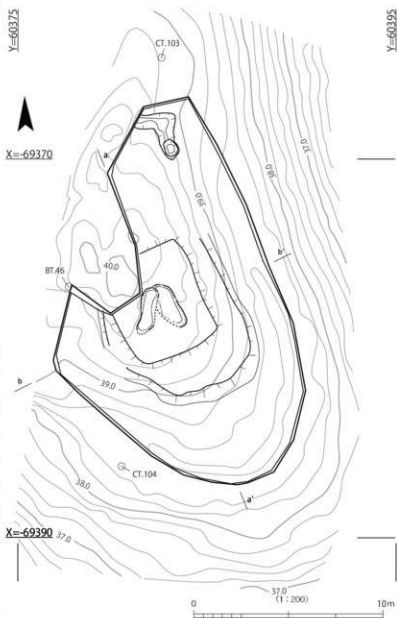
1号墳の築造時期に関しては、前述のとおり副葬品など古墳の築造時期を示す遺物は出土していない。ただし、第3項で既述したように溝SD2175の底面から採取した木炭片でAMS年代測定を行った結果、5世紀前半～6世紀前半の年代が得られた(第6章第1節)。さらに、結本谷古墳群の周辺では、結古墳群や西古墳群、三斗峙古墳群といった群集墳がいくつか調査されており、出土遺物より古墳時代中期中頃から後期前半(5世紀中頃～6世紀中頃)にかけて築造されることが判明している(附編1・2)。これらの古墳は全て尾根上に築かれた墳丘規模10m前後の小規模な円墳・方墳であるうえ、埋葬施設も木棺直葬のものが多く、結本谷1号墳と共通点が多い。以上のように、結本谷1号墳の周辺には、立地や墳形、墳丘規模、埋葬施設の形態といった点で類似する古墳が多く存在することに加えて、それらの古墳の築造時期と溝SD2175から採取した木炭片の年代測定結果がほぼ一致することから、結本谷1号墳とその周囲にある群集墳の築造時期は同時期である可能性が高い。よって、結本谷1号墳の築造時期は古墳時代中期から後期前半と推測される。

第3節 2号墳の調査

第1項 調査の目的と方法

試掘調査により古墳であることが判明した2号墳の本調査は、墳形や墳丘規模、主体部の詳細、築造時期などを明らかにすることを目的として、令和5年(2023)4月17日から同年7月24日まで行った。

試掘トレンチの土層観察や地形観察により、2号墳は10m前後の方墳と想定して約200㎡の調査区を設定した(第83図)。ただし、墳丘の北西側は残地森林に含まれるため、調査区から除外した。そして、想定される墳丘の中心から試掘トレンチを利用して十字方向の畔を残しつつ、墳丘の堆積土を掘削し、墳裾の傾斜変換と主体部の確認に努めた。確認された2基の主体部は



第84図 2号墳 平面図(1:200)

それぞれ主軸に沿って十字の畔と主体部の前後関係を観察するための畔を残して埋土を掘削し、平面と土層断面の両方から主体部の構造把握に努めた。

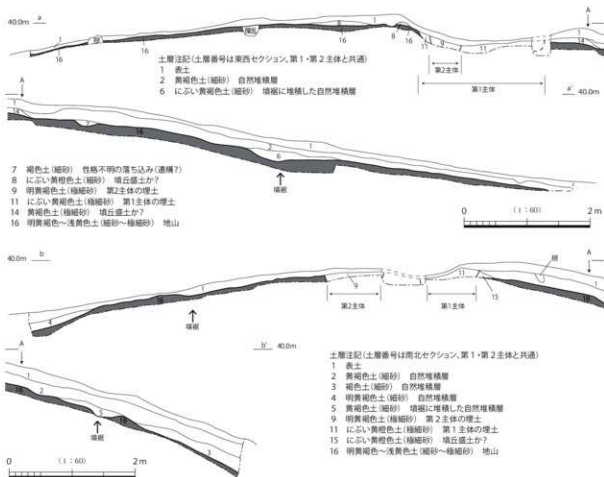
第2項 層序 (第84・85図)

墳丘に残した十字畔の土層断面を検討したところ、墳丘の堆積土のほとんどは自然堆積層であったが、墳頂付近では人為的な盛土と考えられる層(8・14・15層)もわずかにみられた。また、墳丘の東・西・南側では、標高39.0m前後で地山を削りだし、墳裾の傾斜変換を作りだしていることが確認された。以上のことから、2号墳の築造に際しては、墳丘の大部分は地山を削って成形し、墳頂部などに部分的な盛土を行ったと考えられる。

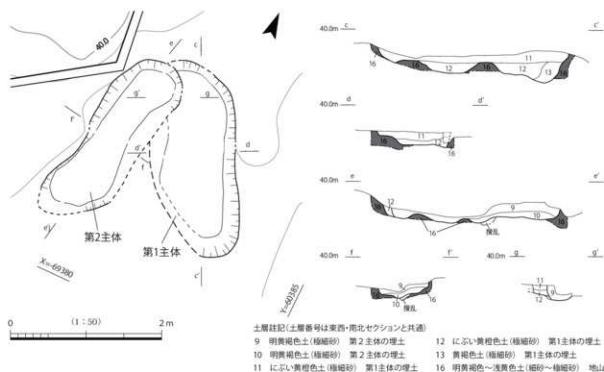
第3項 遺構

(1) 埋葬施設 (第84・86図、図版12・25)

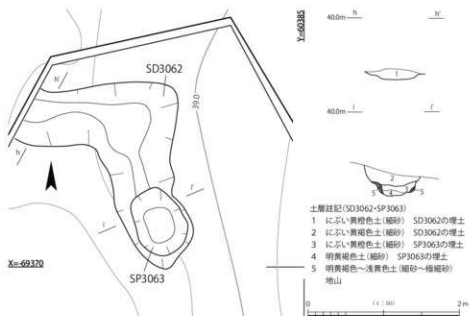
墳頂平坦面で2基の土壇を確認した。後述のとおり、2基とも上面を削平され、棺の痕跡や副葬品も見つからなかったが、墳頂平坦面の中央に配置されていることやその規模から2号墳の埋葬施設だと推測される。東側を第1主体、西側を第2主体と呼称して、以下に各主体部に関して詳述する。



第85図 2号墳 南北(上)・東西(下)セクション土層図(1:60)



第86図 2号墳第1・2主体 平面図・土層図(1:50)



第87図 SD3062・SP3063 平面図・土層図(1:50)

第1主体

第1主体は東側の主体部で、後述のとおり古墳の中心に位置し、主体部の主軸は南東―北西方向で、墳丘の主軸方向と一致しているため、中心主体だと考えられる。墓壇の寸法・形状は長さ約270cm、幅約100cm、深さ40cm以上の歪な長楕円形を呈するが、上面を大きく削平されており、正確な形はわからない。墓壇の底面は歪で高さも不揃いだ、整地土(12・13層)を入れて床面を水平に整えた可能性がある。主体部の上面は大きく削平されているため、木棺等の棺の痕跡は確認できなかった。

第2主体

第2主体は西側の主体部で、主軸は南北方向である。主体部の北端で第1主体と重複しており、平面や土層断面で前後関係を検討したところ、第1主体→第2主体の順に築造されたと考えられる。墓壇の寸法・形状は長さ約240cm、幅約90cm、深さ20cm以上の歪な長楕円形を呈するが、上面を大きく削平されており、正確な形はわからない。木棺等の棺の痕跡は確認できなかった。

(2) 埋葬施設以外の遺構(第84・87図)

溝SD3062

溝SD3062は2号墳の北東側の尾根上で確認された。北西方向に約2mのびた後、逆「く」の字に西へ折れ、約1.4mのびて調査区外に続いている。深さは14～18cmである。2号墳と尾根を区切る区画溝の可能性も検討したが、南側の墳裾と第1主体の距離が約5.5mであるのに対して、第1主体と溝SD3062の距離は約9.5mで、溝の位置が2号墳より北へ寄りすぎている。区画溝である可能性は低いと思われる。

ピットSP3063

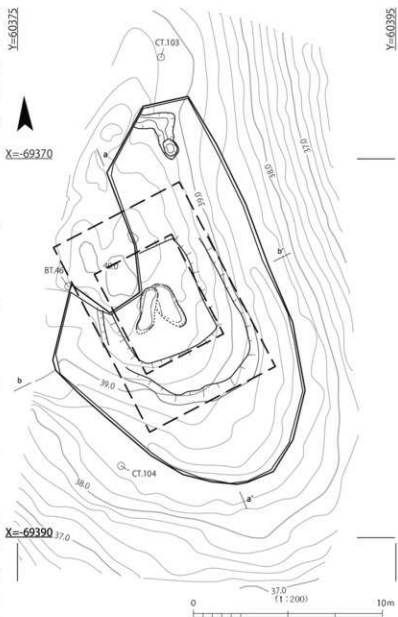
SP3063はSD3062の南端で重複していた楕円形のピットで、径約80cm、深さ約14cmである。平面や土層観察により、溝SD3062がつくられたあと、SP3063が掘りこまれたと考えられる。2号墳との関連は不明である。

第4項 出土遺物(第88図)

2号墳の出土遺物は墳丘の自然堆積層を掘削中に出土した須恵器1点のみである。蓋の口縁部で小片だが国府編年第2型式のものと考えられる。出土した須恵器は結西谷IV遺跡2・3区で確認された時期と同じ奈良時



第88図 2号墳 出土遺物(1:3)



第89図 2号墳 墳丘復元図(1:200)

代のものであり、2号墳とは直接的な関連はないと考えられる。

第5項 小結

2号墳では、墳丘の東・西・南側において、標高39.0m前後で地山の削り出しによる傾斜変換がみられる。さらに、この傾斜変換は直線的に伸びているうえ、南東側、南西側で直角に近い角度で回り込んでいる。この傾斜変換を墳裾として、墳形・墳丘規模を復元すると、短辺は南西―北東方向に約7.5mとなる。墳丘の北側では墳裾の傾斜変換を確認できなかったが、第1主体が墳丘の中心に位置すると仮定すれば、南側の墳裾と第1主体の距離が約5.5mであるため、長辺は南東―北西方向に約11mと復元できる。よって、2号墳の墳形・墳丘規模は約11×7.5mの方墳と考えられる（第89図）。

主体部は2基確認され、東側の第1主体が墳丘の中心に位置し、古墳の主軸とも方向が一致するため、中心主体だと考えられる。第1主体の西側につくられた第2主体は主体部の北端で第1主体と重複しており、第1主体→第2主体の順に築造されたことが判明している。両主体とも上面が大きく削平されており、棺の痕跡や副葬品は確認されなかった。

2号墳の築造時期に関しては、前述のとおり副葬品などの遺物が出土せず、古墳の築造時期を考える手がかりは全くない。しかし、2号墳と近接する1号墳はどちらも墳丘規模10m前後の小規模な方墳で、盛土がほとんどなく、地山を削り出して築造している。このように、両古墳とも墳丘規模・墳形・築造方法が類似していることから、2号墳の築造時期も1号墳と近い時期、すなわち、古墳時代中期から後期前半頃と考えたい。

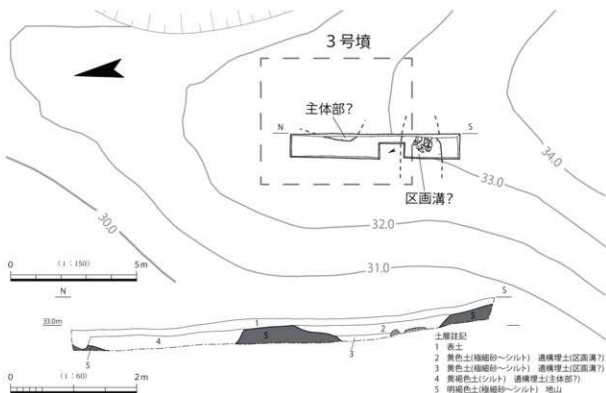
第4節 結本谷古墳群の調査成果

第1項 古墳群の調査成果

結本谷古墳群は仏經山から北にのびる丘陵の先端付近に立地する古墳群で、分布調査や試掘調査の結果、円墳6基・方墳9基の計15基が4つの支群に分かれて分布することが判明した。そのうち、本調査では2基（1・2号墳）を調査した。

1号墳は丘陵の最高所に単独で築かれた（A支群）、約15×11.5mの方墳である。主体部は2基確認され、どちらも主軸は南東―北西方向で頭位は南東側と考えられ、古墳の主軸方向と一致する。そのうち、第1主体は古墳の中心に位置するため、中心主体だと考えられる。第2主体は第1主体の北東側に築かれ、墓壇の両長側面に計3つの石材が置かれていた。この石材は木棺等の棺を支えるためのものだったと考えられる。両主体とも上面が削られており、棺の痕跡や副葬品は確認されなかった。

2号墳は1号墳から北西にのびる尾根上に築かれた（B支群）、約11×7.5mの方墳である。主体部は2基確認され、そのうち、東側に築かれた第1主体は古墳の中心に位置し、主軸が南東―北西方向で古墳の主軸方向と一致するため、中心主体だと考えられる。第2主体は第1主体の西側に築かれ、



第90図 3号墳トレンチ(試掘6トレンチ)周辺測量図(1:150)・東壁土層図(1:60)

主軸は南北方向である。主体部の北端で第1主体と重複しており、前後関係は第1主体→第2主体の順である。両主体とも上面が大きく削られており、棺の痕跡や副葬品は確認されなかった。

なお、残地森林内で保存されることになったために本調査は行っていないが、2号墳から北へ約60mの尾根上に3号墳が築かれている(第76・90図・図版25)。正確な墳丘規模は不明であるが、地形観察により約5×6mの方墳と考えられる。試掘調査では、墳頂平坦面で長さ2.2m以上の主体部らしき土壌1基が確認されたほか、墳丘の南側で東西方向にのびる幅約2.4mの溝1条を確認しており、古墳の区画溝の可能性がある(第3章第2節)。

第2項 古墳群の築造時期

結本谷古墳群の築造時期に関しては、1・2号墳からは副葬品など時期の手がかりとなる遺物が出土しなかった。しかし、1号墳の墳頂平坦面の北西側で確認された溝SD2175の底面から採取された木炭片でAMS年代測定を行った結果、5世紀前半～6世紀前半の年代を得られた。さらに、過去に調査された周辺の古墳群は、立地や墳形、墳丘規模、埋葬施設の形態といった多くの点で結本谷古墳群と共通する(附編1・2)。そして、これらの古墳は古墳時代中期中頃から後期前半(5世紀中頃～6世紀中頃)にかけて築造されており、結本谷1号墳で採取された木炭片の年代測定結果とほぼ一致する。以上のことから、結本谷古墳群も周辺の古墳群と同じく、古墳時代中期から後期前半に築造されたと推測される。

(下江裕貴)

第6章 自然科学分析

第1節 結西谷IV遺跡発掘調査に係るAMS年代測定

第1項 はじめに

結西谷IV遺跡は、鳥根県中部、出雲市斐川町直江結西谷に位置する。

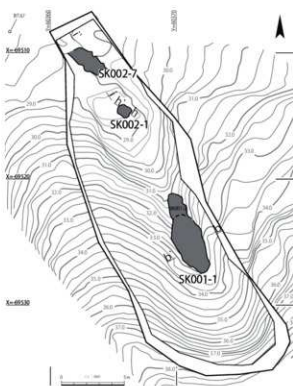
本報告は、結西谷IV遺跡発掘調査で確認された遺構の時期を明らかにすることを目的で、出雲市から委託を受け実施・報告した数編のAMS年代測定報告書を再編集したものである。

第2項 分析試料について（第91～103図 第2表）

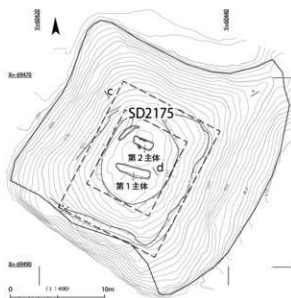
出雲市文化財課により採取・保管中の試料から、分析試料の御提供を受けた。

第91図～第94図に1～3区・1号墳の遺構の配置、第95図～第103図に各遺構の断面図を示したほか、第2表に試料の一覧を示す。

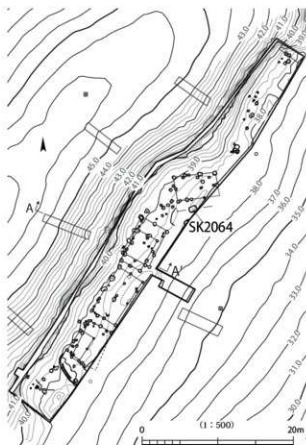
また、以下に示す平面図及び断面図は、出雲市文化財課より御提供を受けた原図をもとに、作成した。



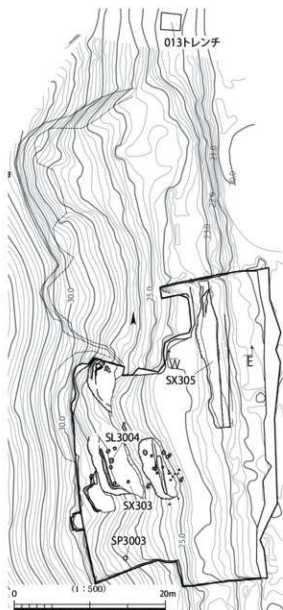
第91図 1区 平面図（1：300）



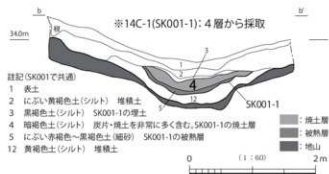
第92図 結本谷1号墳 平面図（1：400）



第93図 2区 平面図 (第2面) (1:500)



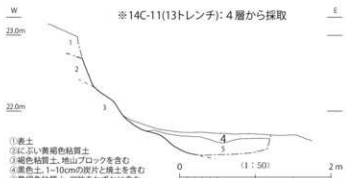
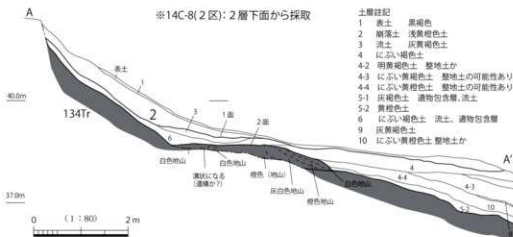
第94図 3区 平面図 (1:500)



第95図 1区炭窯 SK001 東西セクション土層図 (1:60)

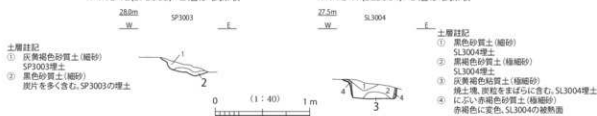


第96図 1区炭窯 SK002-1 土層図 (1:40)

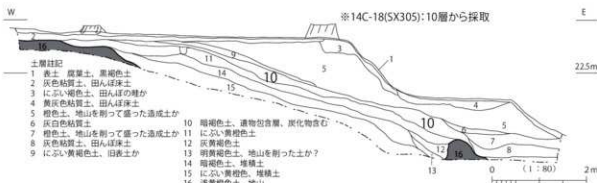


※14C-12(SP3003): 2層から採取

※14C-17(SL3004): 3層から採取



第102図 3区 SP3003 (左)・SL3004 (右) 土層図 (1:40)



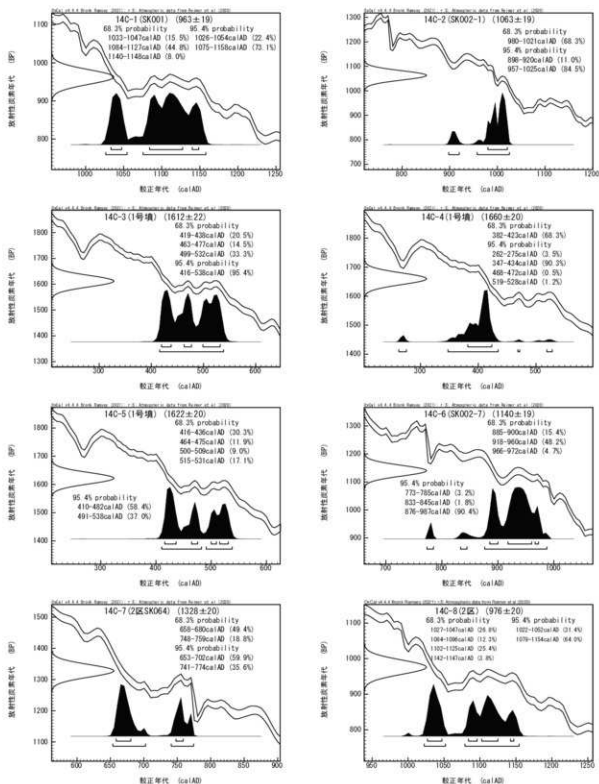
第103図 3区加工段 SX305 土層図 (1:80)

第2表 試料一覧表 (年代測定結果)

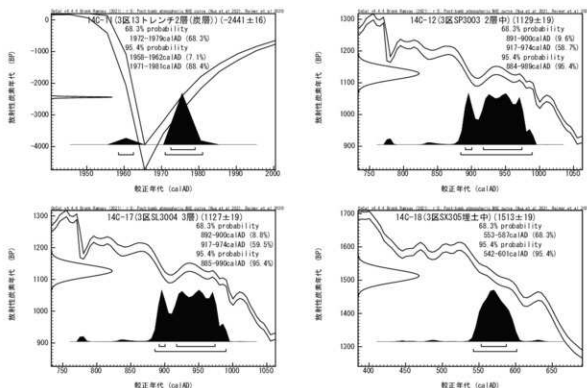
試料番号	採取区・遺構・土層	状況	重量(g)	前処理	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正値 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代範囲 1 σ 暦年代範囲	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代範囲 2 σ 暦年代範囲	測定番号
14C-1	1区 SK001-1 6層	炭化材	0.1843	前処理済 有機炭素抽出、アセトン 抽出、フラスコで乾燥、 炭化材をフラスコに投入し、 炭化 (1.5g ± 0.1) 炭化率 1.5% ± 0.1	-26.76 ± 0.20	902 ± 19	963 ± 19	965 ± 20	1033-1047 cal AD (15.0%) 1084-1127 cal AD (44.9%) 1140-1148 cal AD (37.0%)	1026-1054 cal AD (72.8%) 1075-1138 cal AD (27.2%)	PJ2-47600
14C-2	1区 SK002-1 6層	炭化材	3.3551	前処理済 有機炭素抽出、アセトン 抽出、フラスコで乾燥、 炭化材をフラスコに投入し、 炭化 (1.5g ± 0.1) 炭化率 1.5% ± 0.1	-26.25 ± 0.19	1084 ± 19	1093 ± 19	1085 ± 20	980-1023 cal AD (68.2%)	899-929 cal AD (11.0%) 957-1025 cal AD (84.7%)	PJ2-47601
14C-3		炭化材	0.1243	前処理済 有機炭素抽出、アセトン 抽出、フラスコで乾燥、 炭化材をフラスコに投入し、 炭化 (1.5g ± 0.1) 炭化率 1.5% ± 0.1	-30.54 ± 0.30	1764 ± 21	1612 ± 22	1610 ± 20	419-438 cal AD (20.5%) 613-677 cal AD (14.3%) 690-732 cal AD (12.2%)	416-538 cal AD (85.0%)	PJ2-47602
14C-4	1号墳 S02175 11層	炭化材	0.6704	前処理済 有機炭素抽出、アセトン 抽出、フラスコで乾燥、 炭化材をフラスコに投入し、 炭化 (1.5g ± 0.1) 炭化率 1.5% ± 0.1	-26.33 ± 0.21	1088 ± 20	1040 ± 20	1040 ± 20	382-423 cal AD (58.3%)	263-275 cal AD (3.2%) 347-434 cal AD (90.2%) 464-472 cal AD (0.3%) 519-528 cal AD (1.2%)	PJ2-47603
14C-5		炭化材	0.1856	前処理済 有機炭素抽出、アセトン 抽出、フラスコで乾燥、 炭化材をフラスコに投入し、 炭化 (1.5g ± 0.1) 炭化率 1.5% ± 0.1	-28.40 ± 0.21	1690 ± 20	1622 ± 20	1620 ± 20	416-430 cal AD (30.3%) 664-675 cal AD (11.9%) 680-689 cal AD (3.0%) 693-697 cal AD (1.7%)	410-482 cal AD (58.0%) 491-528 cal AD (37.0%)	PJ2-47604
14C-6	1区 SK003-2 20層	炭化材	4.9906	前処理済 有機炭素抽出、アセトン 抽出、フラスコで乾燥、 炭化材をフラスコに投入し、 炭化 (1.5g ± 0.1) 炭化率 1.5% ± 0.1	-26.40 ± 0.19	1164 ± 19	1140 ± 19	1140 ± 20	865-960 cal AD (15.4%) 919-960 cal AD (16.2%) 968-972 cal AD (4.7%)	773-785 cal AD (3.3%) 842-945 cal AD (1.9%) 876-987 cal AD (14.2%)	PJ2-47605
14C-7	2区 SK2064 3層	炭化材	0.1230	前処理済 有機炭素抽出、アセトン 抽出、フラスコで乾燥、 炭化材をフラスコに投入し、 炭化 (1.5g ± 0.1) 炭化率 1.5% ± 0.1	-25.29 ± 0.21	1323 ± 20	1328 ± 20	1320 ± 20	658-680 cal AD (48.4%) 746-759 cal AD (18.9%)	643-702 cal AD (58.9%) 711-774 cal AD (35.0%)	PJ2-47606
14C-8	2区 V-4547 付着 3層下面	炭化材	1.3223	前処理済 有機炭素抽出、アセトン 抽出、フラスコで乾燥、 炭化材をフラスコに投入し、 炭化 (1.5g ± 0.1) 炭化率 1.5% ± 0.1	-28.41 ± 0.21	1633 ± 21	976 ± 20	975 ± 20	1027-1047 cal AD (26.8%) 1084-1096 cal AD (12.2%) 1102-1125 cal AD (25.4%)	1022-1052 cal AD (31.0%) 1079-1154 cal AD (64.0%)	PJ2-47607
14C-11	3区 137号 4層	炭化材	0.6006	前処理済 有機炭素抽出、アセトン 抽出、フラスコで乾燥、 炭化材をフラスコに投入し、 炭化 (1.5g ± 0.1) 炭化率 1.5% ± 0.1	-27.81 ± 0.22	-2395 ± 16	-2411 ± 16	-2440 ± 15	1972-1976calAD 166.7%	1950-1962calAD (7.1%) 1971-1981calAD 58.4%	PJ2-49772
14C-12	3区 SP3003 2層	炭化材	0.9136	前処理済 有機炭素抽出、アセトン 抽出、フラスコで乾燥、 炭化材をフラスコに投入し、 炭化 (1.5g ± 0.1) 炭化率 1.5% ± 0.1	-27.06 ± 0.15	1164 ± 20	1129 ± 19	1120 ± 20	891-900calAD (9.6%) 917-974calAD (56.7%)	884-989calAD (95.4%)	PJ2-49773
14C-17	3区 SL3004 3層	炭化材	0.4720	前処理済 有機炭素抽出、アセトン 抽出、フラスコで乾燥、 炭化材をフラスコに投入し、 炭化 (1.5g ± 0.1) 炭化率 1.5% ± 0.1	-28.47 ± 0.15	1165 ± 20	1127 ± 19	1125 ± 20	892-900calAD (8.8%) 917-974calAD (56.3%)	885-989calAD (95.4%)	PJ2-49778
14C-18	3区 SX305 10層	炭化材	36.262	前処理済 有機炭素抽出、アセトン 抽出、フラスコで乾燥、 炭化材をフラスコに投入し、 炭化 (1.5g ± 0.1) 炭化率 1.5% ± 0.1	-26.50 ± 0.16	1328 ± 20	1313 ± 19	1315 ± 20	553-587calAD (66.2%)	542-601calAD (86.4%)	PJ2-49779

第3項 AMS年代測定方法

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。 ^{14}C 濃度の測定にはタンデム型イオン加速



第104図 暦年較正結果 (1/2)



第105図 暦年較正結果 (2/2)

器を用い、半減期：5568年で年代計算を行った。暦年較正にはOxCal ver. 4.4 (Bronk Ramsey, 2009) を利用し、INTCAL20 (Reymer et al., 2020) を用いた。

第4項 AMS年代測定結果 (第104・105図 第2表)

測定結果を第2表、第104・105図に示す。

第2表には、試料の詳細、前処理方法、 $\delta^{13}\text{C}$ 値と4種類の測定年代を示している。第104・105図にはOxCal ver. 4.4 (Bronk Ramsey, 2009) を利用し、INTCAL20 (Reymer et al., 2020) を用いた暦年較正結果を示した。INTCAL20の範囲を超え、さらに新しい年代値が想定される場合は、Bomb13NH2 (Hua et al., 2013) を用いている。また、確率分布と σ 、 2σ の構成範囲を示している。

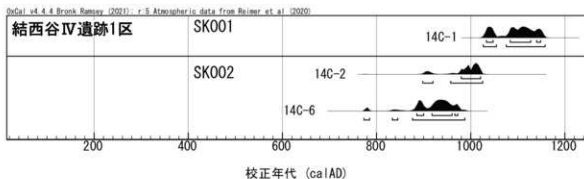
第5項 年代測定値について

暦年較正結果の一覧を第106～109図に示す。年代測定結果から、各遺構の時期を推定した。

(1) 結西谷IV遺跡1区 (第106図)

1区の炭層跡SK001-1で採取された試料(14C-1)は、 2σ でAD 1026-1158の年代値を示した。炭層跡SK002で採取された試料(SK002-1: 14C-2, SK002-7: 14C-6)は、SK002-1でAD 898-1025, SK002-7でAD 773-987の年代値を示した。これらの結果から、炭層の形成時期は、SK001が11世紀～12世紀、SK002が8世紀～10世紀と考えられる。これは、推定された年代(10世紀～11世紀)を含み、矛盾のない結果といえる。

また、SK002内で採取された試料に関して、SK002-1の年代値が、SK002-7と同時期、あるいは



第106図 暦年校正結果一覧(1区)

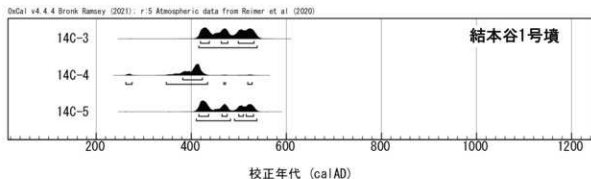
新しい年代値を示す。このことから、SK002-1とSK002-7の形成時期は、同時期あるいはSK002-1のほうが新しいと考えられる。

(2) 結本谷1号墳(第107図)

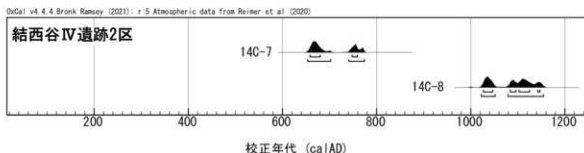
1号墳の周溝と考えられるSD2175で採取された試料(14C-3、14C-4、14C-5)は、14C-3でAD 416-538、14C-4でAD 263-528、14C-5でAD 410-538の年代値を示した。14C-4の年代測定結果で、他2試料より古い年代値が示されているが、これは樹木の年輪の生育過程に起因すると考えられる。一般的に、樹木は年輪の外側(樹皮)に向かって年代値が新しくなることから、同一樹木でも測定部位によって年代値が異なることがある。また、14C-3と14C-5の年代値は5世紀～6世紀を示し、14C-4の年代値も同時期を含む。以上のことから、周溝の形成時期は、3試料に共通する年代値の5世紀～6世紀である可能性が高い。この年代値は、推定されていた年代(5世紀以降)とも一致する。

(3) 結西谷IV遺跡2区(第108図)

2区の加工段と考えられる場所で採取された試料(SK2064:14C-7、1面の集積木炭(x-45グリッド



第107図 暦年校正結果一覧(2区1号墳)



第108図 暦年校正結果一覧(2区)

付近)：14C-8)は、14C-7でAD 653-702、14C-8でAD 1022-1154の年代値を示した。この結果からSK2064の形成時期は、7世紀～8世紀と考えられる。1面の集積木炭は11世紀～12世紀と考えられ、加工段が遅くともこの時期には廃棄されていたことを示唆する。また、これらの年代値は、推定されていた年代(14C-7：7～8世紀、14C-8：8世紀以降)を含み、矛盾のない結果といえる。

(4) 結西谷IV遺跡3区(第109図 第3表)

調査区3区について、各遺構と加工段との関係性を第3表に示す。

SP3003

14C-12(SP3003)は3区の南側斜面で確認されたピットである。試料は埋土中から採取され、年代値は9～10世紀であった。

加工段 SX303

加工段 SX303 と関係性のある遺構の年代値は 14C-17 (SL3004)：9～10 世紀であった。埋土中で採取しており、加工段 SX303 は 9～10 世紀には形成され、埋設していたと考えられる。

加工段 SX305

加工段 SX305 と関係性のある遺構の年代値は、14C-18 であった。

加工段 SX305 を覆う 10 層で採取された 14C-18 は 6 世紀を示す。このことから、加工段 SX305 はこの頃には、埋設していたと考えられる。

13 トレンチ

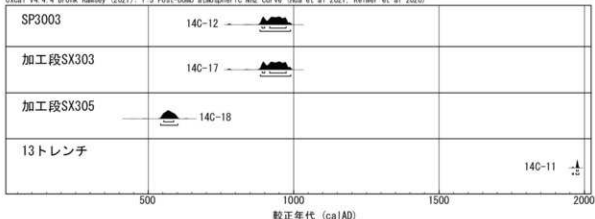
13 トレンチで採取された 14C-11 は、近現代(1958-1981 年)の遺構と考えられる。

(奥中亮太)

第3表 3区各遺構と加工段との関係

試料No.	加工段	遺構名	加工段との関係性
14C-12	—	SP3003	加工段の遺物包含層(埋土)より上層のため、加工段の埋設時期より新しいか。
14C-17	3	SL3004	加工段3に付随するが跡か？
14C-18	5	加工段SX305	加工段5の土器集中出土地点(10層)で採取されたため、加工段5の埋設時期と同時期か。
14C-11	—	013トレンチ	炭素(検定年代は不明)

OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021) : r-S Post-bomb atmospheric $\delta^{13}C$ curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020)



第109図 暦年較正結果一覧(3区)

【引用文献】

- Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- Hua, Q., Barbetti, M., & Rakowski, A. J. (2013). Atmospheric Radiocarbon for the Period 1950-2010. *Radiocarbon*, 55(4).
- Reimer, P., Austin, W., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R., Friedrich, M., Grootes, P., Guilderson, T., Hajdas, I., Heaton, T., Hogg, A., Hughen, K., Kromer, B., Manning, S., Muscheler, R., Palmer, J., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R., Richards, D., Scott, E., Southon, J., Turney, C., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A., & Talamo, S. (2020). The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62.

第2節 結西谷Ⅳ遺跡検出炭窯出土炭化材の樹種

第1項 はじめに

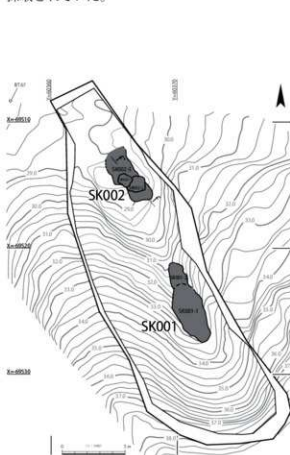
結西谷Ⅳ遺跡は、島根県中部、出雲市斐川町直江 結西谷地内に位置する遺跡である。

本報は出雲市文化財課が、結西谷Ⅳ遺跡発掘調査に伴い検出された平安時代の炭窯出土の炭化材を対象に、炭材の原料を確定するとともに、遺跡周辺の森林植生を推定する目的で、文化財調査コンサルタント株式会社に委託・実施した樹種同定報告書を再編したものである。

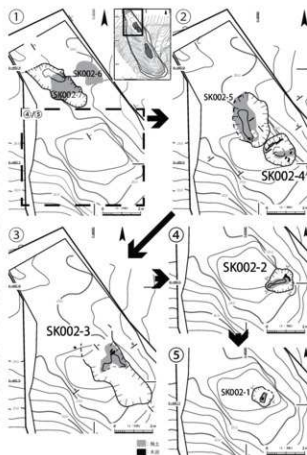
第2項 分析試料について（第110～112図）

第4表に樹種同定試料一覧を示す（試料一覧には、樹種同定結果も併記）。また、SK002-1から9世紀末～11世紀前半、SK002-7から、8世紀後半～10世紀後半の年代値が得られている（第6章第1節）。分析試料は、出雲市より御提供を受けた。また、以下に示す平面図及び断面図は、出雲市文化財課より御提供を受けた原図をもとに作成した。

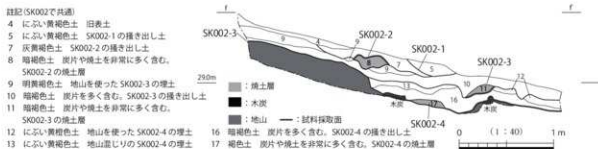
第110図に、1区の遺構配置を示し、第111図に炭窯SK002の作業順を、第112図に炭窯SK002の断面図を示した。また、分析試料は、太線で示した8層上面、11層下面、16層下面より採取されていた。



第110図 1区 平面図（1：300）



第111図 1区炭窯SK002 作業順序（1：200）



第112図 1区炭窯SK002 南北セクション土層図 (1:40)

第3項 樹種同定方法

以下の順に試料を調整し、走査型電子顕微鏡下で観察・同定を行った。また、記載と顕微鏡写真は、それぞれ代表試料にとどめ、用語などは基本的に(島地ほか1985)に従う。

- 1) カッターを用いて3断面(横断面・接線断面・放射断面)を分取。
- 2) 分取した試料を、導電性カーボンテープにより試料台に固定。
- 3) イオンスタック装置にて、Pt蒸着。

第4項 樹種同定結果(第113・114図 第4表)

樹種同定結果を第4表に示す。以下に各試料の記載を行った(複数ある場合は、代表的な試料のみ記載し、下線で示した)。また、第113・114図に顕微鏡写真を掲載(記載と同様)した。

「種と分布」のうち、分類は(大井1978)に従い、分布は(大井1978)及びインターネット上の情報を基にした。

第4表及び下記に示したように、同定できた樹種は温帯の山地に生育する種類で、いわゆる「薪炭林(里山)」の構成種である。

試料が採取された炭窯の時期は、炭化材の年代測定値から8世紀後半～11世紀前半(平安時代)と考えられる。同時期の花粉分析は、西南西に1.8km程度離れた小野遺跡で実施されており、近辺の丘陵地はアカマツやナラ類を主要素とする「薪炭林(里山)」で覆われていたとされる(渡辺2005)。一般に、炭窯では近辺の樹木を用いて炭を生産する。今回の樹種同定結果と、小野遺跡での花粉分析

第4表 樹種同定試料一覧(同定結果)

整理No.	遺跡名	調査区	遺構名	層序	試料名	備考	樹種
1	結西谷IV遺跡	1区	SK002-2	8層上面	木炭	φ: 35×35mm(枝)	クヌギ類
2			SK002-3	11層下面	床面直上	φ: 30×45mm(枝)	ツツジ属
3			SK002-3	11層下面	床面直上	(仮)?-1 φ: 20×25mm(枝)	クマシデ属
4			SK002-3	11層下面	床面直上	(仮)?-2 φ: 25×30mm(枝)	クマシデ属
5			SK002-3	11層下面	床面直上	(仮)?-3 φ: 25×30mm(枝)	クマシデ属
6			SK002-4	16層下面	床面	木炭2 φ: 15×25mm(枝)	イイギリ
7			SK002-4	16層下面	床面	木炭3(西側) φ: 30×35mm(枝)	イイギリ
8			SK002-4	16層下面	床面	木炭6 φ: 40×40mm(枝)	クマシデ属
9			SK002-4	16層下面	床面	木炭8 φ: 40mm以上(木片)	環孔材
10			SK002-4	16層下面	床面	木炭9 φ: 40mm以上(木片)	環孔材

結果を比較すると、アカマツ（樹種同定の分類群としてはマツ属（複雑管束亜属））が検出されていないものの、矛盾のない結果である。

（１）クマシデ属 *Carpinus* sp. (カバノキ科)

整理No: 3, 4, 5, 8

記載：小径の枝であり、木材解剖学的特徴が明瞭ではない（構造が未分化）可能性もある。非常に小さい道管が単独あるいは、まれに2～5、あるいはそれ以上放射方向に複合し、散在状に、非常に多く分布する散孔材である。道管せん孔は単せん孔。放射組織は1～3細胞幅で高さの極めて低いものが密集する、集合放射組織を成す。軸方向柔細胞は短接線状を示す。以上の組織上の特徴から、クマシデ属と同定した。

種と分布：本邦産は主に5種。イワシデ（本州（中国地方）、四国、九州）、イヌシデ・クマシデ（本州、四国、九州）、アカシデ・サワシバ（北海道～九州）

（２）クヌギ節（コナラ属コナラ亜属）*Quercus* (sect. *Aegilops*) sp. (ブナ科)

整理No: 1

記載：中庸で円形ないし楕円形の道管が単独で数列に配列する環孔材である。孔圏外では径を中庸から徐々に減じた小さい道管が、単独で放射状に配列する。小径管は厚壁で円形である。道管せん孔は単せん孔であり、一部の道管にはチロースが認められる。また、孔圏道管の周りには周囲仮道管が存在している。放射組織は同性ですべて平伏細胞からなり、多数の極めて低い単列放射組織と極めて幅の広い広放射組織からなる、典型的な複合型である。道管放射組織壁孔は櫛状を示す。軸方向柔細胞は1ないし2細胞幅の単接線状柔組織を形成している。以上の組織上の特徴から、コナラ属（クヌギ節）と同定した。孔圏道管の径が小さく、数列に並ぶなどクヌギ節と異なる特徴も認められるが、試料が小径の枝でのため、組織が未分化であることに起因すると考えた。

種と分布：本邦産は2種。アベマキ（本州（中、西部）～九州）、クヌギ（本州～九州）

（３）イイギリ *Idesia polycarpa* Maxim (イイギリ科（ヤナギ科）)

整理No: 6, 7

記載：小径の枝であり、木材解剖学的特徴が明瞭ではない（構造が未分化）可能性もある。非常に小さい円形の道管が、多くは単独、まれに2～5個放射方向あるいは団塊状に複合して散在状に非常に多く分布する散孔材である。道管せん孔は単せん孔で、道管壁孔は交互状を示し、道管放射組織間壁孔は階段状を示す。放射組織は異性型で1～2細胞幅で、高さは非常に低い。軸方向柔細胞は不顕著である。以上の組織上の特徴から、イイギリ属と同定した。

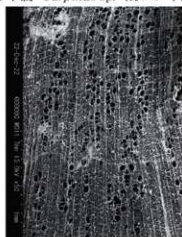
種と分布：本邦産は1属1種。イイギリ（本州～九州、沖縄（山地・谷筋））

（４）ツツジ属 *Rhododendron* sp. (ツツジ科)

整理No: 2

記載：小径の枝であり、木材解剖学的特徴が明瞭ではない（構造が未分化）可能性もある。非常に小さい道管が多くは単独、まれに2～数個放射方向に複合し、散在状に、非常に多く分布する散孔材である。道管せん孔は階段状孔で、barの幅はやや広い。放射組織は1～3細胞幅の異性で非常に低く、

クマシデ属 *Carpinus* sp. (カバノキ科) : No. 3



横断面

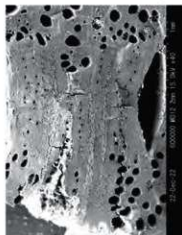


接線断面

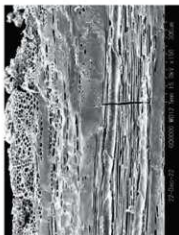


放射断面

クヌギ節 (コナラ属コナラ亜属) *Quercus* (sect. *Aegilops*) sp. (ブナ科) : No. 1



横断面

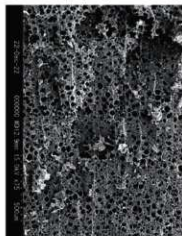


接線断面



放射断面

イイギリ *Idesia polycarpa* Maxim (イイギリ科(ヤナギ科)) : No. 6



横断面



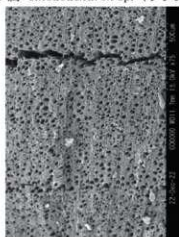
接線断面



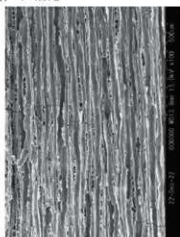
放射断面

第113図 樹種同定図版(1)

ツツジ属 *Rhododendron* sp. (ツツジ科) : No. 2



横断面

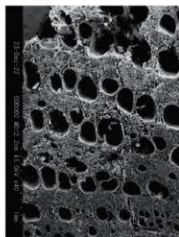


接線断面

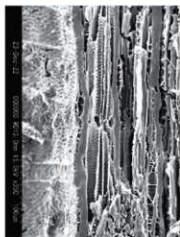


放射断面

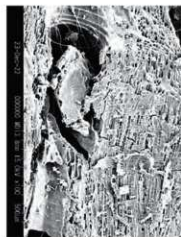
環孔材 Ring-porous wood : No. 9



横断面



接線断面



放射断面

第114図 樹種同定図版(2)

道管放射束期間壁孔は階段状。軸方向柔細胞は少なく、不顕著である。以上の組織上の特徴から、ツツジ属と同定した。

種と分布：本邦産は主に 43 種（園芸品種多数）。ヒカゲツツジ（本州（関東以西）～九州の山地）、ハクサンシャクナゲ（北海道、本州（中部地方以北）の高山針葉林中）、ヤマツツジ（北海道～九州の山地丘陵地）、モチツツジ（本州（伊豆、甲斐、中国東部まで）、四国の丘陵地及び山地）、ミツバツツジ（本州（関東、東海道、関西）の山地）など

(5) 環孔材 Ring-porous wood

整理No：9、10

記載：やや大きく円～だ円形の道管がほぼ単独、単列で密に配列する環孔材。年輪幅が狭く、孔圏外道管の複合、配列が十分に観察できなかった。道管せん孔は単せん孔で、らせん肥厚が認められる。放射組織は同性で、1～3細胞幅。以上の組織上の特徴を持つ樹種は複数存在する。試料の推定直径は4cm以上であるが、同時に同定作業を行った試料は小径の枝で、これらの試料にも同様な可能性があり、構造が未分化である可能性もある。これらのことから、環孔材に止めた。

第5項 まとめ

結西谷IV遺跡1区で検出された炭窯由来炭化材の樹種同定を行った結果、以下の事柄が明らかになった。

- (1) 樹種同定の結果、5分類群が明らかになった。これらは温帯の山地に生育する種類で、薪炭林(里山)の構成種であった。
- (2) 年代測定結果から、同炭窯は平安時代の遺構と考えられ、近隣の小野遺跡で推定された平安時代の森林植生と類似した(ただし、アカマツを欠く)。

(渡邊正巳)

【引用文献】

- 大井次三郎 1978『改訂増補新版 日本植物誌』顕花編 至文堂 1584 頁
- 島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司 1985『木材の構造』文永堂 276 頁
- 渡邊正巳 2005『小野遺跡発掘調査にかかる自然科学分析』『県道木次直江停車場線一工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 小野遺跡』斐川町文化財調査報告 31 斐川町教育委員会 18-22 頁

第3節 結本谷古墳群 結本谷1号墳 第1、第2主体部埋土のPCN分析

第1項 はじめに

酸性土壌が広く分布する日本国内では、古墳でも遺骸や埋葬品の検出されない埋葬施設が多く発見されている。

筆者らは、地質学的視点から埋葬施設（土坑など）の特徴を明らかにし、そこから埋葬施設としての判断材料を導き出すための研究を進めている。ヒト（あるいは動物全体）の特徴として、リン濃度が高く、炭素と窒素の比が1桁を示すことが知られている（第5表）。単純化すると、埋葬施設（土坑など）の底部ではヒト（遺骸）が横たわっていた痕跡として、上位に比べリン濃度が高く、炭素と窒素の比が低いと想定される。一方、農耕が始まって以降、施肥が行われるようになり、耕作土ではリンほかの農作物に必要な元素が人工的に付加されるようになった。これらの元素は上位の耕作土から浸透するために、埋葬施設内では下位ほど低濃度になる。これらのことを踏まえ、遺構内断面で全リン含有量（P）、有機炭素濃度（C）と全窒素濃度（N）の比（C/N）の分布図を作成することで、元素の浸透状況や遺骸痕跡が明瞭になると考える。また、遺構を埋める堆積物が均質であるとは限らず、粒度分析によって堆積物の特徴を同時に明らかにする必要がある。

今回、結本谷古墳群発掘調査で検出された、結本谷1号墳 第1、2主体部埋土を対象として各種元素分析、粒度分析を実施した。更に今回の結果、考察を踏まえ、今後同様の調査を実施する際の留意点についても述べる。

また、結本谷古墳群は島根県中央部、出雲市斐川町直江に位置する。

第2項 分析試料について

分析試料は現地にて、細分して採取した。また、出雲市文化財課より御提供を受けた原因をもとに、

第5表 動物（人間）、植物、土壌中の元素の割合（渡辺 2012）

		リン(P)	P/C	炭素(C)	窒素(N)	C/N	カルシウム(Ca)
人 間	全体	1.1%	0.049	22.5%	2.6%	8.9	1.4%
	骨	6.7%	0.185	36.0%	4.3%	8.4	17.0%
	筋肉	0.59%	0.009	57.0%	7.2%	9.3	0.04%
	毛	0.01%	0	54.0%	16.0%	3.4	0.17%
	肝臓	0.94%	0.014	67.0%	7.2%	9.3	0.07%
動 物	哺乳類	—	—	48.4%	12.5%	3.8	—
	鳥類	—	—	47.5%	11.4%	4.2	—
	バタフライ	3.0%	0.056	54.0%	6.6%	5.6	0.51%
	蕎麦類	0.50%	—	—	3.4%	—	0.09%
	豆科類	0.17%	—	—	1.2%	—	5.1%
植 物	シダ類	0.20%	0.004	45.0%	2.0%	22.5	0.37%
	裸子植物	0.20%	0.004	45.0%	3.2%	14.1	0.85%
	被子植物	0.11%	0.002	45.0%	2.5%	18.0	0.85%
	野山菜	0.51%	0.011	45.0%	5.3%	8.4	2.5%
	平均的土壌	0.08%	0.040	2.00%	0.20%	10.0	1.5%
土 壌・ 出 雲 市	畑地の平均	0.067%	0.023	2.94%	0.047%	52.6	6.6%
	農地の平均	0.070%	0.044	1.50%	0.060%	25.7	3.1%
	花畑の平均	0.070%	1.9	0.036%	0.0021%	17.1	1.6%
	花畑地の平均	0.14%	2.3	0.051%	0.0030%	29.3	6.7%

各種図面を作成した。

第115図(1号墳平面図)に、第1、2主体部の位置を、第116図に試料の採取位置を示す。

第3項 分析方法

(1) 全リン分析方法

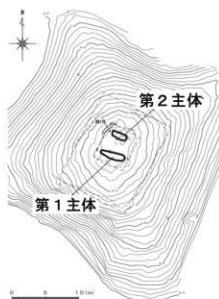
全リン分析は、以下の手順で行った。

- 1) 試料を60℃で1日乾燥後、乳鉢で200メッシュ程度に粉砕。
- 2) フッ化水素酸分解法(土壌環境分析法編集委員会編1997)による試料調整。
- 3) モリブデン酸による定量(日本薬学会編2010)に従い、紫外可視近赤外分光光度計(日本分光社:V-670)による濃度測定。

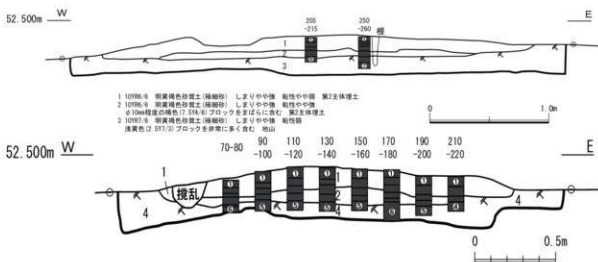
(2) CN 分析方法

CN 分析は、以下の手順で行った。

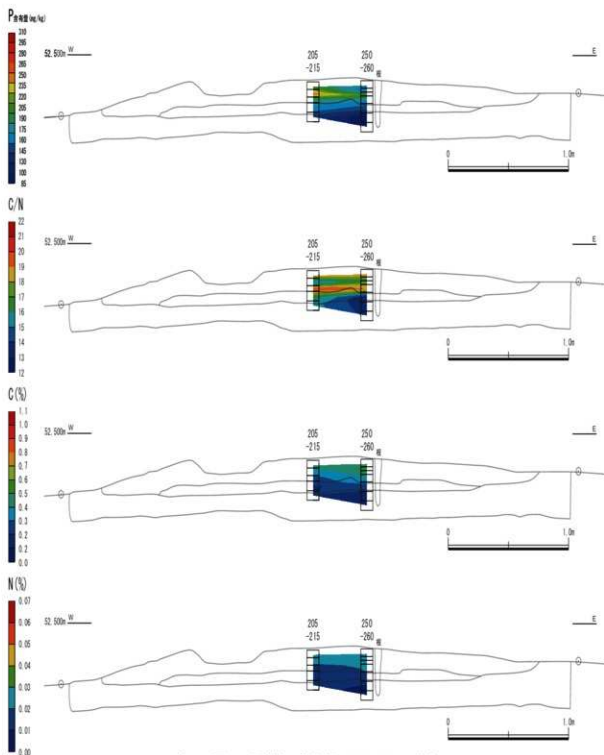
- 1) 試料を60℃で1日乾燥後、乳鉢で200メッシュ程度に粉砕する。
- 2) 約15mgを秤量し銀コンテナに入れる。貝殻起源等の無機炭素を取り除くために、1M-HCl添加後100℃で加熱乾燥する。
- 3) 更にSn(スズ)コンテナで包む。
- 4) 元素分析機EA-1108により測定する。標準試料にはBBOTを用いる。



第115図 調査区配置図(試料採取地点)



第116図 試料採取位置(上:第1主体部 下:第2主体部)



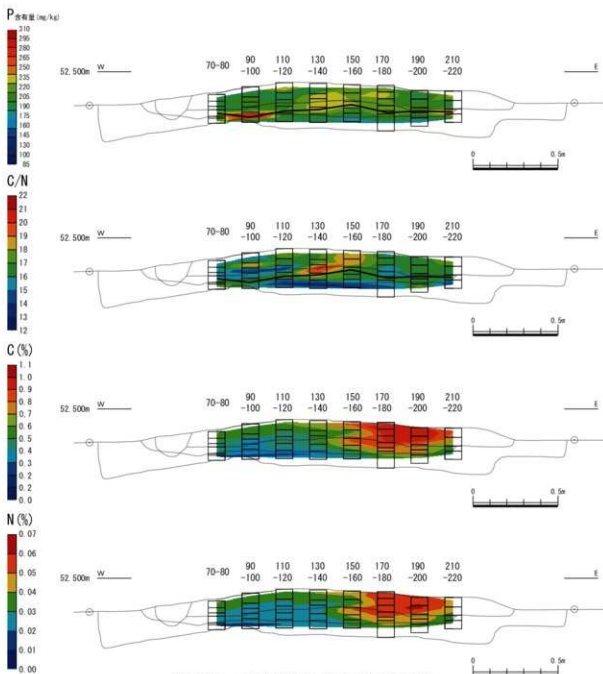
第 117 図 1 号墳第 1 主体部の P,C,N,C/N の分布

5) 乾燥試料に対する重量百分率で有機炭素濃度 (TOC) と全窒素濃度 (TN) を測定し、C/N 値を算出する。

(3) 粒度分析方法

粒度分析は、以下手順で行った。

- 1) 分析試料およそ 5g 程度を秤量後、十分な水を加える。
- 2) 分析試料秤量時に、含水率測定。
- 3) H_2O_2 をおよそ 3cc 加え、分散。一昼夜静止。



第118図 1号墳 第2主体部のP,C,N,C/Nの分布

- 4) 湿式篩により -1.5 ~ 2 φ (0.5 φ 間隔) でふるい分け。
- 5) 2 φ より細粒分を対象に、島津製作所製 SALD-2300 にて粒度分析実施。
- 6) 篩とレーザーのデータを統合し、(Folk & Ward 1957) に従い、統計処理

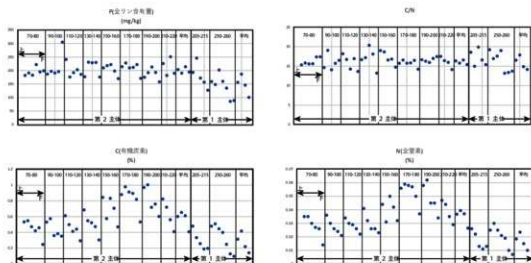
第4項 分析結果

(1) 全リン分析及び CN 分析結果

第117 ~ 119 図、第6表に分析結果を示す。それぞれの濃度分布の特徴は、以下のものであった。

1) P (全リン含有量)

- ① 第1主体部：1層中部にピークがあり、下方に漸減する。また、2、3層間で減少幅が大きい。



第119図 1号墳各地点でのP/C/N/C/Nの分布

② 第2主体部：4層（70-80地点試料№6）で最大値 305mg/kg を示した。ただし全8地点のうち、1～4層で4層が最大値を示すのは70-80地点のみである。その他の地点では土坑下部（2層）でピークを示す傾向が認められる。

2) C/N 値

- ① 第1主体部：第2主体部同様に、10未満の値を示す試料は存在しなかった。
- ② 第2主体部：ほとんどの試料が15～20の値を示し、ヒトを含む動物の指標となる10未満の値を示す試料は存在しなかった。一方で例外があるものの、下位ほど低い値を示す傾向にあった。

3) C（有機炭素濃度）

- ① 第1主体部：第2主体部に比べ濃度が低い。下方への減少傾向が顕著に認められる。
- ② 第2主体部：1、2層間で僅かに減少するが、2、4層間では減少幅が拡大する。また、150-160地点より東側で高率を示す。

4) N（全窒素濃度）

- ① 第1主体部：第2主体部に比べ濃度が低い。下方への減少傾向が認められる。
- ② 第2主体部：C同様に1、2層間で僅かに減少するが、2、4層間では減少幅が拡大する。また、150-160地点より東側で高率を示す。

（2）粒度分析結果

第120図に中央粒径の分布を、第121図に粒度分布特性、第122～125図に粒度累積曲線、第7表に粒度分析結果を示す。また、Folk & Ward (1957) に従い、それぞれの試料の粒度分布特性を、以下に示す。

1) 中央粒径（50%粒径）

- ① 第1主体部：第2主体部同様に、1、2層に比べ3層が細粒を示す。第2主体部西側に比べ、やや細粒である。
- ② 第2主体部：1、2層に比べ4層が細粒を示す。150-160地点より東側では、西側に比べ粗粒と

第6表 PCN測定結果

遺構名	地点	試料層	地層層	採取位置 (上面からcm)	P(全リン含有量) (mg/kg)	C/N	C(有機炭素) (%)	N(全窒素) (%)
第2主体	70-80	1	1	0-4	182	15.33	0.533	0.035
		2	1	4-7	191	15.81	0.548	0.035
		3	1	7-10	183	15.59	0.472	0.030
		4	2	10-13	222	15.61	0.420	0.027
		5	4	13-14	195	17.36	0.458	0.026
		6	4	14-19	199	17.40	0.247	0.014
	90-100	1	1	0-6	187	14.63	0.531	0.036
		2	1	6-9	197	19.05	0.534	0.030
		3	1	9-12	191	14.06	0.260	0.026
		4	2	12-15	196	15.73	0.383	0.024
		5	4	15-21	305	16.49	0.393	0.031
		6	4	21-23	195	18.63	0.473	0.026
	110-120	1	1	0-6	241	18.17	0.612	0.034
		2	1	6-10	176	16.71	0.498	0.030
		3	2	10-14	192	14.26	0.412	0.029
		4	2	14-18	203	16.92	0.441	0.026
		5	4	18-23	176	13.21	0.354	0.023
		6	4	23-25	171	16.68	0.685	0.041
	130-140	1	1	0-6	231	17.17	0.548	0.032
		2	1	6-9	229	20.34	0.522	0.026
		3	2	9-14	230	18.10	0.473	0.026
		4	2	14-18	176	13.21	0.354	0.023
		5	4	18-23	176	13.21	0.354	0.023
		6	4	23-25	171	16.68	0.685	0.041
	150-160	1	1	0-5	210	19.00	0.844	0.044
		2	1	5-10	218	18.65	0.575	0.031
		3	2	10-14	222	16.58	0.832	0.050
		4	2	14-17	198	16.81	0.706	0.042
		5	4	17-22	170	14.14	0.322	0.032
		6	4	22-24	214	15.14	0.680	0.056
	170-180	1	1	0-4	228	16.57	0.978	0.059
		2	1	4-8	210	15.75	0.912	0.058
		3	1	8-12	212	15.84	0.895	0.057
		4	2	12-15	222	16.48	0.819	0.050
		5	2	15-17	171	14.22	0.602	0.030
		6	4	17-27	175	16.65	0.870	0.058
	190-200	1	1	0-5	192	16.28	1.004	0.062
		2	1	5-10	213	15.94	0.718	0.045
		3	2	10-13	193	16.97	0.759	0.045
		4	2	13-16	158	17.46	0.602	0.034
		5	4	16-21	226	17.50	0.824	0.047
		6	4	21-23	182	16.41	0.720	0.044
	210-220	1	1	0-5.5	251	15.97	0.561	0.035
		2	1	5.5-10.5	190	14.12	0.602	0.034
		3	2	10.5-13.5	204	16.34	0.602	0.037
		4	4	13.5-18.5	191	15.79	0.653	0.039
		5	4	18-21	214	16.58	0.611	0.037
		6	4	21-23	194	15.40	0.496	0.028
第1主体	205-215	1	1	0-4	193	18.57	0.479	0.026
		2	1	4-8	246	14.95	0.334	0.022
		3	1	8-11	172	19.89	0.257	0.013
		4	2	11-16	157	16.58	0.602	0.037
		5	3	16-21	127	15.39	0.197	0.013
		6	4	21-23	159	19.21	0.479	0.025
	250-260	1	1	0-4	148	16.93	0.508	0.030
		2	1	4-6	202	17.58	0.445	0.025
		3	1	6-8	160	18.99	0.399	0.021
		4	1	8-12	135	13.18	0.249	0.019
		5	2	12-17	86	13.38	0.127	0.010
		6	3	17-22	89	13.70	0.097	0.007
	平均	全体			156	16.53	0.313	0.019
		1層			181	17.86	0.417	0.024
		2層			146	14.88	0.219	0.015
		3層			101	14.16	0.140	0.010

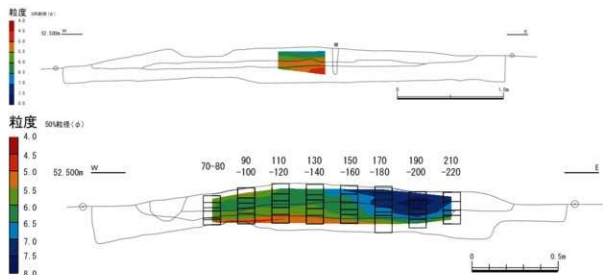
地層重複試料
305 : P, C, N 最高値, C/N 最低値
0.057 : C, N 最低値
246 : P, C, N 2層目最高値, C/N 2層目最低値

なる。

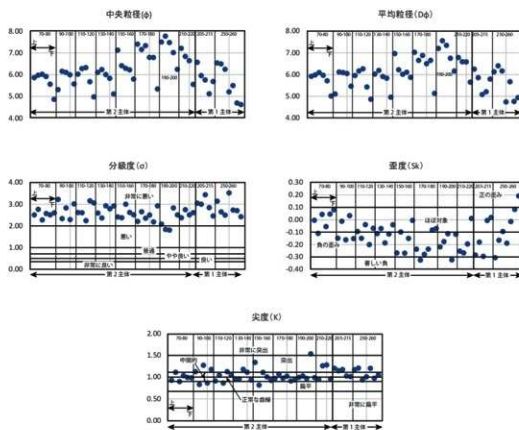
2) 平均粒径

① 第1主体部：中央粒径同様に、1、2層に比べ3層が細粒を示す。ただし、第2主体部西側と同程度の粒径を示す。

② 第2主体部：中央粒径同様に、1、2層に比べ4層が細粒を示し、150-160地点より東側では、西側に比べ粗粒となる。



第120図 粒度分析 (50%粒径分布) 結果 (上: 第1主体部 下: 第2主体部)



第121図 粒度分布特性

3) 分級度

- ① 第1主体部: 全ての試料が「非常に悪い」に分離される。
- ② 第2主体部: ほとんどの試料が「非常に悪い」に分類される。

4) 歪度

- ① 第1主体部: 205-215 地点では「負の歪み」～「ほぼ対象」に位置するが、250-260 地点ではプラス方向 (細粒方向) に移動し、3層下部は「正の歪み」に位置する。

第7表 粒度分析結果

通観区	地点	地層No.	埋土層No.	採取位置 上表から (cm)	単位(%)										平均粒径 (D ₅₀)	分級度 (σ)	塑性指数(%)	液性指数(%)
					15	10	5	2.5	1.25	0.625	0.315	0.15	0.075	0.0375				
70-80	1	1	1	0-4	8.81	9.05	8.43	7.73	8.34	8.57	5.28	4.10	3.41	2.86	1.82	2.51	0.00	0.93
	1	2	4-7	3.79	9.09	8.54	7.83	6.69	5.98	5.40	4.21	3.42	2.86	0.01	5.98	2.76	-0.11	1.11
	1	3	7-10	9.75	9.05	8.51	7.81	6.89	6.02	5.52	4.53	3.75	3.24	2.58	6.09	2.29	0.04	0.90
	1	4	10-13	6.45	8.98	7.73	6.87	5.91	5.17	4.24	3.31	2.51	2.01	1.51	5.91	2.76	-0.05	0.90
	4	5	13-14	5.77	8.91	8.28	7.39	6.16	5.57	4.98	3.93	3.31	2.83	1.39	5.71	2.51	0.09	0.99
	4	6	14-19	9.45	8.53	7.72	6.89	5.52	4.87	4.19	3.16	2.45	1.89	0.97	5.01	2.00	0.09	0.98
	4	7	19-24	9.71	9.84	8.16	7.21	5.91	5.32	4.44	3.26	2.51	2.01	1.51	5.11	2.72	-0.11	1.11
	1	2	9-12	9.78	9.10	8.58	7.91	6.85	6.18	5.56	4.37	3.60	3.09	2.58	6.12	2.34	-0.01	0.83
	1	3	12-15	9.72	9.06	8.54	7.87	6.78	6.11	5.55	4.48	3.62	3.00	-0.80	6.09	2.83	-0.18	1.27
	4	5	15-21	9.71	9.02	8.41	7.78	6.67	6.00	5.46	4.39	3.65	3.14	2.54	6.05	2.76	0.01	0.87
110-120	4	5	15-21	9.55	8.85	8.25	7.42	6.22	5.58	4.94	3.76	3.57	3.00	-0.97	5.47	2.61	-0.15	1.18
	1	1	0-4	9.71	9.05	8.53	7.86	6.77	6.02	5.34	3.99	3.30	2.75	1.70	5.95	2.61	-0.09	0.91
	1	2	6-10	9.73	9.11	8.61	7.98	6.96	6.28	5.68	4.47	3.61	2.97	0.78	6.17	2.81	-0.15	1.04
	2	3	10-14	9.68	9.09	8.61	7.99	6.89	6.23	5.72	4.68	3.86	3.34	2.72	6.26	2.24	-0.04	0.86
	2	4	14-18	9.59	8.91	8.34	7.57	6.35	5.68	5.02	3.63	2.96	-0.61	-1.22	5.43	2.18	-0.20	1.13
	4	5	18-23	9.50	8.89	7.99	6.99	5.70	4.98	4.24	3.14	1.86	1.09	-0.39	4.86	2.06	-0.07	1.05
	4	5	18-23	9.69	9.05	8.54	7.88	6.81	6.11	5.48	4.18	3.42	2.84	1.05	6.02	2.58	-0.11	0.96
	1	2	6-9	9.68	9.05	8.55	7.81	6.80	6.24	5.64	4.59	3.76	3.20	1.95	6.19	2.37	-0.07	0.96
	2	3	9-14	9.66	9.00	8.47	7.79	6.71	6.01	5.38	4.06	3.25	1.93	-1.03	5.91	2.79	-0.19	1.18
	4	5	14-18	9.67	8.96	8.40	7.66	6.51	5.84	5.23	4.02	3.25	2.02	-0.22	5.93	2.73	-0.19	1.11
150-160	4	5	18-23	9.50	8.73	8.04	7.14	5.92	5.13	4.27	3.67	3.11	1.09	0.69	4.99	2.51	-0.04	0.93
	1	1	0-5	9.87	9.34	8.90	8.41	7.83	7.13	6.58	5.57	4.86	3.95	0.81	6.97	2.41	-0.27	1.34
	2	3	5-10	9.75	9.15	8.67	8.07	7.10	6.41	5.73	4.41	3.58	2.96	2.48	6.22	2.37	-0.10	0.82
	2	3	10-14	9.63	9.07	8.60	8.00	7.03	6.30	5.55	4.02	3.13	0.84	-1.12	6.01	3.00	-0.27	1.11
	4	5	14-17	9.67	9.06	8.57	7.84	6.93	6.22	5.55	4.29	3.52	2.89	0.71	6.11	2.62	-0.15	1.01
	4	5	17-22	9.72	9.09	8.43	7.89	6.92	6.06	5.13	4.03	3.29	2.84	1.46	5.87	2.21	-0.01	0.93
	1	1	0-4	10.15	9.55	9.11	8.63	7.91	7.41	6.84	5.65	4.55	3.74	2.12	7.02	2.21	-0.24	0.97
	2	4	4-8	10.08	9.44	8.98	8.49	7.71	7.16	6.49	5.05	3.80	3.16	1.11	6.85	2.85	-0.32	1.07
	2	4	12-15	10.11	9.50	9.06	8.58	7.89	7.34	6.74	5.40	4.23	3.47	2.54	6.88	2.36	-0.78	0.96
	2	4	12-15	9.81	9.25	8.80	8.25	7.40	6.80	6.10	4.87	3.90	3.27	1.38	6.50	2.50	-0.24	1.02
	2	5	15-17	10.04	9.34	8.84	8.30	7.38	6.80	6.14	5.13	4.32	3.74	3.07	6.85	2.18	-0.08	0.91
170-180	1	1	0-5	10.00	9.33	8.13	7.14	6.04	5.29	4.60	3.46	1.33	0.73	1.14	7.00	2.07	-0.07	0.93
	1	1	5-10	11.18	9.59	9.15	8.67	7.98	7.51	6.98	5.86	4.95	4.11	3.34	7.20	2.09	-0.22	0.99
	2	3	9-10	10.27	9.74	9.29	8.82	8.19	7.77	7.32	6.40	5.60	4.86	4.22	7.56	1.94	-0.18	1.02
	2	3	10-13	10.12	9.51	9.09	8.62	7.94	7.48	7.01	6.09	5.47	4.90	4.18	7.35	1.81	-0.11	0.97
	4	5	13-16	9.99	9.37	8.90	8.37	7.66	7.02	6.42	5.40	4.53	2.72	-1.14	6.75	2.62	-0.32	1.04
	4	5	16-21	9.91	9.38	8.91	8.34	7.63	6.93	6.41	4.45	3.65	3.04	1.28	6.16	2.11	-0.12	0.99
	1	1	0-5	10.09	9.47	9.02	8.52	7.76	7.21	6.57	5.23	4.12	3.40	2.50	6.78	2.37	-0.25	0.95
	2	3	5-10	10.02	9.36	8.87	8.31	7.44	6.84	6.15	5.00	4.05	3.32	0.16	5.99	2.75	-0.27	1.26
	2	3	10-13	9.76	9.17	8.71	8.14	7.34	6.65	6.02	5.13	4.39	4.00	3.39	6.56	2.51	-0.19	1.26
	4	4	13-15	9.72	9.02	8.31	7.49	6.34	5.58	4.89	3.81	3.09	1.82	1.10	5.65	2.81	0.01	0.96
190-200	1	1	0-4	9.98	9.30	8.80	8.21	7.25	6.57	5.83	4.41	3.37	1.82	-1.10	6.25	2.54	-0.28	1.20
	2	3	4-8	9.72	9.05	8.53	7.83	6.89	5.96	5.33	3.97	3.08	1.22	-1.08	5.96	3.00	-0.18	1.15
	2	3	8-11	9.54	8.89	8.33	7.57	6.42	5.76	5.15	3.79	1.14	-1.09	-1.29	5.08	2.44	-0.29	1.17
	4	4	11-16	9.65	8.77	8.00	7.05	5.79	5.13	4.37	3.22	2.47	1.39	0.07	5.1	2.01	-0.01	0.93
	4	5	16-21	9.67	8.89	8.23	7.45	6.20	5.59	5.18	4.12	3.42	2.82	1.47	5.79	2.46	0.02	1.01
	1	1	0-4	9.87	9.30	8.79	8.19	7.23	6.55	5.78	4.25	3.04	-1.24	-1.27	6.12	3.14	-0.31	1.17
	2	3	4-8	9.98	9.28	8.71	8.13	7.15	6.50	5.86	4.90	3.95	3.24	0.47	6.40	2.44	-0.18	1.21
	2	4	8-12	9.68	8.87	8.22	7.30	5.95	5.21	4.24	2.84	0.79	-1.09	-1.30	4.74	3.52	-0.19	1.01
	2	5	12-15	9.78	8.89	8.22	7.34	6.09	5.36	4.64	3.97	3.29	2.84	-0.80	5.79	2.73	-0.08	0.90
	3	6	17-22	9.52	8.49	7.63	6.57	5.35	4.70	4.08	3.00	1.94	1.58	1.08	4.76	2.70	0.08	0.87
	3	7	22-17	9.46	8.40	7.48	6.41	5.22	4.63	4.08	3.22	2.71	2.19	1.33	4.84	2.43	0.19	1.05

② 第2主体部：西から東に向かい、マイナス方向（粗粒方向）に移動する傾向にあり、「ほぼ対象」から「負の歪み」、「著しい負の（歪み）」に移動する。

5) 尖度

① 第1主体部：「中間的」と「突出」が半々を示す。

② 第2主体部：ほとんどの試料が「中間的」に位置し、僅かに「扁平」、「突出」に位置する試料がある。190-200 地点試料No.4は唯一「非常に突出」に位置する。

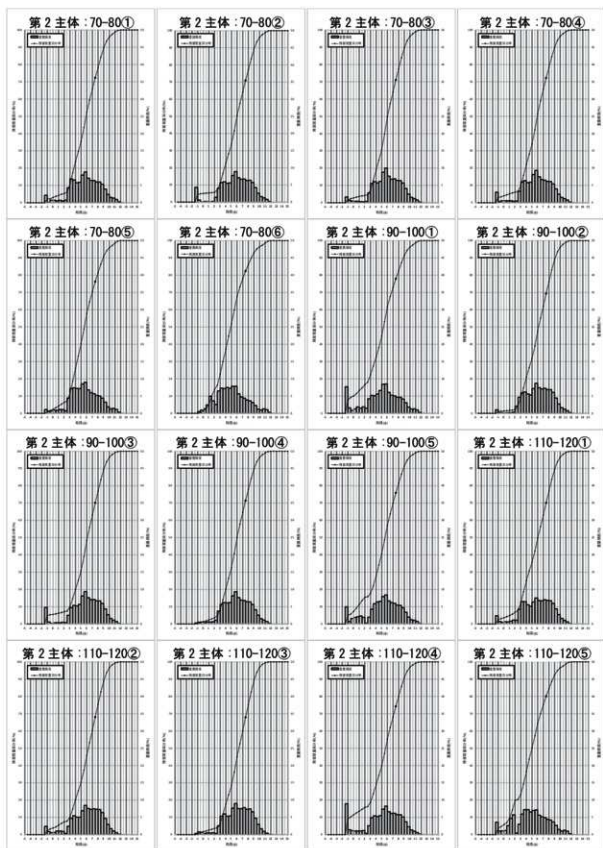
第5項 遺骸痕跡残存の可能性について

(1) 遺骸の示す一般的特徴

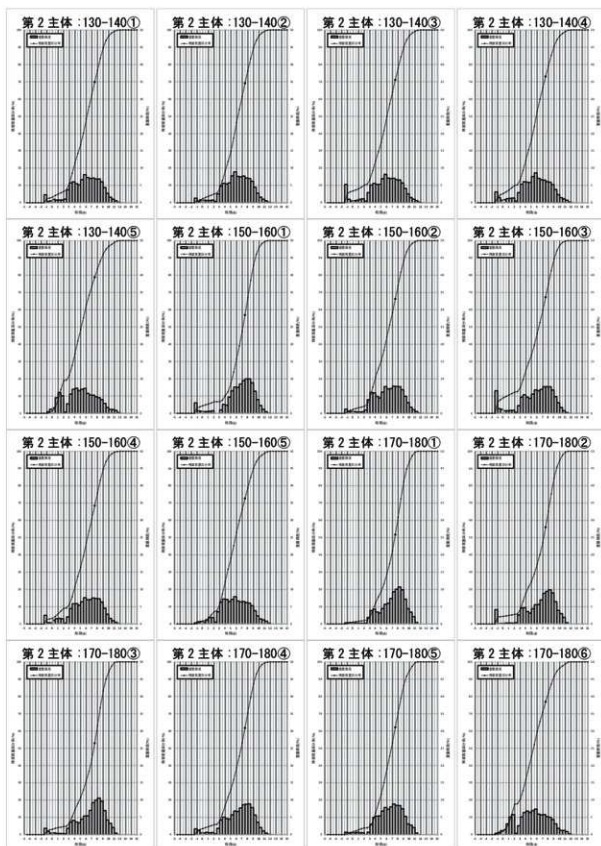
ヒト（あるいは動物全体）を形作る元素の特徴として、他の生物に比べリンの濃度が高く、炭素と窒素の比が1桁を示すことが知られている（第5表）。このことを単純化して、埋葬施設（土坑墓など）が均質な堆積物で埋まったと仮定すると、ヒト（遺骸）が横たわっていた痕跡（遺骸痕跡）として、埋葬施設底部では上位に比べリン濃度が高く、炭素と窒素の比が低いと想定される。実際には、埋葬施設を埋める堆積物の特徴（有機物が含まれる程度など）や木棺の有無、後発的な要因（植物の地下茎による汚染など）によって、リン濃度の相対的高低やC/Nが10以上を示すこともある（渡辺2017など）。

(2) 遺骸痕跡残存の可能性

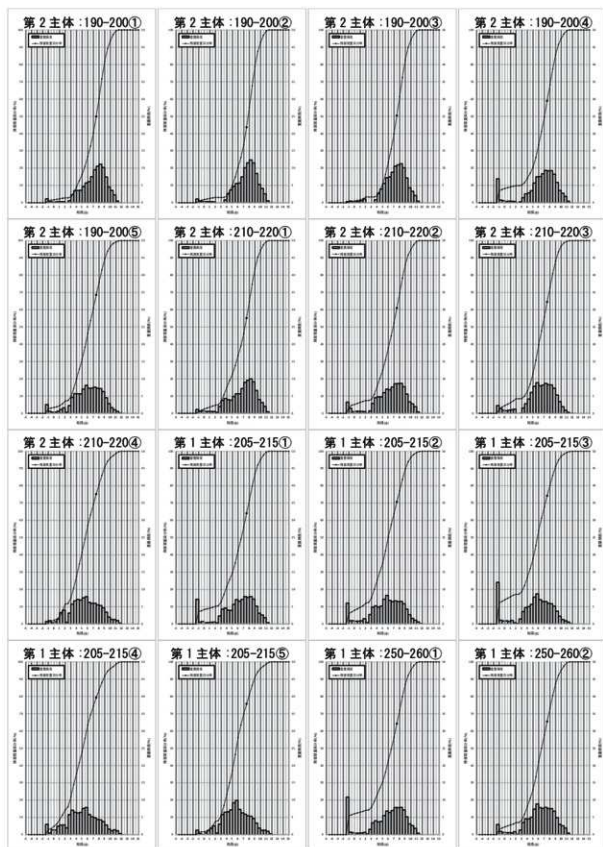
試料採取時に、第1主体部、第2主体部ともに1層は無数の小ブロックに分かれ、かつ小ブロッ



第122図 粒度分析結果(粒度累積曲線1)

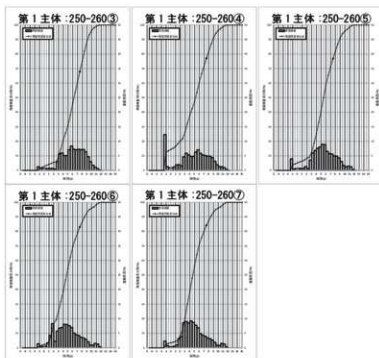


第123図 粒度分析結果(粒度累積曲線2)



第124図 粒度分析結果(粒度累積曲線3)

クの発達は下位に向かって弱くなることが観察できた(第122～125図)。これらの小ブロック間のチャンネルに沿って根が伸びており、表土から伸びたチャンネルに根が入り込み、ブロック化が促進されたものと推定できる(あるいは根が伸びたことにより、チャンネルが生じた可能性もある)。さらに、小ブロックの発達が弱くなる下方に向かってC、Nも低率になる(第119図参照)。このことから、含まれるC、Nのほとんどが「根」により付加(検出されたC、Nの起源が「根」そのものである可能性のほか、「根」あるいは



第125図 粒度分析結果(粒度累積曲線4)

チャンネルに沿って表層から浸透した可能性もある)されたことが明らかである。また、第2主体部では2層(あるいは1層下部～2層)でC、Nが小ピークを成す地点があるが、発掘調査によって推定された「木棺」によって付加された可能性が指摘できる。

第1主体部では、分析地点が少ないものの1層中位でPの高い試料が水平に並び、第2主体部同様に遺骸痕跡の可能性が示唆される。ただし、想定される埋葬面より上位に位置することと分析地点が少ないことから、他の要因による可能性も考えられる。

第2主体部においてPにはC、Nで認められた、小ブロック化の度合いに応じた下方への減少が認められなかった。一方第118図、第6表に示したように、土坑下部の2層(あるいは1層下部～4層)では、Pがピークを成す傾向にあり、断続的ではあるがほぼ水平に連続している。本来小ブロック化に応じた下方への減少が認められるはずであるが、植物に含まれるリンは、炭素、窒素に比べ遥かに少量で、2層(あるいは1層下部～4層)で付加されたPが、Pの深度方向への減少をリセットしているものと考えられる。また、Pの付加は2層(あるいは1層下部～4層)でほぼ水平に認められ、遺骸痕跡に由来する可能性が示唆される。

一方C/Nは、Pが高い値を示す試料で必ずしも低い訳ではない。特に第2主体部4層では、P、C/Nが共に高い試料や、P、C/Nが共に低い試料も存在した。P、C/Nが共に高い場合は、「木棺」の影響(渡辺2017)のほか、ランダムに入り込む「根」の影響が指摘できる。また、P、C/Nが共に低い試料ではC、Nの濃度も低く、C/Nが低いとされる土壌バクテリアの影響を考慮する必要がある。このことは、今後の課題として残る。

前述のように第1主体部、第2主体部ともに水平的方向へのPの広がりが認められ、遺骸痕跡を示すと考えた。同様の現象が起こりうるケースを考えると、不透水層(細粒堆積層)存在による、P、C、

Nの下方への浸透阻害に伴う滞留がある。前述のように第1主体部では、予想外の第1層中位で高濃度でのPの水平分布が認められた。しかし、今回の粒度分析結果では同層準直下での細粒堆積層は確認されていない。また、第2主体部でも同様である。

第6項 まとめ

結本谷古墳群 結本谷1号墳 第1、2主体部埋土を対象としたPCN分析、粒度分析の結果、以下の事柄が明らかになった。

- (1) 第1主体部、第2主体部ともに水平方向へのPの広がりが認められた。一方で、これらの試料でC/Nは14～17程度と高かった。
- (2) 粒度分析の結果、P、C、Nが滞留するような細粒堆積層は確認できなかった。
- (3) C/NはPに対してランダムに変化した。また、ほとんどの試料が15～20の値を示し、ヒトを含む動物の指標となる10未満の値を示す試料は存在しなかった。
- (4) C/Nの高い値は、「木棺」やランダムに入り込む「根」の影響と考え、水平方向へのPの広がりが遺骸痕跡を示唆すると考えた。
- (5) 地山とされた第1主体部3層、第2主体部4層ではP、C/Nが共に低い値を示す傾向があった。C/Nが低いとされる土壌バクテリアの影響が示唆され、評価について今後の課題として残る。

(渡邊 正巳・瀬戸 浩二)

謝辞

本研究を行うに当たり、出雲市文化財課 石原 聡氏、下江裕貴氏には、試料の御提供及び研究結果公表の機会を頂いた。紙面をお借りして、御礼申し上げます。

【引用文献】

- 日本薬学会編 2010「12」総リン(1)『モリブデン酸による定量、衛生試験法・註解 2010』947-948 頁
- 土壤環境分析法編集委員会編 1997「28 全量分析分解方法 B フッ化水素酸分解法」『土壤環境分析法』171-174 頁
- Folk, R.L. and Ward, W. (1957) Brazons rier bar; a study in the significance of grain size parameters. J. Sed. Petrol., 27, 3-26.
- 渡辺正巳 2012「中村1号墳の前室石棺内埋土のリン濃度分布」『中村1号墳 本文編(第1分冊) 出雲市の文化財報告 15 出雲市教育委員会 177-182 頁。
- 渡辺正巳 2017「古屋敷遺跡で検出された「土坑墓(SK01)」の自然科学的検証」『古屋敷遺跡(D区)一般国道9号(静岡・摩多路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2 国土交通省中国地方整備局松江国道事務所・島根県教育委員会 132-137 頁

第7章 総括

第1節 文字資料からみた出雲国出雲郡健部郷について

結西谷IV遺跡・結本谷古墳群は奈良時代においては、出雲国出雲郡健部郷の西部ないし柴(漆)治郷の東部に含まれていたと考えられる。一番近い古代郷里の遺称地名は羽根であり、後述する健部郷波如里に相当すると考えられる。遺跡でも2区・3区で大谷4期から国府6型式(3区)までの遺物遺構が確認され、特に国府2型式に一つのピークが認められる。該当する時期は暦年代では8世紀前半～中葉に当たり、これは天平5(733)年成立の『出雲国風土記』(以下『風土記』)、同11(739)年の『出雲国大税賑給歴名帳』(出雲郡部分のみ『大日本古文書編年文書』2巻201～224、以下『歴名帳』)(註1)を前後する時期に当る。以下これら文献資料にみえる健部郷を中心に検討してみたい(註2)。

まず、健部郷についての『風土記』の該当部分は以下の通りである。なお、『風土記』テキストは鳥根県古代文化センター2023によるが、以下同所の採用する本文に校訂を加えた(冒頭のアラビア数字は底本となった細川家本の行数)。519行目の^①至は写本(細川家本)では「主」であるが、「社主」はやや不審で、主と至は字形が類似することから、本来「至_レ今」であったと考えられる(従来の校訂も「至今」とするものが多い)。

史料1 『出雲国風土記』出雲郡健部郷

517 健部郷。郡家正東一十二里二百廿四步。先所_ニ以号_ニ宇

518 夜里_一者、宇夜都弁命、其山峯天降坐之。即、彼神

519 之社、^①至_レ今猶坐此處。故、云_ニ宇夜里_一。而後、改所_ニ以号_ニ

520 健部_一之、嚮向檜代宮御宇 天皇勅、不_レ忘_ニ朕御

521 子倭健命之御名_一、健部定給。余時、神門臣古

522 弥、健部定給。即、健部臣等、自_レ古至_レ今、猶居_ニ此

523 巡處_一。故、云_ニ健部_一。

当条から、伝承について、次のように整理できる。①健部郷はかつて宇夜里と呼ばれていた、②宇夜都弁命が天降しその神の社があったので宇夜里と呼んだ。③後に健部と改めたのは、景行天皇の時に御子倭健命の御名を忘れぬよう、健部を定めた。④そのとき、神門臣古弥を健部に定めた(部を定めるのは一般に天皇であることから、古弥を目的語と解するが、「古弥が」と主語で読むことも不可能ではない)。⑤今に至るまで健部が住んでいるので健部という、というものである。この郷の説明は『風土記』中で唯一郷名を改めたことを記しており、事実上①②の宇夜里の里名起源伝承と、③～⑤の健部郷の郷名起源伝承が重複して書かれている。このことに注目した伊藤剣氏はいわゆる『風土記』再撰説を継承して、①②について、明確に地名起源を説明しており里制段階(霊亀3(717)年以前)に筆録されたとみられることから、現伝の天平5年の『風土記』に先行する和銅期に編纂された第一次『出雲(国風土記)』の記述と想定している(伊藤2023)。また、③④の郷名健部郷の起源説話は、現伝『風土記』

の記述が養老4(720)年完成の『日本書紀』の武部設置(同景行40年は歳条)の影響を受け採用されたものと理解する。ここでは、『風土記』再撰については検討をくわえないが、①②が里制下の里名字夜里を説明したものであること、③以降が、『日本書紀』の武部(健部)理解を踏まえている点は認めて良い。

『風土記』ではサト名の改訂はこの一か所しか確認されていないが、『風土記』以前の都城出土の荷札木簡ほかには『風土記』にはみえないサト名が知られている。なお、『風土記』の郷名はほぼすべて神亀4(724)年の編戸による旧名の取り扱いについて触れているので(触れていないのは意宇部・島根郡の駅・神戸の一部のみ)、それ以前の養老5(721)年籍作成段階、すなわち養老5年にはすでに『風土記』のサト名とほぼ同様のサトが存在していたとみられる。

都城出土の荷札木簡にみえる『風土記』非掲載サト名は以下の通りである(註3)。

史料2 藤原宮出土木簡(『藤原宮』1-156)

出雲国嶋根郡副良里伊加大費廿斤 186×18×4 033

史料3 藤原宮出土木簡(『藤原宮』3-1175)

橋縫評乃呂志里物部知米為 [] (166)×24×2 039

史料4 藤原宮出土木簡(『奈良県藤原概報』40)

^[神門]
□□評阿尼里知奴大費 222×25×7 031

史料5 藤原宮出土木簡(『飛鳥・藤原概報』9-8下)

加夜里委文連 [] 157×17×6 031

史料6 藤原宮出土木簡(『飛鳥・藤原概報』19-30頁上)

癸卯…月一日記出雲国…室原□ 091

史料3・4が評制下、史料2は郡里制下のもので、史料5も出土遺構(藤原宮58次調査SD105)からは郡里制・大宝2(702)年の木簡が出土していることから、郡里制下の史料とみられる。史料6の「癸卯」を歳次とみると大宝3(703)年となり、すでに元号が使用されている年代であるが、干支が残った事例となる。史料2の副良は『風土記』にはみえないが、現在松江市美保関町に福浦として海浜集落が存在している(註4)。同3の乃呂志里は『風土記』橋縫郡の能呂志浜(495)、同4の阿尼里は『風土記』では神門郡の官社に阿如社(686)がみえ、「歴名帳」の神門郡滑狭郷阿祢里にあたる。史料5は同じ「歴名帳」神門郡朝山郷加夜里の可能性もあるが、筑前国志麻郡加夜郷(『倭名類聚抄』、以下『倭名抄』)の事例があり、他にも備中国賀夜郡内の郷などの可能性もある。史料6は荷札木簡ではないが出雲国の事例で、最後の「□」は確定していないが写真を見ると「田」の字状の残画が確認で

き、「里」の可能性もある。仁多郡の室原山(836・855)・室原川(853)に関連する地名であるが、室原山を水源とする川が横田川(854)と呼ばれ、この横田は『風土記』のサト名でもある。

これらの事例は、何れも『風土記』にはみえないサト名であるが、史料4にみえる旧サト名の阿弥地域は『風土記』の滑狹郷に編入改名されたとみられる。この例のように『風土記』にみえないサトは神亀4年籍より以前に消滅(郷の数が減った)したと考えるより、郷名が改変された、また郷の範囲が変更され、名称が変更された等と考えるべきであろう。このようにみると、史料1の宇夜里も上記木簡と同様の事例といえることができる。

また、上記の例とは反対の『風土記』以前の出雲国の荷札木簡で『風土記』のサト名と一致する事例は2例(出雲評支豆里、藤原宮木簡 1-157・大原郡矢代里、同里の木簡が2点ある。『平城概報』22-20上)しか確認できていない。全体で数例の事例であるが、一致しない事例が一致する事例より多いことは注目すべきであろう。これとは対称的に、先に述べたように、養老5年籍以降『風土記』までほぼサトの改廃は想定されず、また『風土記』以後の郷名については『倭名抄』で確認できるが、両者の間で郷名が欠落した事例は一例もなく(註5)、郷の増加は認められるが既存の郷名を変更することなく増加している。以上のことから、出雲国にあっては7世紀後半の評一五十戸制以降(註6)、養老5(721)年以前に相当程度サト名が改変され、その後改変はないと想定できる。サト名の改変は編戸に関わるので、これは8世紀初頭(須恵器でいうところの出雲国府第2型式)の集落動向を考えるうえで留意すべき特色といえることができる(註7)。

次に、この地域に関しては弘仁6(815)年に編纂された『新撰姓氏録』の右京神別上鳥取連条にも登場する。

史料7『新撰姓氏録』右京神別上鳥取連条

鳥取連 角凝魂命三世孫天湯河桁命之後也。垂仁天皇皇子警津別命。年向三十三不_レ言語_二于_一、時見_二飛鶴_一問曰。此何物。愛天皇悅之。遣_二天湯河桁_一尋求。詣_二出雲國宇夜江_一捕貢_レ之。天皇大嘉。賜_二姓鳥取連_一。

ここにみえる伝承は『古事記』『日本書紀』(以下『記』『紀』)でホムチワケ(ホムツワケ)伝承としてみえるもので、垂仁天皇の皇子本年智和氣王(『記』)・警津別王(『紀』)は言葉を発しなかったが、空を飛ぶ鶴(白鳥)をみて(『紀』垂仁天皇23年9月丁卯条)、あるいは出雲大神宮を拝礼して(『紀』垂仁天皇段)初めて言葉を発し、そのことに由来して鳥取部・品治部が設置されたというものである。なお、『紀』の記述では鶴は出雲で捕らえられたとされるに留まるが、史料7ではもっと具体的に宇夜江で捕らえられたと記している。この宇夜(江)は史料1にみえる宇夜(里)と同一で、現在の出雲市斐川町宇屋谷にあたとみてよい。史料7は、中央伴造の鳥取連氏(本拠地は大阪府柏原市高井田の天湯川田神社付近)の氏族起源伝承上、出雲国、なかでも宇夜里が重要な位置を占めたという認識を示している。ただし、中央伴造氏族の認識とは異なり、『風土記』には鳥取部・品治部関連の伝承はみえず、宇夜里の由来にみえる宇夜都弁命も加藤義成氏は地名に主格を示す「ツ」と比竇に由来する「へ」からなり、宇夜の女神と解する(加藤1981)。

さて、『風土記』編纂の6年後の史料である「歴名帳」は、本来、同年に行われた賑給(社会的弱者

への稲穀の支給)の対象者の名簿(歴名)で、現在出雲郡・神門郡の一部のみが残る。賑給の対象者、「高年以下自存不能以上」(高年・鰥寡孤独・自存不能)といった高齢者ならびに社会的弱者のみを抽出した歴名であり、その点は留意しなければならないが、健部郷について、同郷を構成する3里のうち、名を欠く某里と波如里(出雲市斐川町三絡羽根が遺称地)2里で合計28戸の戸主が判明しており、郷全体の氏族構成などは概要をつかむことができる。そこにみえる氏族構成は第8表のとおりである。

まず両里とも郷名起源伝承に示されているとおりに健部臣・健部首・健部が最も多く、合計36名がみえ、すでに石母田正氏によって指摘があるように知られている人名の半分ほどとなる(石母田1989)。石母田氏は姓にばらつきがない郷について、流動性の少ない後進的な郷とみている(註8)。一方、当郷の前身である宇夜里に関連するとみられる、鳥取部・品治部について、前者は若干(4名)みられるものの、後者は全くみられない。先に『風土記』には鳥取部に関わる伝承がないと述べたが、氏族分布からも関連は薄い。第8表には「歴名帳」にみえる出雲郡神戸郷(2里からなる)のうちの某里、神門郡神戸里の氏族構成も載せたが、むしろ出雲郡では鳥取部は神戸郷に多くみとめられる。これも別稿で論じたが(平石2024)、同郷で最も多いのは神社に附属する下級部民の神奴部であり、鳥

第8表 健部郷の氏族構成(左)・出雲神戸の氏族構成(右)

氏族名	某里		波如里	
	戸主	戸口	戸主	戸口
健部臣	7	8	6	6
健部首	1	1		
健部	2	1	1	3
鳥取部首	1	1		
鳥取部		1		1
間人臣			1	2
日置君		1		
日置部		2	1	4
柒治印伎				2
印伎部			1	1
語君			1	
語部君			1	
語部			1	1
掃守首			1	2
物部			1	8
弓削部		1	2	1
丈部				2
財部				2
勝部		1		
三上部		1		
日下部				1
山部				1
坂部				1
林臣		1		
民臣		2		
出雲積				2
吉備部		1		
合計	11	21	17	40

氏族名	出雲郡	神門郡
	神戸郷 某里	神戸里
鳥取部造		1
神奴部	12(5)	4(2)
鳥取部	10(2)	1
若俣部	5(2)	3
海部	5(2)	
額田部	2(1)	
建部	2	
大伴部	2	
津島部	1	
日置部		4(1)
出雲積		1(1)
三上部		1
語部		1
刑部		1
凡治部		1
若桜部		1

※()内は戸主

取部と併せ一体的に「伊弉奈枳乃麻奈子坐熊野加武呂乃命（熊野大社祭神）、与五百津鉏々猶所取々而所造天下大穴持命（杵築大社祭神）、二所大神等依奉」（カッコ内筆者、意字133）とされる出雲郡出雲神戸の前身を構成しており、その集団がのちに令制の神戸に設定されたのであろう。出雲郡の鳥取部は、鳥を捕らえるという役割だけでなく、杵築大社の前身である出雲大宮宮との関連が強い部民と評価できそうである。ただし、神門郡神戸里には鳥取部はみえず、出雲神戸の構成員として鳥取部が含まれるのは出雲郡に限定されることがうかがえる。

では、当郷の健部の存在はどのように考えるべきであろうか。『風土記』の説明では、纏向檜代宮御宇天皇（景行）が倭健命の名を残すために設定されたとされるが、部の設定は476年に比定される埼玉稲荷山古墳出土辛亥銘鉄剣段階にはみられず（この段階は人制）、後の名代・子代に先行する大王・皇子に設定される宮号舎人の事例が雄略～安閑、早くみて5世紀の後半から6世紀とみられるので（仁藤2012）、伝承そのままはあり得ず、伊藤氏の述べるように『紀』の記述に沿った説明でしかない。ただし、下記に示すように『紀』完成以前の段階ですでに「建王部」は存在しており、ヤマトタケルの系譜的位置づけがなされる以前からその名を有する王権と地域社会の奉仕貢納関係が存在した。

史料8 石神遺跡出土木簡（『飛鳥・藤原概報』20 31頁下段）

・戊寅^(9a)□八^(11a)□〔

・建王ア止己

(62)-22-2 081

史料8は全体形状が不明ながら、貢進物付札、いわゆる荷札木簡と想定され（進上元は不明）、いずれかの地域に建王部が設定されていたことが分かる。「戊寅年」は天武7（678）年であるので、当然『記』『紀』の完成前である（註9）。したがって、全住民に対する定姓が庚寅年籍（690）ないし大宝2年戸籍（702）であるにせよ、建王部（健部）集団は7世紀後半段階から存在したとみてよい。

部民建部（武部・健部）の実態についての現在の通説は、宮城十二門に建部門（侍賢門）がみえることから、門を守衛する門部（職業部民）であったとするものである（佐伯1982）。ただし、7世紀木簡にみえる表記は「建王部」であって、たとえ職業部として先行して成立していたとしても、この段階での王族との関係は否定しがたく（註10）、以下、王族所有民（いわゆる名代・子代）としての健部の可能性について検討する。

第一の案は、ワカタケル（雄略）の部民と想定する案である。仮に雄略の王族所有民とした場合、7世紀に実例の確認できる、最古の起源を持つ事例となる。雄略の資養民については『記』雄略記に宮号であるオオハツセを採る長谷部舎人、白髪部（雄略皇子清寧の名代）を設定したと記載されており、この長谷部も石神遺跡出土木簡に「長浴部」「長浴部直」（『飛鳥・藤原概報』18～20頁下段・24頁上段）、白髪部も「白髪ア五十戸」（『評記荷札』215）とみえ、7世紀後半に実在し、この伝承が事実である可能性もある。一人の王族所有民として複数の部が設定されても問題はないが（部民制では類似した部民の重複がよくみられる）、建王部・長浴部の同時併存が気に掛かる点ではある。

第二の案は中大兄皇子（のちの天智天皇）の子で、齊明天皇の孫にあたる健王に関連する部民とみる

説である。この王は天智即位以前の斉明4(658)年5月に8歳にて没している(『紀』同年同月条)。『紀』天智天皇7(668)年2月戊寅条の天智の後妃・皇子の記載では「哑不能語」とされており、没年の翌年、斉明5(659)年に出雲国造に命じて「嚴神之宮」を修造させたこと自体、ホムチワケ伝承にならった行為、ないし、建王の事例から遡ってホムチワケ伝承が形成されたと解釈されている。

私見では、ホムチワケ伝承は部民設定という観点でみると鳥取部(養鳥人)という人制に遡りうる伝承の一つであり(平石2015)、5世紀～6世紀前半段階に想定可能で、『記』『紀』の言葉の話をしない皇子の説話とは別に杵築大社の前身である出雲大神宮に対する、鳥を飼う奉仕集団(養鳥人・鳥取部)はすでに存在したと考える。

ただし、この郷が元はホムチワケ伝承に見える鳥取部の奉事根源に登場する字夜里であることも偶然の一致とは思われないものがある。あくまで可能性だが、言葉の話をしない健王に対して、斉明朝に出雲大神宮のある出雲郡の、それもホムチワケ伝承を自認していた鳥取部集団(『風土記』では出雲神戸郷に居住、また字夜江の近くでもある)の近くに、A 神門臣の一部を大神宮に奉仕させる健部として設定した、B すでに存在していた職業部の健部を大神宮に奉仕させた(健部自体は全国的に分布している)、C 健王の死後、斉明5(659)年の「嚴神之宮」修造にあたり、ホムチワケ伝承の鳥取部・品治部にならい、健王にちなんで健部として出雲大神宮に奉斎する集団を設定した、等の可能性である。

ただし、健王の生年(650年)・没年(658)は大化改新以後であり、王族の部民領有の事例としてはさすがに遅い。また、健王のような幼年の王族に対して部が設定されたかどうかについても検討が必要であるなど、問題点も多い。現状ではどちらも決しがたく、雄略が倭王権における王族の機能分掌として健部を管轄していたことからワカタケルの王名が生じ、これを機に王族所有民化した建王部が、後に中大兄皇子の子を飼養、王子が健王と名付けられた等も想定する必要がある。

最後に、『風土記』の伝承④(125頁)は、神門臣が何らかの形で建部設定、ないし管理に携わったとするもので、地方の部民設定にあたり、その部とは本来部民制的な関係のない地域有力首長が関与したことを明記した事例として貴重なものである。ここにみえる「神門臣古弥」については、これを「古弥」と判読ないし校訂し、『紀』崇神天皇60年7月癸酉条のいわゆる神宝檢校伝承にみえる「出雲臣之遠祖出雲振根」と同一人物とみる見方がある(高嶋1995)。まずこの文字であるが、現存写本中で原本に近いとされる細川家本・倉野本・蓬左文庫本の該当部分はいずれも「弥」と読むべきと考えるが、偏が「示」の崩しである可能性も否定できない(仮にこれを字体Aとする)。出雲郡にはミダミ社が多数見えるが、この表記の一つである「弥随弥」「弥太弥」にみえる「弥」はすべてこの字体Aを用いている。ただし、「倭名抄」との比較から本来「弥」が書かれていたとみられる飯石郡741・755の多弥郷でも字体Aが用いられている。現状では「弥」「弥」はいずれも伝写の過程で字体Aに変化したとみられ、ここから当初の文字を推測するのは難しい。

次に『紀』との整合性については、仮説の仮説になるので確証的なことはいえないが、伊藤氏の述べるように現伝風土記にみえる記述は『紀』の影響を受けて再編纂されたと考える場合、それにあたり「出雲臣遠祖」を「神門臣」とする態度は、全体の中でかなり特異なものとして考えることができる。現在のところ、仮にこの人物が本来「神門臣古弥」と書かれていたとしても、『紀』の神宝檢校伝承の「振

根」とは別に考えるべきではないかと思われるが、別な解釈も成り立ちうる。

以上まとまりのない検討となってしまったが、『風土記』健部郷の伝承③④(125頁)とは、7世紀に実在した建王部の集団を、倭王権からの指示により、神門臣が関与して健王や杵築大社と関連づけたことの反映である可能性がある。このことは遺跡の存在する健部郷相当地域と、杵築大社や神門郡中枢域(出雲市上堀冶町・古志町)との関連性を想起させるものであるということができ、今後この地域の7～8世紀史を考えるうえで留意するべきであろう。(平石 充)

※木簡の出典

『飛鳥・藤原概報#』=奈良文化財研究所『飛鳥・藤原宮出土木簡概報#』

『奈良県藤原概報』=奈良県教育委員会1968『藤原宮跡出土木簡概報』

『藤原宮#』=奈良文化財研究所『藤原宮木簡#』

『評制荷札』=奈良文化財研究所2006『評制下荷札木簡集成』

【註】

- (1) 実際は一連の史料ではなく途中で欠落のあるⅠ～Ⅵの断簡からなる。詳細な接続関係ならびにテキストについては、(野々村・田中 1989)による。
- (2) 本稿では触れないが、束治郷についても「歴名帳」の断簡が残り、深江・工田・犬上里があった(何れも比定地未詳)。専論に(山村 2017)があり、参照されたい。
- (3) 養老5年籍段階にあったサト(郷)が、『風土記』の記述の元となった神亀4年籍で無くなっていた場合、それについては『風土記』郷名改字で確認できない。ただし上述のように『風土記』記載郷のほぼすべてが養老5年籍・神亀4年籍にあることになることから、この間に大幅な郷の廃止は想定するべきではない。出雲国では養老5年段階にはすでに『風土記』同様の郡郷構成であったとみるべきであろう。
- (4) 島根郡盗道浜(308)をこれに当てる説もある。
- (5) 『倭名抄』では『風土記』の意宇郡飯梨郷が欠落するが、これは大和神戸になったと考えられる(小倉 2021)。
- (6) 出雲国関連の荷札木簡では、明確な評一五十戸段階の木簡は確認されていないが、奈良県明日香村西橘遺跡出土木簡に「□〔八カ〕雲評」とされる木簡がある。同一遺構出土の荷札木簡は評一五十戸制段階で、同木簡を含む木簡群は670年代前後の年代が想定されている(明日香村教育委員会 2024)。興味深い木簡であるが、サト名記載はなく、ここでは触れない。
- (7) なお、風土記編纂中にサト名が改変された場合、サトの起源伝承を中心とする風土記も再編集する必要がある。『豊後国風土記』『肥前国風土記』甲類、そのほか『尾張国風土記』『備中国風土記』逸文などから天平期の『風土記』の存在が類推されるが、和銅6(713)年の風土記撰進命令以後、郷里制施行(715ないし717年。(鎌田 2001))以前に風土記が完成できなかった場合、その編纂は自ずから遅れることになる点も留意すべきであろう。
- (8) 反対に出雲郡出雲郷・神門郡古志郷などは流動性の高い先進的な郷で、郡の中心にあり官道に面しているとし、こちらには開発にともなう移民や移住などがあったと想定している。(岩橋 2024)は東西出雲で特徴

的な土製支脚の分布を論じ、意宇郡の中心である山代郷・大草郷域では1類・2類の混在がみられるとするが、神門郡古志郷域は1類が卓越している。「歴名帳」が完存していないこともあるが、両者には微妙な差がある。

(9)他に同遺跡出土の人名(姓)列記木簡(『飛鳥・藤原概観』18 23頁下段117)にみえ、「建王」もある(同 25頁上段)。

(10)類例に孔王部・蝮王部・雀王部・生王部があり、○王の部民を○王部と表記することがあったとみられる。

【参考文献】

明日香村教育委員会2024『西橘遺跡発掘調査報告書』

石母田正1989「天平11年出雲国大税賑給歴名帳について」『石母田正著作集1』岩波書店 1～79頁(初出1938)

伊藤剣2023「現『伝出雲国風土記』の成立をめぐる一『日本書紀』にもとづく再撰の試み」『出雲国風土記の神話と思想』新典社 148～163頁(初出2017)

岩橋孝典2024「食・住に関わる遺構・遺物は首長権領域と関連するののか—山陰地域の事例から—」『地域と交流の考古学』日本考古学協会2024年度島根大会実行委員会

小倉慈司2021「出雲国の神戸について」『古代律令国家と神祇行政』205～236頁 同成社(初出1996)

加藤義成1981『修訂 出雲国風土記参究』松江今井書店

鎌田元一2001「郷里制の施行と霊亀元年式」『律令公民制の研究』301～333頁 塙書房(初出1991)

佐伯有清1982『新撰姓氏録の研究 考証編第2』吉川弘文館

高嶋弘志1995「出雲国造の成立と展開」『古代王権と交流7 出雲世界と古代の山陰』159～189頁 名著出版

仁藤敦史2012「舎人と采女」『古代王権と支配構造』77～109頁 吉川弘文館(初出2005)

野々村安浩・田中義昭1989「天平11「出雲国大税賑給歴名帳」校訂」『昭和63年度科学研究費補助金(一般研究A) 古代出雲文化に関する総合的研究—斐伊川下流域を中心として—』1～10頁

平石充2015「人制再考」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター 265～285頁

平石充2024「熊野大社・杵築大社の奉斎体制」『伊勢と出雲』島根県古代文化センター 63～76頁

山村桃子2017「『出雲国風土記』出雲郡漆治郷をめぐる」『風土記研究』39 29～50頁

第2節 結西谷IV遺跡出土のヒスイ製勾玉について

第1項 結西谷IV遺跡出土のヒスイ製勾玉

結西谷IV遺跡では3区の加工段SX305からヒスイ製勾玉が1点出土した。同遺構は南北長18.5mに及ぶ大規模な加工段である。同遺構ではヒスイ製勾玉以外に、中央北寄りの遺物集中部を中心に7世紀後葉～8世紀後半(国府1～4型式)の須恵器が見つかったほか、鉄製紡錘車、円盤状の瑠璃の小さな原石、砥石が出土した。勾玉の出土位置は、遺物集中部から北へ約3m離れたところの床面付近で、残存する床面と斜面の境において単独で出土した。以上のような遺物出土状況から、同遺構の時期は8世紀後半と考えられ、床面付近から出土したヒスイ製勾玉も同時期に埋没した可能性がある。

ヒスイ製勾玉は、長さ2.27cm、幅1.33cm、厚さ0.73cm、重量3.7g、両面穿孔である。平面形は湾曲がゆるいC字形を呈し、尾部は丸く仕上げられるのに対して、頭端部がやや細くなる。厚みは頭部が厚く、尾部が薄くなる。色調は全体的に白色(N/9.5)を呈するが、明るい緑色(4G7/9)が部分的にうっすらと認められる。また、頭部から背部、尾部にかけて黒色(N2)に変色した部分が斑状に認められ、微細なヒビ割れがあることから、被熱を受けたものとみられる。ただし、表面の光沢感に残り、被熱の度合いは弱い(註1)。

第2項 島根県内のヒスイ製勾玉(第9表 第126図)

島根県内では弥生～古墳時代のヒスイ製勾玉が19遺跡で計23点(註2)出土している(第9表、第126図)。出土遺跡の種別をみると、弥生時代は墓3、集落1、祭祀1、古墳時代は古墳11、横穴3、奈良時代は集落1、時期不明は散布地1で、古墳からの出土が大半を占める。出土遺構の時期別にみると、弥生時代は中期4点、後期2点の計6点、古墳時代は前期7点、後期8点の計15点、奈良時代1点、不明1点である。勾玉の類型は定形(丁子頭)、亜定形、半塊型、Nn型(大賀2012・2013)が認められる。

定形(丁子頭)は前立山遺跡で弥生時代後期中葉の出土例がある。長さ5.0cmの大形で、頭部に3条の線刻が施されている。被熱を受けているため、色調は褐色を呈する。両面穿孔である。

亜定形は弥生時代中期の真名井遺跡、古墳時代前期の柴尾3号墳、寺床1号墳、上野1号墳、奈良時代の結西谷IV遺跡で各1点が出土し、計5例がある。弥生時代中期、古墳時代前期を主体とする。形態や大きさは多様であるが、いずれも両面穿孔である。真名井遺跡例は長さ3.3cmの整ったC字形で、鮮やかな緑色半透明の優品である。寺床1号墳、上野1号墳例は長さ約2cmの小形で、緑色半透明である。このうち、上野1号墳例は頭部に2条の線刻が微かに施されており、丁子頭勾玉の特徴を残す。

半塊型は古浦遺跡、友田遺跡、沢下6号墓、上塩冶横穴墓群第23支群7号穴で各1点、五反田1号墳で2点の計6例が出土している。同型の勾玉は弥生時代中期～後期に北陸で主に製作されたもの

第9表 鳥根県内出土のヒスイ製勾玉一覧

No.	遺跡名	所在地	遺跡種類	出土遺構等	時期	点数	穿孔	長さ (m)	幅 (m)	高さ (m)	産地 分析	伴生玉器	文献
1	古溝遺跡	松江市曲島町	墓域	49号人骨	弥生時代中期後半	1	両面	9.5	17.0	2.0		碧玉製管玉?	
2	友田遺跡	松江市浜乃木	墳墓	奥山13号土壌	弥生時代中期後半 →後期前半	1	両面	11.0	4.8	13.0		緑色凝灰岩製管玉13	
3	真井井田遺跡	松江市大津田町	祭祀	御代土	弥生時代中期	1	両面	13.0	22.0	11.0	糸島川産		3-4
4	横瀬南遺跡	松江市亀谷	土坑		弥生時代中期末	1							5
5	松山遺跡	笠置町大字注連川	墓域	51号	弥生時代後期中葉	1	両面	13.0	28.0	13.0			6
6	矢上遺跡	松江市大津田町・坂木町	墳墓	6号墓室1主体	弥生時代後期使前	1	両面	13.0	12.0	5.0		碧玉製管玉10	7
7	平谷遺跡	松江市東出雲町	古墳	1号墳1主体部 3号墳遺土主体部	古墳時代前期 古墳時代前期末	1	両面	129.5	112.0	18.0	糸島川産 糸島川産		8-9 10
8	永谷古墳群	松江市永谷・上津村	古墳	1号墳遺土主体部	古墳時代前期末	1	両面	47.2	24.0	13.0		黒磁製勾玉1, ガラス製勾玉1, 碧玉製管玉40	11
9	上野遺跡	松江市内浦町	古墳	1号墳第1主体部	古墳時代前期末	1	両面	17.1	10.0	6.0		黒磁製勾玉1, ガラス製勾玉1, 碧玉製管玉40	12
10	五反田古墳群	安来市門生町	古墳	1号墳1主体部	古墳時代前期末	1	両面	16.0	8.50	7.0		碧玉製管玉18	13
11	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃			14
12	石田遺跡	松江市呉松院町	古墳	主体部	古墳時代前期末	1	片面	25.0	10.0	9.5	糸島川産	黒磁製勾玉2, 碧玉製管玉5, 滑石製玉160, ガラス製丸玉1, 銅平文4	15
13	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	糸島川産		16
14	笠置宮古墳群	安来市伯太町	古墳	1号墳	古墳時代後期	1					糸島川産		17
15	白根古墳	松江市曲島町	古墳	竈式石棺	古墳時代後期	1							18
16	田原古墳	広島県尾道市	古墳	竈式石棺石室周辺	古墳時代後期後半	1	片面	22.2	13.0	12.0		黒磁製勾玉5, 水晶製管玉3, ガラス製丸玉1・玉32	19
17	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃			20
18	上堤古墳群	広島市上堤町	竈穴	第23支那7号穴	古墳時代後期後半	1	両面	13.2	28.0	22.0	糸島川産	ガラス製丸玉1	21
19	堀ノ木谷群穴	大田市仁寿町	竈穴	第1支那1号穴	古墳時代後期	2	片面					碧玉製管玉7, 黒磁製勾玉5・丸玉1, 碧玉製管玉7, ガラス製丸玉6・小丸5, 石材不明管玉2	22
20	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		碧玉製管玉5, 黒磁製勾玉12・丸玉1, 水晶製管玉1・切子玉10・丸玉1, ガラス製管玉1, 石材不明管玉5	23
21	高津久穴群	隠岐郡知夫村	竈穴	2号穴	古墳時代後期後半	1	片面	30.0	18.5	11.5			24
22	松谷寺江遺跡	広島市東川町	墓域	53号	弥生時代	1	両面	22.7	13.5	7.5			本書
23	上出雲青木林町	敷地町	墓域	山(山水溝)	不明								

※(1)の計算値は、実測値からの計算値。

- [illegible]

であるが、県内では弥生時代中期～古墳時代前期、後期に認められる。長さ0.9～1.6cmの小形である。いずれも色調は緑色半透明で、両面穿孔である。このうち、五反田1号墳出土のヒスイ製勾玉は管玉とセットで弥生時代後期～終末期に製作されて以降、長期保有されたことが想定されている(谷澤2019・2020)。上塩治穴六墓群第23支群7号穴例も同様に弥生時代からの伝世品であろう。

N n型は石田古墳、原田古墳で各2点、高津久2号横穴墓で1点の計5点が見つかっている。古墳時代前期末～中期初頭、後期後半に認められる。いずれも形態は整ったC字形を呈し、色調は白色部が多く、鉄針による片面穿孔である。



第126図 島根県内のヒスイ製勾玉(1:2)

第3項 結西谷IV遺跡出土のヒスイ製勾玉の評価

結西谷IV遺跡3区の加工段SX305から出土したヒスイ製勾玉は、白色部分が多い色調であるものの、形態や穿孔の特徴から、古墳時代前期後半ごろに作られた可能性が考えられる。中国地方ではヒスイ製勾玉は古墳時代集落から出土することは希少であることから、本来は古墳へ副葬品を目的としたものであったと考えられる(米田2021)。ただ、加工段SX305は8世紀後半に機能した遺構であり、ヒスイ製勾玉の出土状況からも同時期に埋没したことが調査所見から窺える。現状では、このヒスイ製勾玉は製作時期と埋没時期に大きな隔たりがあり、400年近く伝世したことが想像される。あるいは、加工段SX305の上方にある未知の古墳からヒスイ製勾玉が流入した可能性も否めないが、結本谷古墳群は古墳時代中期～後期前半を主体とすることや、SX305から古墳時代の土器が出土していないこと、勾玉が完形であることなどから、流入の可能性は極めて低いだろう。

前項で触れたように、県内のヒスイ製勾玉は出土数が限られるが、列島における弥生～古墳時代のヒスイ勾玉の類型の変遷と大きな齟齬はない。こうしたなか、古墳時代前期末の五反田1号墳、古墳時代後期後半の上塩治横穴墓群第23支群7号穴は半珠型ヒスイ製勾玉で、弥生時代から伝世した可能性が高い。また、Nn型のヒスイ製勾玉は石田古墳例のように古墳時代前期末～中期前葉に製作されたものが主体であるが、古墳時代後期の原田古墳、高津久2号横穴墓以外にも北部九州では古墳時代後期後半～終末期に大量に出土することから、当該期まで製作されたことが示唆されている(大賀2013)。

ヒスイ製勾玉を列島規模かつ縄文時代～古代・擦文時代の出土例を網羅的にまとめた高橋浩二氏(2005)によると、奈良・平安時代の集落からヒスイ製勾玉が出土した例は管見に触れない。したがって、本例のように、奈良時代の集落を構成する遺構からヒスイ製勾玉が見つかる例は極めて稀有と言わざるを得ない。

古墳時代の勾玉が奈良時代まで伝世した例は、元興寺塔心礎鎮座具、東大寺法華堂空翻素観音像宝冠、正倉院宝物「金銅杏葉形裁文」ほか、神奈川県山野根横穴墓群第4号墓、岩手県太田蝦夷森古墳群、秋田県岩野山古墳群、青森県丹後平古墳群、北海道青苗墳墓などの寺院、末期古墳や墓で認められる(秋山2007、大賀2011・2023、河村2010など)。こうした状況から、限られた出土例ながら、律令期になっても古墳時代に作られた勾玉が列島各地で局地的に消費されていることが分かる。

島根県では林廻り遺跡の建物跡SB01(8世紀末～9世紀)で瑪瑙製勾玉1点、渋山池遺跡の土坑SK30(平安時代)から碧玉製勾玉の仕上げ工程未成品1点が単発的に出土している(島根県教育委員会1996・1997)。出雲地域では律令期の集落内で勾玉を製作、又は伝世された勾玉が使用された可能性があり、結西谷IV遺跡から出土したヒスイ製勾玉もこうした事例を補足するものと言えよう。

(米田 克彦)

【註】

- (1) 本遺跡出土ヒスイ製勾玉の被熱の度合いは弱く、上野2007によるLevel 1に相当する。
- (2) ヒスイ製勾玉の集成にあたっては、井谷2016、岩橋2019、古代歴史文化協議会webサイト、島根県古代文化センター2000、高橋2005、瀧音2019、谷澤2020、米田2009・2021を参考にした。

【参考文献】

- 秋山浩三2007『日本古代社会と物質文化』青木書店
- 井谷朋子2016「出雲における後期古墳出土土玉類からみた地域性と階層性」『古代文化研究』第24号 島根県古代文化センター 25～46頁
- 岩橋孝典2019「島根県の古墳時代前期～中期古墳出土の玉類」『古墳時代の玉類の研究』島根県古代文化センター 113～124頁
- 上野修一2007「焼かれた玉ー硬玉製大珠の二次的変形ー」『縄文時代の社会と玉』日本玉文化研究会第5回シンポジウム橋木大会実行委員会 32～37頁

- 大賀克彦2011「東大寺金堂玉類に関する考古学的考察」『鹿園雑集』第13号 奈良国立博物館
- 大賀克彦2012「古墳時代前期における翡翠製丁字頭勾玉の出現とその歴史的意義」『古墳時代におけるヒスイ勾玉の生産と流通過程に関する研究』平成21～23年度科学研究費補助金若手研究(B)研究成果報告書(研究代表者 高橋浩二) 49～60頁
- 大賀克彦2013「玉類」『古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年』同成社 147～159頁
- 大賀克彦2023「副葬玉類からみた青苗墳墓の埋葬時期と被葬者像」『青苗遺跡重要資料総括報告書』奥尻町教育委員会37～56頁
- 河村好光2010『倭の玉器—玉つくりと倭国の時代—』青木書店
- 古代歴史文化協議会webサイト「玉出土遺跡データベース」(<http://kodairekibunkyo.jp/data.html#tamadb>)
- 鳥根県教育委員会1996『四ツ廻Ⅱ遺跡 林廻り遺跡 受馬遺跡』一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅲ
- 鳥根県教育委員会1997『洪山池遺跡 原ノ前遺跡』一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅶ
- 鳥根県古代文化センター2000『古代出雲における玉作の研究Ⅱ—中国地方の玉製品出土遺跡集成—』
- 高橋浩二2005『ヒスイ製品の流通と交易形態に関する経済考古学的研究』平成15～16年度科学研究費補助金若手研究(B)研究成果報告書
- 瀧音大2019『原始・古代日本における勾玉の研究』雄山閣
- 谷澤亜里2019「古墳時代前期の山陰系玉類—出雲地域、北部九州地域の様相から—」『古墳時代の玉類の研究』鳥根県古代文化センター 95～112頁
- 谷澤亜里2020『玉からみた古墳時代の開始と社会変革』同成社
- 米田克彦2009「勾玉祭祀の波及—弥生時代の中国地方を中心に—」『考古学と地域文化—山典氏還暦記念論集—』山典還暦記念論集刊行会 103～122頁
- 米田克彦2021「中国地方の古墳時代集落における勾玉祭祀の波及」『玉文化研究』第5号 日本玉文化学会 105～130頁

第3節 結西谷IV遺跡について

第1項 結西谷IV遺跡について

結西谷IV遺跡は、この度の工業団地造成に係る事前の分布調査、試掘調査によって明らかになった遺跡である。遺跡は、丘陵の3地区にまたがる。

1区は、北側に開口した谷地形にあり、谷に吹き込む風を利用した簡易な伏せ焼の炭窯を確認した。操業年代は10世紀後半から11世紀前半であり、炭の原料となった木は、クヌギ、ツツジ、クマシデなど一般の里山に生育する樹木である。操業時期が新しくなるにつれ、谷の上方に炭窯を造り替えながら生産している。

2区は、北東に開口した谷奥部にある平坦面を調査した。一部斜面をL字状に削り平坦面を造成している。表土を除去した段階で1面、さらに掘下げて確認した2面で8世紀を中心とした掘立柱建物6棟などを確認した。1面では、炭の集積のみ確認でき、年代は、AMS年代測定によって11～12世紀の年代を得ており、1区の炭窯との関連が考えられる。2面では、柱穴の重複関係や角度、規模から掘立柱建物SB204→SB201・SB205→SB202と建物が建替えられている。SB203、SB205などは、束柱をもつ建物で倉庫として使用された可能性もある。また、カマドや土製支脚が出土していることから一般的な住居であった可能性もある。現在ため池となっている斜面下段にも遺構がひろがることは、試掘調査で確認しており、複数段の加工段が存在する可能性がある。出土遺物から時期は、7世紀後半から8世紀代である。特に出雲国府編年第2型式（7世紀末葉から8世紀第1四半期）の須恵器が多く出土しており、律令制度の整備に伴って活動が活発になっていることがわかる。

3区では、北側に開口した谷の西側、緩斜面にある小規模な加工段を複数確認した。これら加工段は、遺構・遺物などから一時期工房として使用された可能性がある。出土遺物には、伝世品と考えられるヒスイ製勾玉、鉄製紡錘車、小型鉄斧など特殊な遺物があるほか坏蓋硯、灯明皿、使い込まれた砥石などが出土しており工場的な機能として使用された時期があったと考えられる。出土遺物のピークは、出雲国府編年の第1型式から第4型式であり、7世紀後葉から8世紀末の年代となる。なお、調査当初より鍛冶工房の可能性を考え、土を採取し鍛造剥片・粒状滓といった鍛錬鍛冶の痕跡がないか、遺構床面の土を持ち帰り調査したが、鍛冶関連の遺物は確認できなかった。使い込まれた砥石が多数出土していることから、鉄製刃物の研ぎが必要な作業が行われていた可能性がある。

第2項 周辺の官衙関連遺跡について（第127～129図）

結西谷IV遺跡の活動の中心時期は奈良時代と考えられる。この時代の周辺の官衙関連遺跡をみてみたい。

出雲郡家推定地（第128図）

出雲郡家推定地としては、出雲市斐川町出西の後谷遺跡、稲城遺跡、小野遺跡周辺が有力候補となっている。後谷遺跡は、8～9世紀代の掘立柱建物跡や礎石建物跡が確認されており、大型倉庫と



第127図 斐川周辺の主な奈良時代の遺跡（1：30,000）

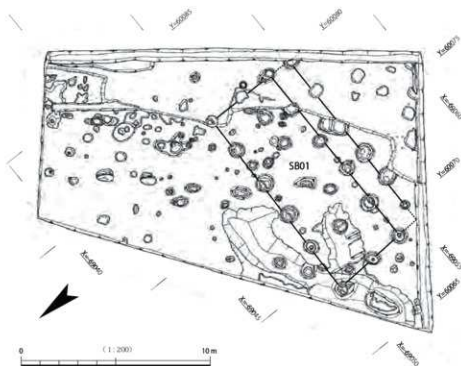


第128図 出雲郡家推定地（後谷・稲城・小野遺跡）（1：5,000）

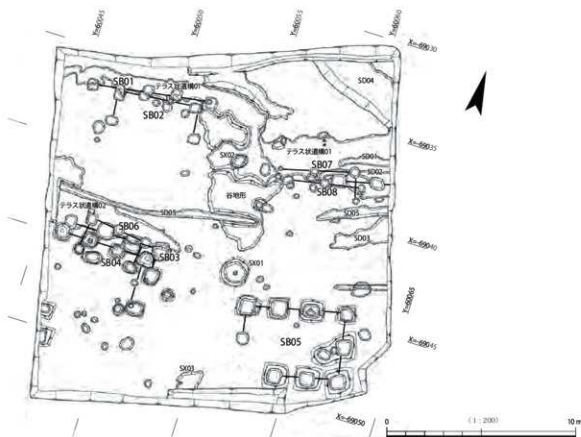
考えられる。炭化米も出土したことから、建物の焼失と再建があり、出雲郡家に伴う正倉跡と推定される。また、稲城遺跡や小野遺跡では、8～9世紀代の掘立柱建物跡が確認されたほか、軒丸瓦や呪符木簡、円面硯、墨書土器といった特殊な遺物も出土した。これらの遺構・遺物と『出雲国風土記』（733年）の記述から、稲城遺跡や小野遺跡の周辺に出雲郡家の郡庁が存在したと考えられる。

出雲国山陰道跡（第129図）

本遺跡から北西方向約500mには、国史跡出雲国山陰道跡が通る。標高25m前後の東西約1kmにわたって丘陵尾根上を縦走している（長原遺跡、杉沢遺跡、三井II遺跡、堀切遺跡をまたがる）。道路遺構に伴いしばしば検出される波板状凹凸面が確認され、埋土から7世紀後半以降の須恵器が出土し、道路造成の際の切土斜面から7世紀末から8世紀前半の土師器が出土した。このことから、道路遺構は、遅くとも8世紀前半頃で、11世紀の中頃には官道としての機能は終焉していたとされる（出雲市教育委員会2017・出雲市教育委員会2020）。



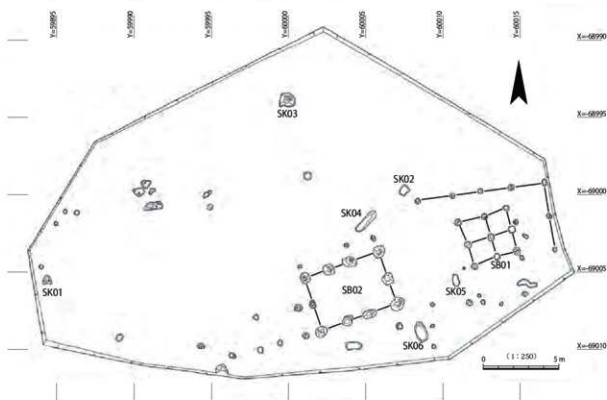
第131図 堀切I遺跡00-1区 平面図(1:200)



第132図 堀切I遺跡00-2区 平面図(1:200)

堀切I遺跡(第131・132図)

00-1区、00-2区ともに奈良時代後半から平安時代前期のいずれかの時期に営まれた集落跡と考



第133図 杉沢Ⅲ遺跡2区-1調査区 平面図(1:250)

えられる。00-1区で確認したSB01は梁行2間(4m)、桁行5間(11m)の大型の掘立柱建物である。00-2区では、斜面をL字状にカットし、切土盛土で平坦面を造成している。

杉沢Ⅲ遺跡(第133図)

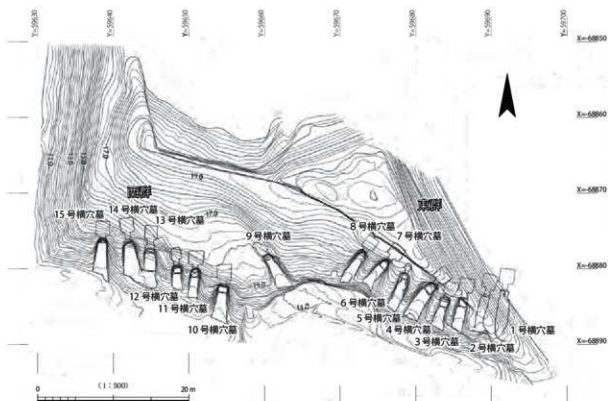
杉沢Ⅲ遺跡では、丘陵の頂上で8～9世紀頃の総柱掘立柱建物(9本柱建物)を確認しており、三井神社の元宮ではないかとの意見もある(斐川町教育委員会 2001b)。

結遺跡F・G地区

本報告書附編1に掲載している。F地区では、7世紀代から8世紀前半にかけての遺物を伴う加工段5つと掘立柱建物跡2棟が見つかった。中心時期は7世紀前半だと考えられる。加工段の中に柱穴が伴うものと伴わないものがあることは、結西谷Ⅳ遺跡3区の状況と酷似しており、関連性が注目される。G地区では、掘立柱建物跡を9棟復元した。なかには、溝や柱穴列で区画され、一列に並んだ建物群もあり(小型の倉庫群か?)、計画的に配置されたことが伺える。出土遺物は8世紀代の須恵器が多く、国府編年第2・4型式のものが大半を占める。

杉沢横穴墓群(第134図)

杉沢横穴墓群は、南向きの斜面に開口する15基の横穴墓群である。出土土器から、7世紀後半から8世紀代にかけて築造・追葬されたことが判明した。これらの横穴墓は、出雲平野の中でも横穴墓造墓の終末期にあたる。出雲東部の影響を受けた意字型横穴墓が造られた。結遺跡F地区や結西谷Ⅳ遺跡など周辺の集落遺跡と重なる時期であり、それら集落と関係する人が埋葬された可能性もある。



第134図 杉沢横穴墓群 全体図(1:500)

第3項 まとめ

結西谷Ⅳ遺跡について、遺跡の周辺を見てみると、西に出雲郡衙の郡庁や正倉、北に出雲国山陰道が東西に通じ、周辺には瓦窯、製炭、製鉄などの工房がひろがる。また、時期を同じくする横穴墓も所在する。律令制度の浸透に伴い、本遺跡2区では谷奥丘陵緩斜面を造成して掘立柱建物の集落が形成され、倉庫や住居が存在した。また、3区では三井Ⅱ遺跡と同じく工房があり、鉄製刃物の研ぎなどを行っていたと考えられる。杉沢横穴墓が出雲東部の影響を受けた意字型横穴墓であることから、一つの可能性として、出雲東部から何らかの影響を受けた人々が活動していたのではないだろうか。その生活拠点の一つが本遺跡に残された平坦面であったと推定できるのではないかと。(石原 聡)

【参考文献】

- 出雲市教育委員会 2016 『杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群 出雲斐川中央工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』出雲市の文化財報告31
- 出雲市教育委員会 2017 『出雲国古代山陰道発掘調査報告書 出雲市三井Ⅱ・杉沢・長原遺跡の調査』出雲市の文化財報告33
- 出雲市教育委員会 2020 『出雲国古代山陰道発掘調査報告書2 堀切Ⅳ・三井Ⅱ遺跡の調査』出雲市の文化財報告43
- 斐川町教育委員会 2001a 『平成11・12年度斐川中央工業団地造成に伴う杉沢Ⅲ・堀切Ⅰ・三井Ⅱ遺跡発掘調査報告書』斐川町文化財調査報告第24集
- 斐川町教育委員会 2001b 『杉沢Ⅲ遺跡 斐川中央工業団地造成予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』斐川町文化財調査報告第26集

第4節 結本谷古墳群について

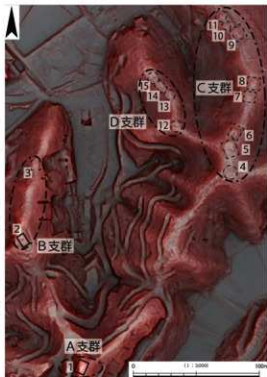
第1項 結本谷古墳群について（第135・136図）

結本谷古墳群は仏經山から南にのびる丘陵の先端付近に立地する古墳群で、15基（円墳6基・方墳9基）が4つの支群（A～D支群）に分かれて築造されている（第135図）。そのうち、本調査では2基（1・2号墳）を調査した。

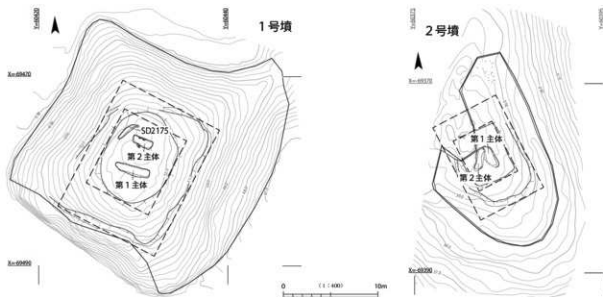
1号墳は丘陵の最高所に単独で築かれた約15×11.5mの方墳である（A支群）。主体部は2基確認され、第1主体が古墳の中心に位置するため、中心主体だと考えられる。第2主体は第1主体の北東側に築かれ、墓壇の両長側面に計3つの石材が置かれていた。この石材は木棺等の棺を支えるためのものだったと考えられる（第136図左）。

2号墳は1号墳から北西にのびる尾根上に築かれた約11×7.5mの方墳である（B支群）。主体部は2基確認され、第1主体は古墳の中心に位置し、主軸が古墳の主軸方向と一致するため、中心主体だと考えられる。第2主体は主体部の北端で第1主体と重複しており、第1主体の後に築かれたことが分かっている（第136図右）。

結本谷古墳群の築造時期に関しては、1・2号墳か



第135図 結本谷古墳群 全体図（S=1/3,000）



第136図 結本谷1号墳（左）・2号墳（右）墳丘復元図（1:400）

らは副葬品など時期の手がかりとなる遺物が出土しなかった。しかし、1号墳の墳頂平坦面の北西側で確認された溝 SD2175 の底面から採取された木炭片で AMS 年代測定を行った結果、5 世紀前半～6 世紀前半の年代を得られた(第 6 章第 1 節)。さらに、過去に調査された周辺の古墳群は、立地や墳形、墳丘規模、埋葬施設の形態といった多くの点で結本谷古墳群と共通する。そして、これらの古墳は古墳時代中期中頃から後期前半(5 世紀中頃～6 世紀中頃)にかけて築造されており、結本谷 1 号墳で採取された木炭片の年代測定結果とほぼ一致する。以上のことから、結本谷古墳群も周辺の古墳群と同じく、古墳時代中期から後期前半に築造されたと推測される。

また、1号墳の墳丘上からは奈良時代頃の須恵器がいくつか出土している。1号墳の斜面下方にある結西谷IV遺跡2・3区では、7世紀後半～8世紀代にかけて集落が営まれており、この集落に居住した人々が1号墳で何らかの活動を行った可能性を示唆している。

第2項 周辺の群集墳 (第137・138図 第10表)

結本谷古墳群が位置する斐川町の丘陵地帯では、数多くの古墳群が確認されている(第137図)。そのうち、いくつかの古墳群では発掘調査が行われており、それらを以下で紹介する(第10表)。

結古壇群

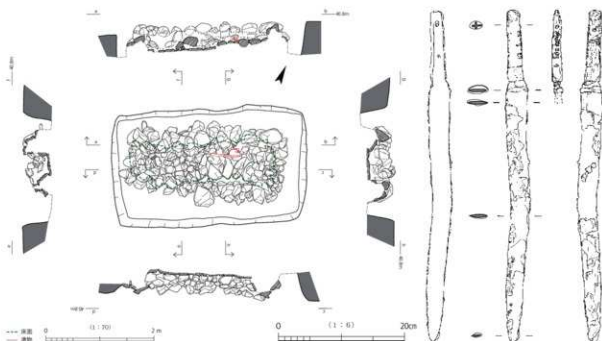
結本谷古墳群から北東に約 600 m の丘陵に築かれた古墳群である。詳細は附編 1 で報告しているが、尾根上に 34 基（円墳 20 基、方墳 14 基）の古墳が密集して築かれている。墳丘規模は全て 10 m 前後で、ほとんどの古墳の埋葬施設が木棺直葬である。須恵器・土師器の他に刀剣や鉄鏃といった武



第137図 斐川周辺の主な古墳(1:30,000)

第10表 斐川の群集墳一覧（調査された古墳のみ）

古墳群	地区	古墳	墳形	墳丘規模(m)	築造時期	埋葬施設	副葬品	出土遺物(墳丘)
結本谷	A	1	方	15.0×11.5	5c中～6c前	木棺?2		須惠器片(奈良)
	B	2	方	11.0×7.5	—	木棺?2		須惠器片(奈良)
結	A	10	円	11.7	5c中	木棺	鉄剣、鉄鏃8、刀子	
	B	11	方	13.2×10.0	5c後	木棺(礎床)	蛇行剣、鉄鏃13～、刀子3	
		12	円	9.0	—	木棺		須惠器片
		13	円	8.6	5c後	木棺(礎床)	鉄剣	
		35	円	6.5	6c前～中	木棺		須惠器片
	C	22	方	9.4×7.5	—	木棺	刀子	
		23	円	9.5	—	木棺		須惠器片、土師器
		24	円	11.0	—	木棺		須惠器、土師器片
		29	方	6.5×5.7	—	—		須惠器片
		30	方	7.0×5.2	—	—		須惠器
		31	円	9.0	5c後	—	鉄製品	須惠器
		33	円	8.2	6c前	木棺3		須惠器、土師器
		34	円	6.5	6c中	木棺	須惠器	
	D	17	円	10.0	5c後	木棺	須惠器、刀子	円筒埴輪
		18	円	8.0	6c前	木棺		円筒埴輪片、須惠器、土師器片
		19	円	12.0	—	木棺2	鉄鏃5～	須惠器片
		39	方	6.5×5.5	—	—		須惠器片
		40	方	7.7×7.4	—	木棺		土師器片
		43	方	6.0×5.0	5c後	木棺	土師器	須惠器片、土師器
		46	方	8.5×7.5	—	木棺		須惠器片
		47	方	5.5×3.8	—	木棺		須惠器片
	E	26	円	11.5	—	—		
		28	円?	8.5?	5c末	木棺2	鉄刀	円筒埴輪、須惠器、土師器片
		44	円	9.0	—	木棺		
		45	円	8.0	—	木棺		須惠器片
三斗蒔		1	方	8.7×7.4		木棺(礎床)		須惠器・土師器片
		2	円	—		—		土師器片
		3	方	8.0×7.0	6c前	木棺	鉄刀、鉄鏃、須惠器	
		4	円	—		—		
		5	円	10.3		—		土師器片
		6	円	12.3	5c中～後	組合式家形石棺	鉄剣	土師器
		7	方	10.0×8.3	5c後	木棺2		須惠器、土師器
西		1	方	10.0×8.0	5c中～後	木棺	鉄刀	須惠器、土師器



第138図 結11号墳 礎檣(1:70)(左)・蛇行剣(1:6)(右)

器類が副葬されている場合が多く、5世紀中頃から6世紀中頃にかけて築造された。

古墳群の中でも注目されるのは、5世紀後半に築かれた11号墳(方墳・ 13.2×10.0 m)で、埋葬施設で礎檣が確認された。古墳時代中期～後期前半頃の山陰地方においては、同様の礎檣が6例ほど確認されており、これら礎檣の被葬者は中間層的な立場にいた人物だったと想定できる(附編1第4節)。また、山陰では類例の少ない蛇行剣という珍しい器物も副葬されている(第138図)。

また、17・18・28号墳では、円筒埴輪が出土している(第140図)。これらの古墳は5世紀末から6世紀初頭にかけて相次いで築かれた小円墳である。これらの円筒埴輪は出雲平野における円筒埴輪の導入時期のものであり、こうした小規模墳に導入初期の円筒埴輪が並べられたことは注目される。

三斗蔭古墳群

結山谷古墳群から北西に約350mの丘陵に築かれた古墳群である。詳細は附編2で報告しているが、丘陵の北斜面に7基(円墳4基、方墳3基)の古墳が密集して築かれている。墳丘規模は全て10m前後で、6号墳以外の埋葬施設は全て木棺直葬である。須恵器や土師器の他に刀剣や鉄鏃といった武器類が副葬されている場合があり、5世紀中頃から6世紀前半にかけて築造された。

6号墳では、家形石棺が確認されている(第141図左)。蓋石は横断面が蒲鉾形の1枚石である。身は各側石1枚ずつの計4枚で構成され、長側石で小口石を挟んでいる。底石はなく小礫を敷いている。こうした特徴をもつ家形石棺は、同じく斐川町内にある軍原古墳でも確認されている。

西1号墳

結古墳群から南東に約500mの丘陵上に築かれた古墳で、隣接する石橋古墳群、古殿古墳群と群集墳を形成している。西1号墳は約 10×8 mの方墳で、埋葬施設は木棺直葬である。木棺内から鉄刀1振が出土しており、この鉄刀は全長108.4cmと斐川町内で出土した最も大きい刀剣である。

以上で紹介したように、斐川の丘陵地帯に分布する古墳群の多くが、墳丘規模 10 m 前後の小規模な円墳・方墳で、尾根上に密集して築かれていることが分かる。また、調査した古墳群では、ほとんどの古墳が木棺を直葬した埋葬施設を持ち、古墳時代中期から後期前半にかけて築かれたことが判明している。以上のことから、結古墳群や三斗蔭古墳群、結本谷古墳群といった、斐川に分布する古墳群の多くが「初期群集墳」にあたるだろう。

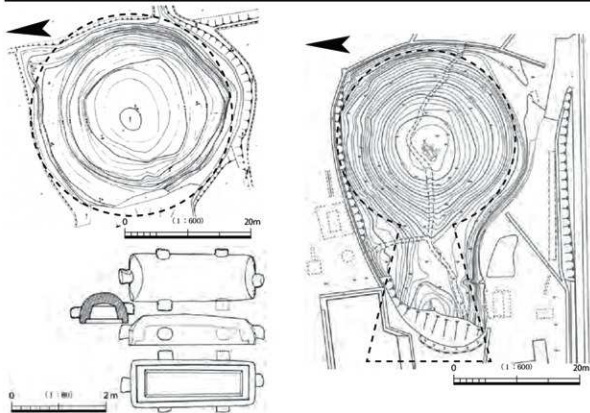
第3項 斐川の首長墳 (第139図)

古墳時代中期頃の斐川では、丘陵上に群集墳が築かれた一方で、古墳群とは独立した立地で、中規模以上の古墳もいくつか築かれており、それらを以下に記述する。

小丸子山古墳

南北方向にのびる丘陵の東縁に築かれ、現況では直径約 32 m の円墳である。明治 42 年 (1909) 頃に地元民によって発掘され、礎床を持つ埋葬施設が 2 基発見されたという。副葬品に鉄刀 2 振、甲冑があったとされる (斐川町教育委員会編 1992)。

古墳	墳形	規模 (m)	築造時期	埋葬施設	副葬品	遺物 (墳丘)
小丸子山	円	32	5c前?	木棺 (礎床) 2?	鉄刀 2、甲冑?	—
軍原	円 (方円)	29? (50?)	5c前~中?	家形石棺	鉄刀 4、甲冑、貝輪 2、 竖櫛 7、管玉 18~19、 勾玉 1~2、朱纒	—
神庭岩船山	方円	49	5c末	舟形石棺	—	円筒埴輪



第139図 斐川の首長墳一覧表 (上)、小丸子山古墳 墳丘測量図 (左中)、神庭岩船山古墳 石棺実測図 (左下)・墳丘測量図 (右)

軍原古墳

南北にのびる丘陵上に築かれ、現況は直径約 29 m の円墳だが、全長 50 m 前後の前方後円墳とする説もある。大正 15 年（1926）に発掘され、墳頂部から石棺 1 基が発見された（野津 1926）。石棺内からは人骨のほか、鉄刀 4 振、貝輪 2、豎櫛 7、管玉 18 ～ 19、勾玉 1 ～ 2、甲冑、朱纛といった質・量ともに優れた副葬品が見つかった。

軍原古墳の石棺に関しては、蓋石は 1 枚でつくられ、内面を深く削りこみ、断面が屋根形である。蓋には短辺側に各 1 個、長辺側に各 2 個の計 6 個の縄掛突起がつけられている。身は各側石が 1 枚ずつの計 4 枚で構成され、長側石で小口石を挟み込んでおり、小口石と長側石の端部は綺麗に揃っている。底石はなく、小礫を敷き詰めている。以上の特徴から、軍原古墳の石棺は九州の影響を受けた家形石棺と考えられている（第 141 図右）（大谷 1994・1996）。

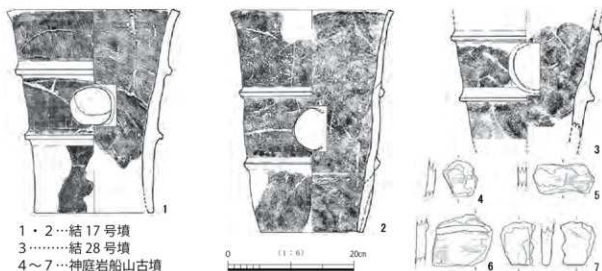
神庭岩船山古墳

当時の水域では穴道湖に面した丘陵の先端に築かれた推定全長約 49 m の前方後円墳である。墳頂部には舟形石棺の蓋石が露出しており、「出雲型舟形石棺」と呼ばれる出雲独自の形態をした舟形石棺とされる（大谷・清野 1996）。また、墳丘からは円筒埴輪が出土した（第 140 図）。底部調整技法や Bd 種ヨコハケ、断続ナデ技法がみられるといった特徴があり、出雲平野内では最も古い埴輪の 1 つである（田中 2016）。舟形石棺や円筒埴輪の特徴から 5 世紀末に築かれたとされ、同時期の島根県内では最大級の墳丘規模と舟形石棺を持つ古墳である（出雲市教育委員会 2021）。

以上で紹介した小丸子山古墳、軍原古墳、神庭岩船山古墳の 3 基は同時期の出雲平野内でも突出した墳丘規模や優れた質・量の副葬品、特別な石棺を持っていることが分かる。これらの古墳は出雲平野を治めるような立場にあった有力者が埋葬された「首長墳」といえる。

第4項 斐川における群集墳と首長墳の関係性

第 2・3 項で概観したように、古墳時代中期頃の斐川においては、丘陵上に小規模な円墳・方墳が

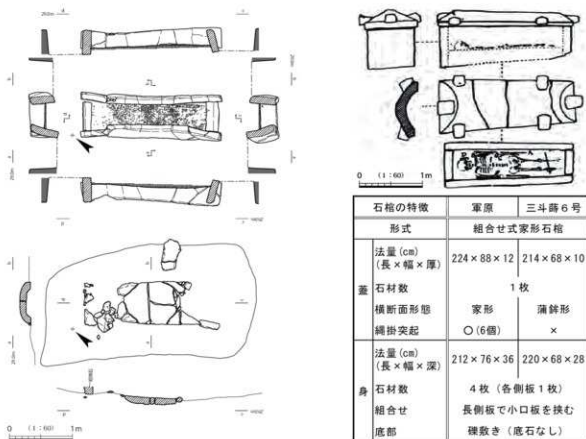


第 140 図 結古墳群・神庭岩船山古墳 円筒埴輪実測図（1：6）

密集する「初期群集墳」が多く築かれた。一方で、群集墳とは独立した立地で「首長墳」もいくつか築造され、これらは墳丘規模や副葬品の質・量、埋葬施設において、同時期の出雲平野内でも卓越したものを持つ。こうした群集墳と首長墳は、立地的・時期的な近さから何らかの関係を持っていたと考えられる。それを示す遺物等として、神庭岩船山古墳と結古墳群で出土した円筒埴輪、軍原古墳と三斗蒔古墳群で確認された家形石棺が挙げられる。

円筒埴輪 (第140図)

結17・18・28号墳と神庭岩船山古墳では墳丘規模にかなりの格差がありながら、どちらも出雲平野では導入段階にあたる円筒埴輪が出土している。そのうち、結古墳群の円筒埴輪については、突帯の突出は並み(突帯高1.0cm前後)で、基底部再調整を行い、外面二次調整のヨコハケを施し、無黒斑のみであるといった詳細な特徴が判明している。これらの特徴は中期後半から後期前半にかけて出雲東部に分布する「中海」系埴輪(田中2017)と共通し、基底部再調整技法の変化(大谷2003)も出雲東部と一致している。以上のことから、結古墳群の円筒埴輪は出雲東部と同系統であることが判明している(下江2022)。一方、神庭岩船山古墳の円筒埴輪は細片しか出土しておらず型式学的な検討ができていないため、系統などは不明確である。よって断定はできないが、小規模な円墳である結古墳群の被葬者が円筒埴輪を入手できた理由を、ほぼ同時期に築造された神庭岩船山古墳との関係性に求めることもできるであろう。つまり、結古墳群の被葬者は神庭岩船山古墳の被葬者と近い関係だったため、当時の出雲平野では珍しい器物である円筒埴輪を、神庭岩船山古墳の被葬者を通じて



第141図 三斗蒔6号墳(左)・軍原古墳(右上) 家形石棺(1:60) 比較表(右下)

導入できたという想定が可能だろう。

家形石棺（第141図）

三斗蒔6号墳と軍原古墳の石棺のような、底石がない切石石棺は鳥根県内でも類例は少なく、そのような石棺が直線距離で約4.7kmという近距離で使われているというのは大変注目される（註1）。両古墳の石棺を詳しく比較すると、どちらも組合式家形石棺で、蓋石は1枚作りであること、各側石1枚ずつで長側石で小口石を挟むこと、底石がなく礎を敷いていることなど構造の共通点は多く、また寸法もほぼ同一である。ただし、軍原古墳は蓋石の小口に各1、長側に各2の計6つの縄掛突起がある一方で、三斗蒔6号墳の蓋石には縄掛突起が無い点、軍原古墳の蓋の横断面形態は内面の挟りが深い屋根形に対して、三斗蒔は内面の挟りが浅い蒲鉾形である点など差異もみられ、全体的に軍原古墳の方が丁寧に作られている。そして、墳丘規模や副葬品の質・量では大きな格差があるにも関わらず、近距離の両古墳で類似した石棺が使われる点も踏まえると、三斗蒔6号墳の石棺は軍原古墳の家形石棺の影響を受けて作られたと考えられる。以上のことから、三斗蒔6号墳と軍原古墳の被葬者は社会的な地位においては大きな差異がある人物であったが、被葬者同士が深い関係にあったため、三斗蒔6号墳の被葬者は軍原古墳の家形石棺を模倣した棺に葬られたと推測できる。

このように、斐川における群集墳と首長墳に関しては、立地的・时期的な近さのほか、円筒埴輪や石棺といった直接的な関係性を示す遺物も見つかっている。以上のことから群集墳の被葬者像は、首長墳に葬られた出雲平野を治めるような有力者を傍で支えた人々であると想定できる。そして、群集墳の中でも少し大きめの墳丘、石棺や礎石といった埋葬施設、蛇行剣など珍しい器物の副葬品を持つ結11号墳や三斗蒔6号墳には、首長層と群集墳の被葬者たちの間に立つような中間層といえる人物が葬られたと考えられる。

第5項 まとめ

結本谷古墳1・2号墳では、埋葬施設や副葬品が不明確なため、そこから被葬者の人物像を推測することは難しい。ただし、同時期に周辺で築造された結古墳群や三斗蒔古墳群、西1号墳といった群集墳とは、立地や墳丘規模、墳形といった点で類似していることから、これら群集墳の被葬者と同じような社会的地位の人物が埋葬されたと推測される。すなわち、結本谷1・2号墳に埋葬された人物は斐川周辺を治めた首長層を傍で支えた人々だったのではなかろうか。（下江裕貴）

【註】

- （1）大谷晃二氏のご教示によれば、古墳時代中期頃の鳥根県内において、底石がない切石の組合せ式石棺は他に松江市二名留2号墳（飯塚・中尾1992）、安来市上ノ谷古墳（舟木2004）、安来市仲仙寺6号墳の3例がある。ただし、縄掛突起の有無や位置、礎床の有無、長側石と小口石の挟み方といった構造や寸法に関して差異も多い。

【参考文献】

- 飯塚康行・中尾秀信 1992『二名留古墳群発掘調査報告書』松江市教育委員会
- 出雲市教育委員会 2021「神庭岩船山古墳の調査」『令和2年度出雲市文化財調査報告書』出雲市の文化財報告 47 1～16頁
- 大谷晃二 1994・1996『斐川町軍原古墳について(上)・(中)・(下)』『八雲立つ風土記の丘』No.127・136・137
島根県立八雲立つ風土記の丘
- 大谷晃二 2003「円筒埴輪基底部再調整の技法復元」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター調査研究報告 書 16 島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター 193～208頁
- 大谷晃二・清野孝之 1996「安来市比売塚古墳の再検討」『島根考古学会誌』第13集 島根考古学会 33～52頁
- 内田雄雄・曳野律夫・松本岩雄 2018「出雲市斐川町神庭岩船山古墳墳丘測量報告」『島根考古学会誌』第35集 島根考古学会
- 下江裕貴 2022「結古墳群出土の円筒埴輪の型式学的検討」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第10集 出雲弥生の森博物館 13～26頁
- 田中 大 2016「出雲市神庭岩船山古墳出土の円筒埴輪」『古代文化研究』第24号 島根県古代文化センター 19～24頁
- 田中 大 2017「出雲・伯耆西部における古墳時代後期後半の異系統円筒埴輪の融合」『考古学研究』第64巻第2号 考古学研究会 82～98頁
- 野津左馬之助 1926「出雲斐川郡荏原村塚山古墳」『史蹟名勝天然記念物』第二集第一号
- 斐川町教育委員会 1992『島根県斐川町道跡分布調査報告書』斐川町文化財調査報告 10
- 舟木 聡 2004「広瀬町立歴史民俗資料館所蔵の古墳写真」『島根県考古学会誌』第20・21集合併号 島根考古学会 385～388頁

第8章 結語

令和7年(2025)3月現在、斐川インター工業団地の造成工事は、令和8年(2026)2月の完成、分譲に向けて現在も工事が進められている。

造成に係る埋蔵文化財調査は、令和2年度(2020)の分布調査、試掘調査に始まり、結西谷Ⅳ遺跡、結本谷古墳群を令和5年(2023)の8月末までの3年間で現地調査を終了する計画で発掘調査に着手し、計画期間内に終了した。

この間、発掘調査の現地説明会は、地元対象と一般を対象にした2回の説明会を実施し、一般対象の現地説明会は、真夏8月の37℃を超える猛暑日にもかかわらず、65名の方に訪れていただき調査成果を見ていただいた。また、出雲弥生の森博物館での速報展では、古墳時代と奈良時代にテーマを絞った展示を行ったほか、文化財課職員による講演会を通して発掘調査の成果を公開し活用している。

発掘調査の成果として、結本谷1・2号墳は、埋葬施設や副葬品が不明確なため、そこから被葬者の人物像を推測することは難しかったが、周辺の群集墳と類似した立地や墳形、墳丘規模であるため、埋葬された人物は古墳時代中期から後期にかけて斐川周辺を治めた首長層を傍で支えた人々であったと考えられる。

結西谷Ⅳ遺跡では、1区で平安時代の被熱した伏せ焼炭窯が9基確認でき、2区の平坦面では7世紀後半～8世紀代の162基のピットを確認し、並びや深さの検討から奈良時代の倉庫や住居と考えられる掘立柱建物6棟を確認した。また同時期の伏せ焼炭窯1基も確認した。3区では、奈良時代の工房跡と考えられる小規模加工段を確認し、ヒスイ製勾玉、鉄製紡錘車、小型鉄斧、使い込まれた砥石など特殊な遺物も出土した。

出土須恵器の時期別出土量から、遺跡の主な時期は、2区が出雲国府第2型式(7世紀末葉から8世紀第1四半期)、3区が第2型式及び第4型式(8世紀第3から第4四半期)にピークを迎えていることがわかった。これらの時期は、天平5年(733)成立の『出雲国風土記』や天平11年(739)の「出雲国大税賑給歴名帳」を前後する時期であることから、^{たけるべ}健部郷波如里に相当する地域であると考えられる(第7章第1節 平石)。そこには、400年近く伝世したヒスイ製勾玉(第7章第2節 米田)を持ち、丘陵斜面の加工段に住居や倉庫、工房などを構え、暮らす奈良時代の人々がいた。

また、3区丘陵の裾を西側から東側に貫通させた水田供給用の隧道水路を確認した。近・現代の農業土木遺産である。

現地は今後工業団地となることから、調査成果を記録保存してこの発掘調査報告書にまとめた。この成果が斐川地域のみならず、出雲地域の歴史解明の一助になることを期待します。

最後に、調査に際して多大なるご理解とご協力を賜った関係機関および地元住民の皆様をはじめ、調査に関わっていただいたすべての方々々に末筆ながら感謝申し上げます。(下江裕貴・石原聡・原俊二)

附編1 結古墳群・結遺跡の調査

第1節 遺跡の位置と調査の経緯

結古墳群・結遺跡は出雲市斐川町直江字結に所在した。結西谷Ⅳ遺跡・結本谷古墳群から北東に約600 mの地点に位置し、南北約450 m、東西約330 mの丘陵上に立地した遺跡である（第142図）。

本遺跡は工業団地（現在の島根富士通）の造成に先立って、1984～85年にかけて旧斐川町によって発掘調査された。遺跡では古墳群と集落遺跡を確認し、地形によって古墳群を5地区、集落遺跡を3地区に区分した。

周辺の丘陵上には古墳時代中期から後期前半頃にかけて築造された、三斗蒔古墳群や西古墳群、結本谷古墳群などの古墳が多く分布している。奈良時代になると、丘陵を東西に横断するように出雲国古代山陰道が整備されたほか、後谷遺跡や稲城遺跡、小野遺跡付近では出雲郡家が、武部遺跡周辺でも官衙関連施設がつくられたと考えられる。また、古墳時代終末期から奈良時代頃にかけて、古代道周辺に立地する結西谷Ⅳ遺跡や堀切Ⅰ遺跡、三井Ⅱ遺跡、杉沢Ⅲ遺跡などで掘立柱建物跡や加工段が多数確認されるようになり、当地域が大きく発展したことが伺える。これらの集落で生活していた人々が葬られたと考えられるのが杉沢横穴墓群である。

第2節 古墳群の調査

標高17～43 mの尾根上に円墳20基、方墳14基の計34基が確認され、立地によって5地区（A～E地区）に区分した（第143図・第11表）。なお、調査中に自然地形と判明した古墳はその号数を欠番としたため、実際の古墳数より号数の方が多くなっている。また、詳しくは後述するが、整理過程



第142図 周辺の主要な遺跡（1：25,000）

で変更した地区名もあり、概報（穴道 1990）の地区番号から変わっているため注意されたい。

第1項 A地区

A地区は古墳群の中でも最も南側に位置し、標高約43mの丘陵上に円墳1基（10号墳）を確認した。調査当時はC地区と呼称されていたが、整理過程で地区名を変更した。

（1）古墳と出土遺物

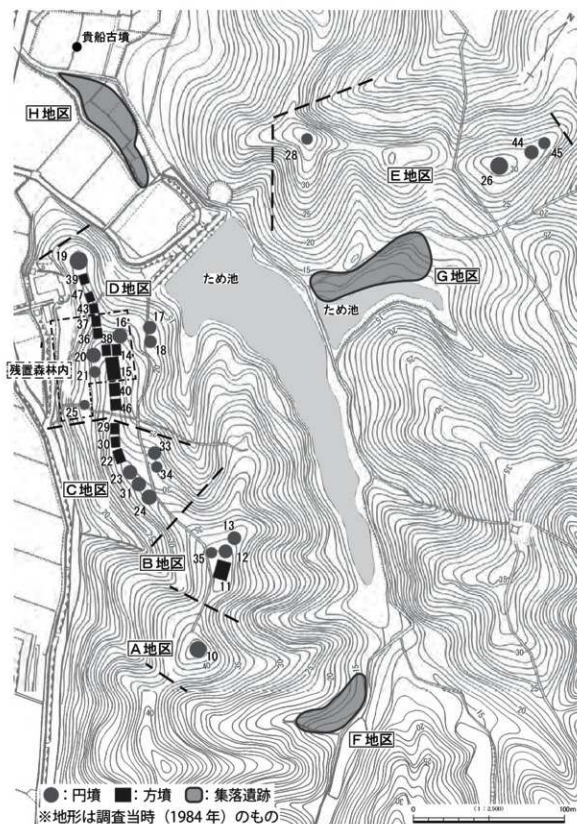
10号墳（第144・145図 図版13・43・44）

南北方向にのびる尾根上の最高所（標高約43m）に築かれた直径約11.7mの円墳である。埋葬施

第11表 結古墳群（A～E地区）一覧表

地区	古墳	墳形	墳丘規模(m)	築造時期	埋葬施設	副葬品	出土遺物(墳丘)	備考
A	10	円	11.7	5c中	木棺	鉄剣、鉄鏃8、刀子		
B	11	方	13.2×10.0	5c後	木棺(礎床)	蛇行剣、鉄鏃13～、刀子3		
	12	円	9.0	—	木棺		須恵器片	
	13	円	8.6	5c後	木棺(礎床)	鉄剣		
	35	円	6.5	6c前～中	木棺		須恵器片	
C	22	方	9.4×7.5	—	木棺	刀子		
	23	円	9.5	—	木棺		須恵器片、土師器	
	24	円	11.0	—	木棺3		須恵器、土師器片	
	29	方	6.5×5.7	—	—		須恵器片	
	30	方	7.0×5.2	—	—		須恵器	
	31	円	9.0	5c後	—	鉄製品	須恵器	
	33	円	8.2	6c前	木棺3		須恵器、土師器	
	34	円	6.5	6c中	木棺	須恵器		須恵器は枕?
D	17	円	10.0	5c後	木棺	須恵器、刀子	円筒埴輪	
	18	円	8.0	6c前	木棺		円筒埴輪片、須恵器、土師器片	
	19	円	12.0	—	木棺2	鉄鏃5～	須恵器片	
	39	方	6.5×5.5	—	—		須恵器片	
	40	方	7.7×7.4	—	木棺		土師器片	
	43	方	6.0×5.0	5c後	木棺	土師器	須恵器片、土師器	土師器は枕?
	46	方	8.5×7.5	—	木棺		須恵器片	
	47	方	5.5×3.8	—	木棺		須恵器片	
E	26	円	11.5	—	—			
	28	円?	8.5?	5c末	木棺2	鉄刀	円筒埴輪、須恵器、土師器片	
	44	円	9.0	—	木棺			
	45	円	8.0	—	木棺		須恵器片	

■…本文中で紹介している古墳



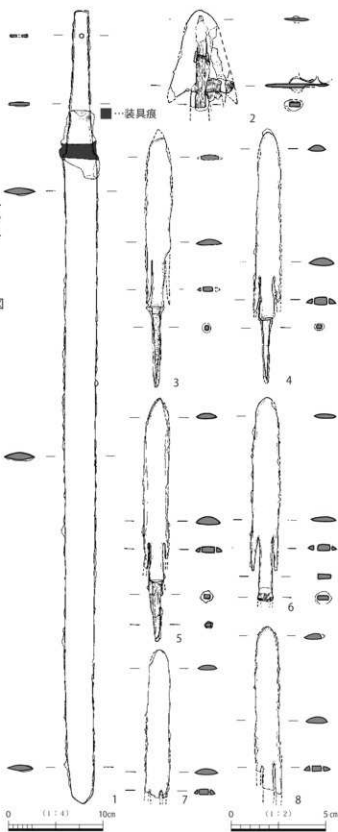


第144図 結古墳群A地区10号墳 地形測量図
(1:300)

設は木棺直葬で、墳丘のほぼ中央に築かれ、主軸が南西―北東方向である。主体部の南側が削平されており、墓域は長さ約330cm、幅190cm以上、木棺は長さ約270cm、幅約65cmである。

木棺内に鉄剣1振と刀子1点が、木棺外に鉄鐮8点が副葬されていた(第145図)。鉄剣(1・長さ84.0cm)は完存しており、切先を西に向けて木棺のほぼ中心に置かれていた。鉄鐮は木棺の南東側にまとめて置かれていた。鉄鐮のうち、2は平根鐮で、川畑分類(川畑2009)では短茎長三角D式で、残存長5.4cmである(以下、鉄鐮の分類は同論考を参照する)。刃部に別個体の矢柄2点が付着している。残りの7点は全て刃部が細長く深い腸袂を備えており、腸袂柳葉C式の4型式である。掲載したものは遺存状態の良い6点で(3～8・長さ7.9～13.2cm)、3～5の茎部には糸巻痕が残っている。

築造時期は副葬された鉄鐮の型式と組み合わせから、5世紀中頃と考えられる。



第145図 結古墳群A地区10号墳 出土遺物
(1:2, 1は1:4)

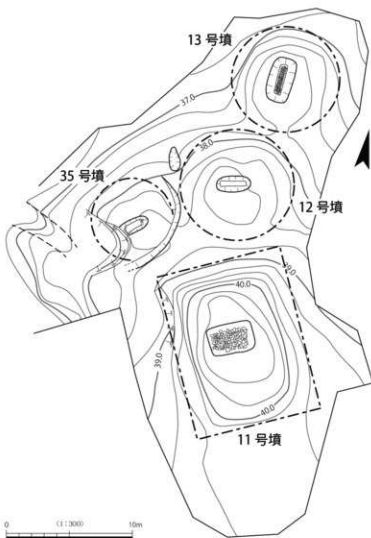
第2項 B地区（第146図）

B地区はA地区から北にのびる尾根（標高37～40m）である。南側の高所に方墳1基（11号墳）が築かれ、その北側に円墳3基（12・13・35号墳）がある。以下、主だった古墳について記述する。

（1）古墳と出土遺物

11号墳（第147・148図 図版13・14・27・43・44）

B地区の最高所（標高約40m）に築かれた方墳である。墳丘規模は長辺約13.2m、短辺約10.0mあり、古墳群の中で最も大きい。埋葬施設は礫櫛で、墳丘の中央やや北寄りに築かれる（第147図）。主軸が南西―北東方向で古墳の短辺とほぼ一致している。礫櫛の内法は長さ約310cm、幅約160cm、深さ約50cmだが、内部に転落した石材が多数あったため、本来はもう少し深い。底面にも

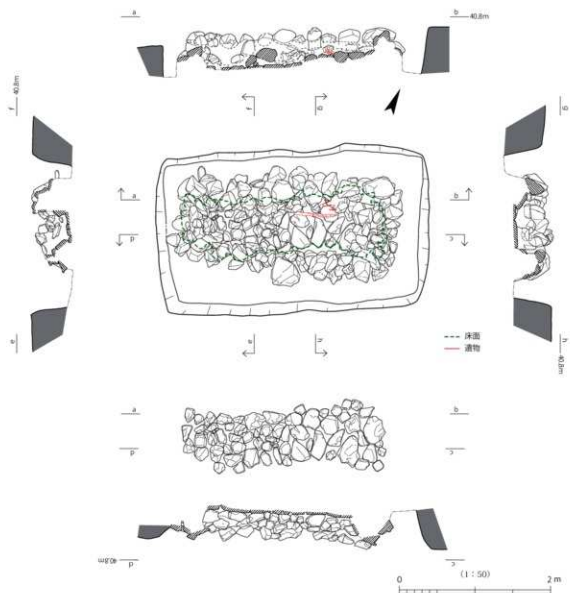


第146図 結古墳群B地区 地形測量図（1：300）

礫を敷き詰め、側壁の持ち送りはほばない。蓋石がないため、木材等で蓋をしたと推測される。

木棺内に蛇行剣1振が、木棺外に刀子3点と鉄鎌13点以上が副葬されていた（第148図3～8）。蛇行剣（3・長さ52.7cm）は切先を西に向けて棺内の東側に置かれていた。刃部が3回弱く屈曲する。全体的に鞘や柄の木質が残存しているほか、柄部の側面には糸巻き痕が残っている。柄部の先端付近や刃部にはハエの囲蛹殻が付着しており、殞を示す資料として注目されている（坂本2024）。なお、蛇行剣は山陰地方では他に安来市五反田3号墳（池淵1998）、倉吉市頭根後谷6号墳（根鈴編1991）の2古墳でのみ出土している貴重なものである。刀子や鉄鎌は礫櫛の北東側で棺床面より高いレベルから散らばって出土したため、元は棺上に置かれていたものが落ち込んだ可能性がある。刀子は遺存状態の良い2点を掲載した。長さ13.5cm以上の大型品（4）と6.7cmの小型品（5）がある。鉄鎌は細片となったものも多いが、全て7cm前後の長い頸部を持つ片刃のもので、長頸C式である。掲載したものは遺存状態の良い3点で（6～8・長さ9.6～11.9cm）、全て矢柄を樹皮で巻いて固定しており、7のように塗布された赤色顔料が残っているものもある。

築造時期は副葬された鉄鎌の型式から、5世紀後半と考えられる。



第147図 結古墳群B地区11号墳礫床 平面図・見通し図 (1:50)

13号墳 (第148図 図版14・43)

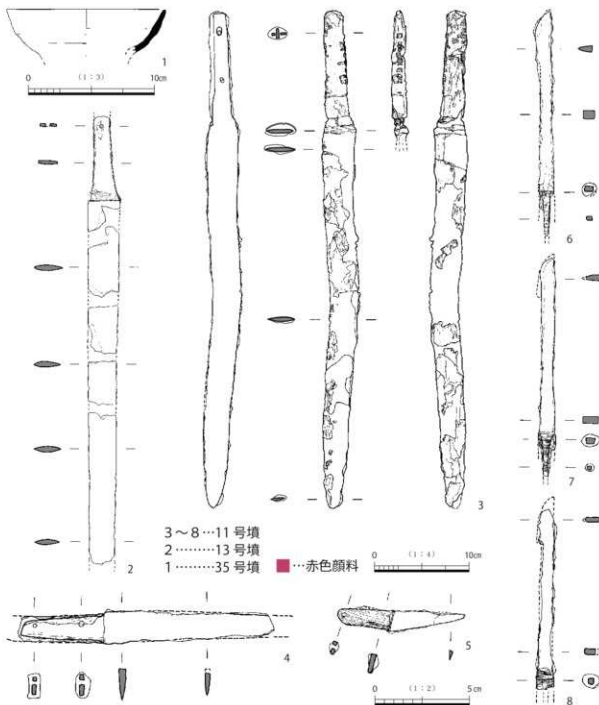
12号墳の北隣の尾根上(標高約37m)に築かれた直径約8.6mの円墳である。埋葬施設は礫床を持つ木棺直葬で、床面には5～10cmほどの小礫が敷き詰められている。墳丘のほぼ中央に築かれ、主軸が南北方向である。墓域は長さ約330cm、幅約203cm、木棺は長さ約213cm、幅約50cmである。

第148図2は礫床に副葬された鉄剣で、残存長45.4cmである。切先を北に向けて礫床の東辺の南寄りに置かれていた。

築造時期は鉄剣が両関であること、須恵器が出土していないことから、5世紀後半と推定される。

35号墳 (第148図 図版27)

12号墳の西側斜面(標高約38m)に築かれた直径約6.5mの円墳で、後背の丘陵や12号墳とは円弧状の周溝で区画している。埋葬施設は木棺直葬で、両小口側には人頭大の礫が置かれており、木棺の支え石と考えられる。墳丘のほぼ中央に築かれ、主軸が南西―北東方向である。主体部の南西側



第148図 結古墳群B地区 出土遺物 (1:2、1は1:3、2・3は1:4)

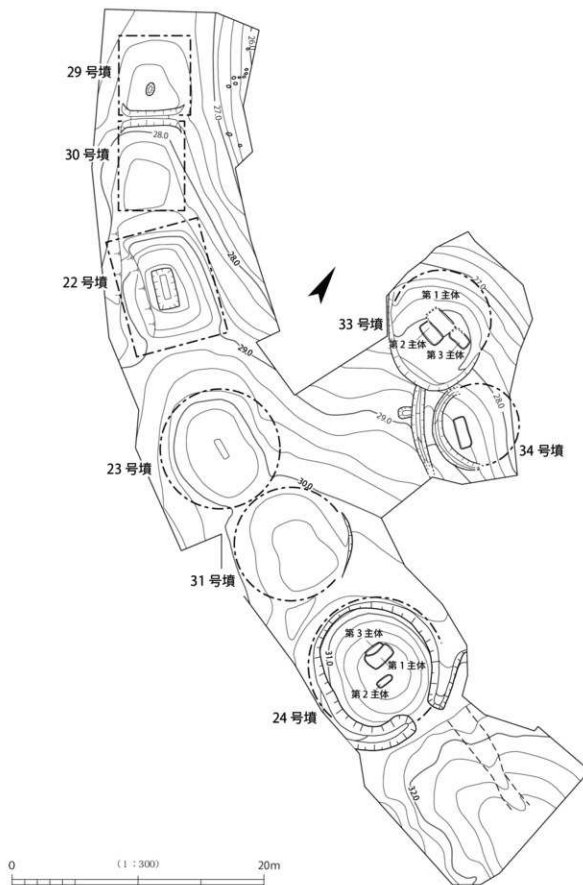
が削平されており、墓壙は長さ 225cm以上、幅約 124cm、木棺は長さ約 203cm、幅約 65cmである。

第148図1は墳丘上から出土した須恵器の甕で、大谷分類 A3型にあたる。

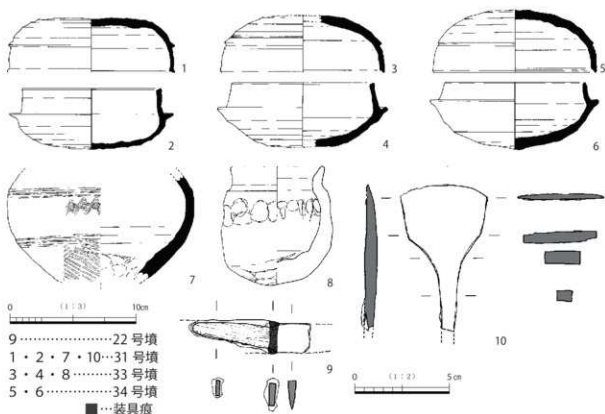
築造時期は甕から大谷編年の出雲2期、6世紀前半～中頃と考えられる。

第3項 C地区 (第149図)

C地区(調査当時はA地区)はB地区から北西にのびる尾根やその北斜面(標高27～31m)である。尾根上に円墳3基(23・24・31号墳)、方墳3基(22・29・30号墳)が並び、北斜面には円墳2基(33・



第149図 結古墳群C地区 地形測量図 (1:300)



第150図 結古墳群C地区 出土遺物1 (1:3、9・10は1:2)

34号墳)が隣り合って築かれている。以下、主だった古墳について紹介する。

(1) 古墳と出土遺物

22号墳 (第150図 図版45)

B地区から北西にのびる尾根上(標高約29m)に築かれた長辺9.4m、短辺7.5mの方墳である。埋葬施設は木棺直葬で、墳丘のほぼ中央に築かれており、主軸が北西-南東方向で古墳の長辺と一致している。墓壇は長さ約336cm、幅約167cm、木棺は長さ約204cm、幅約53cmである。

木棺外に小型の刀子1点が副葬されていた(第150図9)。

31号墳 (第150図 図版45)

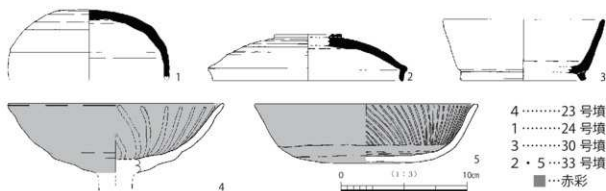
23号墳の南東側の尾根上(標高約30.5m)に隣り合って築かれた直径約9.0mの円墳で、尾根の上方とは円弧状の周溝で区画している。埋葬施設は確認できなかった。

第150図1は周溝内から出土した須恵器の蓋杯の蓋で、大谷分類A2型にあたる。2・7・10は墳丘上から出土した。2は須恵器の杯身で、大谷分類A1型にあたる。7は須恵器の腿で、底部を叩き出して丸底に成形しており、大谷分類A1型にあたる。10はへら状の鉄製品だが、用途は不明である。

築造時期は蓋杯や腿から、大谷編年の出雲1期中段階、5世紀後半まで遡るとみられる。

33号墳 (第150図 図版45)

31号墳の北側の斜面下方(標高約28m)に築かれた直径約8.2mの円墳で、後背の丘陵や隣り合う34号墳とは円弧状の周溝で区画している。埋葬施設は木棺直葬3基で、主軸は3基とも東西方向である。中心主体は最も規模が大きく、墳丘の中央に近い第1主体だと考えられ、墓壇は長さ187



第151図 結古墳群C地区 出土遺物2 (1:3)

cm以上、幅112cm以上、木棺は長さ約161cm、幅約46cmである。第2主体は第1主体の南側に築かれ、重複関係から第1主体より後に築かれ、墓壇は長さ約204cm、幅約120cm、木棺は長さ約152cm、幅約59cmである。第3主体は第1主体の東側につくられ、第1主体より後のもので、墓壇は長さ約170cm、幅約76cm、木棺は長さ約90cm、幅約47cmである。

第150図3・4は墳丘上から出土した須恵器の蓋環でセットである。大谷分類A2a型にあたる。8は墳丘上から出土した手づくね土器である。

築造時期は蓋環のセットから、大谷編年の出雲2期A、6世紀前半と考えられる。

34号墳 (第150図 図版28・45)

33号墳の南東側(標高約28m)に隣り合って築かれた直径約6.5mの円墳で、後背の丘陵や33号墳とは円弧状の周溝で区画している。埋葬施設は木棺直葬で、墳丘の南西寄りに築かれており、主軸は北西-南東方向である。墓壇は長さ約245cm、幅約109cm、木棺は長さ約153cm、幅約49cmである。

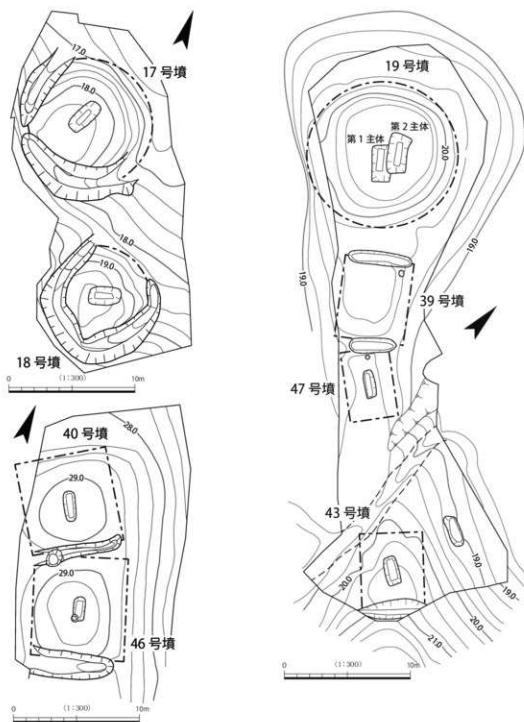
第150図5・6は木棺内から出土した須恵器の蓋環でセットである。大谷分類A2b型にあたる。棺底面の頭位側(南東側)に並べられており、土器枕として使用したと考えられる。

築造時期は蓋環のセットから、大谷編年の出雲2期B～C、6世紀中頃と考えられる。

(2) 古墳に伴わない遺物 (第151図)

C地区では古墳の墳丘上などから古墳と直接的な関連はないと考えられる遺物がいくらか出土した(第151図)。1は24号墳の墳丘東側から出土した須恵器の蓋環の蓋で、大谷分類A4型にあたる。2は33号墳の墳丘上から出土した蓋環C類の蓋で、国府編年第2型式にあたる。3は30号墳の墳丘上から出土した蓋環C類の環で、国府編年第3型式にあたる。4は23号墳の周溝内から出土した土師器の高環で、国府編年第1型式にあたる。5は33号墳の北側で確認された土坑から出土した土師器の環で、国府編年第1型式にあたる。4・5は内外面を赤彩している。

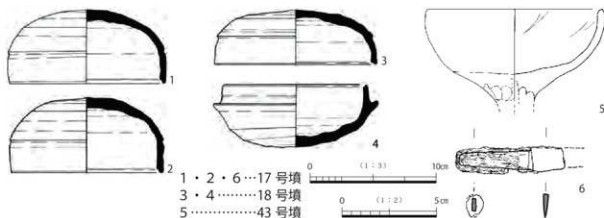
これらの遺物は7世紀から8世紀前半のもので、古墳の築造時期とは大きく隔たる。古墳群の位置する尾根上には古墳時代終末期から奈良時代頃の遺構は見つかっておらず、後世の遺物が古墳に流入する可能性は低い。そのため、後述するF・G地区の集落に居住していた人々が古墳上で何らかの活動を行った可能性もある。



第152図 結古墳群D地区 17・18号墳(左上)、19・39・43・47号墳(右)、
40・46号墳(左下) 地形測量図(1:300)

第4項 D地区(第152図)

D地区(調査当時はE地区)はC地区から北西にのびる尾根やその北・南斜面(標高18~29m)である。円墳7基、方墳10基の計17基が築かれ、古墳群の中で最も古墳が密集している地区である。残置森林の中に9基の古墳が現地保存されることとなったため、発掘調査されたのは残置森林の北斜面にある円墳2基(17・18号墳)、残置森林の北側の尾根上に並ぶ円墳1基(19号墳)と方墳3基(39・



第153図 結古墳群D地区 出土遺物（1・3、6は1:2）

43・47号墳）、残置森林の南側に築かれた方墳2基（40・46号墳）の計8基である。以下、主だった古墳について記述する。

（1）古墳と出土遺物

17号墳（第153図 図版28・46）

残置森林の北側の斜面下方（標高約18m）に築かれた直径約10.0mの円墳で、後背の丘陵とは円弧状の周溝で区画している。埋葬施設は木棺直葬で、墳丘のほぼ中央に築かれ、主軸は南北方向である。墓壇は長さ約293cm、幅約131cm、木棺は長さ約147cm、幅約53cmである。

第153図1・2は木棺の北端から出土した須恵器の蓋環の蓋で、どちらも大谷分類A1型にあたる。逆さまに重ねた状態で木棺の上面に副葬されていた。6は木棺内から出土した刀子である。また、周溝内から多数の円筒埴輪片が出土しており、5～6個体が墳丘を囲うように置かれていたと考えられる。円筒埴輪の詳細については別稿で紹介しているが、出雲東部に分布する「中海系」埴輪と同系統のものである（下江2022）。

築造時期は蓋や円筒埴輪から、大谷編年の出雲1期中～新段階、5世紀後葉と考えられる。

18号墳（第153図 図版46）

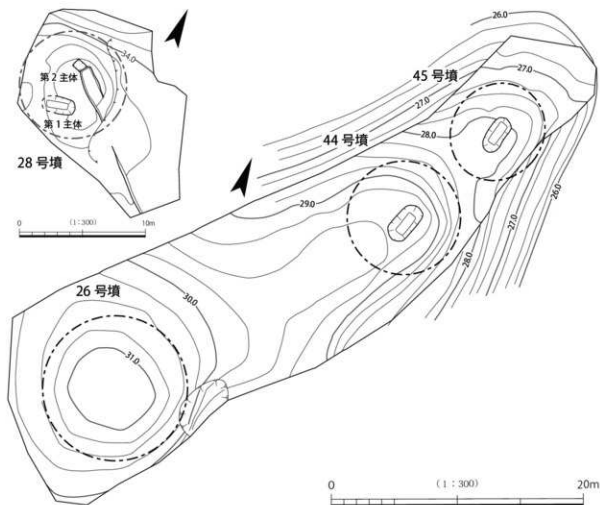
17号墳の南東側（標高約19m）に隣り合って築かれた直径約8.0mの円墳で、後背の丘陵とは円弧状の周溝で区画している。埋葬施設は木棺直葬で、墳丘のほぼ中央に築かれ、主軸は南西―北東方向である。墓壇は長さ約255cm、幅約143cm、木棺は長さ約149cm、幅約50cmである。

第153図3・4は周溝内から出土した須恵器の蓋環でセットである。大谷分類A2a型にあたる。また、主体部上から円筒埴輪片や土師器の壺片が出土した（下江2022）。

築造時期は蓋環のセットや円筒埴輪片から、大谷編年の出雲2期A、6世紀前半と考えられる。

19号墳

D地区の尾根の北西端（標高約20m）に築かれた直径約12.0mの円墳である。埋葬施設は木棺直葬2基で、重複関係から第1主体が先に築かれた。主軸はどちらも北西―南東方向で、中心主体は墳丘中央の第1主体と考えられる。第1主体の墓壇は長さ約289cm、幅150cm以上、木棺は長さ約176cm、幅約51cmで、第2主体の墓壇は長さ約325cm、幅約172cm、木棺は長さ約187cm、幅約



第154図 結古墳群E地区 28号墳（左上） 26・44・45号墳 地形測量図（1：300）

51cmである。

第1主体の墓域内から長頸鐏が5点以上出土したが、刃部を欠くため、型式等は不明である。

43号墳（第153図 図版28・46）

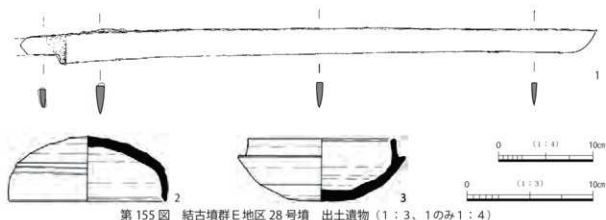
残置森林のすぐ北側の尾根上（標高約20.0m）に築かれた長辺約6.0m、短辺約5.0mの方墳で、尾根の上とは溝で区画している。埋葬施設は木棺直葬で、墳丘のほぼ中央に築かれ、主軸は北西—南東方向で古墳の長辺と少しずれている。墓域は長さ約239cm、幅約100cm、木棺は長さ約171cm、幅約43cmである。

第153図5は木棺内から出土した土師器の高坏である。棺底面の頭位側に脚部を打ち欠いたうえで伏せて置いており、土器枕として使用したと考えられる。

築造時期は高坏から、5世紀後半と考えられる。

第5項 E地区（第154図）

E地区（調査当時はD地区）はA～D地区から谷を挟んで北側の尾根（標高28～34m）である。西側の高所に円墳1基（28号墳）が築かれ、その約125m東側の尾根上に円墳3基（26・44・45号墳）



第155図 結古墳群E地区28号墳 出土遺物 (1:3、1のみ1:4)

が並んでいる。以下、主だった古墳について紹介する。

(1) 古墳と出土遺物

28号墳 (第155図 図版14・43・46)

E地区の最高所(標高約34m)に築かれた古墳で、墳丘が大きく削平されているため、墳形や墳丘規模が明確でないが、直径約8.5mの円墳と考えられる。埋葬施設は木棺直葬2基で、第1主体は墳丘の南側に築かれ、主軸は東西方向である。主体部の西側を削平されており、墓壇は長さ170cm以上、幅約128cm、木棺は長さ約158cm、幅約58cmである。第2主体は墳丘の北側につくられているが、上面を大きく削平されているため、規模や形状は不明瞭である。

第155図1は第1主体に副葬された鉄刀で、残存長61.2cmである。柄部以外は完存しており、切先を西に向けて木棺内の南縁に置かれていた。2・3は墳丘上から出土した須恵器の蓋環でセットである。大谷分類A1型にあたる。また、墳丘上からは円筒埴輪片が2個体分ほど出土した。17号墳出土のものと同じく「中海系」であるが、17号墳より後段階のものである(下江2022)。

蓋環のセットや円筒埴輪片から、大谷編年の出雲1期新段階、5世紀末葉頃の築造だと考えられる。

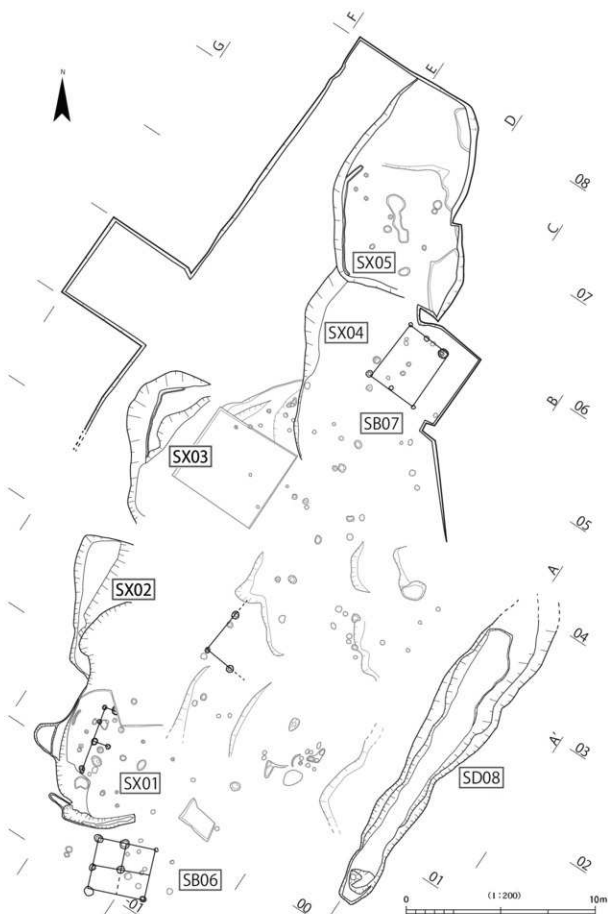
第3節 集落遺跡の調査

集落遺跡は尾根の先端に広がる緩斜面上で確認され、立地によって3地区(F～H地区)に区別されている。なお、整理過程でG・H地区の呼称を入れ替えた。

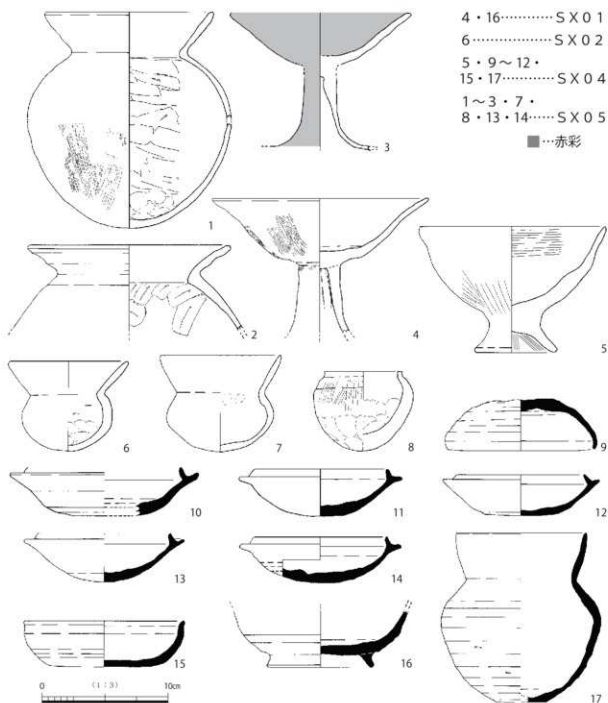
第1項 F地区 (第156図 図版29・30)

F地区はA地区から東にのびる尾根の先端に位置し、標高13～18mの緩斜面上に立地する。F地区では、古墳時代終末期から奈良時代にかけての須恵器・土師器を伴う加工段5基と掘立柱建物跡2棟が確認された。南東で見つかった溝状遺構からは縄文土器・石器も出土している。

5m間隔のグリッドを地形に合わせて任意に設定し、南西から北東に向けてアラビア数字(01、00、01・・・)を、南東から北西に向けてアルファベット大文字(A'、A、B・・・)を付与した(註1)。グリッドの名称は南隅の交点の番号を基準としている。



第156図 結遺跡F地区全体図 (1:200)



第157図 結遺跡F地区加工段 出土遺物(1:3)

(1) 奈良時代頃の遺構と出土遺物

加工段 SX01 (第157図 図版30・46)

調査区の南西端(C-01～00・D-01～01グリッド)で確認した加工段である。平面形は西側が突出した半円形で、南北方向に約7.6m、東西方向に約5.4mである。南側には壁体溝を備えているほか、西側の突出部に2段ほどの小さな平坦面を確認した。最下段の広い平坦面には20基ほどの柱穴が確認され、1間以上×2間(梁間0.5m以上、桁行3.5m)の柱穴列が復元でき、建物跡の可能性もある。その北端で後述するSX02と重複しており、SX02より後につくられた。

第157図4・16がSX01付近から出土した。4は土師器の高坏である。16は国府編年第2型式にあたる蓋環C類の坏である。

加工段 SX02 (第157図 図版30・46)

SX01の北側で確認した加工段である。平面形は長方形で、南北方向に約7.6m、東西方向に約4.3mである。柱穴や土坑は全く確認されていない。

手づくね土器1点がSX02から出土した(第157図6)。

加工段 SX03 (図版30)

SX02の北側で確認した加工段である。南側を削平されているため、平面形は不明確だが長方形に近く、南北方向に約8.3m、東西方向に約3.7mである。北西側に壁体溝と小さな平坦面を備えているが、柱穴や土坑は確認されていない。

加工段 SX04 (第157図 図版16・30)

SX03の東側で確認した加工段である。南側を削平されているため、平面形は不明確だが南北方向に10m以上の規模はある。加工段の南東側では約25基の柱穴が確認され、後述する掘立柱建物跡SB07が復元できた。ただしSX04とSB07は約4mほど離れており、関係するものかどうかは不明である。SX04はその北端でSX05と重複しており、SX05より前につくられた。

第157図5・9～12・15・17がSX04付近から出土した。5は土師器の低脚坏である。9～12は大谷分類A7型にあたる須恵器の蓋環である。15は国府編年第3型式にあたる無高台坏A類である。17は須恵器の直口壺で、国府編年第2型式以前のものである。

加工段 SX05 (第157図 図版16・30)

SX04の北側で確認した加工段である。平面形は長方形で、南北方向に約10.7m、東西方向に約5.6mである。西側に壁体溝を備え、平坦面には約10基の土坑や柱穴が確認されたが、建物跡等は復元できなかった。

第157図1～3・7・8・13・14がSX05付近から出土した。1・2は土師器の甕、3は土師器の高坏で内外面を赤彩している。7・8は手づくね土器である。13・14は大谷分類A7型にあたる須恵器の坏身である。

掘立柱建物跡 SB06 (図版30)

SX01の南側で確認した。2間×2間(梁間2.7m、桁行3.0m)の小型の総柱建物跡で、方位は北西―南東方向である。

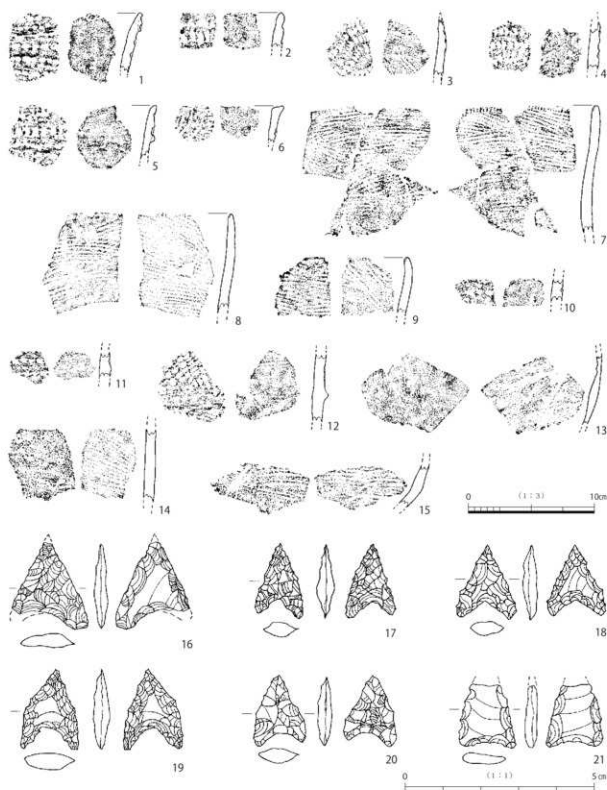
掘立柱建物跡 SB07

SX04の東側で確認した。2間×1間(梁間2.7m、桁行3.4m)の側柱建物跡で、方位は南西―北東方向である。SX04とは約4m離れており、関連するかは不明である。

(2) 縄文時代の遺構と出土遺物

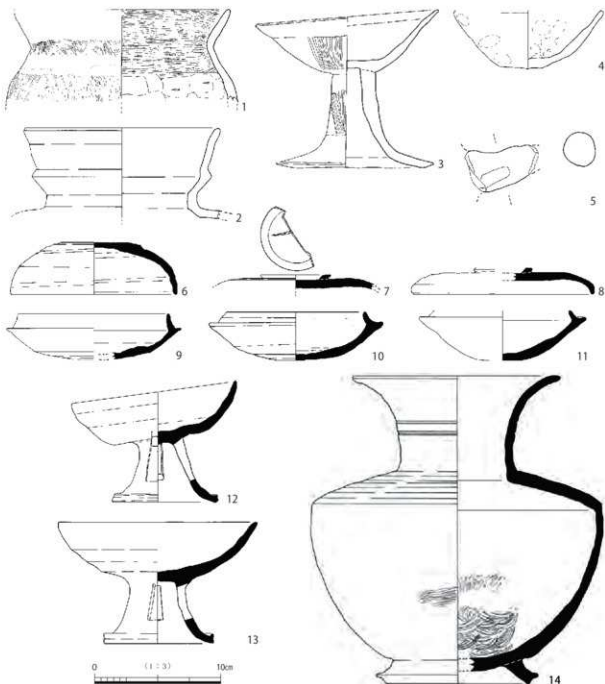
溝 SD08 (第158図 図版30)

F地区の南東端(A00～04・A00～04グリッド)で確認された溝で、幅3.4mで南西―北東方向に18m以上のびる。この溝の内外で多くの縄文土器や石器が出土した(第158図)。



第158図 結遺跡F地区SD08 出土遺物 (1:3、16~21は1:1)

第158図1～15は縄文時代前期前葉の土器で、西川津式である。1～9は口縁部片である。1は折り返し口縁を持ち、口縁部および口縁部下に横位方向の押し引き文が施される。2～4も押し引き文が施され、2は1と同様に押し引き文が横位方向に展開するが、3・4は半円状の意匠を描く。5は横位方向の押し引き文を持つが、やや下部に隆帯が作出されており、押し返し口縁の痕跡的な形



第159図 結道跡F地区遺構外 出土遺物(1:3)

態となる。また、口縁端部付近の内面には細かい縦刻みを施している。6は外面に二枚貝腹縁を用いたロッキング技法で施文される。1～6は基本的に器面をナデ調整で仕上げるが、内面は条痕調整が残るものもある。7～9は内外面ともに横位方向を主体とする二枚貝の条痕調整で、口縁端部付近の内面に細かい縦刻みが施文される。10～15は頸部から胴部片であり、10・11は横位方向の押し引き文、12は斜位に多重の押し引き文を鋸歯状に施し、幾何学的な文様構成となる。また、12の中段には隆帯が作出される。10～12はナデ調整、13～15は内外面の条痕調整を基調としており、15は頸部と胴部を分ける屈曲部である。時期としては、1～4・10～12が西川津式中段階、5～9・13～15は西川津式新段階に細別できると考えられる(註2)。

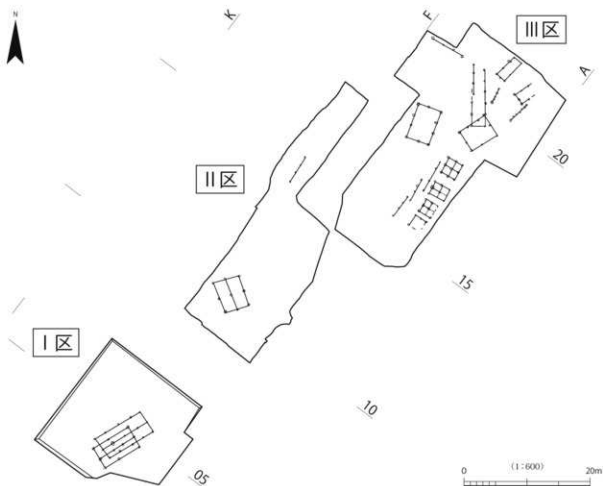
第158図 16～21は石器で、16～20は黒曜石の石鏃、21は安山岩の石鏃未成品である。16～18の側縁は直線的に加工され、19・20の右側縁は直線的で、左側縁が外湾する。16～20は基部に挟りが施されるが、未成品である21の挟りは浅く、加工途中であったと考えられる。SD06の内外からは、他に200点以上のチップや剥片、石器（ほとんどが石鏃）が出土しており、この溝状遺構の周辺で石器製作が行われていたことは間違いないだろう。

(3) 遺構外出土の遺物（第159図 図版47）

第159図はF地区の加工段SX01～05や溝SD08外の包含層から出土した遺物である。1・2は土師器甕の口縁部である。3は土師器の高坏、4は土師器の坏である。5は甕の把手と考えられる。6・9は大谷分類A6型にあたる須恵器の蓋坏である。7・8は国府編年第2型式にあたる蓋坏C類の蓋であり、7は蓋のつまみ内にヘラ記号が刻まれている。10・11は大谷分類A7型にあたる須恵器の坏身である。12・13は須恵器の高坏で、12は大谷分類A4型、13は大谷分類A5型にあたる。14は国府編年第3型式にあたる須恵器の長頸壺である。

第2項 G地区（第160図）

G地区はE地区から南東にのびる尾根の先端付近に位置し、標高11～17mの緩斜面上に立地する。



第160図 結遺跡G地区 全体図（1：600）

3つの調査区に分かれ、南西側から順にⅠ～Ⅲ区とした。調査当時はH地区と呼称されていたが、整理過程で地区名を変更した。

各調査区で多くの土坑や柱穴が見つかり、9棟の掘立柱建物跡や柱穴列が復元できた。包含層から多くの須恵器や土師器が出土している。

5 m間隔のグリッドを地形に合わせて任意に設定し、南西から北東に向けてアラビア数字(01、02、03・・・)を、南東から北西に向けてアルファベット大文字(A、B、C・・・)を付与した。グリッドの名称は南隅の交点の番号を基準としている。

(1) Ⅰ区の遺構(第161図 図版31)

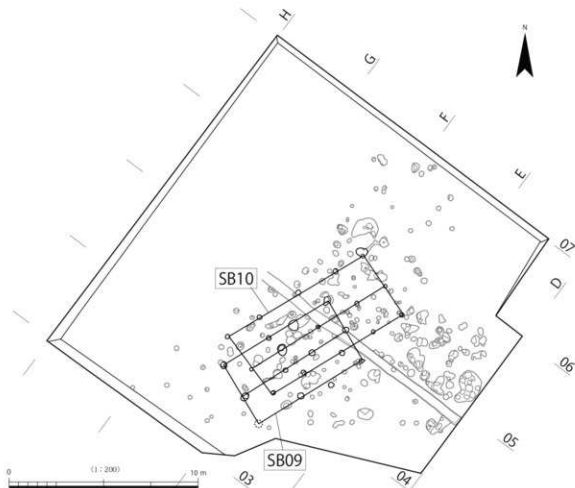
掘立柱建物跡 SB09

Ⅰ区のやや南寄り(E03～04、F03～04グリッド)で確認した掘立柱建物跡である。2間×3間(梁間3.6 m、桁行6.4 m)の建物跡で、方位は南西―北東方向である。

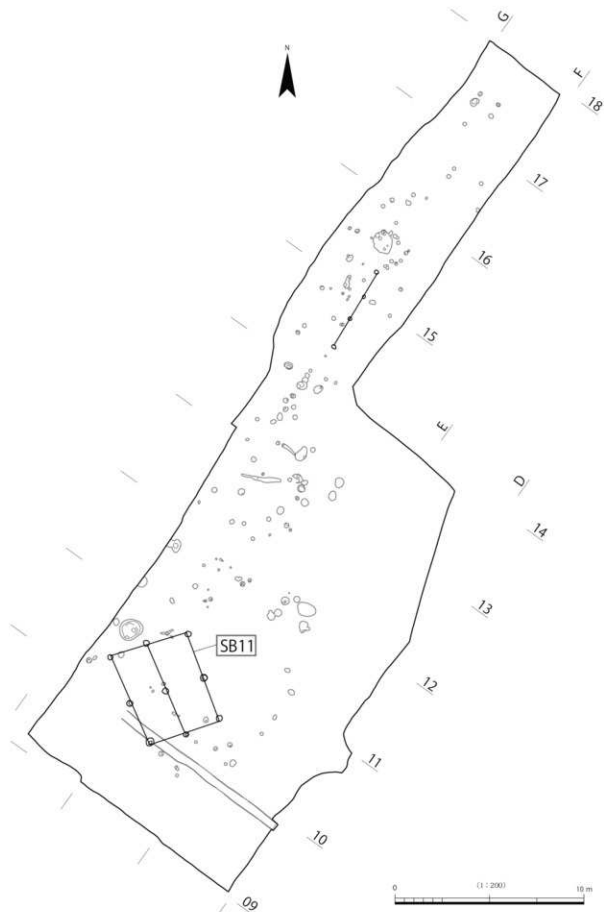
掘立柱建物跡 SB10

Ⅰ区のほぼ中央で確認した掘立柱建物跡で、SB09より少し北側にずらして建てられている。2間×4間(梁間3.8 m、桁行8.2 m)の建物跡で、方位は南西―北東方向である。

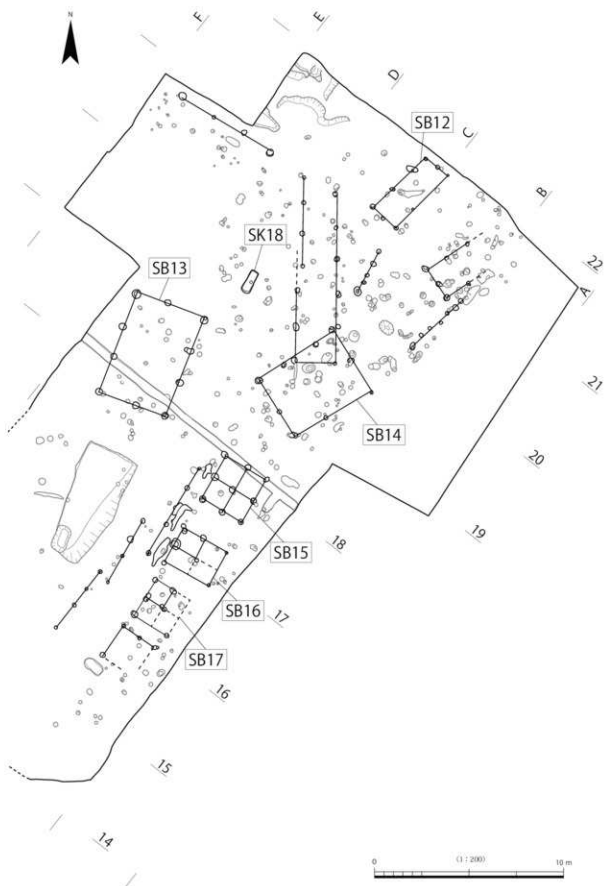
SB09・10はほぼ同じ場所、同じ方位で建てられており、時期を置かず建て替えられた建物だと考



第161図 結遺跡G地区Ⅰ区 遺構配置図(下)(1:200)



第 162 図 結遺跡 G 地区 II 区 遺構配置図 (1 : 200)



第163図 結遺跡G地区Ⅲ区 遺構配置図 (1:200)

えられるが、順序は不明である。

(2) II区の遺構(第162図 図版31)

掘立柱建物跡 SB11

II区の南側(E09～10、F10グリッド)で確認した掘立柱建物跡である。2間×2間(梁間3.8m、桁行4.8m)の建物跡で、方位は北西―南東方向である。

(3) III区の遺構(第163図 図版32)

III区では6棟の掘立柱建物跡を復元できたほか、柱穴列も多く確認され、G地区の中で最も遺構が密集している調査区である。特に、後述するSB15～17は建物の規模や規格、方位が統一されているうえ、建物群を区画するような柱穴列や溝も確認されているため、計画的に建てられたことが伺える。また、墓と考えられる土坑SK18も見つかった。

掘立柱建物跡 SB12

III区の北東側(C21グリッド)で確認した掘立柱建物跡である。2間×3間(梁間1.6m、桁行3.9m)の側柱建物跡で、方位は南西―北東方向である。

掘立柱建物跡 SB13

III区のほぼ中央付近の西寄り(C17～18、D17～18グリッド)で確認した掘立柱建物跡である。2間×3間(梁間3.8m、桁行5.5m)の側柱建物跡で、方位は南西―北東方向である。

掘立柱建物跡 SB14

III区のほぼ中央付近、SB13の東側で確認した掘立柱建物跡である。2間×3間(梁間3.6m、桁行4.7m)の側柱建物跡で、方位は南西―北東方向である。

掘立柱建物跡 SB15

III区のほぼ中央付近、SB14の南西側で確認した掘立柱建物跡である。2間×2間(梁間2.4m、桁行2.6m)の総柱建物跡で、方位は南西―北東方向である。

掘立柱建物跡 SB16

SB15の南西側で確認した掘立柱建物跡である。2間×2間(梁間2.0m、桁行2.6m)の総柱建物跡で、方位は南西―北東方向である。

掘立柱建物跡 SB17

SB16の南西側で確認した掘立柱建物跡である。2間×2間(梁間2.0m、桁行2.2m)の総柱建物跡で、方位は南西―北東方向である。SB17の南西側で確認した柱穴列も2間×2間の建物跡に復元できる可能性がある。

以上のように、SB15～SB17は南西―北東方向へ一直線に並んで建物群を形成している。建物群の北西側には、建物群を区画するとも捉えられる柱穴列や溝が見つかった。加えて、SB15～17はほぼ同規模・同規格の建物でもあり、これらの建物群は計画的に建てられた可能性が高い。用途としては小規模な倉庫群であろうか。

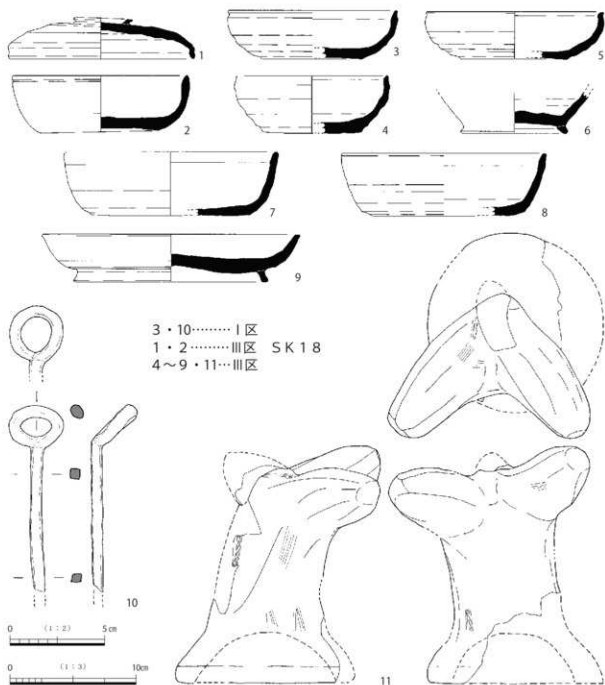
土坑 SK18

SB13の北東側で確認した土坑である。長さ約130cm、幅約50cmの長方形を呈する。土坑内の中

央やや北東寄りに須恵器の蓋環（第164図1・2）が置かれており、土壌墓の可能性が高い。

（4）出土遺物（第164図 図版48）

第164図はG地区から出土した遺物である。3・10はⅠ区から出土したもので、3は国府編年第2型式にあたる無高台杯A類、10は馬具の引手と考えられ、鉄棒の先端を反時計回りに折り曲げて先端を鍛接している。1・2はⅢ区のSK18内に蓋を閉じた状態で置かれていた須恵器の蓋環である。ただし、1は国府編年第2型式にあたる蓋環C類の蓋、2は国府編年第3型式にあたる無高台杯A類で、本来のセット関係ではないと推測される。4～9・11はⅢ区の包含層から出土した遺物である。



第164図 結遺跡G地区 出土遺物（1：3、10は1：2）

4・5は国府編年第2型式にあたる無高台坪A類である。6～9は国府編年第4型式にあたる須恵器で、6は蓋坪C類の坪、7・8は無高台坪A類、9は高台付皿A類である。11は3方向に突起が伸び、胴部に孔がない土製支脚で、岩橋氏による分類(岩橋 2003)のⅡA類にあたる。他にも図化できなかったが、土師器や須恵器の破片がコンテナ5箱分ほど出土している。

第3項 H地区(第165図)

H地区はE地区から南西にのびる尾根の先端付近に位置し、標高10m前後の緩斜面に立地する。調査前には茶畑や水田として利用され、地形改変も大きかった。4つの調査区に分かれ、東側から順にⅠ～Ⅳ区とした。調査当時はG地区と呼称されていたが、整理過程で地区名を変更した。

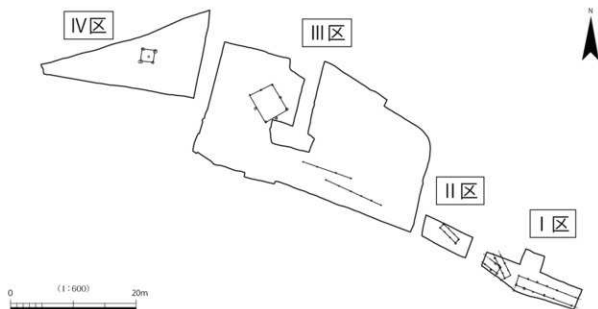
各調査区で溝や土坑、柱穴が多く見つかったが、場所によって疎密があり、掘立柱建物跡6棟や柱穴列が復元できた。堆積土から須恵器や土師器、陶磁器の破片が多数出土しているものの、遺構から出土した遺物は少ない。

(1) Ⅰ区の遺構(第166・167図 図版33・48)

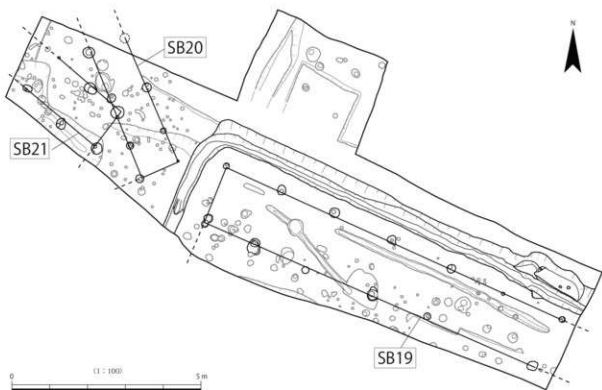
掘立柱建物跡SB19

Ⅰ区の東側で確認した建物跡である。梁方向に3.0m以上、桁方向に10.5m以上のびる方形の溝を掘りこんでつくった、周囲より一段低い場所に建てられた。1間×6間以上(梁間1.5m以上、桁行9.8m以上)の総柱建物跡で、方位は北西-南東方向である。建物を囲う溝は調査区外にも続いており、かなり大規模な建物だと考えられる。また、Ⅲ区の南東側でも同様に、周囲より一段低い方形の区画があり、建物跡は復元できなかったものの、5間(9.7m)の柱穴列が確認された(第170図)。

遺物に関しては、建物を囲う溝から土師質皿4点が出土した(第167図1～4)。全てほぼ同じ法量で、13世紀ごろのものと考えられる。



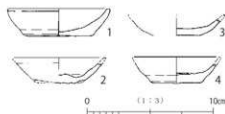
第165図 結遺跡H地区 全体図(1:600)



第166図 結遺跡H地区Ⅰ区 遺構配置図 (1:100)

掘立柱建物跡 SB20

Ⅰ区の西側で確認し、1間×3間以上(梁間1.1m、桁行3.6m以上)の総柱建物跡で、方位は北西-南東方向である。調査区外にも広がる可能性がある。

第167図 結遺跡H地区Ⅰ区
出土遺物 (1:3)

掘立柱建物跡 SB21

Ⅰ区の西端で確認し、1間×2間以上(梁間1.1m、桁行2.4m以上)の総柱建物跡で、方位は北西-南東方向である。調査区外にも広がる可能性が高い。

SB20とは東端で重複しており、建物の規格もほぼ同一であるため、時期を置かず建て替えられたと考えられるが、順序は不明である。

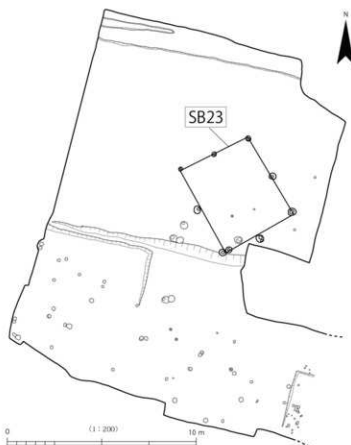
(2) Ⅱ区の遺構 (第168図 図版33)

掘立柱建物跡 SB22

Ⅱ区の中央付近の北寄りで確認し、1間×3間(梁間0.8m、桁行3.4m)の総柱建物跡で、方位は北西-南東方向である。調査区外にも広がる可能性がある。



第168図 結遺跡H地区Ⅱ区 遺構配置図 (1:100)



第169図 結遺跡H地区Ⅲ区西側 遺構配置図(1:200)

(3) Ⅲ区の遺構(第169・170図 図版33)

掘立柱建物跡 SB23

Ⅲ区の北西側で確認し、2間×2間(梁間4.0m、桁行4.8m)の側柱建物跡で、方位は北西―南東方向である。

(4) Ⅳ区の遺構(第171図 図版33)

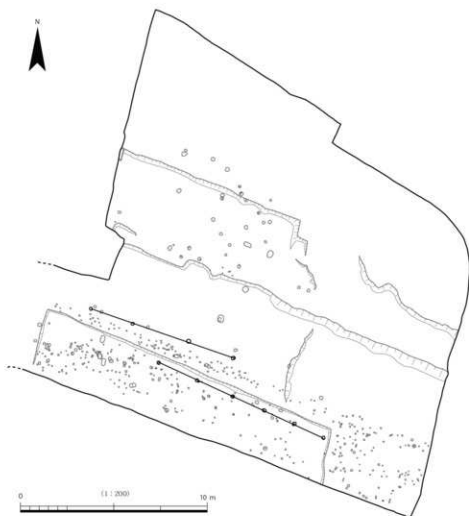
掘立柱建物跡 SB24

Ⅳ区の中央付近で確認し、1間×1間(梁間1.9m、桁行1.9m)の建物で、方位は南北方向である。平面がほぼ正方形で、建物の中心にも柱穴が1基確認され、小規模な倉庫といった用途を想定できる。

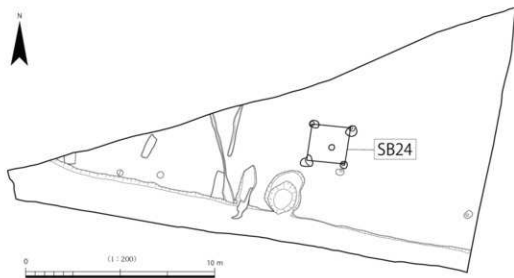
第4節 まとめ

(1) 古墳群

結遺跡は古墳群(A～E地区)と集落遺跡(F～H地区)で構成される遺跡である。そのうち、古墳群は尾根上に広く分布し、墳丘規模10m前後の円墳・方墳が34基築造された。築造時期が判明した古墳は多くないが、最も標高の高い場所にある10号墳が5世紀中頃に築かれたのを初めとして、5世紀後半から6世紀中頃にかけて次々と尾根上に密集して築造されたと考えられる。確認できた埋葬施設は11号墳の礫椁と13号墳の礫床を除いて全て木棺直葬である。以上のような特徴から、結古墳群は古墳時代中期後半から後期前半にかけて築かれた初期群集墳といえる。



第170図 結遺跡H地区Ⅲ区東側 遺構配置図 (1:200)



第171図 結遺跡H地区Ⅳ区 遺構配置図 (1:200)

また、古墳群からは築造時期と大きく隔たりのある7世紀～8世紀代の土器も出土している。これらの土器は周辺から流入した可能性が低く、F地区やG地区の集落に住んでいた人々が古墳上で何らかの活動を行ったことを示唆している。また、結本谷1号墳でも同様に8世紀代の須恵器が出土しており、関連性が注目される。

(2) 結11号墳の礫櫓(第172図)

結古墳群のなかでも、11号墳のみ木棺を礫櫓で囲っていることは注目される。この礫櫓は①荒い礫石を使用、②蓋石を使わない、③側壁に持ち送りはほぼみられない、④床面にも礫石を敷くといった特徴がある。古墳時代中期～後期前半頃の山陰地方においては、この4つの特徴を持つ礫櫓に類似した埋葬施設は6例ほど確認できた(第172図)。これらの礫櫓は細部の形態が多様であるうえ、50m規模の大型墳から10m規模の小型墳まで幅広く使われており、一見すると共通点はないようにみえる。しかし、墳形や墳丘規模、副葬品等も組み合わせて鑑みると、以下の3パターンに分類できる。

- ①墳丘規模が40m以上の大きな前方後方墳の副埋葬であり、副葬品は鉄製品のみである。古曾志大谷1号墳の前方部埋葬施設が当てはまる。
- ②墳丘規模が30～40mの中規模な前方後方墳・方墳の中心埋葬で、副葬品は玉類や鉄製品、その他装身具を持つ。塚山古墳や菅田ヶ丘古墳が当てはまる。
- ③墳丘規模が10～20mの小規模な円墳・方墳の中心埋葬である。副葬品は玉類や鉄製品を複数所有し、同規模の古墳と比べて質・量で優越する。結11号墳や奥才1号墳、伝宇牟加比売命御陵古墳が当てはまる。

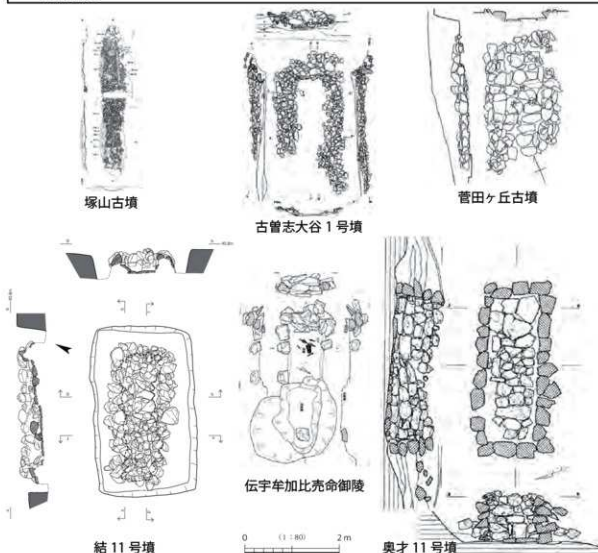
古墳時代中期末から後期前半における出雲では、舟形石棺→舟形木棺→箱形木棺の順に緩やかな序列・階層があったと想定されている(大谷2015)。礫櫓をもつ古墳はパターン①・②のように舟形石棺を使えなかったと考えられる大規模墳の副埋葬や中規模墳の中心埋葬である場合がひとつある。さらにパターン③のように小規模墳ではあるが、埋葬施設が木棺直葬のみの同規模な古墳より副葬品の質や量で優越している場合もある。これらの傾向から、舟形石棺を使えるほど階層が高くないが、木棺のみの階層よりも上位に位置する中間層ともいえる人物たちが、木棺を礫櫓で囲うことで、木棺のみの階層との差を表した可能性がある。

結11号墳では、山陰では3つしか出土例がない蛇行剣も副葬されている。蛇行剣はその分布状況から畿内で製作されて各地に配布されたとみられており(前坂1994)、結11号墳の被葬者はそうした珍しい器物を入手できる中間層的な立場にあった人物だったと想定できる。

(3) 集落遺跡

集落遺跡のうち、尾根先端の東向き緩斜面に広がるF地区では、7世紀代から8世紀前半にかけての遺物を伴う加工段5基と掘立柱建物跡2棟が見つかった。出土遺物の大半は出雲5期のものであり、F地区の中心時期は7世紀前半だと考えられる。加工段の中には柱穴が伴うもの(SX01・04・05)と伴わないもの(SX02・03)がある。用途など両者の差異は明らかでないが、結西谷IV遺跡3区の状況と酷似しており、関連性が注目される(第4章4節)。溝SD08からは、斐川では類例の少ない縄文時代前期前葉の土器が出土しており、石器製作も溝周辺で行われたと考えられる。

バタ ー	古墳	時期	墳形	墳丘規模 (m)	埴輪・葺石	副葬品	礫柳の寸法 (内法)			木棺	備考
							長 (m)	幅 (m)	高 (m)		
①	古曾志大谷1号	5c後	前方後方	46	葺石・円筒埴輪	鉄刀・鉄鏃・刀子・鉄斧	2.55~	0.6	0.33	舟形	前方部副埋葬
②	塚山	5c中	方	33×33	円筒埴輪・人物埴輪	鉄刀・鉄鏃・槍・短甲・刀子・銅鏡・櫛・小玉・白玉	3.15	0.66	0.2	舟形	副埋葬の可能性あり
	菅田ヶ丘	5c後	前方後方	30	円筒埴輪	管玉・垂玉・小玉	2.3	0.8	0.3	箱形	
	結11号	5c後	方	13.2×10.0	×	蛇行剣・鉄鏃・刀子	2.7	0.7	0.3~	箱形?	
③	奥才1号	6c前	円	10	円筒埴輪	須恵器・管玉・切子玉・鉄刀・刀子	3.15	1.05	0.95	箱形	
	伝宇牟加比亮命御陵	6c前	方	16×16	円筒埴輪	鉄鏃・刀子	2.0~	0.65	0.5	箱形?	



第172図 古墳時代中期～後期の島根県における礫柳をもつ古墳一覧 (実測図は1:80)

尾根先端の南東向き緩斜面に位置するG地区では、多数の柱穴や土坑が確認され、掘立柱建物跡も9棟復元できた。特に、Ⅲ区で確認されたSB15～17は計画的に建てられた倉庫群であったと考えられる。出土遺物は8世紀代の須恵器が多く、なかでも国府編年第2・4型式のものが大半である。さらに、須恵器の蓋環を副葬した土墳墓と考えられるSK18も見つかった。

谷の入り口に広がる南西向き緩斜面のH地区でも、多数の柱穴や土坑、溝が確認され、掘立柱建物跡も6棟復元できた。周囲を溝で区画した大規模な掘立柱建物跡SB19は中世のものと考えられるが、他の遺構に関しては時期が不明確である。

このように、結遺跡の集落は地区ごとに時期や利用方法が異なる。特に、古墳時代終末期頃の加工段が確認されたF地区、奈良時代頃の掘立柱建物跡が確認されたG地区については、結西谷IV遺跡2・3区や堀切I遺跡、三井II遺跡、杉沢III遺跡といった付近の集落遺跡と、立地や時期、土地利用の方法等で共通点も見いだせる。これらの遺跡は7～8世紀の斐川における土地利用や集落の動向を考えうるうえで、重要な遺跡といえるだろう。(下江裕貴、第3節第1項(2)は、幡中光輔)

【註】

- (1) 調査当初はA01グリッドが調査区の南端であったが、調査中に南西側(00、-01)、南東側(A)に調査区を拡張したため、グリッド番号の付与が変則的になっている。
- (2) 西川津氏の細別時期については、(柳浦 2016)で示された型式内容に準拠した。

【参考文献】

- 大谷晃二 2015「多様な石棺と出雲型舟形石棺」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター 241～244頁
- 池淵俊一 1998「門生黒谷III遺跡の調査」『門生黒谷I遺跡 門生黒谷II遺跡 門生黒谷III遺跡(門生山根1号窯・門生黒谷1号窯・五反田古墳群)』島根県教育委員会・建設省松江国道工事事務所 207～268頁
- 岩橋孝典 2003「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について」『古代文化研究』第11号 島根県古代文化センター 55～82頁
- 川畑 順 2009「前・中期古墳副葬品の変遷とその意義」『史林』92-2 285～323頁
- 坂本豊治 2024「古墳時代における葬送儀礼―葬具の出土状況から見るその流れ―」『令和6年度瀬戸内海考古学研究会第10回大会 予稿集』瀬戸内海考古学研究会 55～62頁
- 下江裕貴 2022「結古墳群出土の円筒埴輪の型式学的検討」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第10集 出雲弥生の森博物館 13～26頁
- 穴道年弘 1990「島根県東部における古墳時代前半期の群集小墳について」『島根考古学会誌』第7集 島根考古学会 95～100頁
- 根鈴智津子編 1991「頭根後谷遺跡発掘調査報告書」倉吉市教育委員会
- 前坂高志 1994「蛇行剣小考」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズVI 同志社大学考古学シリーズ刊行会 313～332頁
- 柳浦俊一 2016「山陰地方縄文前期・西川津式の展開―押引き・刺突文土器を中心とした分析―」『古文化談叢』第75集 九州古文化研究会 75～95頁

附編2 三斗蒔古墳群の調査

第1節 古墳群の位置と調査の経緯

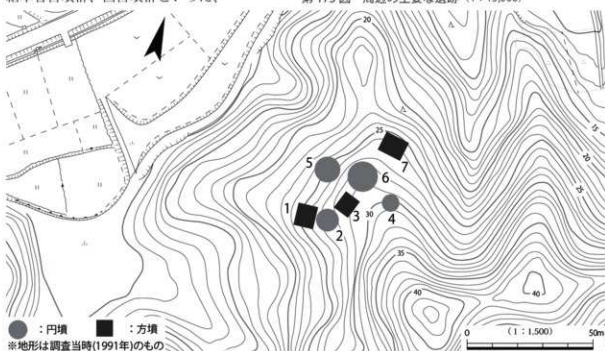
三斗蒔古墳群は出雲市斐川町直江字三斗蒔に所在し、結西谷Ⅳ遺跡・結本谷古墳群から北西に約350 mの丘陵に位置した古墳群である（第173図）。

古墳群は斐川南工業団地（現在の島根島津・スター精機 出雲工場）の造成に先立ち、1990～91年にかけて旧斐川町によって発掘調査された。なお開発範囲内では、他に結西谷Ⅱ・Ⅲ遺跡や結西谷2号墳、三井1遺跡が1986～91年にかけて断続的に発掘調査された。

仏經山（標高366 m）の北麓に広がる周辺の丘陵上には、結古墳群や結本谷古墳群、西古墳群といった、



第173図 周辺の主要な遺跡 (1:15,000)

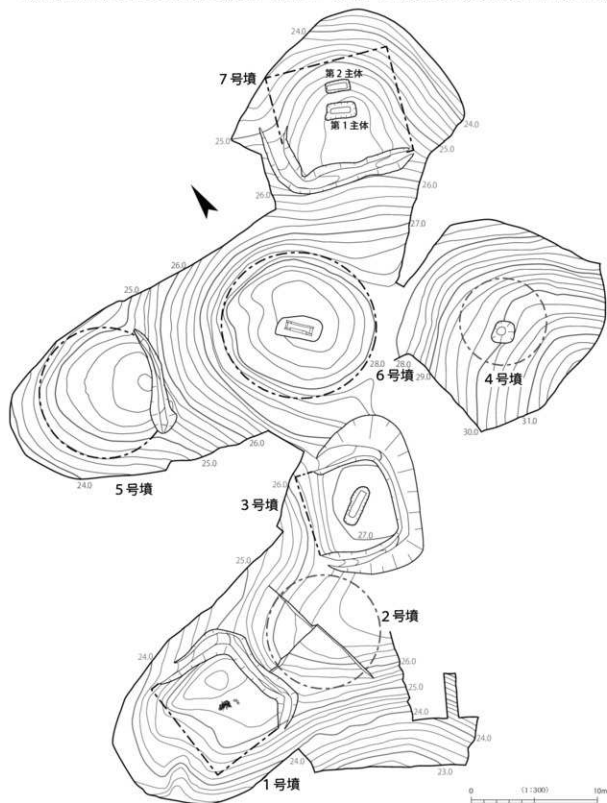


第174図 三斗蒔古墳群 全体図 (1:1,500)

古墳時代中期から後期前半頃の古墳群が多く分布し、出雲市内でも有数の古墳密集地帯でもある。

第2節 調査の概要

発掘調査では、北にのびる尾根の緩斜面（標高 24～31 m）に円墳 4 基、方墳 3 基の計 7 基の古墳



第175図 三斗蔦古墳群 地形測量図 (1:300)

が確認された（第174・175図・第12表）。以下、その概要を記述する。

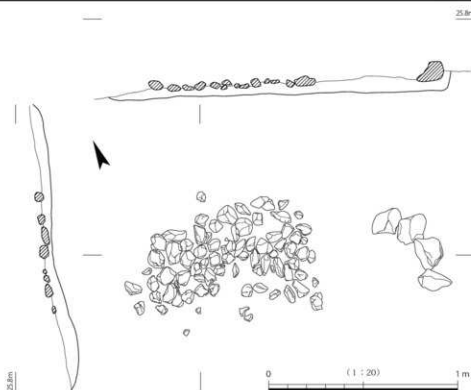
1号墳（第176図 図版34）

古墳群のうち、最も南側の尾根上（標高約25m）に築かれた長辺約8.7m、短辺約7.4mの方墳で、尾根の上方とはコの字状の周溝によって区画している。埋葬施設は礫床をもつ木棺直葬で、墳丘の中央に築かれ、主軸が東西方向で古墳の短辺の向きとほぼ一致している。上面を大きく削平され、墓壇底から10cm程しか残存していないが、墓壇は長さ182cm以上、幅151cm以上ある。東側が大きく削られているものの、西側は5～10cmの礫を敷いている。墓壇の東端には約20cmの礫が4つ円弧状に並べられており、石枕の可能性も考えられる。

墳丘から須恵器片・土師器片が少量出土しているが、1号墳に伴うものかは不明である。

第12表 三斗峙古墳群 一覧表

古墳	墳形	墳丘規模(m)	築造時期	埋葬施設	副葬品	出土遺物（墳丘）
1	方	8.7×7.4		木棺（礫床）		須恵器・土師器片
2	円	—		—		土師器片
3	方	8.0×7.0	6c前	木棺	鉄刀、鉄鏃、須恵器（坏身・蓋）	
4	円	—		—		
5	円	10.3		—		土師器片
6	円	12.3	5c中～後	組合式家形石棺	鉄剣	土師器（甕）
7	方	10.0×8.3	5c後	木棺2		須恵器（直口壺） 土師器（甕）



第176図 三斗峙1号墳 礫床（1：20）

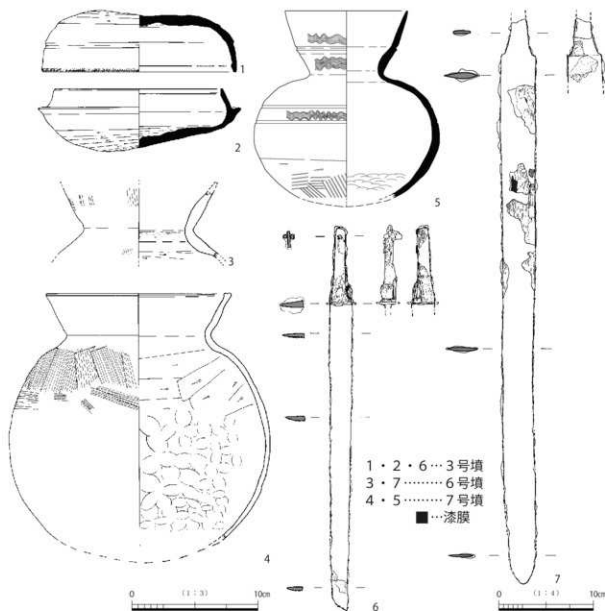
2号墳

1号墳の上方（標高約26m）に位置するが、主体部や周溝は確認されておらず、自然地形の可能性も考えられる。コンテナ半箱分の土師器片が出土しているが、2号墳に伴うものかは不明である。

3号墳（第177図 図版14・15・34・49）

1・2号墳がある尾根の北隣の谷（標高約27m）に築かれた長辺約8.0m、短辺約7.0mの方墳で、後背の丘陵とはコの字状の周溝によって区画している。埋葬施設は木棺直葬で、墳丘の中央に築かれ、主軸が南西―北東方向であり、古墳の長辺とは東に約45°ずれている。墓壙は長さ約329cm、幅約124cm、木棺は長さ約226cm、幅約59cmである。

主体部の北東側上面には須恵器の蓋坯のセット（第177図1・2）と鉄鏃2点が副葬されていた。蓋坯は大谷分類A2a型式のものである。鉄鏃2点は現物が確認できず、出土当時の写真を見る限り、深い脇挟を持つ平根系の鉄鏃と考えられる。木棺内には鉄刀1振が副葬されていた（同6）。全長



第177図 三斗蒔古墳群 出土遺物（1：3、6・7は1：4）

40.9cmで、切先を南西に向けて棺内の北寄りに置かれ、柄の木質や目釘が残存している。

築造時期は蓋環のセットから、大谷福年の出雲2期A、6世紀前半と考えられる。

4号墳

3号墳の北東側の斜面上方（標高約30m）に位置するが、土坑が1基確認されたのみで主体部や周溝は見つかっておらず、自然地形の可能性もある。

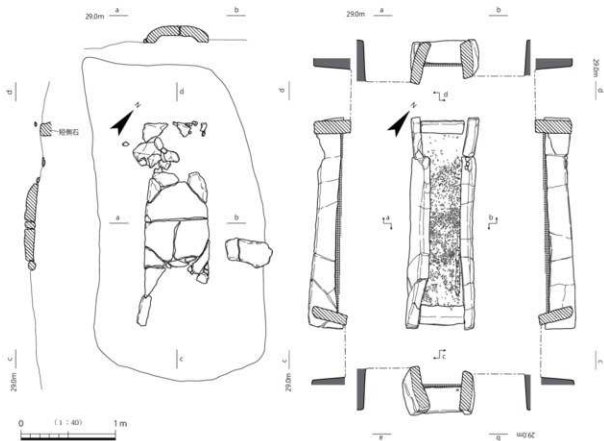
5号墳

4号墳から北西側にのびる尾根上（標高約25m）に築かれた直径約10.3mの円墳で、尾根の上とは溝によって区画している。埋葬施設は確認できなかった。

コンテナ半箱分の土師器片が出土しているが、5号墳に伴うものかは不明である。

6号墳（第177図 第178図 図版15・49）

5号墳の上方（標高約28m）に築かれた直径約12.3mの円墳で、古墳群のなかで最も大きい。埋葬施設は組合式家形石棺で、墳丘のほぼ中央に築かれ、主軸が北西—南東方向である（第178図）。蓋石は地表に露出していたらしく、風化により大きく割れ、欠けていたものの、1枚の石材で作られたと考えられる。寸法は長さ214cm、幅68cm、厚さ10cmで、蓋の横断面が稜の不明瞭な蒲鉾形となっている。身は大きく割れている石材があるものの、各側石1枚ずつの計4枚で作られ、長側石で小口石を挟んでいる。底石はなく、小礫を敷いている。寸法は長さ220cm、幅68cm、深さ28cmである。こうした石棺の特徴は、本古墳から北東へ約4.7kmの丘陵上にある軍原古墳（円墳・約29m）の石棺と、



第178図 三斗時6号墳 家形石棺（1：40）

縄掛突起の有無と蓋の横断面形態以外はほぼ共通しており注目される（大谷 1994・1996）。

第 177 図 7 は石棺内に副葬された鉄剣である。現存長 60.0cm で、切先を北西に向けて棺内の南東隅に置かれていた。柄部が欠けているほかは完存しており、鞘の木質が部分的に残っている。同図 3 は墳丘から出土した土師器甕の口縁部～頸部である。

軍原古墳と共通した石棺を踏まえると、築造時期は軍原古墳と同じ 5 世紀中頃から後半の可能性が高い。

7 号墳（第 177 図 図版 49）

6 号墳の北東側の斜面下方（標高約 25 m）に築かれた長辺約 10.0 m、短辺約 8.3 m の方墳で、後背の丘陵とはくの字状の周溝で区画している。埋葬施設は木棺直葬 2 基で、主軸がどちらも北西－南東方向で古墳の長辺とほぼ一致している。中心主体は規模が大きく、墳丘の中央に近い第 1 主体だと考えられ、墓壇は長さ約 240cm、幅約 129cm、木棺は長さ約 152cm、幅約 40cm である。第 2 主体は第 1 主体の北側にあり、墓壇は長さ約 191cm、幅約 98cm、木棺は長さ約 154cm、幅約 56cm である。

遺物に関しては、周溝内から土師器甕（第 177 図 4）が、墳丘上から須恵器の直口壺（同 5）が出土している。甕の可能性もあったが、甕にしては大型品であること、口縁部が大きく開かないこと、胴部の孔が見当たらないことから直口壺と判断した。体部が少しつぶれた球形を呈し、底部を叩き出して丸底に成形していることから、大谷編年の出雲 1 期中段階にあたるものと推定される。

直口壺の特徴から、7 号墳の築造時期は 5 世紀後半だと考えられる。

第 3 節 小結

三斗蒔古墳群は墳丘規模 10 m 前後の円墳・方墳 7 基からなる古墳群で、5 世紀中頃から 6 世紀前半にかけて築かれた。確認できた埋葬施設は石棺の 6 号墳を除いて全て木棺である。こうした特徴から、結古墳群と比較すると小規模ではあるが、古墳時代中期後半から後期前半にかけて築かれた初期群集墳とみて問題ないだろう。

6 号墳の石棺に関しては、諸説あるが九州の影響を受けた家形石棺の可能性があり、軍原古墳の石棺とほぼ同じ特徴を持っている。地域首長クラスが葬られたと考えられる 30 m 規模の軍原古墳と、群集墳内に築かれた 10 m 規模の小規模墳である三斗蒔 6 号墳でほぼ同じ石棺が使用されていることは、古墳時代中期の斐川における首長墳と群集墳の関係性を考察するうえで、非常に重要な事実といえる（第 7 章第 4 節）。（下江裕貴）

【参考文献】

大谷晃二 1994・1996 「斐川町軍原古墳について（上）・（中）・（下）」『八雲立つ風土記の丘』No.127・136・137
島根県立八雲立つ風土記の丘

結西谷IV遺跡 試掘調査・範囲確認調査出土遺物(土器・土製品)

検出番号	図版番号	出土位置				種別	法量 (cm)			調査	備考
		地区	トレンチ	遺構	層位		100	縦径	断面		
8	1	A区	33Tr		2層 (埋藏層)	片蓋 (土製品)	17.00	—	(2.2)	外蓋 同形ヘラツズリ 同形ナデ 内蓋 同形ナデ 不整方向ナデ	
8	2	A区	24Tr		2層 (埋藏層)	蓋 (土製品)	—	—	—	外蓋 平口メタリ 内蓋 当て鉢(四心円型) 底ナデ?	
8	3	A区	23Tr		2層 (土層部)	蓋 (土製品)	—	—	(8.1)	外蓋 覆け蓋のための調整不明 内蓋 ナデ ケズリ	外蓋全体に腐食層、使用のための口縁部が深く削 磨
8	4	A区	23Tr		2層 (土層部)	輪郭口 (土製品)	長径 3.7	—	縦3.4		底面部分のみ腐食
13	1	B区	9Tr		—	片蓋 (埋藏層)	—	—	(1.6)	外蓋 同形ナデ 同形ヘラツズリ 内蓋 不整方向ナデ	輪状つまみ
13	2	B区	9Tr		埋土 (埋藏層)	高直付円蓋 (土製品)	13.40	8.00	5.1	外蓋 同形ナデ 同形ヘラツズリ 内蓋 同形ナデ 不整方向ナデ	
13	3	B区	11Tr		—	蓋 (埋藏層)	—	—	(2.7)	外蓋 ナデ ヘラツズリ 内蓋 ヘラツズリ ナデ	蓋部外周に細い凹みあり
20	1	C区	43Tr		6層 (埋藏層)	片蓋 (土製品)	12.00	6.00	4.1	外蓋 同形ナデ 内蓋 同形ナデ 不整方向ナデ	
20	2	C区	43Tr		2層 (表・裏地上)	片蓋 (埋藏層)	—	13.60	(2.0)	外蓋 同形ナデ 底面同形未切り 内蓋 同形ナデ 不整方向ナデ	
20	3	C区	43Tr		6層 (埋藏層)	片蓋 (土製品)	14.40	8.40	4.4	外蓋 同形ナデ 底面同形未切り 内蓋 同形ナデ 不整方向ナデ	
20	4	C区	43Tr		高直付円蓋 (埋藏層)	—	19.40	13.30	(3.3)	外蓋 同形ナデ 底面同形未切り 内蓋 同形ナデ 不整方向ナデ	
20	5	C区	43Tr		6層 (埋藏層)	高直付円蓋 (土製品)	—	18.00	(2.5)	外蓋 同形ナデ 内蓋 同形ナデ 不整方向ナデ	
20	6	C区	43Tr		3層表地上	高直付円蓋 (埋藏層)	12.40	7.60	4.5	外蓋 同形ナデ 底面同形未切り 内蓋 同形ナデ 不整方向ナデ	
20	7	C区	43Tr		蓋 (土層部)	—	—	—	(4.2)	外蓋 同形ナデ 内蓋 同形ナデ ケズリ	
20	8	C区	43Tr		蓋 (土層部)	—	—	—	(4.8)	外蓋 同形ナデ 同形ナデ 内蓋 同形ナデ ケズリ	口縁部が深く削む
20	9	C区	21Tr		表土 (埋藏層)	—	—	—	(3.6)	外蓋 同形ナデ 内蓋 同形ナデ	
25	1	E区	106Tr		表土面下 (埋藏層)	—	—	—	(4.2)	外蓋 同形ナデ 底面同形未切り 内蓋 同形ナデ	

結西谷IV遺跡 試掘調査・範囲確認調査出土遺物(鉄器)

検出番号	図版番号	出土位置				種別	法量 (cm)			備考
		地区	トレンチ	遺構	層位		長	幅	厚	
8	5	A区	38Tr		流土 (2層)	鉄片	4.9	3.8	2.0	

結西谷IV遺跡 試掘調査・範囲確認調査出土遺物(石器)

検出番号	図版番号	出土位置				種別	石材	法量 (cm)			重量 (g)	備考
		地区	トレンチ	遺構	層位			長	幅	厚		
8	6	A区	28Tr		表土面下	砥石	流紋岩	14.3	7.8	4.6	584.00	明確な推通痕なし
8	7	A区	39Tr		落ち込み 埋土上面	石砥	安山岩	(2.3)	2.1	0.4	1.30	凹基無基式、先端を欠く
20	10	C区	50Tr		3層上面	石砥	黒曜石	(1.2)	1.3	0.3	0.30	凹基無基式、先端を欠く

結西谷IV遺跡 出土遺物(土器・土製品)

[illegible]

[illegible]

遺物観察表

観察番号	図数	出土時期				図	測量 (m)			測 量	説 明
		期	種	トポ	遺 物	考 究	100	縦	横		
90	3	29	316	1867b	遺物(土) 土器	外器 (遺物)	11.40	—	12.0	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
91	8	29	316	1877b	遺物(土) 土器	外器 (遺物)	11.60	—	1.9	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
92	5	29	316		遺物(土) 土器	外器 (遺物)	11.40	—	2.5	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
93	8	29	316	1877b	遺物(土) 土器	外器 (遺物)	—	—	12.0	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
94	7	29	316	1877b	遺物(土) 土器	外器 (遺物)	12.4	3.0	4.0	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
95	8	29	316		遺物(土) 土器	外器 (遺物)	12.20	16.80	13.20	外器 ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
96	9	29	316		遺物(土) 土器	外器 (遺物)	11.40	19.60	4.7	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
97	10	29	316		遺物(土) 土器	外器 (遺物)	12.40	19.60	3.8	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
98	11	29	316		遺物(土) 土器	外器 (遺物)	12.20	19.60	3.7	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
99	12	29	316	1867b	遺物(土) 土器	外器 (遺物)	11.40	17.60	3.0	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
100	13	29	316		遺物(土) 土器	外器 (遺物)	12.8	2.4	3.1	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
101	14	29	316		遺物(土) 土器	外器 (遺物)	11.60	—	12.1	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
102	15	29	316	1877b	遺物(土) 土器	外器 (遺物)	19.80	16.60	3.0	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
103	16	29	316		遺物(土) 土器	外器 (遺物)	19.80	16.20	3.1	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
104	17	29	316		遺物(土) 土器	外器 (遺物)	11.60	16.80	12.30	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
105	18	29	316		遺物(土) 土器	外器 (遺物)	11.40	17.60	1.6	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
106	1	29	316	1867b	遺物(土) 土器	外器 (遺物)	12.80	16.80	3.7	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
107	5	29	316	1867b	遺物(土) 土器	外器 (遺物)	12.60	16.80	2.8	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
108	3	29	316	1877b	遺物(土) 土器	外器 (遺物)	11.30	17.60	4.6	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
109	8	29	316		遺物(土) 土器	外器 (遺物)	12.3	2.3	3.7	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
110	5	29	316	1877b	遺物(土) 土器	外器 (遺物)	12.20	16.80	4.6	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
111	6	29	316	1877b	遺物(土) 土器	外器 (遺物)	12.20	16.80	4.7	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
112	7	29	316	1877b	遺物(土) 土器	外器 (遺物)	11.80	11.40	3.9	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
113	8	29	316	1877b	遺物(土) 土器	外器 (遺物)	16.4	11.2	6.1	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
114	9	29	316		遺物(土) 土器	外器 (遺物)	11.30	19.60	12.30	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
115	10	29	316	1877b	遺物(土) 土器	外器 (遺物)	11.1	4.6	3.8	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
116	11	29	316	1877b	遺物(土) 土器	外器 (遺物)	11.20	17.80	4.0	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
117	12	29	316		遺物(土) 土器	外器 (遺物)	11.3	7.2	4.2	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
118	13	29	316	1877b	遺物(土) 土器	外器 (遺物)	12.40	16.80	3.8	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
119	14	29	316		遺物(土) 土器	外器 (遺物)	12.8	8.2	4.2	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
120	15	29	316		遺物(土) 土器	外器 (遺物)	11.80	16.80	1.6	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
121	16	29	316		遺物(土) 土器	外器 (遺物)	11.30	16.80	3.9	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
122	17	29	316		遺物(土) 土器	外器 (遺物)	12.40	19.60	2.5	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
123	18	29	316	1877b	遺物(土) 土器	外器 (遺物)	11.60	19.80	6.7	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
124	19	29	316	11807b	遺物(土) 土器	外器 (遺物)	—	11.80	13.20	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
125	20	29	316		遺物(土) 土器	外器 (遺物)	11.80	11.40	3.8	外器 ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
126	21	29	316		遺物(土) 土器	外器 (遺物)	11.40	19.60	2.3	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
127	22	29	316	1877b	遺物(土) 土器	外器 (遺物)	11.80	11.40	2.3	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
128	23	29	316		遺物(土) 土器	外器 (遺物)	11.80	11.40	3.8	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
129	24	29	316		遺物(土) 土器	外器 (遺物)	12.80	10.7	4.1	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡
130	1	29	316		遺物(土) 土器	外器 (遺物)	12.8	7.4	3.7	外器 陶器ナゲ ムナミナ	内器に黒い泥状物、赤い泥状物の痕跡

[illegible]

結西谷IV遺跡 出土遺物(土管)

検出番号	図版番号	出土位置				種別	法量 (cm)				調査	備考
		地区	トレンチ	遺構	層位		長さ(内径)	径(外径)	壁厚	底径		
73	1			築造土路 SX206	表層 (西側流入11)	土管 (陶器)	—	(16.4)	(14.4)	(12.5)	内面: 凹坑ナデ 縦方向ナデ 平型方向ナデ 内面: 凹坑ナデ 縦方向ナデ 平型方向ナデ 断面: 厚目	内面に漆喰物の痕跡
73	2			築造土路 SX206	表層 (東側流入11)	土管 (陶器)	—	—	(17.0)	(13.7)	内面: 凹坑ヘラケミ 凹坑ナデ 縦方向ナデ 内面: 凹坑ナデ 縦方向ナデ 平型方向ナデ 断面: 厚目	内面に漆喰物の痕跡
73	3			築造土路 SX206	表層 (3区北東部4区)	土管 (陶器)	—	—	(13.0)	(7.7)	内面: 凹坑ナデ 内面: 凹坑ナデ 断面: 厚目	法測? (凹坑ナデ時の砂粒の跡?)
73	4			築造土路 SX206	表層 (東側流入11)	土管 (陶器)	(11.0)	—	(13.9)	(6.1)	内面: 凹坑ヘラケミ 凹坑ナデ 内面: 凹坑ヘラケミ 凹坑ナデ 断面: 厚目	
73	5	42		築造土路 SX206	表層 (西側流入11)	土管 (陶器)	35.6	—	18.0	(40.2)	内面: 凹坑ナデ 縦方向ナデ 平型方向ナデ 内面: 凹坑ナデ 縦方向ナデ 平型方向ナデ 断面: 厚目	内面に漆喰物の痕跡
73	6			築造土路 SX206	表層 (西側流入11)	土管 (陶器)	(16.2)	—	(17.2)	(13.1)	内面: 凹坑ナデ 縦方向ナデ 平型方向ナデ 内面: 凹坑ナデ 縦方向ナデ 平型方向ナデ 断面: 厚目	内面に漆喰物の痕跡

結西谷IV遺跡 出土遺物(鉄器)

検出番号	図版番号	出土位置				種 別	法量 (cm)			重量 (g)	備 考
		地 区	トレンチ	遺 構	層 位		長	幅	厚		
36	3		1区	89Tr		柄形鉄片	5.6	5.6	2.2		
36	4		1区	89Tr		柄形鉄片	5.0	3.9	1.6		
36	5		1区			灰土	棒状製品 (5.5)	0.5	0.5	1.79	
45	7		2区		加工段 SX2153	埋土	柄形鉄片	4.2	4.0	1.8	
48	7		2区	南側拡張部		1面下層	鉄片	3.4	2.2	1.6	
48	9		2区			1面下層	鉄片	(5.7)	(2.1)	0.4	11.84
62	8	38	3区	118Tr付近	加工段 SX305	即表土	紡錘形 軸部長 (4.3)	門鎖部最大径 5.0	門鎖部厚 0.3	28.68	先刀式鉄片 角欠損
69	1	42	3区			灰褐色土	袋状鉄片	(5.9)	3.6	1.5	51.25
69	2		3区			黒色土	鉄片	(5.7)	1.0	0.4	8.87
69	3		3区	15Tr		黒色土は少	刀子	(4.0)	0.8	0.3	1.20
69	4		3区	ベルト3東部			刀子	(2.8)	刀部 1.0 基部 0.7	0.3	1.00
69	5		3区			即表土	刀子	(2.8)	(0.7)	0.3	1.19
69	6		3区	ベルト3東部			刀子	(2.1)	0.5	0.3	0.87
69	7		3区				釘	(2.5)	0.5	0.5	1.41
69	8		3区			黒色土	釘	(5.3)	0.6	0.6	2.50

結西谷IV遺跡 出土遺物(石器・玉類)

調査番号	回収番号	出土位置				種別	石材	法量 (mm)			重量 (g)	備考
		地区	トレンチ	遺構	層位			長	幅	厚		
36	6	1区	南北方向 掘削区		旧表土?	石鏡	安山岩	(2.3)	2.1	0.3	1.76	平基無基式。先端を欠く
48	5	2区			1面下層	砥石	流紋岩	4.8	3.3	2.0	39.96	磨面あり
48	6	2区			1面	砥石	花崗岩	3.7	3.5	2.0	22.88	磨面あり
48	8	2区	43T+ 先行溝		3層灰色土	石鏡	デイサイト	(1.9)	1.8	0.3	1.09	先端を欠く
62	5	38区		加工区SC305	旧表土 (遺構掘削面)	磨石	花崗岩	4.0	2.3	2.3	28.40	乳棒状(加工なし)。表面は磨らからで小さい窪みがある
62	6	38区		加工区SC305	遺構上面	砥石	砂岩	13.1	9.1	5.6	776.00	
62	7	38区		加工区SC305	旧表土	与玉	燐灰	2.3	1.3	0.7	3.70	穴面穿孔 孔径0.3cm
68	1	3区			遺物包層 (旧表土?)	砥石	流紋岩?	4.5	2.5	1.8	32.13	磨面あり
68	2	3区		加工区SC302 SK3006	標土下層	砥石	流紋岩	7.6	5.8	5.1	187.74	磨面あり
68	3	42区			遺物包層 (灰褐色土)	砥石	シルト岩	11.8	8.0	5.8	414.35	磨面あり
68	4	3区			遺物包層 (地山面土)	砥石	流紋岩	5.1	4.9	3.3	76.21	磨面あり
68	5	42区			遺物包層 (旧表土)	石鏡	デイサイト	2.1	1.4	0.4	0.80	
68	6	42区	139T+南側		遺物包層	石鏡	安山岩	2.0	1.3	0.4	0.45	石の表面を削いで作成
68	7	42区			遺物包層 (旧表土)	石鏡	安山岩	1.6	1.4	0.3	0.45	
68	8	42区			灰褐色土	磨石	水晶	2.7	最大 1.8	—	9.32	琢磨品

結南谷古墳群 出土遺物(土器)

調査番号	回収番号	出土位置				器種	法量 (mm)			調査	備考
		地区	トレンチ	遺構	層位		口徑	底径	高さ		
81	1	1号墳			表土下層	外蓋 (甕蓋)	(15.8)	—	(1.5)	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	
81	2	1号墳	84T+		表土～黄灰色土	両台付外身 (甕蓋)	—	(12.0)	(2.8)	外面 回転ナデ 底部回転ナデ切り? 内面 全型方向ナデ 底面平滑	転用説?。重ね廻りの痕跡?
81	3	1号墳	84T+		表土～黄灰色土	両台付外身 (甕蓋)	—	(15.0)	(2.6)	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 底面平滑	転用説?
81	4	1号墳			表土	杯身 (甕蓋)	(16.2)	—	(2.1)	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	外面に薄く灰褐色
81	5	1号墳	84T+		表土～黄灰色土	杯身 (甕蓋)	(13.7)	—	(3.0)	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	
88	1	2号墳	127T+		3層 (地山上の 自然埋蔵)	杯蓋 (甕蓋)	—	—	(1.3)	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	

結古墳群・結遺跡 出土遺物(土器・土製品)

刊行年度	10版 版回数	10版 番号	著者名			種 別	法量 (mm)	図 像	備 考			
			姓 名	通 称	肩 名							
148	1	東国版	20年頃	2版	—	—	13.40	—	(3.2)	外国 対紙ナゲ 内紙 対紙ナゲ		
150	1	43	東国版	21年頃	両端	—	—	13.25	—	4.3	外国 対紙ヘラズミナゲ 対紙ナゲ 内紙 対紙ナゲ 本型ナゲナゲ	裏の機り目痕跡
150	2	43	東国版	21年頃	両端	—	—	13.40	—	4.8	外国 対紙ヘラズミナゲ 対紙ナゲ 内紙 対紙ナゲ ナゲ	
150	3	43	東国版	21年頃	2版	—	—	13.40	—	4.6	外国 対紙ヘラズミナゲ 対紙ナゲ 内紙 対紙ナゲ	
150	4	43	東国版	22年頃	2版	—	—	13.40	—	5.2	外国 対紙ヘラズミナゲ 対紙ナゲ 内紙 対紙ナゲ ナゲ	
150	5	43	東国版	24年頃	本型内 両端両端両端	—	—	13.8	—	3.0	外国 対紙ヘラズミナゲ 対紙ナゲ 内紙 対紙ナゲ 本型ナゲナゲ	宛所、上端目に痕跡
150	6	43	東国版	24年頃	本型内	—	—	13.40	—	5.4	外国 対紙ヘラズミナゲ 対紙ナゲ 内紙 対紙ナゲ ナゲ	宛所、上端目に痕跡
150	7	東国版	24年頃	両端	—	—	—	18.51	—	—	外国 横方向ナゲ 背ヘラズミ 内紙 横方向ナゲ 当て目痕	紙張の間に紙痕文
150	8	43	東国版	25年頃	2版	—	—	7.25	—	9.6	外国 横方向ナゲ ナゲ 背オサム 内紙 ナゲ 背オサム	
151	1	東国版	24年頃	両端	—	—	—	13.40	—	(3.6)	外国 対紙ヘラズミナゲ 対紙ナゲ 内紙 対紙ナゲ ナゲ	
151	2	東国版	25年頃	2版	—	—	—	13.25	—	3.7	外国 対紙ヘラズミナゲ 対紙ナゲ 内紙 対紙ナゲ 本型ナゲナゲ	機りつゝえり、裏の機り目の痕跡
151	3	東国版	26年頃	2版	—	—	—	12.80	(9.6)	4.9	外国 対紙ナゲ 内紙 対紙ナゲ	
151	4	東国版	22年頃	両端	—	—	—	17.1	—	(3.6)	外国 横方向ナゲ 内紙 横方向ナゲ 斜め方向の順文	内紙面に赤色着色
151	5	東国版	22年頃	両端	—	—	—	17.8	—	4.7	外国 横方向ナゲ ヘラズミ斜ナゲ 内紙 横方向ナゲ 本型ナゲナゲ 斜め方向の順文	内紙面に赤色着色
152	1	46	東国版	17年頃	本型上(小)	本型上(面)	—	13.3	—	5.8	外国 対紙ヘラズミナゲ 対紙ナゲ 内紙 対紙ナゲ ナゲ	宛所、両端に片目痕
152	2	46	東国版	17年頃	本型上(小)	本型上(面)	—	12.8	—	6.0	外国 対紙ヘラズミナゲ 対紙ナゲ 内紙 対紙ナゲ	片目痕跡
152	3	46	東国版	18年頃	2版	—	—	12.8	—	4.4	外国 対紙ヘラズミナゲ 対紙ナゲ 内紙 対紙ナゲ 本型ナゲナゲ	宛所
152	4	46	東国版	18年頃	2版	—	—	13.0	—	5.0	外国 対紙ヘラズミナゲ 対紙ナゲ 内紙 対紙ナゲ	
152	5	46	東国版	42年頃	本型内	両端 (土屋版)	—	13.9	—	(7.5)	外国 横方向ナゲ 背オサム 内紙 横方向ナゲ	上端目に痕跡、底面内面にヘリ取り
152	6	46	東国版	20年頃	4版	両端両端	—	12.4	—	5.2	外国 対紙ヘラズミナゲ 対紙ナゲ 内紙 対紙ナゲ 本型ナゲナゲ	宛所、外面に両向き
152	7	46	東国版	20年頃	2版	両端	—	13.3	—	5.0	外国 対紙ヘラズミナゲ 対紙ナゲ 内紙 対紙ナゲ 本型ナゲナゲ	
152	1	16	下国版	加工JPSN01	両端	—	—	13.2	—	(11.3)	外国 横方向ナゲ ヘラズミナゲ 背オサム 内紙 横方向ナゲ ヘラズミナゲ 背オサム	
152	2	下国版	加工JPSN01	両端	—	—	—	14.0	—	(6.9)	外国 ナゲ 内紙 ナゲ ヘラズミナゲ	
152	3	16	下国版	加工JPSN01	—	—	—	13.42	—	(11.3)	外国 横方向の両端に片目 内紙 横方向の両端に片目	外紙と内紙の間に赤色着色
152	4	46	下国版	加工JPSN01	—	—	—	13.25	—	(10.0)	外国 ナゲ ヘラズミ 内紙 ナゲ ヘラズミ 機りつゝえり目	
152	5	16	下国版	加工JPSN02	両端	—	—	13.40	6.2	10.1	外国 ナゲ ヘラズミ 内紙 ナゲ ヘラズミ	
152	6	46	下国版	加工JPSN04	—	—	—	9.4	—	7.2	外国 横方向ナゲ ナゲナゲ 内紙 横方向ナゲ ナゲナゲ ナゲナゲ 背オサム	
152	7	16	下国版	加工JPSN01	両端	—	—	9.6	—	7.8	外国 ナゲ 内紙 ナゲ 背オサム	
152	8	16	下国版	加工JPSN01	—	—	—	6.25	—	6.4	外国 ナゲ ヘラズミ オサム 内紙 ナゲ 背オサム	
152	9	16	下国版	加工JPSN02	両端	—	—	13.8	—	4.2	外国 ナゲ 内紙 ナゲ	
152	10	16	下国版	加工JPSN02	両端	—	—	13.40	—	2.9	外国 対紙ナゲ 底面ヘラズミ 内紙 対紙ナゲ	
152	11	16	下国版	加工JPSN02	両端	—	—	1				

調査番号	図説番号	調査年度	出土位置				出土品名	法量 (kg)			調査	備考
			地区	町	丁目	番地		重量	容積	形状		
137	17	36	下地区				銅(15502)	遺物出土層	銅(15502)	銅(15502)	銅(15502)	山内宮、1層部、銅(15502)に属する
138	1		下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
139	2		下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
140	3		下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
141	4		下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
142	5		下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
143	6		下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
144	7		下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
145	8		下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
146	9		下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
147	10		下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
148	11		下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
149	12		下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
150	13		下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
151	14		下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
152	15		下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
153	1	42	下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
154	2	42	下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
155	3	42	下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
156	4	42	下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
157	5	42	下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
158	6	42	下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
159	7	42	下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
160	8	42	下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
161	9	42	下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
162	10	42	下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
163	11	42	下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
164	12	42	下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
165	13	42	下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
166	14	42	下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
167	1	48	下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
168	2	48	下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
169	3	48	下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
170	4	48	下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
171	5	48	下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
172	6	48	下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する
173	7	48	下地区				銅(15506)	遺物出土層	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)	銅(15506)に属する

調査年度	調査番号	回	出土位置				種別	位置 (m)			調査	備考
			地	区	溝	溝		11	12	13		
194	8		古墳区				—	11.21	11.21	5.0	外周 鉄板ナブ 底部回転木釘ナブ 内周 鉄板ナブ ナブ	
144	9	48	古墳区				遺物出土層	12.41	15.4	3.8	外周 鉄板ナブ 底部ナブ 内周 鉄板ナブ 木釘ナブ	
144	11	48	古墳区				—	—	12.41	18.2	外周 ナブ ハナメ 内周 鉄板ナブ	
147	1	48	古墳区				—	—	12.41	5.0	外周 鉄板ナブ 内周 鉄板ナブ ナブ	
147	2		古墳区				—	—	12.41	12.11	外周 鉄板ナブの調査不明 内周 鉄板ナブの調査不明	
147	3		古墳区				—	—	12.41	12.11	外周 鉄板ナブの調査不明 内周 ナブ	
147	4		古墳区				—	—	12.41	12.11	外周 鉄板ナブの調査不明 内周 鉄板ナブの調査不明	

結古墳群・結遺跡 出土遺物（鉄器）

調査年度	調査番号	回	出土位置				種別	位置 (m)			重量 (g)	備考
			地	区	溝	溝		11	12	13		
142	1	43	古墳区	10号溝	主体部 (堀内)		鉄器	84.0	3.3	0.7	外周長 48.9 内周長 15.1	目釘穴1つ、重量あり
142	2	44	古墳区	10号溝	主体部 (堀内)		鉄器	5.4	3.4	0.2	外周長 44.7 内周長 10.4	7.21 短基三内口式。鉄板の木釘残存、鉄身を鉄板に固定するための等孔あり（わずかにあききあり）、側面鉄の方向の木釘、側面が2銅板分厚
142	3	44	古墳区	10号溝	主体部 (堀内)		鉄器	13.21	1.4	0.4	外周長 18.8 内周長 2.5 重量 3.7	8.81 鉄板鉄器C-4型式、内周、木釘あり
142	4	44	古墳区	10号溝	主体部 (堀内)		鉄器	13.1	1.3	0.4	外周長 19.2 内周長 2.2 重量 3.1	9.47 鉄板鉄器C-4型式、内周、木釘あり
142	5	44	古墳区	10号溝	主体部 (堀内)		鉄器	12.9	1.3	0.4	外周長 19.1 内周長 2.0 重量 3.0	9.64 鉄板鉄器C-4型式、内周、木釘あり、あききあり
142	6	44	古墳区	10号溝	主体部 (堀内)		鉄器	10.8	1.4	0.4	外周長 19.2 内周長 3.3 重量 10.21	10.80 鉄板鉄器C-4型式、内周、木釘 (側面?) 残存
142	7	44	古墳区	10号溝	主体部 (堀内)		鉄器	7.9	1.2	0.3	外周長 12.9 内周長 10.4	6.83 鉄板鉄器C-4型式
142	8	44	古墳区	10号溝	主体部 (堀内)		鉄器	8.9	1.3	0.4	外周長 18.9 内周長 11.5	7.47 鉄板鉄器C-4型式
148	2	43	古墳区	13号溝	主体部 (堀内)		鉄器	14.1	3.3	0.6	外周長 136.4 重量 19.6	目釘穴1つ、木釘わずかに残存
148	3	43	古墳区	13号溝	主体部 (堀内)		鉄器	13.21	3.3	0.5	外周長 41.4 重量 11.3	2段の銅板をもつ銅器、目釘穴2つ、木釘をもつ、鉄金具残存、重量の異なる銅板あり、あきき残存 (中央の未使用)、銅の銅板が2つあり
148	4	44	古墳区	13号溝	主体部 (堀内)		鉄器	13.1	1.6	0.4	外周長 19.0 内周長 4.4	15.10 銅器、目釘穴2つ、木釘残存
148	5	44	古墳区	13号溝	主体部 (堀内)		鉄器	6.2	1.1	0.3	外周長 4.0 内周長 3.0	4.91 ナブ器、目釘穴1つ、木釘あり残存
148	6	44	古墳区	13号溝	主体部 (堀内)		鉄器	11.9	0.8	0.3	外周長 12.8 内周長 12.4	8.98 長筒式銅器、台形銅、木釘・銅板残存、あききあり
148	7	44	古墳区	13号溝	主体部 (堀内)		鉄器	11.6	0.8	0.4	外周長 12.2 内周長 7.1 重量 12.3	7.34 長筒式銅器、台形銅、木釘・銅板残存、あききあり、銅の銅板に赤色塗料の痕跡あり
148	8	44	古墳区	13号溝	主体部 (堀内)		鉄器	19.6	0.8	0.4	外周長 11.9 内周長 7.1 重量 10.6	5.93 長筒式銅器、台形銅、銅板残存
150	9	45	古墳区	22号溝			鉄器	16.5	1.6	0.4	外周長 12.0 重量 4.4	10.00 銅器、木釘あり残存、鉄金具の痕跡あり
150	10	45	古墳区	23号溝			鉄器	17.8	4.7	0.7	外周長 11.9 重量 3.7	23.54 平刀
152	6	46	古墳区	17号溝			鉄器	15.8	1.4	0.3	外周長 11.9 重量 3.7	6.52 銅器、木釘あり残存
155	1	43	古墳区	28号溝	主体部 (堀内)		鉄器	16.21	3.0	0.8	外周長 136.0 重量 14.7	木釘残存
164	10	48	古墳区	1区			鉄器	19.8	2.9	0.6	外周長 11.9 重量 1.8	11.95 引手・引手金具 45° の角度で接合

結古墳群・結遺跡 出土遺物(石器)

探検番号	図版番号	出土位置				種別	石材	法量 (cm)			重量 (g)	備考
		地区	トレンチ	遺構	層位			長	幅	厚		
158	16	F地区		溝SD06		石鏃	黒曜石	(2.3)	(2.0)	0.3	1.07	先端を欠く
158	17	F地区		溝SD06		石鏃	黒曜石	2.0	1.3	0.4	0.49	
158	18	F地区		溝SD06		石鏃	黒曜石	1.9	1.5	0.3	0.58	
158	19	F地区		溝SD06		石鏃	黒曜石	2.1	1.6	0.4	0.87	
158	20	F地区		溝SD06		石鏃	黒曜石	1.9	1.4	0.4	0.53	
158	21	F地区		溝SD06		石鏃	安山岩	(1.7)	1.5	0.2	0.66	未成品、先端を欠く

三斗蒔古墳群 出土遺物(土器)

探検番号	図版番号	出土位置				種別	法量 (cm)			調査	備考
		古墳	遺構	層位			口径	底径	高さ		
177	1	49	3号墳	主体部	—	丹塗 (滑石製)	15.4	—	4.9	外面 凹形ナデ 天井部凹形ヘラケズリ 内面 凹形ナデ	口縁端部外面に両点状のヘラ跡を認む
177	2	49	3号墳	主体部	—	丹塗 (滑石製)	13.4	—	5.0	外面 凹形ナデ 底部凹形ヘラケズリ 内面 凹形ナデ	近形
177	3	49	6号墳	溝広部内部	—	小笠原 (土師製)	(12.2)	—	(5.6)	外面 縦方向ハケメ 横方向ナデ 内面 横方向ハケメ 横方向ナデ ケズリ	横ナデ?
177	4	49	7号墳	西溝内	—	丹塗 (土師製)	14.8	径部最大径 21.0	(21.5)	外面 縦方向ハケメ縦横方向ハケメ オサス部ナデ 横方向ナデ 内面 ヘラケズリ 面オサス 横方向ナデ	横付着
177	5	49	7号墳		—	直口部 (滑石製)	(9.8)	径部最大径 14.8	(15.5)	外面 凹形ナデ ケズリ タタキ 当て具部 7号も横方向ナデ 内面 凹形ナデ 底部特殊工具によるタタキ	外面に凹溝と横溝を認め、口縁部内面と肩部外面に反映?

三斗蒔古墳群 出土遺物(鉄器)

探検番号	図版番号	出土位置				種別	法量 (cm)				重量 (g)	備考
		古墳	遺構	層位			長	幅	厚	その他		
177	6	49	3号墳	本館内	—	鉄刀	40.9	2.5	0.8	刃部長 33.1 茎部長 7.6		柄内寄りの両端、目釘穴1つ(目釘残存)、刃先付近に布目痕あり、柄の木質残存
177	7	49	6号墳	石館内	—	鉄剣	(60.0)	3.7	0.6	刃部長 56.1 茎部長 (3.9)		角内寄り、木質残存、鞘に漆痕が残存

写真図版



① 調査後全景 背後に宍道湖を望む（西から）



② 調査後全景 背後に出雲平野・北山を望む（南東から）



① 調査後全景 背後に仏経山を望む（北から）



② 1区全景 焼土面検出時（北から）



① 1区 SK002-4 木炭検出状況（北東から）



② 1区 SK002-5・6・7 焼土面検出状況（北東から）



① 2区 1面検出状況（北東から・背後に仏経山を望む）



① 2区1面 木炭集積 検出状況 (西から)



② 2区 調査後全景 (東上空から・奥に結本谷1号墳)



① 2区 2面完掘状況（上が南西方向）



① 2区 焼成土坑 SK2064 完掘状況（南西から）



② 2区2面 出土遺物



① 3区 調査後全景（北東から・背後に仏經山を望む）



② 3区 加工段 SX301～304 完掘状況（東から）



① 3区 加工段 SX303 完掘状況（南から）



② 3区加工段 SX303 内 炉 SL3004（東から）



① 3区加工段 SX305 勾玉出土状況（北から）



② 3区 出土遺物



① 結本谷1号墳 調査後全景（北東から）



② 結本谷1号墳 第1主体（右）・第2主体（左）完掘状況（北西から）



① 結本谷 2号墳 調査後全景（南東から）



② 結本谷 2号墳 第1主体（右）・第2主体（左）完掘状況（南から）



① 結古墳群A地区 10号墳 主体部（東から）



② 結10号墳主体部 鉄鏽出土状況（上が西）



③ 結古墳群B地区 11号墳 礎檣（西から）



④ 結11号墳礎檣 床面検出状況（西から）



① 結 11 号墳磔廊 蛇行剣・鉄鏃出土状況 (上が東)



② 結古墳群B地区 13号墳 磔床 (北から)



③ 結 13 号墳磔床 鉄剣出土状況 (東から)



④ 結古墳群E地区 28号墳 主体部 (西から)



⑤ 結 28 号墳主体部 鉄刀出土状況 (北から)



⑥ 三斗蒔 3 号墳主体部上面 遺物出土状況 (南西から)



① 三斗蒔 3号墳 主体部完掘状況（南西から）



② 三斗蒔 3号墳主体部 鉄刀出土状況（北から）



③ 三斗蒔 6号墳石棺 鉄剣出土状況（南西から）



④ 三斗蒔 6号墳 石棺検出状況（南東から）



⑤ 三斗蒔 6号墳 石棺完掘状況（南東から）



① 結遺跡 F 地区 加工段 SX04 出土遺物 (第 157 図)



② 結遺跡 F 地区 加工段 SX05 出土遺物 (第 157 図)



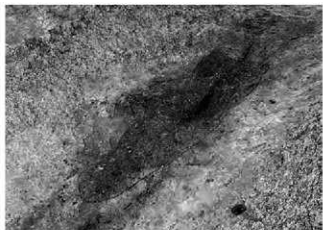
① 1区 SK001 全景 (北から)



② 1区 SK002 全景 (北から)



① 1区 SK001-1 焼土面検出状況（北東から）



② 1区 SK001-2 焼土面検出状況（北西から）



③ 1区 SK002-1 完掘状況（北東から）



④ 1区 SK002-2 焼土面検出状況（北西から）



⑤ 1区 SK002-3 焼土面検出状況（北東から）



① 2区 調査後全景（南西から）



② 2区南半 SB201～206（北から）



① 2区 掘立柱建物跡 SB201・202 (北西から)



② 2区 掘立柱建物跡 SB206 (北から)



① 3区 調査後全景（南から）



② 3区 加工段 SX301（南から）



③ 3区加工段 SX301 土層堆積（北から）



④ 3区 加工段 SX302（南から）



⑤ 3区加工段 SX302 土師器甕出土状況（南から）



① 3区加工段 SX303 建物跡（西から）



② 3区 加工段 SX304（南から）



③ 3区加工段 SX304 土層堆積（北から）



④ 3区加工段 SX304 須恵器坏出土状況（南から）



⑤ 3区 加工段 SX305（北から）



⑥ 3区 加工段 SX305 中央付近（北東から）



⑦ 3区加工段 SX305 須恵器坏出土状況（北から）



① 3区加工段 SX305 土器集中箇所 (東から)



② 3区 隧道水路 流入口 (西から)



③ 3区 隧道水路 流出口 (東から)



④ 3区隧道水路 流出口 開口部 (東から)



⑤ 3区隧道水路 流出口内部 (東から)



⑥ 3区北側 地滑り痕 (東から)



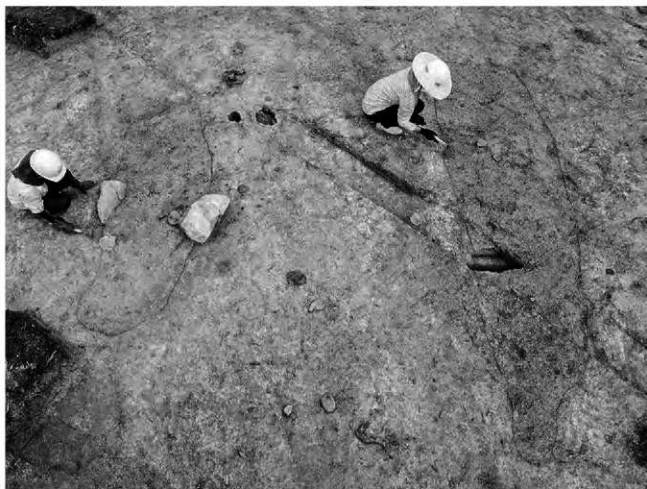
⑦ 3区北側 地滑り痕 (試掘145トレンチ北壁)



⑧ 3区内 植林ヒノキ 年輪



① 結本谷古墳群 A・B 支群 (東から・左が 1 号墳、中央上が 2 号墳)



② 結本谷 1 号墳 第 1 主体 (右)・第 2 主体 (左) 検出状況 (北西から)



① 結本谷1号墳 東隅填堀（北東から）



② 結本谷1号墳 東隅填堀 土層堆積（南東から）



③ 結本谷2号墳 第1・2主体 検出状況（南から）



④ 結本谷2号墳 南側填堀 土層堆積（西から）



⑤ 結本谷3号墳（試掘6トレンチ）全景（北から）



⑥ 結本谷3号墳 主体部（西から）



⑦ 結本谷3号墳 区画溝（北西から）



① 結古墳群B地区 全景（北から・右手前が13号墳、左奥が11号墳）



② 結古墳群C地区 24号墳から31・23・22・30・29号墳を望む（南東から）



① 結古墳群B地区 11号墳 礫櫛 (南から)



② 結11号墳礫櫛 西側小口 (東から)



③ 結11号墳礫櫛 蛇行剣・鉄鏃出土状況 (東から)



④ 結古墳群B地区 35号墳 主体部 (南西から)



① 結古墳群C地区 34号墳 主体部（北西から）



② 結 34号墳 主体部 土器枕（北西から）



③ 結古墳群D地区 17号墳 主体部（北西から）



④ 結 17号墳 主体部 土器出土状況（北から）



⑤ 結 43号墳 主体部 土器出土状況（西から）



⑥ 結古墳群D地区 43号墳 主体部（北西から）



① 結遺跡F地区 調査後全景（東から）



② 結遺跡F地区 加工段 SX01 ～ 03 完掘後（南東から）



① F地区 加工段 SX01・掘立柱建物跡 SB06 (東から)



② F地区 加工段 SX01 (東から)



③ F地区 加工段 SX02 (南東から)



④ F地区 加工段 SX03 調査状況 (北東から)



⑤ F地区 加工段 SX04 (南東から)



⑥ F地区 加工段 SX05 (東から)



⑦ F地区 溝 SD08 (北東から)



① 結遺跡 G 地区 I 区調査後全景 (南東から)



② G 地区 I 区掘立柱建物跡 SB09・10 (南東から)



③ G 地区 II 区北半 調査後全景 (南西から)



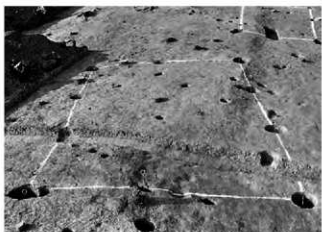
④ G 地区 II 区南半 調査後全景 (南東から)



⑤ G 地区 II 区 掘立柱建物跡 SB11 (西から)



① G地区Ⅲ区 調査後全景（南西から）



② G地区Ⅲ区 掘立柱建物跡 SB13（南から）



③ G地区Ⅲ区 掘立柱建物跡 SB15~17（南西から）



④ G地区Ⅲ区 土坑 SK18 遺物出土状況（北東から）



① 結遺跡H地区 I区調査後全景（北西から）



② H地区 II区調査後全景（北西から）



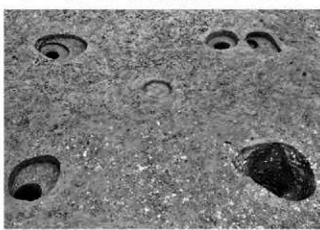
③ H地区 III区調査後全景（南から）



④ H地区III区 掘立柱建物跡 SB23（北西から）



⑤ H地区 IV区調査後全景（西から）



⑥ H地区IV区 掘立柱建物跡 SB24（西から）



① 三斗蒔古墳群 4号墳から1～3・5・6号墳を望む(東から)



② 三斗蒔1号墳 礎床(東から)



③ 三斗蒔3号墳 主体部上面(南西から・右奥に遺物)



45-1



45-3



46-3



46-5



46-6



46-7



46-8



46-9



46-10



46-11



46-12



46-13



46-14



46-15

図版 36 結西谷Ⅳ遺跡 2区出土遺物③





47-10



SX302

59-1



47-11



59-5



SX303

60-1



SX304

60-4



SX305

61-1



61-2



61-4



61-5



61-7



61-8



61

SX305 須恵器



62-5



62-7



62-6



62-8

SX305 石製品・鉄製品



3区包含層(1)





65-7



65-9



65-10



65-13



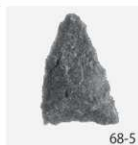
67-1



67-2



67-8





図版 44 結古墳群出土遺物② (X線写真)



145-3



145-4



145-5



145-6



145-7



145-8



145-2



148-6



148-7



148-8



148-4



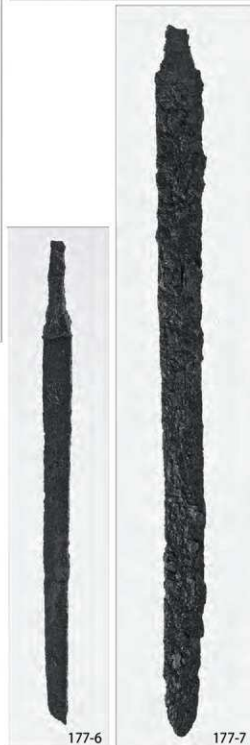
148-5











報告書抄録

ふりがな	むすびにしたいよいいせき・むすびほんだにこふんぐん						
書名	結西谷Ⅳ遺跡・結本谷古墳群						
副書名	出雲斐川インター企業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	出雲市の文化財報告						
シリーズ番号	60						
編著者名	下江裕貴（編）、石原聡（編）、原俊二、幡中光輔、渡邊正巳、瀬戸浩二、奥中亮太、平石充、米田克彦						
編集機関	出雲市市民文化庁文化財課						
所在地	〒699-0011 鳥取県出雲市大津町 2760 TEL (0853) 21-6618						
発行年月日	令和7年(2025)3月						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	道跡番号					
むすびにしたいよいいせき 結西谷Ⅳ遺跡	しまねけしむすび 鳥取県出雲市 ひかわちやうなんせき はか 斐川町直江 外 さんたまきこふんぐん 三斗崎古墳群	32203	Y255	35° 22' 23"	132° 49' 53"	20211126 ～ 20230728	4,850 m ²	工業団地 造成工事
むすびにしたいよいいせき 結本谷古墳群			Y254	35° 22' 18"	132° 49' 54"	20220520 ～ 20230724	700 m ²	
むすびにしたいよいいせき 結古墳群・結遺跡			Y57	35° 22' 38"	132° 50' 08"	1984 ～ 1985	—	
三斗崎古墳群			Y171	35° 22' 30"	132° 49' 42"	1990 ～ 1991	—	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な道構	主な遺物	特記事項
結西谷Ⅳ遺跡	集落跡	奈良時代	掘立柱建物跡、加工段が跡、溝、土坑	須恵器、土師器、移動式竈土製支脚、製塩土器、土管石器、鉄器、ヒスイ勾玉	尾根の東南面2か所で奈良時代頃の集落跡、谷の北斜面で平安時代の灰窯跡を発見した。3区では市内3例目となるヒスイ勾玉が出土した。
結本谷古墳群	生産遺跡	平安時代	炭窯跡		
結本谷古墳群	古墳	古墳時代	古墳2基	須恵器	尾根上で15基の古墳を発見し、うち墳丘規模10m前後の方墳2基を調査した。
結古墳群・結遺跡	古墳	古墳時代	古墳34基	須恵器、土師器、円筒埴輪鉄剣、鉄刀、鉄鏃、刀子蛇行剣	尾根上で小規模な円墳・方墳34基を発見した。11号墳では礎石を確認し、蛇行剣が出土した。丘陵斜面3か所で古墳時代終末期から奈良時代にかけての集落跡を発見したほか、縄文時代前期末の溝跡、13世紀頃の建物跡を確認した。
結古墳群・結古墳群	集落跡	縄文時代 奈良時代 中世	掘立柱建物跡、加工段土壇墓、溝、土坑	縄文土器、須恵器、土師器土質土器、土製支脚鉄器、石器	
三斗崎古墳群	古墳	古墳時代	古墳7基	須恵器、土師器、鉄剣、鉄刀	丘陵上で小規模な円墳・方墳7基を調査した。6号墳では組合式冢形石棺を確認した。

要約	本報告書に収録した4遺跡は、出雲市斐川町内における3か所の工業団地造成に伴って調査された。	
	結西谷Ⅳ遺跡と結遺跡では、丘陵の緩斜面で古墳時代終末期から奈良時代にかけての集落跡を確認した。集落跡は場所によって加工段の規模や柱穴の有無に差異があり、用途や立地条件によって作り分けられたと推察される。結西谷Ⅳ遺跡3区出土のヒスイ勾玉は、古墳時代前期後半頃に製作、伝世した可能性もある。	
	結本谷古墳群と結古墳群、三斗崎古墳群では、5世紀中頃から6世紀中頃にかけて、小規模な円墳・方墳が尾根上に密集して築かれた。ほとんどの古墳は木棺を直葬している。こうした特徴から、これらの古墳群は「初期群集墳」といえる。また、結11号墳の礎石や蛇行剣、結17号墳などの円筒埴輪、三斗崎6号墳の冢形石棺は、出雲平野を治める首長層と密接に関わった中間層の存在を示唆する。	

出雲市の文化財報告書 60

結西谷Ⅳ遺跡・結本谷古墳群

出雲斐川インター企業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和7年(2025)3月

編 集	出雲市市民文化部文化財課 〒693-0011 島根県出雲市大津町 2760 T E L (0853) 21-6618
発 行	出雲市教育委員会 〒693-8530 島根県出雲市今市町 70 T E L (0853) 21-6874
印 刷・製 本	株式会社 報 光 社